カバーイラスト・山田章博

暗黒神話大系シリーズ
クトゥルー
6
大瀧啓裕 編
青心社
640

暗黒神話大系シリーズ

クトゥルー6

ラヴクラフト＆ダーレス

大瀧啓裕 編

青心社

暗黒神話大系シリーズ

クトゥルー6

ラヴクラフト＆ダーレス

大瀧啓裕編

青心社

The Cthulhu Mythos Vol. 6

Edited by

Keisuke Ohtaki

The Horror from the Middle Span

by Lovecraft & Derleth

The Survivor

by Lovecraft & Derleth

The Lurker at the Threshold

by Lovecraft & Derleth

目次

クトゥルー6

恐怖の巣食う橋

H・P・ラヴクラフト＆A・ダーレス
岩村光博訳

アンブローズ・ビショップの失踪を調査する当局によってビショップの手記が発見された。これは壜のなかに封入されており、燃えあがる家から裏の林に投げこまれたものらしい。マサチューセッツ州アーカムの保安官事務所にいまも保管されている。

I

わたしはロンドンをはなれて七日目に、祖先たちが二世紀以上まえにイギリスから移住した地に到着した。そこはマサチューセッツ州ダニッチの北方、ミスカトニック河の上流に接する荒涼とした土地のただなかにあって、アイルズベリイ街道から分岐する道の大半に連なっていた、茨に縁どられる石垣さえ、はるか後方でとぎれているようなところだった。歳月を経た巨木がひしめきあって黒ぐろと立ちならび、茨が繁茂して、そこかしこには――藪が丈高く茂

ってほとんど目にたつことはないとはいえ——遠い昔に見すてられた住居の廃墟が点在する。住居に通じる小道が——いまでは植物に蹂躙されて久しく——木木や灌木にすっかり覆いつくされているため、場所を見あやまるおそれがあったものの、道のそばに立つ石柱の残骸には、かろうじて「ビショップ」の最後の四文字がのこっており、こうして目的地に達したことがわかった。大叔父のセプティマス・ビショップはおよそ二十年まえ、人生なかばにしてこの住居からぷっつりと姿を消している。わたしは茨や藪をかきわけ、両側に立ちならぶ木木の落とした枝を踏みこえて、半マイルのあいだ小道をのぼりつづけた。

家は丘の斜面に建っていた——二階建てでありながらも、ずんぐりしており、石材と木材を併用した造りで、かつては白く塗られていたのだろうが、いまや元の色の痕跡をとどめるばかり、木肌をさらけだすようになって久しかった。わたしはすぐに、この住居のはなはだ奇妙な点に気がついた——これまで道すがら目にしてきた、全壊あるいは半壊の住居とは異なり、石組はいうにおよばず、窓ガラスの一枚にいたるまで、まったくなにひとつ損なわれてはいないのだ。もっとも上部構造の木造部は風雨に蚕食され、これはとりわけ屋根にそびえる円形の頂塔に顕著で、亀裂がいくつもはしり、そのまわりの木部の腐っているのがはっきりとうかがえた。

玄関の扉がすこし開いていたが、柱つきのヴェランダが外にはりだしているおかげで、扉の内部は風雨の最悪のものからまもられていた。さらに内部は埃に厚く覆われているとはいえ、

なにも乱されていないことがすぐに明白になった——家具のひとつにいたるまで手のつけられた形跡はなく、書斎の机で開かれたままになっている書物すら乱されてはいない。とはいえ、いたるところが黴におかされ、住居は湿っぽい黴くささに充満しており、どれほど換気をよくして徹底した掃除をおこなっても、とうていぬぐいされないと思えるほどだった。

それでもわたしはやるだけのことはしてみようと思いたち、このためにダニッチにもどらなければならなくなったため、ニューヨークで借りた車を停めてある本道——といっても轍のついた小道にすぎないもの——にひきかえし、ダニッチへとむかった。ミスカトニック河の暗い流れと、おびやかすようにそびえるラウンド山のあいだにひっそりと位置して、その山の陰にとこしえにつつまれているように思えるさびれた村落、それがダニッチだ。わたしはダニッチで、放棄された教会を占有して、トバイアス・ウェイトリイなる人物の所有物とうたっている、この村でただ一軒の雑貨店に行った。

辺鄙な土地の無骨者には何度もお目にかかっているが、髭面のやつれ顔をした老人の応対たるや、あきれかえるほどのもので、わたしの求める品をほぼすべてとりだしながらも、わたしがうけとって支払いをすますまで、まったくひとことも口をきかなかった。

そうしてはじめて、わたしの顔をまじまじと見つめた。「はじめてお見かけしますな」

「ああ、そうだね」わたしはいった。「イギリスから来たんだ。もっとも以前はこのあたりに親戚がいたよ。ビショップという名前なんだが」

「ビショップですと」店主のトバイアス・ウェイトリイが囁くような小さな声でいった。「ビショップとおっしゃったんですかい」そしてわたしのあずかり知らないことを確かめようとするつもりなのか、声を大きくしていった。「このあたりにはまだビショップ家の者がいますがね。そちらの親戚ですかな」

「そうじゃないだろう。わたしの大叔父はセプティマス・ビショップといったんだ」

　その名前を口にしたとたん、店主のトバイアスの血色の悪い顔がさらに青ざめた。そしてわたしが買いこんだ品物をカウンターからとりさろうとしたものだ。

「なにをするんだ」わたしはいった。「金をはらったじゃないか」

「金なら返しますよ」トバイアスがいった。「セプティマス・ビショップの身内とはかかわりたくねえんでね」

　店主の細い腕にはさしたる力もなく、品物をとりかえすのは造作もなかった。トバイアス・ウェイトリイはカウンターから背後の棚にまであとずさった。

「まさかあの家に行きなさるわけじゃねえでしょう」また囁き声でいったが、年老いた顔には驚きの表情がありありとうかんでいた。

「自分の好きなようにするさ」わたしはそういった。

「ダニッチの者は誰もあの土地には足を踏みいれませんぜ——家にはもちろんね」

「どうしてだね」

「知らないんですか」トバイアスがたずねた。

「知っていたら、たずねるわけがないだろう。わたしの知っているのは、大叔父が十九年まえにあの家から消えたことだけだし、大叔父の財産をひきつぐためにやってきたんだからね。大叔父はどのみち、もう死んでいるにちがいない」

「あのとき死にましたよ」店主のトバイアス・ウェイトリイがまた囁き声でいった。「殺されちまってね」

「誰に殺されたんだ」

「あいつらですよ。あのころいたるところに住んでたやつらです。そいつらにセプティマスもセプティマスの身内も殺されちまったんでさあ」

「大叔父はひとりきりで暮していたんだぞ」

わたしはこの田舎者が迷信にとりつかれ、おびえきっていることにうんざりしはじめていた。大叔父セプティマスについてなにも知らないことは明らかで、こうした店主の反応も、セプティマスがもっていたような知識や教養とはおよそ縁のない、無学文盲の住民にあっては典型的なものとうけとってさしつかえないのだろう。

ウェイトリイがぶつぶつつぶやきはじめていた。「……夜に……セプティマスを埋めて、もうひとりを生き埋めにした……呪われたやつらだ……やつらの棲家はくずれて、やつらはつぎつぎに死んでった……」

この不愉快な言葉を耳にして、わたしは店をはなれ、今度なにか買いものをするときにはアーカムまで行かなければならないだろうと思った。とはいえ、年老いた店主の言葉に不審の念をかきたてられ、ただちにアーカムへと車を走らせ、『アーカム・アドヴァタイザー』紙のファイルを調べることになった――しかしこの衝動はむくわれることなく、六月分にすべて目をとおしても、ダニッチ発の記事はふたつしかなく、そのうちのひとつがセプティマスにかかわるものだった。

セプティマス・ビショップの消息はなく、十日まえにダニッチ北方の土地にある自宅から姿を消したものと思われる。ビショップ氏は独身の世捨て人であり、ダニッチの住民は氏に迷信的な能力が数多く備わっているとして、「治療師」とか「魔法使い」とかさまざまに呼びならわしたものだった。ビショップ氏は長身痩軀の人物で、失踪当時五十七歳だった。

そしていまひとつは、ダニッチ北部のミスカトニック河に渡された、もはや使用されていない橋の中央の橋桁が補強されたことにまつわる面白い記事で、郡当局は頑強に否定しているため、どうやらこの橋になんらかの関係をもつ個人が率先しておこなったものらしいが、もはやつかわれなくなって久しい橋を修理することについて、さまざまな批判を伝えていた。

収穫はとぼしかったものの、わたしはダニッチにもどってさらにその奥へ車を走らせるあいだ、あのトバイアス・ウェイトリイのとった態度も、どうやら住民のいだく迷信から説明づけられるのだと思った。ただ手をおいたりするだけで治療ができるというようなばかげた考えや、呪術についての途方もない話のすべてが、無知の産物以外の何物でもないと知られている、この科学時代にふさわしい教育をうけた者なら、どうあっても笑いとばすたぐいの迷信を、トバイアスは信じこんでいるにすぎない。わたしの大叔父セプティマス・ビショップはハーヴァードで教育をうけ、イギリス在住のビショップ家の者たちには学者はだしの男として知られており、およそ迷信というたぐいのものを極度に嫌っていたはずなのだから。

夕闇がせまるころ、わたしはあの古さびたビショップ家の住居に帰りついた。大叔父は電気もガスもひいていなかったが、蠟燭と石油ランプがあって、石油ランプにはまだ油がすこしのこっていた。わたしは石油ランプのひとつに火をともし、つましい食事をつくって食べおわると、さほど不快感をおぼえずに寝られる程度に書斎をかたずけ、すぐに眠りこんでしまった。

Ⅱ

朝になると、住居の掃除にとりかかったが、大叔父の書棚にならぶ黴だらけの蔵書だけはど

うすることもできず、暑い真夏ではあっても暖炉に火をおこし、あたりの湿気をとりのぞくしかなかった。

そのころには、一階の掃除はおわっていた——一階には書斎、それに隣接する寝室、小さな台所、食料貯蔵室、そして明らかに食堂としてつくられたのだろうが、本や書類が積みあげられているところから、なんらかの物置としてつかわれていたらしい部屋がある。二階にあがってみたが、掃除にとりかかることはせず、一度にはひとりしか通れないような狭い階段を伝って、そのまま頂塔へとのぼってみた。

頂塔はわたしが思っていたよりもいささか広く、おとなひとりが立って自由に動きまわれるだけのゆとりがあった。望遠鏡が備えられていることからも、天体観測のためにつかわれていたことは明らかだが、ただどうにも不可解なことに、円や五芒星形といった星の形が多く認められる、さまざまな模様に床が埋めつくされているほか、奇妙なことに天文学だけではなく、占星術をはじめとする占術の書物がすくなからずあって、どれもかなり古い時代のものばかりで、一六二三年に出版されたものまであった。一部ドイツ語のものもあるとはいえ、大半はラテン語で記されており、きっと大叔父が所有していたのだろうが、なんのためにこういう書物を用いたのかは見当もつかなかった。北側に天窓があるほか、覆いをとれば望遠鏡をつきだせる開口部もあった。

この住居に近づいたときに気づいたように、木部の一部が腐りはて、壁にいくつかの亀裂が

生じているにもかかわらず、この頂塔は驚くべきことに塵や綿埃はいっさいなく、こうした亀裂が雨や風に痛めつけられているのは明らかだが、そのどれひとつとして修理不可能とまではいえず——わたしが短期間にせよこの家を我が家とする気持をかためれば——こうした修理もそれほどの出費をせずになしとげられそうだった。

そうはいっても、まだ家の土台の状態を確かめるにはいたっていないので、二階はそのままにしてひきあげた——ざっと見たかぎりでは、寝室がふた部屋にクローゼットがふたつ、それに納戸がひとつあるだけで、寝室のひと部屋のみが調度もととのっていたが、使用されたことがないかのようだった。わたしは一階にもどると、台所に設けられているドアを開けて、地下室へおりていった。

たずさえていったランプの光で見ると、いささか驚かされたことに、家の占める広さの半分をみたすにすぎない地下室の床が、煉瓦敷きになっている一方、その壁といえば、窓の枠組から明らかなように、すべて一フィート半はある石灰岩からつくられていた。古い家の地下室にひとしく見うけられる、むきだしの地面を予想していたのだが、仔細に調べてみると、家が建ってかなりしてから、おそらくは大叔父セプティマスによって、煉瓦が敷かれたものと思われた。

そしてこの床のふたすみには、四角い揚げ戸がひとつずつ設けられ、大きな鉄の環が備わっており、そのひとつは横の壁から管がのびて、ポンプが顔をのぞかせているところからも、貯水タンクを隠すためのもののようだった。しかしもうひとつのほうは、なんの目的があって備

えられているものなのかわからず、果実か根菜類を貯蔵するためのものかもしれないと思い、自信たっぷりに近づいて、自分の判断が正しいかどうかを確かめるために揚げ戸を開けた。

しかしなんということか、煉瓦造りの階段が下方へと通じているのは――開口部にランプをいれてその光が照らしだしたものは――いかなるたぐいの地下室でもなく、なんらかの通路めいたものだった。さっそく階段をおりてみると、家からはじまるこのトンネルが、わたしに判断できるかぎりにおいて、丘のなかにはいりこみ、北西の斜面に沿ってのびていることがわかった。うずくまるようにしてこのトンネルをすこし進んでみたが、曲がりかどをすぎたところで、なんのために造られたものかが定かでないことに不安をおぼえ、ためらってしまった。

しかしトンネルが大叔父によってつくられたことは確実なように思え、そしてひきかえそうとしたそのとき、前方すこし先で光っているものが目にとまり、進んでみたが、また新たな揚げ戸のあることがわかっただけだった。わたしはこの揚げ戸も開け、煉瓦の階段を七段くだったところに、大きな円形の部屋があることを知った。

こんなものを目にしては、おりないわけにもいかず、ランプを高くかかげてあたりを見まわしてみた。この部屋の床も煉瓦が敷かれ、奇妙なものがあった――石造りの祭壇めいたものがひとつ、おなじく石造りのベンチがいくつもあった。そして床には、頂塔にあったものとよく似ている粗雑な模様が描かれており、空にむかって開いている頂塔に天文学にかかわる模様があることには説明もつけられるが、こういうところに存在する理由については推測もままなら

なかった。

さらに祭壇のまえの床には、またもうひとつの揚げ戸があった。揚げ戸に備わっている大きな鉄の環を目にして、開けたい誘惑にかられたが、どうしたものか用心深くなってそうするのをやめた。ただそばに近づいてみれば、空気の流れを告げるかすかな風が吹いていることから、この地下室の下には外部に通じるべつの開口部があるらしかった。そのあとトンネルにひきかえしたが、家にもどるかわりに進みつづけることにした。

およそ四分の三マイルほど歩いたころ、大きな木製の扉に行きあたったが、これには内側から貫木がさされていた。わたしはランプをおろして、貫木をはずした。扉を開けるや、植物がからみあって生い茂っており。外部からは見えないように、トンネルの出口がたくみに隠されているのだった。からみあった植物をかきわけると、丘の中腹から眼下の風景を見おろす恰好になり、すこし遠くにミスカトニック河が流れ、石橋がかかっている――しかしどこにも住居らしいものは見あたらず、孤立した農家の廃墟があるばかりだった。わたしはそんな景色をながめつづけたあと、来た道をひきかえし、こういう巧妙なトンネルや地下の部屋を設けた理由について考えをめぐらした――そしてあの揚げ戸の下にはなにがあるのだろうかと思った。もしそういうものが必要であるとして、家を脱け出す秘密の通路らしいと判断する以外には、まったく手がかりひとつつないのだから。

家にもどると、二階の掃除はべつの日におこなうことにして、書斎のかたづけにとりかかっ

た。書類が机やそのまわりの床に散乱しているほか、椅子がぞんざいに押しやられ、大叔父が立ち去ったときのままにのこされている形跡を示しており、あたかも大叔父が急に呼びだされてすぐにでかけながらも、ふたたびこの部屋にもどってくることがなかったかのようだった。

わたしはつねづね、大叔父のセプティマス・ビショップには働かなくともやっていけるだけの収入があり、なんらかのたぐいの学究的な調査をおこなっているのだと理解していた。おそらく天文学だったのだろう――どうにもありえそうにないことだが、占星術とのからみから天文学にかかわる調査をおこなっていたのかもしれない。イギリスにとどまっている兄弟の誰かと手紙のやりとりをしていたとか、日記や日誌のようなものをつけていたりしていれば、すこしはこのあたりの事情がうかがえるだろうが、そういうたぐいのものは机の引出や書類のなかにも見あたらず、その書類自体も難解なことがらをあつかったものらしく、図表や図形にうずめつくされていて、それらがことごとくわたしには馴染のない角度や曲線ばかりなので、幾何学に関係するものかと思われる。そして書類に記された文章は英語ではなく、わたしの知識にないほどに古い言語であるため、ラテン語ならどんなものでも読めるし、ヨーロッパでまだつかわれている言語の六つくらいは読みとれるわたしにしても、まるで理解することのできないものだった。

しかし入念に束ねられた手紙が何通かあり、チーズとパンとコーヒーで軽い昼食をとったあと、これに目をとおしはじめた。最初に手にした手紙にまず驚かされた。便箋の上部に「星の

うなものだった。

知慧派」と印刷されているが、住所はない。先の太いペンで流麗に記された手紙は、つぎのよ

親愛なる同士　ビショップ殿

アザトースの御名において、輝くトラペゾヘドロンの印によって、闇をさまようものが招喚されるとき、なべてが汝の知るところとなるでありましょう。光は避けねばならず、闇にひそみて来たれるものは光から遁れるのです。天国と地獄の秘密をことごとく知ることになりましょう。この世に知られざる神秘が、なべて汝のものとなりましょう。

たゆまず待ちつづけられたし。さまざまな妨げをうけてもなお、いかに身をひそめることになろうと、われらはここプロヴィデンスにて、なおも隆盛をきわめておりますれば。

署名は判読しがたいが、「アセナス・ボウアン」あるいは「アセナス・ブラウン」と記されているように思えた。のこりの手紙の語調も、最初に目をとおしたこの驚くべき手紙とおなじようなものだった。いかさま暗澹たる秘密につつまれた手簡であり、わたしの理解をこえる謎めいた事象をあつかっている——現代の人間の理解の外にあって、暗黒時代以来ほぼ失われた迷信のはびこった時代に属する事象であり、大叔父がそうした事象にいかなる関係をもっていたかは、およそ迷信深い儀式やその実践がいまの世にのこっていることを調べていたのでない

かぎりは、まったく推測することもままならなかった。
　わたしは手紙をつぎつぎに読みふけった。大いなるクトゥルー、名状しがたきものハスター、シュブ＝ニグラス、ベリアル、ベルゼブルといった多数の名前でもって、大叔父は呼びかけられている。どうやら大叔父は魔術師を自称する者や背教の司祭もふくめ、ありとあらゆるたぐいの山師や詐欺師と文通していたものらしい。しかしながら学者めいた筆致で記された手紙が一通あって、これはほかのものとは異なっていた。読みづらい筆跡だが、署名――ウィルバー・ウェイトリイ――はたやすく判読でき、一九二八年一月十七日の日付や差出人の住所――ダニッチの近く――を読みとるのにも困難はなかった。苦労して読みとおしたその手紙は印象的なものだった。

親愛なるビショップ殿
たしかにドゥホオの呪文により、ふたつの磁極のうちなる都市を見ることは可能であります。小生も見ましたし、すぐにその都市へ行けることを願っております。地上が一掃されたときのことではありますが。ダニッチにおこしのせつは、農場におたちよりいただければ、ドゥホオの呪文をお教えいたしましょう。ドゥホオ＝フナの呪文もお教えいたします。空間のすべての角度や、イルからヌフングルまでの呪文もお教えするのにやぶさかではありません。

空からやってくるものたちは、人間の血なくしてはやっていけないのです。ご存じのごとく、かれらは人間の血でもって肉体をまとうのであります。貴殿が〈徴〉によって破滅することがなければ、貴殿にもおこなえるでありましょう。このあたりには〈徴〉とその力について知っている者がおります。ゆめ他言なさらぬよう。サバトにても言葉にご注意されたし。

かの地にて貴殿をお見かけいたしました――女性のなりをして貴殿のかたわらにはべるものを目にいたしました。されど小生が招喚したものによってあたえられた眼力でもって、貴殿も目にしておられるはずの、そのものの正体を看破いたしておりますゆえ、小生がいつの日かおのが姿に似せて招喚するものをごらんになられても、貴殿が恐懼されることはなかろうと存じます。

名づけられざるものの御名において

明らかにこの手紙を書いた者は、大叔父の住居を忌みきらうトバイアス・ウェイトリイとおなじ一族の者なのだろう。そう考えれば、あの年老いた店主の迷信深いおびえも当然のことで、大叔父のもとに寄せられた手紙以上に具体的な形で、そうした手紙にほのめかされていることをはっきりと知っていたにちがいない。そして大叔父セプティマス・ビショップがウィルバー

・ウェイトリイと親交があったのなら、ウェイトリイ家のいまひとりの者が、ウィルバーに対する疑いを大叔父にもむけたとしたところで、驚くべきことではないだろう。それがどんな疑いであるかはわからないとしてもだ。しかし大叔父とウィルバー・ウェイトリイに親交があったことは、どうすれば説明づけられるのだろうか。どうやら大叔父についてわたしの知らないことがたくさんあるようだった。
わたしは手紙を束ねて、収められていたところにもどした。そして封筒にはいっている新聞の切り抜きに目をむけた。活字の書体から、すべて『アーカム・アドヴァタイザー』紙から切りぬかれた記事であることがわかったが、ダニッチやアーカムで――大叔父セプティマスが最後に行方をくらましたのとおなじように――もっぱら子供や若者が謎めいた失踪をした事件にかかわるものばかりなので、手紙と同様に当惑させられてしまった。記事のひとつは地元の住民が憤慨して、名前こそあげられていないが、隣人のひとりを失踪事件の犯人と疑い、地元の警察がなにもできないのなら自分たちの手でけりをつけると、さかんに息まいていることを伝えていた。おそらく大叔父はこの失踪事件を解決することに興味をもっていたのだろう。
わたしはこれらの切り抜きも収めてあったところにもどし、しばらくのあいだ坐りこんで、読んだ記事について考えこみ、ウィルバー・ウェイトリイからの手紙に記されていた文章、「かの地にて貴殿をお見かけいたしました――女性のなりをして貴殿のかたわらにはべるものを目にいたしました」という文章を思いだして、どういうわけか心おびやかされるような気が

してならなかった。そういえば、トバイアス・ウェイトリイも、わたしの大叔父のことにふれて、「セプティマスもセプティマスの身内も」といっていた。それも殺されたのだ、と。おそらく迷信深い地元の者たちが、失踪を大叔父セプティマスのせいにして、大叔父に怨みをはらしたということなのだろう。

突如として、わたしはしばらくのあいだ家をはなれる必要を感じた。もう午後もなかばで、黴くさい家に長いあいだいたため、新鮮な空気を吸いたい欲求が強かった。そこで外に出ると、また道まで歩いていったが、ほとんどまるでそうせざるをえないかのように、ダニッチには背をむけて進みつづけた。ビショップ家の住居の背後の土地がどのようなものかを知りたい好奇心にかられるとともに、丘の中腹に開いたトンネルの出口から見た景色が、おおよそいま進んでいる方角にあることを確かめたくもあった。

荒れた土地を予想していたが、まさしくそのとおりだった。うねうねつづく道は明らかにほとんどつかわれることもなく、おそらく地元の郵便配達夫が利用するだけなのだろう。木木や灌木が両側から道をふさぐようにせまり、ときには片側に丘陵がぬっとそびえることもあって、反対側にはミスカトニック河の流れる谷が、いまや道に並行するようになっていたが、やがてまた距離をあけて遠ざかるようになった。あたりにはまったく人の姿がないとはいえ、明らかに手間をかけられた畑がいくつもあって、はるばるこんなところまでやってくる農夫のために穀物が実っている。人家はなく、廃墟や廃屋があるばかりで、牛の姿も見えない。ただ道

があるだけで、道というものはどこかの場所、おそらく人の住んでいたところに通じるものだから、最近まで誰かが住んでいたところへむかっているものと思われた。

河からかなりはなれたところで、右におれる脇道に行きあたった。かたむいた標識にはクレイリイ街道とあり、古びた柵が行く手をさえぎって――脇道そのものも繁茂する植物におおわれている――そこに「通行禁止」の表示があるほか、その下にもうひとつ表示があって、「この橋倒壊」と記されていた。これを目にして、いきおい脇道に入りこもうという気になり、半マイルあまりも灌木や茨をかきわけて進みつづけると、やがて目のまえにミスカトニック河があらわれ、かつて往来のあった石橋が見えた。

橋はたいそう古いもので、中央部だけがのこり、二本の石の橋桁にささえられていて、その一本にはコンクリートが分厚くぬりかためられているだけでなく、誰がやったものか、大きな五芒星形が刻みこまれている。中央部におなじ形の石がはめこまれていたが、刻みこまれている五芒星形に比較すれば、この石はかなりこぶりなものだった。河は橋の両端をえぐりとって流しさっており、いまにのこっている中央部は、かつてこの谷に栄えながらも消えさって久しい、過去の文明の象徴ごときものになっている。おそらく『アーカム・アドヴァタイザー』紙の記事にあった、もはやつかわれなくなっているのに補強された橋というのは、いま目のまえにあるものなのだろう。

奇妙なことに、橋――というよりもその残骸――が、粗雑な造りのものであるにもかかわら

ず、わたしの心を強くひきつけた。過去の多くのものがそうであるように、実用一点ばりのものので、美観を考慮してつくられたわけではないのだが、いまや古色という魅力を備えるにいたっており、それがコンクリートの補強によってことごとくそこなわれ、およそ土台から一番上にいたるまで、大きなかさぶたのようにふくれあがっているのだった。事実、よくながめてみると、たしかに橋桁はふたつともたいそう古びて崩れかけ、河の流れの勢いからして長くはもたないだろうが、それにしてもこのコンクリートが橋桁の補強として役立っているとは思えなかった。ミスカトニック河はこのあたりではそう深くないようだが、橋の中央部をささえる橋桁の双方をひたすほどに、河幅はたっぷりあるのだから。

橋の残骸をながめながら、いつごろつくられたものなのか、おおよその時期をつきとめようとしていると、にわかに空が暗み、ふりかえってみれば、大きな入道雲が西から南西にかけてわきあがり、雨になりそうな気配だった。わたしは橋の残骸をあとにして、大叔父セプティマス・ビショップの住居であった家にもどった。

もどったのは賢明で、一時間とたたないうちに嵐になり、嵐の猛威はとどまることを知らず、ひと晩じゅう雷鳴がとどろき、稲妻が走り、沛然たる雨がふりしきり、闇につつまれる夜を徹して屋根から滝のように流れおちた。

雨に洗われたさわやかな朝に、わたしがまた橋のことを考えたのも、当然のことにすぎないのだろう。あるいはそうではなくて、わたしには未知の源から発する、強迫観念のようなものだったのかもしれない。ともかく雨は三時間まえにやみ、いまやしずくがたれるばかりで、朝の日差をあびて屋根もかわきはじめ、もう一時間もすれば灌木や草もかわきそうだった。

正午にははやる期待に心みたされ、あの古びた橋を見にいった。どういうわけか、変化が起こっていることを期待したのだが、はたしてそのとおりだった――中央部がなくなり、橋桁そのものも崩れはて、コンクリートによる補強すら割れて砕けていた――落雷があったことにくわえ、ミスカトニック河が夜にはすさまじい奔流と化したにちがいなく（わたしが訪れたときですら水かさを増し、泥をはらみ濁流となっており、土手を見れば夜には水位が二フィート以上も高かったらしく）、このふたつの力があわさって、いまや無人の谷となっている河むこうへと、かつて人びとの渡った古い橋を、完全に破壊しつくしたのだった。

事実、橋桁を組んでいた石塊が押し流されて、かなり下流の岸にうちあげられており、コンクリートの補強部分のみが、割れて砕けながらも、中央部にのこっているだけだった。河の流れを目で追って、そこかしこの岸にうちあげられた石塊に目をむけていると、水際からそう遠くない土手近くに、白いものがあるのに気がついた。わたしはそこへ行き、予想もしなかった

ものを目にした。

骨だった。おそらく長いあいだ水のなかにあって、奔流によってうちあげられた、目にしみるほどに白い骨だった。たぶん遠い昔にどこかの農夫の牛が溺死したのだろう。しかしそんな考えは頭にうかぶが早いか消えてしまった。目のまえに散乱している骨は、すくなくとも一部が人骨であり、そのなかにはまぎれもない頭蓋骨があったからだ。

しかしすべてがすべて人骨だったわけではなく、いままで見たこともない、なんのものとも知れない骨もあった――なんらかの生物のものではあるが、まだ完全には生育していないのか、見ためにはしなやかそうな長い骨があり、こういったものがほとんど見わけもつかないほど、人骨といりみだれているのだった。埋葬しなければならないが、もちろんしかるべき筋に知らせることなく葬るわけにもいかない。

骨を運べるものはないかとあたりを見まわすと、おなじようにミスカトニック河が岸にうちあげた粗い麻布が見つかった。それをとってきて、まだぬれてはいたが、骨のそばに広げた。そして骨をひろいあつめ、最初はごたまぜになったままの骨を両手いっぱいにすくいあげ、やがてひとつひとつ、最後の指の骨にいたるまでひろって、この作業がおわると、粗い麻布の四隅を縛ってさげられるようにし、夕方にでもダニッチか郡庁所在地のアーカムにでも運ぶつもりで、家の地下室に運びこんだ。ひろいあつめる衝動をおさえ、見つけたところにそのままにしておくほうが、当局にとっても都合がいいだろうと思いはしたのだが。

さて、どのような基準に照らしても、どうにも信じがたいことを記さざるをえない箇所にさしかかっている。すでに述べたとおり、わたしは骨をまっすぐ地下室へ運びこんだ。ヴェランダや書斎に置いていけない理由もないのだが、わたしは当然のように地下室に運びこみ、骨をそこにのこして一階にもどり、あの橋を見にいくまえに食べなかった昼食をつくった。そして食事をおえると、河からもちかえった骨を当局に届けようと心を決め、また地下室におりていった。

　置いたままになっている袋をもちあげたとき、なかがからになっていることを知って、わたしがいかに驚き当惑したかを察していただきたい。骨はなくなっていた。わたしは自分の感覚という証拠さえ信用できなくなってしまった。一階にもどってランプに火をともすと、それをもって地下室にもどり、隅から隅まで調べてみた。無駄だった。地下室のなかはわたしがはなれたときとなにひとつかわってはいない――窓にも手をふれた形跡はなく、まえとかわらぬ蜘蛛の巣におおわれていた。そしてわたしの見るかぎり、トンネルに通じる揚げ戸は開けられていなかった。しかし不可解にも骨は消えてしまったのだ。

　わたしは困惑したまま書斎にもどり、実際に骨を見つけて家にもちかえったことを疑うようになった。しかし確かに見つけて、もちかえったのだ。腰をおろし、なにか納得のいく説明はつけられないものかと考えていると、この謎を解き明かせそうな考えが――不自然なものではあるけれど――脳裡にひらめいた。もしかしたら骨はわたしが思っていたほど堅くはなく、大

気にふれたことで塵に化してしまったのかもしれない。しかしその場合、塵が骨のあった証拠としてのこっているはずだ。そして粗い麻布は、骨の粉もないきれいなものだった。
　狂人と思われるのがおちだから、こんな話を警察にもちこめるはずもなかった。しかしこの件について調べることはできるので、車に乗りこみダニッチにむかった。わたしはつむじまがりにも、まずトバイアス・ウェイトリイの店に行った。
　わたしを見るなり、トバイアスはにらみつけた。「あんたに売るものなんてねえよ」わたしが口を開くより先にそういうと、店にいたもうひとりの客——だらしない恰好をした老人に顔をむけた。「これがビショップの身内だ」その言葉を聞くや、老人はわたしを見すえながら、あとずさりしてすぐに店から出ていった。
「たずねたいことがあってね」わたしはいった。
「いってみなよ」
「わたしの家から奥へ行ったところに古い橋があるが、あの近くでミスカトニック河に面した墓地はあるのかね」
「そんなものは知らねえな。どうしてそんなことを聞くんだ」トバイアスが不審そうな顔をしていった。
「理由はいえない」わたしはいった。「そう思わざるをえないものを見つけたという以外にはね」

店主が目を細めた。そして下唇をかんだ。血色の悪い顔がさらに青ざめた。「骨だな」囁き声でいった。「骨を見つけたんだろう」
「そんなことはいわなかったがね」
「どこで見つけたんだ」はりつめた声でたずねた。
わたしは両手を広げた。「骨なんかもってないさ」そういって、店から出た。
来るときに見かけた横道にある、小さな教会の牧師専用の住居にむかって歩きながら、ふりかえってみると、ウェイトリイが店を閉めて、ダニッチの本通りを小走りに進んでいくのが見えた。口にした疑惑をふれまわるつもりなのだろう。
郵便受けを見ると、浸礼教会の牧師の名前はエイブラハム・ダニングといい、運よく在宅していた——背の低いまるまると太った人物で、頰が赤く、眼鏡をかけていた。六十代なかばといったところか、ありがたいことに、わたしの苗字はこの人物にはさしたる意味もないようだった。ダニング牧師は執務室につかっているらしい予備の居間に、わたしを通してくれた。
わたしはすこしたずねたいことがあるのだときりだした。
「どうぞご遠慮なく、ビショップさん」牧師がいった。
「それでは、ダニング牧師、このあたりに魔法使いがいるという話をお聞きになったことはありますか」
ダニング牧師は両手の指先をつきあわせ、椅子にもたれかかった。鷹揚な笑みがうかんだ。

「ええ、ビショップさん、このあたりの人は迷信深いたちでしてね。とりわけ一九二八年に、ウィルバー・ウェイトリイと、双子(ふたご)の弟だったやつが死んでからは、魔女や魔法使いや外世界からのものといった、ありとあらゆるたぐいのものを、たくさんの人が信じこんでいるのですよ。ウィルバーは自分が魔法使いだと思って、空から『呼びだせる』もののことをさかんにいっておったそうですが、もちろんそれは弟のことにすぎなくて、その弟というのはひどい奇形だったといわれていますね。どうせ出産のときになんらかの障害をうけたのでしょうが、わたしが聞いた話は突拍子(とっぴょうし)もないことばかりで、本当のところはどうにもよくわからないのですよ」

「亡くなったわたしの大叔父のセプティマス・ビショップについては、なにかご存じでしょうか」

牧師は首をふった。「わたしがここへ来るまえに亡くなられたかたでしょう。この教区にはビショップ家がいくつかありますが、血のつながりはないのではありませんか。教養のない一族ですし、顔つきもあなたとは似ておりませんから」

わたしは血縁関係がないことをはっきりさせた。しかし牧師がわたしの助けになるようなことをなにも知らないのは明らかなので、失礼のないようにしてできるだけ早くひきあげた。ダニッチやその近辺ではめったにお目にかかれない、教養のある者と話をかわせることを、ダニング牧師がたのしんでいるように思えたからだ。

ダニッチではなにもつかめないと思い、わたしは家に帰ったが、もちかえった骨がないもの

かどうか確かめるために、またしても地下室におりずにはいられなかった。もちろん骨は影も形もなかった。たとえ鼠（ねずみ）がいたところで、わたしの目をかすめ、骨をひとつずつ書斎のドアから外へ運びだせるはずもない。

しかし鼠のことを思ったことで、新たな考えがひらめいた。その考えを確かめるべく、ランプを手にもち、また地下室に行き、鼠が利用するような穴はないものかと入念に調べるとともに、骨が消えたことについて納得のいく説明はつけられないものかと、なおも頭をひねりつづけた。

なにも見つからなかった。

わたしはもうあきらめてしまい、その日はずっと、ほかのことを考えようとした。

しかしその夜、夢に悩まされることになった――その夢のなかでは、わたしのもちかえった人骨が結びついて骨格をつくり、骨格に肉がついた。得体の知れないしなやかな骨はといえば、この世のものとも思えないものになりはて、たえず姿をかえ、このうえもなく怖ろしいものになったかと思えば、大きな黒猫に転じ、触腕をそなえたばけものになったかと思えば、今度はたおやかな裸形（らぎょう）の女になりかわり、巨大な牝豚（めすぶた）になったかと思えば主人のそばを走りまわる痩（や）せこけた牝犬（めすいぬ）に変じるといった具合だった。目をさましたとき、わたしの耳にはなんのものとも知れない音がかすかに聞こえていた――すすり泣くような、しゃくりあげるような妙な音で、それがはるか下、地中深くから聞こえるように思え、肉をひきさき骨をくだくような音には、

には、悪意のこもる空怖ろしいものが感じとれた。
身を起こして夢と幻聴を脳裡からふりはらい、闇につつまれる家のなかを歩きながら、ときおり立ちどまっては、月に照らされる夜の戸外をのぞきこんでいると、またしても幻覚に襲われ、家にせまる林のはずれに長身痩軀の男の姿と、そのかたわらで跳ねまわる忌わしい姿のものが見えたように思った――たちまちのうちにふたつの姿は、月光もさしこまない暗い林のなかに消えてしまった。大叔父セプティマス・ビショップの智恵を導きにしたいと願う気持になったとすれば、それはそのときのことだった。地底から聞こえるように思った音に対してしたように、すでに脳裡からふりはらっていた夢よりもなお、この幻覚はなまなましいものだったのだから。
それにもかかわらず、まもなく夜が明け、朝の明るい光に照らされると、わたしはせきたてられるように地下室におり、ランプを手にしてトンネルに入りこみ、地下の部屋にむかった――わたしには理解できない、また耐えられようもない、なんらかの力にせきたてられているかのように、そうせざるをえなかった。地下の部屋の入口で、その床の乱れようが、以前にわたしが訪れてのこした足跡だけによるものではないように思え、わたしのものではない足跡に乱されているばかりか、丘の中腹にある開口部のほうから、ここへなにかをひきずってきたような跡まであるような気がして、不安をおぼえながら部屋に入りこんだ。しかし不安を感じる必要もなく、そこには誰もいなかった。

ランプを高くかかげて、あたりを見まわしてみた。すべてこのまえ訪れたときとなんの変化もなかった――石のベンチ、煉瓦を敷いた床、祭壇、しかし……。祭壇に染みがあった。まえには見たおぼえのない大きな染みだった。わたしはそうするつもりも、そうしたいという気持もなかったのに、しぶしぶながらもゆっくりとまえに進み、やがてランプの光が照らしだしたものは――まだぬれて輝いているものは――まぎれもない血のたまりだった。

そしてわたしは、はじめて祭壇に間近にせまったことで、黒ぐろとした古い染みがほかにもいくつかあり、それらがまだかすかに赤いことから、遠い昔にこぼれた血にちがいないことを知った。

わなわなと身を震わせながら地下の部屋から逃げだし、トンネルを走りぬけ、家のすぐ下の地下室にとびこんだわたしだった。そしてそこで息をととのえていると、頭上から足音が聞こえるようになったため、用心深く一階にもどってみた。

足音は書斎から聞こえるように思えた。木木がおびやかすように立ちならんでいるとはいえ、外からさしこむ光は十分なものなので、ランプの火を消し、書斎へとむかった。

書斎にはひとりの男が坐(すわ)っており、顔はやせこけ、表情は陰鬱(いんうつ)、長身の体をマントにつつみ、燃えるような目をわたしにむけた。

「おまえはビショップ家の者のようだな」男がいった。「しかしどこのビショップ家だ」

「アンブローズです」わたしは口がきけるようになるとそういった。「ウィリアムの息子で、

ピーターの孫にあたります。大叔父のセプティマスの財産を調べにきたのです。あなたはどなたですか」
「わたしは長いあいだ身を隠していた。甥よ、わたしがおまえの大叔父のセプティマスだ」
セプティマスの背後でなにかがうごめき、椅子のうしろからのぞきこむようにしたが、大叔父はそれを隠そうとするかのようにマントを広げた――鱗におおわれた生物だったが、美しい女の顔をしていた。
わたしはたまらず気を失ってしまった。
意識をとりもどすと、セプティマスがそばに立って、誰かに話しかけているようだった。
「すこし時間をやらなければならんな」
おそるおそる目を開け、セプティマスのいたところに目をむけた。
誰もいなかった。

VI

四日後、『アーカム・アドヴァタイザー』紙がはじめて配達され、道ばたの石柱の残骸に置かれ、風で飛ばないよう石が乗せられていた。大叔父に関する記事はないものかと調べたとき

に、半年間の購読を申しこんでおいたのだ。昔のファイルを見せてもらった好意にむくいる形で購読を申しこんだようなものだから、最初は投げすてたくなったが、その衝動をおさえて家にもちかえった。

べつに読むつもりもなかったが、二段組みの記事の見出しが目にとまった。ダニッチの失踪事件の再燃、と記されていた。わたしはいささか不安を感じながら記事を読んだ。

ダニッチのすぐ北にあるハワード・コール農場の作業員、セス・フライ（十八歳）の失踪が報告されている。三日まえの夜、家路につくためダニッチからはなれるところを目撃されたのが、フライが見かけられた最後の姿となった。これは最近におけるダニッチでの二度目の失踪事件である。二日まえにはハロルド・ソーヤー（二十歳）がダニッチの郊外から跡形もなく姿を消した。保安官のジョン・ホートンと部下たちが近辺を捜索しているが、いまだなんの手がかりもつかめていない。失踪したふたりの若者はいずれも、自分から行方をくらます理由がなく、殺害されたのではないかと思われる。

年配の読者なら、二十年以上もまえに同様の失踪事件が頻発し、一九二九年夏にセプティマス・ビショップの失踪とともに事件がとだえたことを思いだされよう。

ダニッチ地区は奇妙な噂のつきまとう僻地であり、一九二八年の謎めいたウェイトリイ事件以来、ときとして一様に尋常ならざる事件が新聞紙上をにぎわせ……

出来事がただひとつの説明、いまでさえうけいれる気にはなれない、ただひとつの説明しかつけられない方向にむかっていることを知り、わたしは心うちひしがれる思いで新聞をおろした。これまでに起こったことのすべてを正しい関係のうちにとらえられることを願い、こうして細かく書き記す決心をつけたのはそのときのことだ。こうした出来事はわたしの心のなかで絶望的なまでにいりみだれ、地下室から消えてしまった骨のことや、大叔父に宛られたウィルバー・ウェイトリイの手紙の文章――「空からやってくるものたちは、人間の血なくしてはやっていけないのです……かれらは人間の血でもって肉体をまとうのであります……貴殿にもおこなえるでありましょう……」といった文章――や、大叔父が謎めいた復活をしておなじように謎めいた消失をしたことについて、たえず考えこまざるをえなかったのは、大叔父の姿を書斎で目にして以来、大叔父のいる気配がまったくしないためだった。

新聞を床に投げすてたわたしの心には、魔法使いやその使い魔にまつわる伝説、流水には幽霊や魔女といった迷信的な存在がひそむといった伝承が渦をまき、理性がおびやかされていた。もっと多くを知りたいという奔放な好奇心にかりたてられるまま、家からとびだし、行く手に繁茂する茨も気にせず、車を停めてある小道に行くと、ダニッチにむかって車を走らせた。

トバイアス・ウェイトリイの店に入ったとたん、トバイアスがわたしをにらみつけた。

「出てってくれ。あんたに売るものなんかないからな」トバイアスが怒りもあらわにいった。

「あんたのしわざだろう」
　トバイアスの怒りをしずめることなどできなかった。
「さっさと村から出ていくんだ。またおなじことになるぞ。わしらはまえにもやったんだからな——またやれるとも。わしはあのセスを、わが子のようによく知ってたんだぞ。あんたのしわざだ——呪われたビショップ家のな」
　わたしはトバイアスのむきだしの敵意をまえにあとずさり、店から出て車にもどった。そのとき、ダニッチの住民が通りに集まっている様子から、憎しみをむきだしにしてわたしを見つめていることがわかった。
　わたしは車に乗りこみ、ダニッチをはなれ、いかなる理性も無力と化す未知の恐怖が蔓延していることを、はじめて知った。
　そしてビショップ家の住居にもどると、ランプに火をともし、地下室におりていった。トンネルに入り、しばらく歩きつづけて地下の部屋に通じる揚げ戸をまえにした。それを開けると、納骨堂を思わせる悪臭がどっと押しよせてきた——ランプの光で照らされる部屋のなかは、わたしがまえにのぞきこんで以来なにもかわっていなかったから、わたしが開けなかった、さらに地下に通じる揚げ戸からたちのぼってきたのだろう。その悪臭のあまりのすごさに、とてもおりていくことなどできなかった。
　わたしは揚げ戸を閉めると、来た道をあわてててひきかえした。

まったく理屈に反することではあるが、わたしはここにきてついに、はからずも自分がいかなる恐怖を近郊に解きはなってしまったかを知った——わたしと自然の盲目の力とが、あの橋の中央部から恐怖を解きはなったのだ……

その後のこと。大叔父セプティマス・ビショップが、肩にがっしりとした手を置いて、夢に悩まされる眠りからわたしを起こした。わたしは目を開け、闇のなかにいる大叔父と、その背後にいる、一糸もまとわぬ長い髪の女の姿をぼんやりと見たが、女の目は燃えあがっているようにきらめいていた。
「甥よ、ここにいてはあぶない」大叔父がいった。「来るのだ」
大叔父とその連れが踵を返して書斎をはなれた。
わたしは服を着たまま眠りこんでしまった寝椅子から身を起こし、この手記に最後の言葉を書きつけている。
外では数多くの松明の揺らめいているのが見える。林のはずれに誰がいるのかはわかっている——憎しみにみなぎるダニッチや近在の住民だ。かれらがなにをするつもりでいるのかもわかっている。
大叔父セプティマス・ビショップとその連れが、トンネルでわたしを待ってくれている。わ

たしにはそうするしかない。
丘の中腹にあるトンネルの開口部が知られていないかぎりは……
ビショップの手記はここでおわっている。
偶然の一致ではあるが、奇異なものに興味があるかたは、古さびたビショップ家の住居が焼け落ちてから十一日後に発行された『アーカム・アドヴァタイザー』の四面に目をむけるなら、つぎのような記事が見いだせるだろう。

ダニッチの住民またしてもおこなう
アンブローズ・ビショップが失踪してまもなく、ダニッチの住民がまたしても橋に手をつけた。古くからあるクレイリイ街道の橋は、最近のミスカトニック河の増水によりほぼ全壊したが、どうやらダニッチの住民には魅力つきせぬものらしく、中央部の橋桁が何者かによってふたたびコンクリートで補強され、このあたりの老人たちが「旧神の印」と呼ぶものが備えられている。ただ取材に応じたダニッチの住民の誰ひとりとして、古い橋について知っていることを認める者はない……

生きながらえるもの

H・P・ラヴクラフト ＆ A・ダーレス

岩村光博訳

ある種の住居はある種の人間と同様に、どういうわけかたちまち邪悪な性質をあらわすものだ。おそらくその屋内ではたされた邪悪(じゃあく)な行為の発散物(はっさんぶつ)が、その行為をなした者が世を去って久しい後も、訪れる者の肌に粟(あわ)を生じさせ、毛を逆立たせるのだろう。邪悪な行為をなした者の激情、そしてその犠牲者の感じた恐怖が多少なりとも、なにも知らずに訪れる者の心にしのびこみ、こうして神経がさわぎ、肌がむずむずして、血がさがるような思いをすることになるのである。

アルジャーノン・ブラックウッド

あの怖るべき発見をした夜に、あわてふためいてプロヴィデンスの街を逃げだして以来、シャリエール館のことについては、二度と話したり書きとめたりするつもりはなかったが——誰であれ、どうあっても抑圧したり否定したりして、消しさりたいと願う記憶があるものだが——ベネフィット・ストリートに建つあの屋敷にしばらく住んでいたことや、その屋敷からやみくもに逃げだすことになった顚末を、あえてここに書き記さざるをえない。警察がついに怖ろしい事実をつきとめ、その解決をめざそうとすることで、無実の者が侮辱をくわえられることのないように。ともかく警察がつきとめたのとおなじ慄然たる恐怖を、わたしは誰よりも先に目にすることになったのだ——そしてわたしが見たものは、あれから長い月日がすぎさり、わたしが予想していたようにあの屋敷が市の所有するものとなって、いまもなお世間にさらしている姿よりも、はるかに凶まがしいものだった。

古物蒐集家というものは、古い家屋についての知識はふんだんにもちあわせていても、いささか古い時代の人間を調査する方法については、その知識もかくだんに劣ると思われているようだが、およそ人間の住みついた住居の調査にどっぷりとつかった古物蒐集家なら、ときと

して、建物の増築部の年代や駒形切妻屋根の起原といったものより、はるかに難解な謎に行きあたり、その謎に対してある種の結論をひきだしうると、そう判断することもないわけではない。その結論がいかに信じがたく、怖ろしく、凶まがしく、さらに呪わしいものであってもだ。古物蒐集家のあいだでは、アリヤ・アトウッドの名前はそこそこ知られており、わたしにも慎みというものがあるのでこれ以上は記さないが、参考文献をひもとくだけの興味をもっていただけるなら、古物蒐集家のための情報をまとめた人名録に、わたしのことがすくなからず記されていると、そう指摘するくらいのことは許されるだろう。

わたしがロード・アイランド州のプロヴィデンスを訪れたのは一九三〇年のことで、すぐにひきあげニューオリンズに足をのばすつもりだった。しかしベネフィット・ストリートのシャリエール館を目にするや、たちまち魅了されてしまったのは、ニューイングランドの通りにあって、ほかとは建築時期をたがえて孤立して建つ普通でない家屋、見るからに古色をおびて、人をひきつけるとともにはねつける、いわくいいがたい雰囲気をもつ家屋に対して、ひとり古物蒐集家のみが心ひかれる魅力を感じたからにほかならない。

シャリエール館にまつわる噂話——幽霊屋敷だという風評——は、新世界であれ旧世界であれ、数多くの古びた空家についていわれることとさしてかわらず、『アメリカ民族学紀要』に発表されるもったいぶった論文を拠にするなら、アメリカのインディアン、オーストラリアのブッシュマン、ポリネシア人といった、さまざまな原住民の原始的な住居について報告さ

れることとも、さしてかわるところはない。幽霊のことにはふれたくないので、わたしのささやかな経験においても、科学的な説明のつけられない現象があったとはいえ、わたしはこれでも合理主義者であって、まちがいのない科学的な研究方法によってしかるべき解釈が得られさえすれば、そうした説明もつけられると思っていることを記すだけで十分だろう。

その意味においても、シャリエール館は明らかに幽霊屋敷などではなかった。鎖をひきずって部屋から部屋へと歩きまわる幽霊もいなければ、真夜中にうめき声が聞こえることも、夜半に亡霊があらわれてさしせまる運命を告げることもない。しかしその屋敷には何人も否定しきれない雰囲気があり――それが邪悪あるいは恐怖もしくは慄然たる凶まがしいものによるものかどうかはわからないにせよ――もしもわたしが生まれつき神経過敏なたちだったなら、正気を失ってあの屋敷からとびだしていたことだろう。その雰囲気というのは、わたしの知っているどんな家屋の雰囲気よりも漠然としたものではあれ、長いあいだ人間の知覚をすりぬけてきた、名状しがたい秘密が屋敷内にあることをほのめかしていた。とりわけ歳月を閲しているという圧倒的な感じがあった――屋敷が存在してからの歳月ばかりか、世界が若かった遙かな過去にまでさかのぼるという感じなのだが、屋敷そのものは古いものだとはいえ、三世紀にもみたないものなのだから、いかさま奇妙なことではある。

最初は古物蒐集家としてこの屋敷を目にし、おちついたニューイングランドの家並のなかに、十七世紀にケベックでよく用いられた様式を顕著に示す住居が存在するのを知って、うれしい

思いがしたのだった。近くに建ちならぶ家屋とはあまりにも異なっているため、そばを通りすぎる者なら誰でもすぐに目をひかれるような建物だった。わたしはケベックはもとより、北アメリカの古くからある街の数多くに足をのばしているが、はじめてプロヴィデンスを訪れたこのときには、古さびた家屋を探してみるつもりなどなく、友人でもある有名な古物蒐集家をたずねようとしていたにすぎず、バーンズ・ストリートにある友人の家にむかう途中でシャリエール館を目にし、空家になっているので自分の住居として借りうける心づもりになったのだ。そうではあっても、友人の古物蒐集家がこの屋敷について妙にいいしぶったり、わたしが屋敷に近づくことにすら難色をしめしたりするようなことがなかったなら、そうはしなかったかもしれない。いまふりかえってみれば、ふたりながらに知る由もなかったとはいえ、気の毒な友人はあのときすでに死の床についていたのだから、おそらくわたしは友人に不当な仕打ちをしたことになるのだろう。わたしは友人の書斎ではなく、ベッドのかたわらに坐り、名前もなにも知らなかったために、外観をはっきりと説明して、屋敷のことを友人にたずねたのだった。

シャリエールという人物——ケベックから移住してきたフランス人の外科医——が屋敷を所有していたものらしい。しかし建築したのが誰であるのかについては、友人のギャムウェルも知らず、シャリエールのことを知っているだけだった。

「背の高い、肌のざらざらした男だったな——めったに見かけたことはないが、誰であれ、あの男をそう目にした者はおらんだろうよ。もう隠退していたからね」ギャムウェルはそういっ

た。
　ギャムウェルの知るかぎり、シャリエール医師はずっとあの屋敷で暮していたという——おそらく親と同居していたのだろうが、この点についてギャムウェルはなにも知らなかった。シャリエール医師は隠居生活をおくり、『プロヴィデンス・ジャーナル』に掲載された訃報によれば、三年まえの一九二七年に他界した。事実、ギャムウェルから聞きだせた具体的な情報はこの没年だけで、これ以外のことはすべて漠然としたものばかりだった。屋敷は一度だけ賃貸されたことがあり、専門職についている男が家族とともに移り住んだのだが、一カ月後には古い家特有のにおいがするとか湿気が多いとか文句をいってひきはらい、それ以後は空家のままになっている。とりこわしもされずにいるのは、長い歳月——一説には二十年——にわたり、土地家屋の税金が滞納されることのないよう、シャリエール医師が遺言でかなりの金をのこしていたからであり、こうして屋敷は外科医の相続人があらわれるときにそなえて存在しつづけることが保証されているのだが、その相続人について、外科医はフランス領インドシナで兵役についている甥のことを漠然と記しているだけだった。その甥を見つけだそうとする試みはすべてむなしくおわり、いまや屋敷はシャリエール医師の遺言で明記された期間が終了するまで、現状のまま維持されることになっているのだった。
「借りてみようかと思うんですがね」わたしはギャムウェルにいった。
　わが友人は病の床にふせっていながらも、片肘をついて身を起こし、わたしを思いとどまら

せようとした。「つかのまの気まぐれだよ、アトウッド君――そんなことは忘れてしまうんだ。あの屋敷については、穏やかでないことを聞いてるから」
「どういうことですか」わたしはぶっきらぼうにたずねた。
しかしギャムウェルはなにもいわず、ただ力なく首をふって目を閉じただけだった。
「明日にでも調べてみるつもりです」わたしはいった。
「ケベックにあるようなものとなにもかわらんよ、本当に」
しかし先に記したように、ギャムウェルがわたしの考えに妙に反対したことも、屋敷を仔細に調べたいというわたしの希望を強めただけだった。わたしとて死ぬまでその屋敷ですごすつもりはなく、半年ほど借りうけるだけにして、そこを足場にプロヴィデンスの通りや小路はもちろん、郊外にまで足をのばし、この地方の古物を探しだそうと思ったわけだ。ギャムウェルも最後には、シャリエール医師の遺言の執行をゆだねられた弁護士事務所の名前を教えてくれ、わたしは弁護士事務所を訪れて賃貸を申しこみ、さほど熱意のない相手がたを説得することにつとめ、そしてきっかり半年のあいだ、古いシャリエール館を自分のものにすることができたのだった。
わたしはすぐに屋敷に移ったが、給排水の設備はととのっていながらも、電気がひかれていないことを知って、いささか困惑してしまった。屋敷はすべての部屋がシャリエール医師の亡くなったときのままにされているが、屋敷の調度品のなかに照明としてつかえるランプが六つ

見つかり、造られた時代もその大きさもそれぞれに異なっていて、一世紀以上もまえのものもあった。蜘蛛の巣がかかり埃まみれになっているだろうと思っていたので、そうではないことを知って驚いたが、シャリエール医師の家系に連なる唯一の相続人があらわれることもないいま、今後半世紀ものあいだ、バーカー・アンド・グリーンボー弁護士事務所が屋敷の維持管理をするつもりでいるとは、およそ理解しがたいことだった。

屋敷はすべてわたしの願っていたとおりのものだった。重厚な造りの木造家屋で、壁紙がはずれかかっている部屋もあれば、もともと漆喰塗りの壁に壁紙がはられていない部屋もあり、どちらかだった。二階建てだが、二階はほとんどつかわれた形跡がない。しかし一階には、かつてここに外科医の住んでいた証拠がふんだんにあって、そのうちのひと部屋はどうやらなんらかの実験室、隣接する部屋は書斎としてつかわれていたらしく、そのふた部屋とも、なんらかの研究の途中でごく最近に明け渡されたような様子で、シャリエール医師の死後に短期間移り住んだ家族も、このふた部屋には手をつけていないかのようだった。屋敷は広びろとしていて、裏の庭に面したこの実験室と書斎まで立ちいらなくとも十分に暮せるため、おそらくそうだったのだろう。いまや灌木と木木がたくましく育っている裏庭もかなりの広さがあり、敷地は通りに面する正面で三区画以上を占め、高い石壁にいたるまでの裏庭は、裏の区画をひとつそっくりとりこんだものだった。

シャリエール医師はどうやらなんらかの仕事をおこなっているときに死期が来たらしく、その仕事の性質がおよそ尋常なものではなかったため、すぐに好奇心をそそられたことを告白しておく。その研究が人間のみを対象としたものでなかったことは、生理学の図を思わせる、さまざまな種類の爬虫類を描いた謎めいた不思議な図があることからも明らかで、なかでも目をひくのは鰐目のクロコダイル属とコビトワニ属の図だが、はっきりそれとわかるインドワニ、トミストマ、カイマン、アリゲーターの図にくわえ、ジュラ紀にまでさかのぼる爬虫類の初期形態を考察したスケッチもあった。しかしこの屋敷に古物蒐集家の好奇心をくすぐる謎がなかったなら、外科医の奇妙な研究の性質をこうして一瞥したことも、外科医の研究そのものを真剣に探ってみるだけの刺激にはならなかっただろう。

　シャリエール館は、後に給排水設備がもうけられている点はべつとして、建築当時の姿をそのままにのこしているものとして、たちまちわたしの胸を熱くさせた。わたしはそれまでシャリエール医師本人がこの屋敷を建てたのだろうと思っていた。友人のギャムウェルもまわりくどいことをいうばかりで、はっきりしたことはなにも教えてくれなかったし、そのことについていえば、外科医の死亡したときの年齢も口にはしなかった。かりに八十代なかばで死んだとしても、屋敷内部の証拠は建築時期を一七〇〇年ごろ――シャリエール医師の死ぬ二世紀以上もまえ――だとはっきり告げているので、外科医が建てたものではありえないことになってしまう。したがってシャリエール館という名称は、建てた者ではなくして、最後にもっとも長い

期間住んでいた者の名前であるように思われ、この問題を探るうえで、確かな事実とはなんの関係ももたないように思える不穏な事実をいくつか、つきとめることになったのだった。
　ひとつには、シャリエール医師の生年がどうしてもつきとめられなかった。わたしは外科医の墓を見つけだした——妙なことに敷地内にあって、庭に埋葬される許可を得たのだろうが、屋敷が建てられたころからあるものらしい、バケツと台のそなわる屋根のついた優美な古い井戸からほど遠くないところだった。生年を知ろうと思って墓石に目をむけたが、はなはだ失望させられたことに、墓石には名前のジャン＝フランソワ・シャリエール、職業の外科医、居住地もしくは診療をおこなった土地のバヨンヌ、パリ、ポンディシェリ、ケベック、プロヴィデンス、そして没年の一九二七年が刻みこまれているだけだった。ほかにはなにもない。しかしこれだけでもさらに調査をおこなうには十分で、わたしは調査すべきさまざまな土地の知人に宛て、問いあわせの手紙を書く作業にとりかかった。
　二週間のうちに、問いあわせに対する返書が届いた。しかしその結果は満足できるものからはほど遠く、いままでにもまして当惑させられることになった。わたしはまず、墓石に最初に記されていることから、シャリエール医師が出生した土地に近いのだろうと思い、バヨンヌにいる知人に問いあわせをした。つぎにパリに問いあわせ、イギリス古文書保管所で情報を得てくれるかもしれないロンドンの友人に調査を依頼し、最後にケベックにも問いあわせの手紙をだしたのだった。こうして送られてきた返書からつかめたものは、一連の謎めいた年号にすぎ

なかった。ジャン＝フランソワ・シャリエールという人物は確かにバヨンヌで生まれている——しかし一六三六年のことなのだ。この名前はパリでも知られており、おなじ名前の十七歳の若者が、一六五三年から三年間にわたって、イギリスから追放された王党員のリチャード・ワイズマンのもとで学んでいる。インドのポンディシェリ——後にはコロマンデル海岸——では、ジャン＝フランソワ・シャリエール医師なる人物が、一六七四年以来フランスの軍隊の外科医として従軍している。そしてケベックでは、シャリエール医師のもっとも古い記録は一六九一年のもので、六年間その街で医療活動にたずさわった後、いずことも知れない土地に移っているのだった。

どう考えてみたところで、ひきだせる結論はただひとつしかないようだった。つまり、一六三六年にバヨンヌで生まれ、ベネフィット・ストリートの屋敷が建てられる年までケベックにいたことが知られているジャン＝フランソワ・シャリエール医師は、最後にこの屋敷に住んだ外科医とおなじ名前をもつ祖先だということだ。しかしそうであるとしても、一六九七年という年代と、屋敷を最後に所有した人物の生涯のあいだには、大きなへだたりがあり、最初のジャン＝フランソワ・シャリエールの家族についてはまったくなにひとつ情報が得られなかった。夫人や子供たちがいたとしても——今世紀にまで家系がつづいているのだからいたはずだが——記録はなにもない。もっともケベックからやってきた最初の人物が、プロヴィデンスで結婚したこともありえないことではないだろう。当時は六十一になっていたことになる。しかし

ことになったが、古物蒐集家として事実をつきとめる困難さは十分にわきまえているので、はなはだ失望させられたとはいえ、調査を中断するほどのものではなかった。
　わたしは新たな角度から調査することにして、ベイカー・アンド・グリーンボー弁護士事務所を訪れ、故シャリエール医師にかかわる情報を求めた。ここではさらに奇妙な挫折がわたしを待ちうけており、フランス人の外科医の顔つきをたずねると、弁護士はふたりとも、シャリエール医師には会ったことがないといったものだ。指示はすべて気前のいい金額の小切手とともに手紙で送られてきたのだという。弁護士ふたりはシャリエール医師が死ぬおよそ六年まえから代理行為をひきうけていて、それまではシャリエール医師に雇われてはいなかったのだ。
　わたしはつぎに医師の「甥」についてたずねたが、そういう質問をしたのは、すくなくとも甥が存在するとすれば、シャリエール医師に兄弟か姉妹がいたことを意味するからだ。しかしこれもまた行きどまりだった。ギャムウェルから聞いたことはまちがっており、シャリエール外科医は甥とはっきり明記しているわけではなく、ただ「わが家系に連なる唯一の男性遺族」と記しているだけだった。この人物は甥だろうと考えられているにすぎず、いくら手をつくしても探しだせなかったが、シャリエール医師の遺言書には、かかる「唯一の男性遺族」を探しだす必要はなく、本人であることをまちがいなく示す形で、文書で知らせるか直接ベイカー・アンド・グリーンボー弁護士事務所に訪れるという意味のことが記されている。まさしく謎め

いたことであり、弁護士ふたりもそのことを否定しなかったが、弁護士は信託物件に対して十分すぎるほどの報酬を得ているらしく、わたしに話したようにごくあたりさわりのないことを口にするしかないこともわかった。ともかく弁護士のひとりが分別よく指摘したように、シャリエール医師が亡くなってからまだ三年しかたっておらず、遺族があらわれる時間はまだたっぷりとあるのだから。

この線に沿って調べることに失敗したため、わたしは旧友のギャムウェルを訪れたが、まだ床にふせって、見ためにも衰弱していた。かかりつけの医者がおりしもひきあげるところで、ギャムウェルが二度と回復しないことをはじめて告げ、興奮させたりしたくさんの質問をして疲れさせたりしないようにと忠告した。そうはいっても、わたしはシャリエール館のことで、できるかぎり多くのことを聞きだそうと心をかためていたのだが、ギャムウェルにくいいるように見つめられるとは思ってもいなかった。まるでギャムウェルは、わたしがシャリエール館で暮してまだ三週間にもならないのに、わたしの風貌に変化が起こっているのではないかと考えているかのようだった。

挨拶の言葉をかわした後、すぐに用件にうつって、屋敷が興味つきないものであることを説明し、シャリエール医師についてもっとよく知りたいのだといった。会ったことがあるといっていたでしょう、ともちかけると、

「しかしずいぶんまえのことだ」ギャムウェルがいった。「亡くなったのは三年まえだったな。

そうすると、最後に見かけたのは、一九〇七年のことになる」
　わたしは驚いてしまった。「シャリエール医師の死んだ二十年もまえのことじゃありませんか」わたしにはうけいれられなかった。
　それでもギャムウェルは一九〇七年なのだと主張した。
　それで顔つきはどんなふうだったんですか。わたしはそう質問した。
　がっかりしたことに、老衰と病とが、老人のかつては聡明だった頭脳をむしばんでいたと見える。
「蜥蜴をつかまえ、すこし育て、後脚で歩かせるようにして、きれいな服を着せてやればいい」ギャムウェルがいった。「それがジャン＝フランソワ・シャリエールだ。もっとも肌はざらざらしていて、ほとんど硬化しているといってもいいくらいだったがな。冷血人間だった。べつの世界に生きてたのさ」
「死んだときは何歳だったんです」わたしはたずねた。「八十くらいですか」
「八十ね」ギャムウェルは考えこんだ。「はじめて会ったとき──当時わたしは二十歳だったが──シャリエール医師は八十以上には見えなかったな。それにアトウッド君、二十年まえに見かけたときには、すこしもかわっていなかったんだよ。はじめて会ったときは八十くらいに見えた。わたしが若かったから、そんなふうに思えたのかな。たぶんそうだろう。一九〇七年には八十くらいに見えたんだ。そしてその二十年後に亡くなった」

「それだと、百歳になりますよ」
「そうかもしれんよ」
しかしギャムウェル自身も納得がいかないようだった。またしても具体的なことは、事実のひとかけらとして得られなかった——ギャムウェルが口にはできない理由から嫌っているらしい人物について、その印象、思い出を告げられただけだった。おそらく職業的な嫉妬が、さしものギャムウェルの判断をくもらせていたのだろう。
わたしはつぎに近所をたずねまわってみたが、大半は若い人びとで、シャリエール医師のことはほとんどおぼえていなかった。ただ早くどこかへ移ってもらいたい人物だったという意見があったのは、医師が不快にも爬虫類を買いこんでいたからだが、さて医師の実験室でいかなる悪魔じみた実験がおこなわれていたかとなると、誰も知らなかった。ただひとり高齢の人物がいて、シャリエール館のすぐ裏に建つ小さな二階建ての家に住んでいる、ヘプズィバ・コベットという老婦人だが、高齢のために足腰がめっきりおとろえ、車椅子に坐って、鷲鼻の娘につきそわれていた。娘は鼻眼鏡ごしにひややかな青い目でわたしを不審そうに見つめたが、老婦人のほうは、わたしがシャリエール医師の名前をもちだし、シャリエール館に住んでいることを知らせると、急に生気をとりもどして話をはじめた。
「あんな家に長く住んではいけませんよ。早く出ていきなさい。あれは悪魔の家なんですからね」老婦人は息をはずませてそういったが、すぐに老人特有のしゃがれ声になった。「あたし

はあの人をよく見かけましたよ。背が高くて、鎌のように腰がおれて、顎には山羊みたいにちょこっと髭がはえてましたっけ。あたしにははっきり見えなかったけど、あの人の足もとで這ってたもんはなんだったんでしょうかね。長くて黒いもんでしたけど、蛇にしては大きすぎましたよ——けど、あたしはシャリエール先生を目にするたびに、蛇のことを思いましたね。それにあの夜、悲鳴をあげたのはなんだったんでしょう。井戸で吠えてたのはなんだったんでしょう——狐じゃないでしょうね。あたしは狐も犬も知ってますから。海豹の声みたいでしたよ。ねえ、あなた、あたしはいろんなものを見ましたけど、もう墓に片足をつっこんでる婆さんのいうことなんか、誰も信じちゃくれませんよね。あなただってそうですよ。誰も信じちゃくれないんだから」

　どううけとればいいのだろうか。おそらく娘がわたしを見送りながらいったことが正しいのだろう。

「母のいったことは聞きながしてください。動脈硬化になっているせいで、気がふれたようなことをいうもんですから」娘はそういったのだ。

　しかしわたしにはコベット婦人の気がふれているようには思えなかった。話しているときに目がきらめいて輝き、いつもそばにいる保護者めいた、いかめしい娘にはとうてい理解もおよばない、途方もないひそかな冗談を楽しんでいるかのように見うけられたからだ。

　つねに失望が待ちうけているようだった。あらゆる手段をつくして得た情報も、たがいにま

とまりあうということはなかった。新聞のファイル、図書館の参考文献、登記簿をくまなく調べても、屋敷が一六九七年に建てられたことと、ジャン＝フランソワ・シャリエール医師の没年がわかっただけだった。たとえシャリエールという名前の別人がこの街で死んでいたとしても、そういう記録はなかった。ベネフィット・ストリートの屋敷の最後の所有者に先立って、シャリエール家の一族がプロヴィデンス以外の地で全員亡くなったとは、およそ考えられないことだが、ほかにもっともらしい説明がつけられない以上、そう考えるしかない。

　しかし新たにわかったことがひとつある――屋敷のなかでシャリエール医師の肖像画を見つけたのだ。二階の部屋でほとんど手の届かない片隅にかけられており、名前は記されていないが、J・F・Cのイニシャルがいかなる疑いもはねつけた。細おもての禁欲主義者めいた顔つきで、まばらな顎鬚をたくわえ、高い頬骨、おちくぼんだ頬、燃えるような黒い目に特徴がある。その表情たるや、薄気味悪い陰鬱なものだった。

　こうして他の情報を得る方策もないまま、わたしはまたしても、シャリエール医師の書斎と実験室にのこされている書類や書物に目をむけざるをえなかった。これまでのところ、シャリエール医師の経歴を調べるために屋敷をはなれることが多かったが、いまや屋敷に閉じこもったも同然だった。おそらくこうして閉じこもったことによるのだろうが、屋敷の雰囲気をますます強く意識するようになりはじめた――精神的にも肉体的にも感じとるようになったのだ。ある家族がこの屋敷に移り住みながら、屋敷にたちこめるにおいにたえかね、一カ月でひきあ

げたことが頭にあって、はたしてにおいがするものかと気をつけるようになっていたが、するうちはじめて、さまざまなにおいのすることがはっきりわかるようになった。古い家につきもののにおいもあれば、わたしにはまったく見当のつかないにおいもある。しかしもっとも強くにおうのは、はっきりそれとわかるものだった。以前に何度も——動物園や沼沢地や澱んだ池で——かいだことのある麝香のにおいで、爬虫類の存在を強くほのめかす瘴気に近いものだった。爬虫類が街をぬけて、シャリエール館の裏庭という安息所にやってくることも、かならずしもありえないことではないが、あたりに充満するにおいを放つほどの数をなして存在するとは、およそ信じがたいことだった。そして屋敷の内部や外をいくら探そうと、この爬虫類の麝香を発する源は見つからず、一度は井戸からたちのぼってくるのではないかと思いこみさえしたが、これは明らかにわたしの空想のもたらした根も葉もない確信だった。

　この麝香のにおいは消えることがなく、湿度があがるとにおいは強まるものだから、予想したとおり、雨がふったり、霧がたちこめたり、草に露がおりたりするときに、ことのほか強くなった。屋敷のなかも湿度が高く、例の家族が短期間でこの屋敷をひきはらった理由の一部はこれで説明がつくし、屋敷をひきはらったことはまちがいではない。わたしも不快感をおぼえることが多かったとはいえ、しかし心をかきみだされるほどではなかった——この屋敷の他の様相ほどに心がかきみだされることはなかった。

　事実、わたしが書斎と実験室に立ちいったことが刺激となって、この古い屋敷が抗議をしは

じめたかのように、ある種の幻覚が困惑させられるほどの規則正しさで起こるようになったのだ。たとえば、夜遅くに奇妙な吠え声が庭から聞こえてくるように思えた。また、妙に腰のまがった爬虫類じみた人影が、庭の闇のなかに出没するのが書斎の窓から見えるような幻覚もあった。こうした幻覚は執拗につづき――わたしは幻覚とみなしつづけていたのだが――やがてあの運命の夜、誰かが庭で水あびでもしているような音がはっきり聞こえたあと、わたしは屋敷のなかにいるのが自分ひとりではないことを確信して眠りから目ざめ、ローブとスリッパを身につけ、ランプに火をともし、書斎にむかったのだった。

書斎で目にしたものが、故シャリエール医師の書類を読んだことから引き起こされた、幻覚であればよいものを。そのときは悪夢の産物であることを疑いもしなかった。ほんの一瞬、侵入者の姿が目にはいったのだが、そのときは悪夢の産物であることを疑いもしなかった。それというのも、書斎にいた侵入者はシャリエール館にのこされていた書類をもって逃げだし、わたしは頭上にかかげたランプの弱よわしい黄色の光にやや目をくらませながら、ほんのつかのま賊の姿をとらえたのだが、黒くてらてら輝いているような、体にぴったりあった粗く黒い材質の服をまとっているように思えたからだ。ほんのつかのま目にしたかと思うと、たちまち開いた窓から庭の闇のなかにとびだし、わたしもランプの光のもとで心さわがされるものを見なかったなら、そのあとを追っていただろう。

侵入者がいたところに不規則な足跡――ぬれた足跡――があるばかりか、足跡の間隔が妙に広く、指には長い爪があるものらしく、指の跡と爪の跡がはっきりはなれていた。そして侵入

者がかがみこんでいた書類もぬれており、あたりにはこの屋敷特有のものとしてわたしがうけいれるようになっていた、あの爬虫類の麝香のにおいがたちこめ、ほとんど気を失いそうになるほど強烈だった。

　しかし書類に対する関心が恐怖や好奇心をうわまわった。そのときわたしの脳裡にうかんだただひとつの解釈は、シャリエール館に怨みをいだき、とりこわしを先導している隣人の誰かが、ひと泳ぎしてから書斎にしのびこんだというものだった。確かにこじつけもはなはだしい。しかしわたしが見たものに対して、ほかにどのような解釈ができるだろう。わたしは考えたくもない。

　書類についていえば、まちがいなく一部がなくなっていた。なくなったものは幸いにして、わたしがすでに目をとおしていたものだった。こぎれいに積みかさねておいたのだが、大半はつながりのないものばかりだった。わたし以外の誰かがシャリエール医師に関心をもち、屋敷や財産を自分のものにしようとしているのでないかぎり、どうして書類をほしがるのかまったくわけがわからない。盗まれた書類は、クロコダイルやアリゲーターといった爬虫類が長命であることについて、骨身をおしまず記された覚書だったからだ。わたしにもすでにはっきりわかりはじめていたが、シャリエール医師はほとんど強迫観念のような熱意をもって、どうやら人間の寿命をのばす方法を見つけようとして、爬虫類の長命さを研究していたらしい。爬虫類の長寿の秘密がはたして明らかになったものかどうかは、これまでのところ書類からはうかが

えなかったが、被験者の寿命をのばす意図をもって、なんらかの「手術」がほどこされたことを暗示する、どうにも不穏な文章が二、三あった――被験者が誰であるのかは記されていない。
シャリエール医師が手書きしたと思われる書類のなかに、ほかとは趣のちがう覚書があり、関連する主題をあつかったものだが、わたしには爬虫類の長命さを科学的に研究するものとは異なっているように思えた。これはある種の神話的生物、とりわけ「クトゥルー」と呼ばれるものと、「ダゴン」と呼ばれるものについての謎めいた文章からなっていて、両者ともにどうやらわたしにはまったく未知の、古代の神話における海の神であるらしく、これら古代の神神に仕える、深海に棲む両棲類らしい「深きものども」とよばれる長命の生物（あるいは種族）をほのめかす文章もあった。こうした覚書のなかには、一枚岩から刻まれた、ことのほか悍しい、明らかに爬虫類の特徴をおびた彫像の写真があり、「マルケサス諸島、イヴァオサ島の東海岸。崇拝の対象」とラベルに記されているほか、爬虫類を思わせる、驚くほど造りのよく似た北西海岸のインディアンのトーテム・ポールの写真があって、こちらには「クワキウトル族のトーテム。クアツィノ・サウンド。トリンギット族も同様のトーテムを建立」と記されていた。こうした奇妙な覚書のあることは、シャリエール医師が切実に望む目標に達するため、古代呪術や原始的宗教の儀式まで、綿密に研究することすらいとわなかったことを示しているかのようだった。
それがいかなる目標であるかは、すぐに明らかになった。シャリエール医師はただ長命の研

究にのみ関心をもっていたのではなく、自分自身の寿命をのばすことを願っていたのだ。そして医師ののこした文書のなかには、衝撃的な文章があり、すくなくとも部分的に、奔放きわまりない夢をもこえる成功をはたしたことがほのめかされていた。このことを知ってわたしが動揺したのは、一九二七年にプロヴィデンスで亡くなった、故ジャン＝フランソワ・シャリエールの、誕生から若いころのことが謎につつまれているのと同様に、晩年と死がまったく謎につつまれている、おなじく外科医であった、最初のジャン＝フランソワ・シャリエールの奇妙な経歴を思いだしたからだ。

その夜の出来事は、ひどくおびえさせられるほどのものではなかったにせよ、結局わたしは新品の懐中電灯とともに、古道具屋で強力なルガーの拳銃を購入することになった。ランプはこのまえの夜にかえって邪魔になったが、懐中電灯ならおなじような場合にも、わたしの目をくらませるようなことはないだろう。隣人の誰かが押しいったのであれば、もちさった書類は目当のものではなさそうだから、遅かれ早かれまたやってくるはずだ。その場合にそなえて準備万端おこたりなくして、わたしの借りている屋敷の書斎でまた略奪をしようとする者を見つけた場合、おとなしくしろといって聞かないようなら、ためらわずに発砲するつもりだった。

つぎの日の夜は、またシャリエール医師の蔵書と書類に目をとおした。蔵書は祖先のものだったにちがいなく、何世紀もまえに刊行されたものが多くあり、そのなかに英語からフランス語に翻訳されたR・ワイズマンの著書があって、パリにおいてワイズマンのもとで学んだジャン＝

フランソワ・シャリエール医師と、ロード・アイランド州プロヴィデンスに最近まで住んでいたおなじ名前のいまひとりの外科医に、ある程度のつながりがあることを示していた。
　全体としてはきわめてまとまりのない蔵書というしかない。フランス語からアラビア語にわたる、ありとあらゆる言語で記された書物があるようだった。事実、わたしもフランス語は読めるし、ロマンス語のいくつかはどうにかこなせるのだが、大半の書物はその書名を翻訳することすらおぼつかない。当時のわたしには、フォン・ユンツトの『無名祭祀書』といった書名がなにを意味するのか、まったく理解できなかったとはいえ、おなじ棚の隣にならんでいるダレット伯爵の『屍食教典儀』と同類のものではないかと思えた。動物学にかかわる書物のそばには、古代文化に関する浩瀚な書物がならび、『ポリネシア人と南米大陸のインディオ文明の関連性の考察――ペルー考をふくむ』をはじめ、『ナコト写本』、ジャンバッティスタ・ポルタの『秘密書記法』、シックネスの『暗号』、レメギウスの『悪魔崇拝』、バンフォートの『龍脚類の時代』といった書物にくわえ、マサチューセッツ州アイルズベリイの『トランスクリプト』紙、おなじくマサチューセッツ州アーカムの『ガゼット』紙といった新聞のファイルもあった。一部の書物はかなりな価値のあるものにちがいなく、多くの書物は一六七〇年から一八二〇年にかけて刊行されており、すべて一様によく繙かれた形跡があるものの、比較的保存状態は良好だった。
　しかしこうした書物もわたしにとってはほとんど意味をなさなかった。ふりかえってみれば、

もっと丹念に目をとおしていたなら、さらに多くのことを知りえていただろうと思わざるをえないが、ほんのわずか知っているよりはなにも知らないほうがましともいわれている。わたしがすぐにこうした書物を調べるのをやめてしまったのは、書棚に押しこまれた恰好で、日記か日誌のように思えるものが見つかったからだ。よく調べてみると、シャリエール医師の生まれるはるか以前の年代が記されているので、備忘録であることがわかった。すべて判読しがたい小さな文字で書かれており、十中八九、いまは亡きシャリエール医師の書いたものであって、最初のほうの年代が腑におちないとはいえ、すべておなじ筆跡で記されており、はじめのほうの記述から察するに、シャリエール医師がおおざっぱな年代順配列のもとに覚書を記しているもののようだった。ただ文章だけではなく、ところどころに図も描かれており、絵の教育をうけていない画家の素朴な絵によく見うけられるように、粗雑ではありながらもそれなりに効果的なものだった。

　そしてわたしは手ずから装釘された草稿の第一ページに、つぎのような書きこみを目にしたのだ。

　　一八五一年。アーカム。アセフ・ゴウド、深。

これには件のアセフ・ゴウドと思われる人物を描いた絵がそえられ、顔の特徴が強調されて

いて、本質的には両棲類といってよく、異様なまでに大きな口、奇妙にも堅そうな唇、きわめてせまい額、妙に薄膜がかかったような目、全体的にずんぐりした姿態が目をひき、まぎれもない蛙じみた姿にほかならなかった。この絵がページの大半を占めていて、これにともなう書きこみは――実在するものとはとうてい思えないため明らかに文献を調べるうえで――外科医の見いだした人間もどき（「深」という省略は先に医師の書類に見いだした深きものどもを意味するのだろうか）についての注釈と思われ、どうやらシャリエール医師は、みずからの研究の動向を確証するものとみなしていたらしい。この人間もどきに、両棲類や爬虫類とのなんらかの血縁関係が跡づけられるという、医師がおそらくいだいていた信念を支持するものとしてだ。

そのために、ほかにも書きこみがなされていた。その多くは漠然としていて――おそらく故意にそうされているのだろうが――最初に目をとおしたときには、まったく意味をなさなかった。たとえば、つぎのような文章の記されたページを、どう理解すればいいのだろうか。

一八五七年。セントオーガスティン。ヘンリー・ビショップ。皮膚は鱗状なるも、魚類のものにあらず。一〇七歳という。老化は認められず。感覚はすべてなおも鋭敏。家系は定かならざるも、過去にポリネシアにて交易に従事せり。

一八六一年。チャールストン。バラツ家。手の皮膚の硬化。二重顎。家族全員おなじ徴候を示したり。アントン一一七歳。アンナ一〇九歳。海よりはなれて不幸なるかな。

一八六三年。インスマス。マーシュ、ウェイト、エリオット、ギルマン家。オーベッド・マーシュ船長、ポリネシアにて交易し、ポリネシアの女と結婚。全員がアセフ・ゴウドと同様の容貌をせり。秘密につつまれし生活をなす。女はほとんど外には出ぬが、夜にはよく泳ぐ――家族全員、町の住民が家に閉じこもるなか、悪魔の暗礁まで泳ぎたり。深との関係きわめて顕著。インスマスとポナペの往来はなはだし。異教の信仰。

一八七一年。カーニヴァルの芸人ジェド・プライス。「鰐男」として知られる。鰐のいる池にあらわる。長くつきでた顎。歯の先がとがりたるといわれたるも、真偽は定かならず。

　書きこみはこういう調子のものばかりだった。対象範囲は北米大陸全域におよんでいる――北アメリカの東海岸のみならず、カナダやメキシコまでとりあつかわれていた。こうした覚書を読むにつれ、ジャン＝フランソワ・シャリエール医師が、しだいに奇妙な強迫観念にとりつかれた男としてたちあらわれてきた――爬虫類もしくは両棲類の祖先となんらかの血縁関係を

もつ特徴をおびた、特定の人間の長命さを証明しようとしていたのだから。
正直なところ、顕著(けんちょ)な肉体欠陥をおびている人びとについての記述を、願望によって潤色(じゅんしょく)されたものではなく、すべて事実としてうけいれられるなら、こうして集められた証拠の重要性は、シャリエール医師にもその信念にも、異様かつ刺激的な確証をあたえるものだと思われる。しかし外科医の記しているものは、ほぼ純然たる推測の域にとどまっているのだ。外科医が探し求めていたものは、注意をひかれるにいたったさまざまな事例を結びつけるつながりだったらしい。そして三つの神話伝説にこのつながりを求めた。このうちもっともよく知られているのは、ネグロ文化のヴードゥ伝承だろう。馴染(なじみ)深さにおいてこれにつぐのは、古代エジプトの動物崇拝だ。最後に、そして外科医の覚書によればもっとも重要なものは、地球よりもさらに古い、太古の旧神と、おなじように原初の存在である旧支配者との止(や)むことのない怖るべき闘いにかかわる、まったく異質な文化だった。旧支配者はクトゥルー、ハスター、ヨグ＝ソトース、シュブ＝ニグラス、ナイアーラトテップといった名前をもち、トゥチョ＝トゥチョ人、深きものども、シャンタク鳥、忌わしき雪男といった奇妙な生物に仕えられ、これら従者のなかには人間に近いものもいるが、それ以外のものは突然変異か、まったく人間とはかけはなれているらしい。シャリエール医師の研究成果は魅力的なものではあるが、はっきりしたつながりと思えるものはどこにも見いだせなかった。ヴードゥ教には特定の爬虫類のことが記されている。古代エジプトの宗教文化にも同様のつながりがある。そして爬虫類をクトゥルー神話に関

連づける、もどかしいほど曖昧な暗示が数多くあって、これらはクロコダイルやガビアルよりも古く、ティラノサウルス、ブロントサウルス、メガロサウルスといった中生代の恐龍が存在した、遥かな過去にさかのぼるものだった。

　こうした興味深い覚書にくわえ、きわめて奇妙な手術と思われるものの図解があり、これがどういう性質のものであるのか、当時はまるで理解できなかった。これらの図は明らかに古い書物から写されたものであって、とりわけ出典としてよくあげられているのは、ルドウィク・プリンの著した『妖蛆の秘密』という書物であり、不可解な言及がなされて、わたしにはまったく理解しがたいものだった。手術そのものは、そうした手術をおこなう理由があまりにも驚くべきものなので、とても額面どおりにはうけとれない。たとえば手術のひとつとして、皮膚をのばすためにおこなわれるものがあるのだが、「成長を可能ならしめる」ために多数の切開をなすことからなりたっている。もうひとつは、「尾骨の拡張」を目的として、脊柱を単に十字切開するものだった。これら途方もない図がほのめかしているのは、考えるだに怖ろしいことだが、シャリエール医師によって多年にわたってつづけられた、奇怪な調査研究の一部であることにまちがいはない。シャリエール医師の目指していたものは、同僚の学者たちの非難や嘲笑をかわすためにも、ひそかにおこなわざるをえないものだったため、医師の隠棲もこれによって説明がつけられるだろう。

　こうした書類のなかに、筆者自身の経験であると思うしかない筆致で書かれたものがあった。

あったが、まぎれもないシャリエール医師の筆跡で記されているために——別人の経験を書き写している可能性はあるとはいえ——医師が死亡時には八十路をこえていることが明らかになった。事実、八十をはるかにこえているらしく、そのことから予想されることを考えれば安閑としていられなくなり、この屋敷の最後の主が死ぬまえに亡くなった、いまひとりのシャリエール医師のことを思いださずにはいられなかった。

シャリエール医師の信条の骨子は、ある種の手術をほどこすとともに、慄然たる性質の異常な処置をとることで、人間が爬虫類に特有の長寿を得られるということだ。一世紀半、おそらくは二世紀以上もの歳月を人間の寿命にくわえることができ、そればかりか、湿度の高い場所でなかば意識的な休眠状態をある期間おこなえば、これが一種の妊娠期間のようなものになり、確かに外見にはいささか変化が生じるものの、生まれかわって新たな寿命をもつことも可能となり、そのさい起こった生理学的な変化によって、以前の生活様式をいささかかえなければならないことになるらしい。この確信を支持するために、シャリエール医師が蒐集したのは、かなりな伝承、同様の性質をもつデータ、そして過去二百九十一年間に存在したことが知られる、奇妙な人間の突然変異に関係した、きわめて思弁的な話ばかりだった——この二百九十一年間という数字は、あとになって、最初のシャリエール医師の生年から現代の外科医の没年までの期間であることに思いいたったとき、大きな意味をもつようになった。こうした資料のなかには——ほのめかしや曖昧な暗示があるばかりで——具体的な線に沿って、引用可能な証拠

をもちだし、科学的な調査研究がおこなわれたことを示すものはどこにもなく、なにげなく読んだ者の胸を怖ろしい疑いと半信半疑の慄然たる確信でみたすだろうが、およそまともな学者の真摯な関心をひくものではなかった。

　このままなにも起こらなければ、わたしはシャリエール医師の調査研究にどれほど深入りしていただろうか。

　ベネフィット・ストリートの屋敷から悲鳴をあげて逃げだすことになった、あの出来事が起こらなければ、屋敷から逃げだしたりするかわりに、さらに調査をつづけ、いずれ屋敷が市当局によって最終的にとりこわされるようにしていただろう。屋敷とその財産を自分のものだと主張する相続人があらわれるはずもないことを、いまのわたしは知っているからだ。

　人が好んで「第六感」と呼ぶものによって、わたしが何者かに監視されていることを意識するようになったのは、シャリエール医師の「発見したこと」について思いをめぐらしているときのことだった。わたしはふりかえる気にはなれず、次善の策と思えることをなし、懐中時計をとりだして、蓋を明けて目のまえにかかげ、鏡のように磨きあげられた蓋の内側をつかい、背後の窓を映そうとした。すると、そこにぼんやりと、人間の顔をすさまじくもゆがめたものが映っているのが見え、驚きのあまり、この目で確かめようとしてふりかえった。しかしかすかな動きが目にはいったとはいえ、窓ガラスが見えるだけだった。わたしは立ちあがり、ランプを消して、すぐに窓に近づいた。長身ながらも妙に腰のまがった人影が、身をかがめるよう

にして、不恰好な足取りで庭の闇のなかに消えていくのを見たのは、はたして本当のことだったのだろうか。確かに見たと思ったが、あえてその跡を追うような愚行はおかさなかった。何者であるにせよ、まえの夜にあらわれているのだから、またあらわれるはずだった。

こうしてわたしは待つことにしたが、それらしく考えられる解釈が脳裡にひしめいていた。夜の侵入者として、シャリエール医師の住居が存在しつづけることに長く反感をいだいている隣人たちを、まず疑ってかかったことを告白しておく。わたしの賃貸期間が短いことを知らないまま、わたしをおどして逃げださせるつもりだということはありうる。それに書斎のなかにほしがっているものがあるということも考えられるが、屋敷が長いあいだ空家になっていて、探しまわる時間は十分にあったわけだから、これはこじつけにすぎるだろう。事態の真相はついにわたしの頭には思いうかばなかった。古物蒐集家の例にもれず、わたしも生まれつき疑いぶかいたちではないが、わたしほど科学的な精神をもたない者には大きな意味をもつ、たがいにからみあった奇妙な状況でありながらも、正直いって侵入者の正体については、まるで見当もつかなかった。

闇につつまれながら、書斎で腰をおろしていると、古い屋敷の雰囲気をいままでにもまして痛感させられた。闇そのものが生きているようだったが、まわりにひしめくプロヴィデンスの生命とは信じられないほどかけはなれているようだった。内部の闇ははるかな歳月の霊的な澱にみたされているようで、たえざる湿気のにおいが、動物園の爬虫類の檻にひとしくつき

まとう、あの麝香のにおいをしたがえて鼻をつく一方、これまでにこの屋敷が閲した歳月が材木と石材の双方を劣化させているため、古い材木や地下室の壁をつくっている古い石灰岩のにおい、そして腐朽のにおいがたちこめていた。そしてそれ以上のもの、動物の存在をほのめかすかすかな気配が、刻一刻と強まっていくようだった。

一時間以上もそんなふうに坐っていると、妙な音が聞こえた。

やがてその音は聞こえなくなった。最初はアリゲーターのたてる音に似ているように思ったが、そのあとたくましい想像力のなせるわざとは思えない、実際にドアの閉まる音が聞こえた。しかししばらくすると、またべつの音がわたしの耳をうった――紙をまさぐる音だった。なんということか、賊がわたしに見られることなく、実際に書斎に入りこんでいるのだ。わたしは机のほうにむけていた懐中電灯をつけた。

わたしが目にしたのは、信じられない、怖るべきものだった。そこに立っていたのは人間ではなく、人間の姿をゆがめたものだった。その激変的な一瞬、わたしは意識を失うのではないかと思ったが、切迫感にくわえ、危険をまざまざと意識することで、瞬時のためらいもなく、四度つづけて拳銃を発砲し、至近距離だったため、闇につつまれる書斎でシャリエール医師の机にかがみこむ、獣的な生物の体にすべて命中したはずだった。

そのあとにつづいたことについては、ありがたいことにぼんやりした記憶しかない。のたうちまわる音がして、侵入者が逃げだし、どうやらわたしはその跡を追ったらしい。弾はあたっ

ていたはずで、机のそばから賊がガラスを破って出ていった窓まで、血の跡がのこっていた。外では、懐中電灯の光が血痕を照らしだし、跡を追うのは造作もないことだった。こんな血痕がなくとも、夜の大気に強烈な麝香のにおいがたちこめているので、逃げているのが何者であれ、その跡を追うことはできた。

　血痕は——屋敷からさほどはなれることなく——庭の奥へとつづき、まっすぐ裏の井戸にむかっていた。そして井桁をこえた井戸のなかに、わたしははじめて、懐中電灯の光によって、巧妙に備えられた梯子が闇の奈落に通じているのを見た。井桁にはかなりな血が流れているので、侵入者が致命傷を負っていることにわたしは自信をもった。この自信に支えられ、明らかな危険をものともせず、跡を追いつづけたわたしだった。

　井戸のまえで踵を返し、そのまま呪われた場所をあとにしてさえいれば。しかしわたしは井戸の壁面に備えられた梯子をおりて、最初予想したような水中ではなく、庭のさらに奥深くへと通じる、井戸の壁面に設けられたトンネルの開口部に達した。いまや侵入者の正体を知りたい燃えるような欲求にかりたてられるまま、泥が服を汚すことも気にかけず、懐中電灯をまえにつきだし、いつでも発砲できる準備をして、トンネルのなかに入りこんでいった。前方に穿たれた洞窟のようなものが見え——おとなひとりが膝をついてどうにか通りぬけられるものだったが——懐中電灯の光があたった中央に棺があり、それを見るやわたしが一瞬ためらったのは、井戸からはじまるトンネルのむかっている方向が、シャリエール医師の墓にほかならなかった

からだ。

しかしここまで来た以上、もうひきかえすことなどできなかった。

この狭い開口部のにおいたるや、ほとんど筆舌（ひつぜつ）につくしがたいものだった。トンネルじゅうに充満しているのは、胸がむかつくような爬虫類の強烈な麝香のにおいで、事実、あまりにも濃厚にたちこめているため、棺にむかって突き進むしかなかった。わたしは棺に近づき、蓋（ふた）がされていないことを知った。血痕は棺の縁、そしてそのなかにつづいていた。燃えあがる好奇心にうながされ、なにを目にすることになるかと思うと、いささか不安でもあったが、わたしは膝をついたまま上体を起こし、震える手で懐中電灯の光を棺のなかにむけた。

あれから長い月日のすぎさったいま、わたしの記憶があてにならなくなっていることは、責められてしかるべきかもしれない。しかしわたしが見たものは、わたしの記憶に消しがたく焼きついている。懐中電灯が照らす棺のなかには、いましも死んだばかりの生物が横たわっており、そんな生物が存在することによって暗示されるものが、わたしを恐怖で圧倒した。これこそわたしが殺した侵入者だった。なかば人間、なかば爬虫類で、かつては人間であったものをすさまじくもゆがめた姿にほかならない。体が怖るべき変化をして、はりさけて硬化した皮膚によって、服はずたずたにひきさかれており、手とむきだしの足は平べったく、強靭（きょうじん）そうで、鉤爪（かぎつめ）を思わせた。わたしがものもいえない恐怖に襲われながら目にしたのは、背骨の基部からずんぐりつきだす尾のような慄然たる付属器官と、怖ろしくもひきのばされたクロコダイルの

ような顎で、その顎には山羊の髭を思わせる、ひとふさの毛がまだついていたのだ……

わたしはこうしたものを目にしたあと、ありがたくも意識を失った──棺のなかに横たわっているのがなんであるかがわかるほど目にしたためだった。一九二七年以来、強硬症の休眠状態のまま横たわり、悍しくも変身した姿でよみがえるのを待っていたのだ。一六三六年にバヨンヌで生まれ、一九二七年にプロヴィデンスで「死んだ」、外科医のジャン＝フランソワ・シャリエール。そしてわたしは、シャリエール医師の遺言に記された相続人が、シャリエール医師本人にほかならないことを知った。シャリエール医師は、恐龍があらそいあっていた地球幼年期にまでさかのぼる、人類の誕生に先立つ太古の、長く忘れ去られていた地獄めいた儀式によって、怖ろしくも再生復活したのだった。

暗黒の儀式

H・P・ラヴクラフト&A・ダーレス

大瀧啓裕訳

第一章　ビリントンの森

アーカムの北部は丘が黝(かぐろ)くそびえ、荒涼として木木が鬱蒼(うっそう)と生(お)い茂(しげ)り、樹海のひとつの境界といった感じでミスカトニック河が海にむかって流れている。かろうじて認められる経道(けいどう)が、おそらくは丘へ、そしてミスカトニック河へ、さらにはそのむこうの原野へと通じているのだろうが、このあたりを旅する者で、その道に足を踏みいれたいという衝動にかられる者はいない。歳月の猛威(もうい)のなすがままにおかれている無人の家家は、驚くほど均一な、風雨にさらされた様相を呈(てい)し、森が著(いちじる)しい活力の徴(しるし)を示すかたわら、そのまわりの土地にはなにひとつ作物が育たないように見える。事実、アーカムのリヴァー・ストリートに端(たん)を発し、ディーンズ・コーナーズの奥、怪しく凄涼(せいりょう)たるダニッチにむかい、古びた駒形切妻屋根(こまがたきりづまやね)の住居が立ちならぶ街の西あるいは北西に、気まぐれな感じでくねりながらつづくアイルズベリイ街道(かいどう)を歩く者は、一見そのあたりに植林がなされたように見えるので驚くが、仔細(しさい)にながめてみれば、それらは新しい木木ではなく、何世紀もの歳月を耐えぬいた大昔の強壮(きょうそう)な木木であることがわかるだろう。

アーカムの住民はほとんど忘れ去っているが、祖母たちが暖炉をまえにして考えこんだ、冥(くら)

く朧な伝説が存在し、そのいくつかは妖術が吹き荒れた時代にまでさかのぼる。しかし同工異曲の多数の伝説とおなじく、分明でない部分は完全に欠落するにいたり、森が〈ビリントンの森〉であり、丘が〈ビリントンの丘〉であり、木木に隠れて見ることのできない屋敷もふくめ、地所のすべてが「塔と環状列石の近く」のさわやかな丘の上にあるということ以外、いまに伝わっているものはない。節榑立つ古木が好奇な者を誘うことはなく、暗い森が旅人を招くこともない。古びたビリントンの屋敷に惹かれるような、そのかみの伝説や習慣や家財道具を蒐集する者たちさえ、ビリントンの森には二の足を踏んだ。忌避される森だった。たまたま通りすがる者は、アーカム、あるいはボストン、はてはマサチューセッツの廃村のいずれから来たにせよ、説明しようのない妙な嫌悪感、ただもう無事に帰りつきたい思いにさせられる幻想のとりことなり、できるかぎり足を早めるのだった。

　ビリントン老のことは、もうすでに世を去っているアーカムの住民の記憶がいまに伝えられ、まだ完全に忘れ去られてはいない。アリヤ・ビリントンは十九世紀初頭の大地主だった。祖父と曾祖父が終の栖としたビリントンの屋敷に移り住んだが、老齢になってから、屋敷を棄てて祖先たちの土地であるイギリスのロンドン南部にひきあげた。祖税は弁護士事務所の手で滞りなく支払われたが、それ以後、アリヤ・ビリントンの消息はぷっつりとぎれ、ミドル・テンプル・レーンに住所を置く弁護士事務所がビリントン老の伝説に威厳を付与するにいたった。何十年の歳月が流れ、アリヤ・ビリントンは祖先たちの列にくわわり弁護士たちも同様の運命

に会った後、アリヤの息子のラバンが成年に達し、弁護士たちの息子たちが仕事をひきついだ。そして幾十年の月日が過ぎるなか、無人の屋敷と所有地に拘わる租税が、ニューヨークのとある銀行を通して毎年遅滞なく支払われるため、所有権はビリントン家の手をはなれることはなかったが、二十世紀をむかえるにいたって、ラバンの息子に相違ない、ビリントン家最後の嫡男が男児をもうけることなく世を去ったことにより、デュワート夫人としか委細詳らかでないラバンの娘が家督を相続したという話がもちあがったものの、ビリントン老とその〝音〟の伝説が語りつがれるアーカムにデュワート夫人なる人物が姿をあらわすことはなく、思いがけない噂はアーカムの住民の好奇心を誘わないまま速やかに忘れ去られた。

　ビリントン老について人びとの脳裡にのこるものはかくのごとくで、その記憶はもっぱら、何世代にもわたって地方の上流社会に連なった、紋章をつける資格をもつわずかばかりの旧家の子孫によって語りつがれていた。しかし歳月の蚕食は否応もなく、特定の逸話で現在にまで完全な形で伝わっているものはない。ただビリントン老が住んでいた木木の生い茂る丘で、夕暮どきや夜によく〝音〟がしたといわれるが、その〝音〟の原因がビリントン老にあるかどうかさえ、いまとなっては窺いようもなかった。まぎれもない事実として、禁断の森や青草の繁茂する荒野、屋敷近くの森のただなかに位置する冥い沼地がなかったなら、アリヤ・ビリントンは完全に忘却の淵に沈みこんでいただろう。その沼地からは、春の夜には、アーカムの半径百マイル以内のほかの場所では聞こえることもない、蛙の騒然たる鳴き声がおこり、夏には、

蛙をはじめとする種種さまざまな生物や昆虫とともに、蛍の大群があらわれて、雨をはらんで低くたれこめる雲の上で尋常ならざる光を明滅させながら、時がすぎゆくのも知らぬげに乱舞するという。アリヤ・ビリントンの死とともに〝音〟が聞こえることはなくなったが、蛙の鳴き声はつづき、蛍の輝きは減じることもなく、夜鷹の啼き声も衰えることを知らなかった。

永の歳月を閲した後、古い屋敷が一九二一年三月のある日に開かれるという知らせは、近在の住民の好奇心と関心をいやましにつのらせた。アーカムのアドヴァタイザー紙に、アンブローズ・デュワート氏の簡にして要を得た求人広告が掲載された。広告文は「ビリントンの屋敷」を修復する人材を求め、ミスカトニック大学の敷地内にあって寄宿寮にも供される、ホテル・ミスカトニックのデュワート氏の部屋を、面接場所に指定していた。アンブローズ・デュワート氏は鷹のような容貌の中背の男で、剃髪したような印象をあたえる赤毛がきわだち、眼光鋭く唇を堅く結び、物腰は穏当、真面目な顔をして軽口をたたくので、傭いいれた作業者たちに好ましい印象をあたえた。

アンブローズ・デュワート氏がアリヤ・ビリントンの直系であり、祖先たちが三世代以上にわたって住みついた土地におなじように住みつくつもりであることは、夜が明けるまえにアーカムじゅうに知れわたっていた。年齢は五十代、肌は褐色、大戦でひとり息子を失い、それ以外に子供に恵まれることがなかったため、余生をおくる望みを胸に、終の栖としてアメリカに顔をむけたという。屋敷と所有地を検分するため、マサチューセッツには二週間まえに訪れて

いた。古い屋敷を往古の栄光に復帰すべき計画を立てたことからも、目にしたものに満足したことはまちがいないが、電気等、古い屋敷に現代的な設備をくわえる目論見は、もっとも近い送電線さえ数マイルはなれているとともに、幾多の障害がその克服を困難なものにしているため、断念せざるをえなかった。しかしそれ以外の計画については、延期させる理由もなく、作業はただちに開始されて、屋敷は修復され、道が屋敷に、そして森のはずれにまで切り開かれ、アンブローズ・デュワート氏は夏にアーカムの仮寓を去って祖先たちの屋敷におちつき、作業員たちは十分すぎるほどの礼金をはずまれ、ビリントンの屋敷の修復作業や、屋敷がロングフェローの長らく住んだクレイギー館に似ていることについて、驚き畏れながら家路についた。目を奪われる彫刻のほどこされた美事な階段といい、優に二階分の高さがあって一面に西方を望む多彩な玻璃のはめられた大窓がある書斎といい、永の歳月何者にも触れられることのなかった蔵書といい、デュワート氏が古物に純粋な喜びをもつ者にとっては貴重きわまりないものだと告げた種種の備品といい、なにもかもが屋敷の修復作業に携った者たちを驚かせるに十分なものばかりだった。

まもなく、あれやこれやの噂がとりざたされ、デュワート氏と相貌が酷似しているという、ビリントン老の特定の胸臆が掘りおこされはじめた。詮索が度を強めるにつれ、ダニッチ周縁の土地から、ビリントン老がたてた〝音〟の話が蒸返され、いささか不吉な様相を呈する種種さまざまの話が囁かれはじめたが、そういう話の出所については、ウェイトリイ家やビショッ

プ家やわずかばかりの旧家が各様の堕落あるいは衰頽の度合を示しながら住む、ダニッチのあの地域から伝えられるという以外、沓として知れなかった。ウェイトリイ家とビショップ家もまた、マサチューセッツのその地域に何世代にもわたって住み着き、その祖先たちはまさしく、ビリントン老ばかりかビリントン家を興して薔薇窓のある屋敷を建てるにいたった人物とも同時代人だった。ウェイトリイ家とビショップ家の者は、屋敷を建てたのはべつの人物だというが、かれらが伝える種種の話は何世代にもわたって語りつがれたもので、すべてが事実でないにせよ、すくなくとも真相には接近しているらしく、これがビリントンの森とデュワート氏自身に対する関心に火をつけた。

しかしながら、アンブローズ・デュワート本人は、自身の出現がひきおこした詮索や噂にも幸い気づかなかった。孤独を愛する性格で、いまやわがものとなった独居にこのうえない満足をおぼえていた。まず決意したのは、屋敷と地所の利点を最大限調べあげることで、この目的にたゆみなく心をかたむけたが、真実をいわねばならないなら、どこから手をつけていいのかさえわからないありさまだった。マサチューセッツ州に「幾許かの地所」があり、売却せずに所有しつづけるのが「賢明」で、もし万一の事があったなら、ボストンに住む従弟のスティーブン・ベイツに譲り渡さなければならないという以外、母親もくわしくは話さなかった。事実、アンブローズ・デュワートには、地所をのこしてイギリスに渡ったアリヤ・ビリントンからのものらしい、当惑させられる指示だけしか伝えられず、その一連の指示は、屋敷と地所にまだ

精通していない身にあってみれば、思案にあまるものばかりだった。
　たとえば、「島の廻りを流れる水を止めることなかれ」だの、「塔を乱すことなかれ」だの、「石に懇願することなかれ」だの、「怪しの時と所に通じる扉を開けることなかれ」だの、「神変する窓に触れることなかれ」だのいう厳命は、デュワートにはなんの意味もなさない指示だったが、どこかしら心惹かれるところがあり、指示書を一度目にして以来、脳裡から消え去ることはなく、ルーン文字のように思考にとりついてはなれなかったため、デュワートは知らぬ間に屋敷や森や丘陵や沼地を歩きまわるようになったが、そのおかげもあって、屋敷が敷地内の唯一の建物ではないこと、かつてはミスカトニック河の支脈として蕩蕩と流れていたものの、はるか昔にひあがってしまい、春以外その面影もない河のただなかに位置する、かつては小島だったらしい場所に、きわめて古い石造りの塔がそびえていることを、ほどなく知るにいたった。
　デュワートはこれを八月のある日の午後遅く発見し、祖先の指示が言及している塔であることをただちに確信した。仔細に調べた結果、円錐形の屋根をもつ円筒状の石造りの塔は、直径おおよそ十二フィート、高さ大略二十フィートあることが判明した。かつては上部に、はりだす屋根もないまま、大きな半円形の開口部があったらしいが、その開口部は石造術でふさがれていた。建築に疎くないデュワートは甚く興味をそそられた。塔を造りあげる石がきわめて古い時代のもので、それも屋敷よりも古いものであるらしいことは、熟練した目には明白だった。

書斎にある蒼枯たるラテン語の文書を読むときに使用する拡大鏡を携えていたので、それをつかって塔を調べてみると、表面が妙な技法で仕上げられ、開口部をふさぐ大石に刻まれているものと同様の幾何学模様らしきものが用いられていた。塔の基部もまた、同様に興味がそそられるもので、意外なほど厚く、かなりな深さまで大地に根をおろしているという印象をあたえるものだった。しかしデュワートはこれを、アリヤ・ビリントンが塔をながめて以来、間隔を置いて地面が高くなったためだろうとうけとった。

アリヤがこの塔を建てたのだろうか。すくなくとも部分的には遙かな昔のもののように思えるのだから、アリヤが建てたのではなさそうだが、それならいったい誰が建てたのか。この疑問に好奇心をかきたてられたデュワートは、祖先の蔵書に数多くの古文書が存在するのをすでに知っていたので、塔についての言及があるかもしれないという期待感を胸に、調べようと思って屋敷へもどりはじめたが、すこしはなれてふりかえったとき、塔がかつては環状列石だったにちがいない残骸のただなかにそびえ立っているのをはじめて目にし、その環状列石らしきものがストーンヘンジに似ているのでうれしくなった。繁茂する藪に蚕食され、避けるものもなく風雨にさらされているにもかかわらず、水の侵食による跡はまだ磨耗していないため、明らかにかつては小島をはさんでかなりな水量の河が流れていたのだろう。

デュワートは早まる足をおさえた。塔の立つ場所と屋敷のある丘のあいだに位置する沼地を迂回しなければならないため、屋敷にもどったのは夕暮どきだった。手ずから食事をつくり、

それを口に運びながら、古文書を調べる最善の方法を思案した。のこっている古文書のほとんどはきわめて古い時代のもので、触れれば毀れてしまいそうなものもあった。しかし幸いにも、破損するおそれなしに手にできる羊皮紙のものがあるほか、一世紀以上まえにこの土地をはなれてイギリスに渡ったアリヤの息子に相違ない、「ラバン・B」と記された革装釘の小型本が一冊あった。デュワートは思案した後、子供の日記帳から調べてみることにした。

デュワートはランプのそばで日記を読んだ。電気設備の問題は、善処する旨の約束をとりつけたものの、マサチューセッツ州のどこか遠くにある役所で、厄介事としてひねりつぶされていた。夜は幾分冷えるので、暖炉に火をおこしていたが、ランプの光とあいまって、心地よい親近感を書斎にあたえ、デュワートは間もなく、黄ばんだ紙に書き記されたものから現出する過去の世界に入りこんでいた。デュワートの曾祖父に相違ない少年ラバンは早熟らしく、日記を書きはじめたのが九歳、書きおえたのが十一歳のときだと思われた。物を実によく見ていて、書き記すことは家内の出来事だけにとどまらなかった。

ほどなく少年に母親のいないことが明らかになり、唯一の遊び相手は、アリヤ・ビリントンに仕えているインディアンのナラガンセット族の男らしかった。インディアンの名前はクアムスともクアミスとも記され、少年ラバンもどちらなのか知らなかったらしいが、大きな字で記された日記には同年代の者に対するとは思えない尊敬の気持が認められるので、インディアンの年齢は少年よりもアリヤに近かったと考えられる。日記は少年の日課をくわしく記すことか

ら書きはじめられているが、それを書き記した後は、なにかなしとげたとき以外、日課にふれられることはなかった。少年は勉強から解放された午後の数時間になにをしたかを書いている。屋敷のなかを楽しく歩きまわっただろうし、屋敷から遠くはなれることは禁じられているので、インディアンが同行することを条件に、森のなかを歩きまわったりしたのだろう。

　インディアンは寡黙でめったに口を開かなかったが、少年に部族の伝説を話すときだけはべつだった。想像力豊かな少年は、インディアンがどんな気分をしていようと、そばにいてくれさえすれば喜び、ときおりは聞かされた物語のいくばくかを日記に書きとめた。その日記を読み進むにつれ、インディアンが「晩餐が用意されて後」アリヤのためになんらかの仕事をしていたことが明らかになってきた。

　日記のなかほどの箇所に脱落がある。何ページかがちぎられたままになっているので、少年ラバンの手になる記述に欠落があると見てさしつかえないだろう。その直後に三月十七日（何年であるかは記されていない）の日付の記述があるが、ページの欠落がいかにも暗示的なので、デュワートは好奇心をつのらせながらその記述を読んだ。

> 本日、吾の学習を終えし後、吾等雪の中に出でたり。クアミス倒木の上にて待ちやと言い置き、沼地に向いて歩み行きしを、吾気に入らず、何処に行きしや窺わんとて、昨夜積もりたる雪に残りし足跡を辿りたる内に、父君の近付くを禁じ給われし塔を擁する小島の対

岸にて、吾クアミスを見ゆ。クアミス跪座し、双手挙げ、文無し言葉を声高に発したり。吾未だクアミスが言葉に知悉すること僅かなりと言えども、吾が耳に聞こえたる言葉は、ナルラト或いはナルロテプなりけん。吾の将に呼びかけんとするや、クアミス吾に気付き、俄に立上がるや、吾に歩み寄りて、手を引き吾を連れ行かん。吾クアミスに汝祈りしや、行いたるは何ぞ、伝道の白人の建てし教会にて祈るを肯ぜず故は如何と問いしに、クアミス黙して答えず、願わくはこの地に来たるを父君に言うなかれ、命に背きし咎に依りて罰せられんとのみ言えり。彼の地は見る物も無き岩場にして、河の遮らん小島にしあれば、クアミスの行くを欲する由を吾は知らず、行きたくも無し。

つづく二日間はありふれた記述だけだが、その後、クアミスの行為がアリヤに知られ、クアミスが罰せられたことを暗示する文章が記されている。しかしどうして少年ははっきり記さなかったのか。七日間の記述の後、また禁断の場所が言及されている。今度は、少年とインディアンが突然の雪嵐に襲われ、道を見失った。雪が激しく吹きすさぶなか、ふたりはさまよい歩き、ふりしきる雪のために目が見えないまま、三月下旬の太陽にさしもの雪もとかされ、足場が柔かくなっている場所に行き着く。そして、

吾等吾の未だ見るを得ざりし地に来たれり。クアミス叫びて慌しく吾を連れ行かんとす。

吾等足を踏み入れたるは、列石と塔を擁せし島を遮る河なれど、此度は遙けき方より之に近付きたり。吾等ミスカトニック河に向い、東方に歩みいるれば、如何にして此方に来たれりや吾は知らず、忽然と猛威を揮いし雪嵐に惑わされしか。クアミス狼狽し恐怖の念を顕わしたれば、吾何を怖るるやと尋ぬるに、従前と同じく、父君欲せざればなりと応えるのみ。父君吾をして随意に地所内を行くを許され、アーカムを訪うをも聞届られたれども、塔の立ちし島に行くは禁ぜられ、ダニッチ及びインスマスに近付くは許し給われず、ダニッチを超ゆる丘に在するインディアンの村を訪うは之を厳く止められたり。

それ以後、塔についての言及はないが、それにかわってべつの妙な文章が記されている。突然の雪嵐に関する記述をした三日後、少年は「大地の雪を失くせし」雪解けの陽気を書きとめているが、翌朝に記されたものによれば、その夜、

丘から聞こえし怪しき音声に目を覚まされし。凄じき絶叫に似たり。吾は寝台より起き出でて東の窓に歩み寄れど、何物も見るを得ず、南の窓に移れども変わる所無し。然して勇気を奮い起こし、部屋より出でて父君の部屋の扉を叩けども、答える声無からんとて、父君の部屋に入りて寝台に近附くに、父君休み給われず、床に就きたる跡も無ければ、西の窓を窺うに、丘の窪なる林の上の青や緑に光れる様を見ゆ。先程聞こえし音声此方よ

り依然聞こえし故、訝みたり。人の声に非ず、吾の知れる如何な獣の声にも非ず。怖れと驚きに心奪われ、半開きの窓を離れ得ざりしに、ダニッチ或いはインスマスの方依り、凄じき音声にさも似たる別種の声遙かに聞こえり、宙天に懸かる木霊のごとし。然る程に音は止み、空の光も消ゆれば、吾は部屋に戻りたり。されど今朝クアミス現われし折、彼の音声揚げしは何ぞと問いたるに、クアミス答えて、文無し、夢を見たれば父君にこれをな言い給いそと告げし。クアミス吾が言葉に狼狽し、父君の訪れるさえ怖るる様明らかなれば、吾はクアミスの言に従い父君に申し上ぐるを控えたり。父君の安否を存じ上げたくも、クアミス応えて、父君邸内を離れ給うこと無く、夜半床に就き給えりと言えるを聞きて、吾も根問を憚り、クアミスが勧告を入れ、見聞せし物を忘れ去りし体を装うことにせば、クアミス怖るるを止め、落着を取り戻したり。

その後二週間、少年ラバンが書きとめているのは、勉強とか読書とかいった些細なことがらにかぎられているが、もう一度、簡単ではあるものの、いかにも謎めいた言及がなされている。

音声は途切れる事無く西方より聞こえしと覚ゆれど、音声に答えしごとき声、ダニッチ或いはダニッチ周縁の荒地が位置せし東北東より聞こゆ。

その四日後、少年は眠れないまま新月が沈むのをながめていたとき、父親が屋敷の外に出る姿を目にして、それを書きとめている。

父君クアミスと伴(とも)にいらせられぬ。何物かを運びたるも、明らかには見えず。東の方(かた)に進み給われ、屋敷の影に入られ、見るを得ざれば、父君の部屋に行きて窓から覗(のぞ)きしに、森の中より父君の声聞こゆれど、その御姿(おんすがた)を見るは能(あた)わざりき。

その夜遅く、少年はまた目をさます。

先なる時と同様、大音声(だいおんじょう)により目を覚ましたり。横になりしまま耳を傾けたれば、祈念(きねん)するがごときの声、怪(あや)しの声聞こゆ。

その後も同様の記述がくりかえされ、こういう状態のまま、およそ一年が過ぎ去る。最後からひとつ手前の記述が格別当惑させられる。少年はひと晩じゅう丘の「大音声」を聞き、少年にとっては、たれこめる闇で起こるその声が世界じゅうに聞こえるような気さえする。

朝になると、

クアミス姿を現わさざりき。父君に尋ぬるに、クアミス絶えて戻らじ、吾等もまた夜の訪れん前に出立たねばならぬ故、約やかに旅の仕度に羅らんと応えられぬ。父君出立を急いておられる御様子なれど、行く先は明かし給われず。吾はアーカム、或いは遙けきボストン乃至はコンコードなりしやと覚ゆれど、如何なる物を携えて行きしか判らざれば、下着類のみを取り纏めたり。父君の急かるること、時を気遣わるること此の上無く、吾には分明ならず。午後の半ばには出立なさる御意志なれど、成さねばならぬ事数多しと告げ給いけるに、仕度は未だやと吾に幾度も尋ね給いけり。

最後からすこし手前のページにある最後の記述は、その日の午後になされたものだろう。

父君言い給いけるに、吾等英吉利に行かんとて、海を渡りて其の国の血縁を訪のう由なり。吾の出立する仕度は既に完了せり。

そしてやや気どった筆跡でこうつけくわえられている。

此はアリヤ・ビリントンとラヴィニア・ビリントンの息子にして、本日附けで生まれてより十一年と七日になる、ラバン・ビリントンの日記なり。

デュワートはいささか困惑していたものの、強い好奇心をいだきながら、少年ラバンの日記帳を閉じた。直截には記されていないが、少年は大きな謎を書き記しており、それについては少年も十分に見てはいないので、デュワートはなんの手がかりもつかむことはできなかった。しかしながら、不十分な記述のなかに、十分な心配りもされずに屋敷内に書物や文書がのこっている事実の説明があった。アリヤと息子が長旅の準備をする間もなく、急に屋敷をはなれることになった次第が記されていた。アリヤが屋敷にもどる意志のなかったことを示すものはないが、ごくわずかなものしか携えてなかったにせよ、もどるつもりはなかったにちがいない。デュワートはまた日記帳をとりあげ、手早くページを繰りながら、あちこちひろい読みをしていたが、そうしているうちに、少年がインディアンのクアミスとともにアーカムを訪れたことがくわしく記された文章のただなかにあるため、うっかり見すごしてしまった謎めいた一節が目にとまった。

吾等行く先先にて、尊敬のみならず、恐怖の念明らかに迎えらるるは不思議なり。商人の自卑し腰を低くせし事常ならず、クアミスと言えども、インディアンの町にて受けけん仕打ちより免れたり。一度ならず、老女等のかすれし声にて囁けるを耳にせしが、ビリントンが名前を不信と疑惑の念けざやかに口にしたれば、吾の案ずるはこの上無し。屋敷に帰る

さ、クアミスに問いたれば、想像逞しゅうして自ら恐怖せしのみと答えたれど、其の言や真なりけるや。

つまり、ビリントン老は怖れられているか嫌われていて、ビリントン老に関係のある者も同様に思われていたのだろう。デュワートはこの記述を発見して、期待に胸がふるえた。通常の系図の調査からかけはなれた探求が、デュワートをよろこばせていた。謎があった。なにかとてつもなく根の深い、理解を絶する謎があった。謎を好むデュワートは、探求の興奮に刺激され、心をかりたてられていた。

デュワートはさまざまな書類や文書に目をむけたが、大半が建築や定住に関係するものばかりなので、強い失望感を味わった。アリヤ・ビリントンがロンドン、パリ、プラハ、ローマの書店から購入した書物の請求書もあった。一部しか判読できない、ペン書きの文書を目にしたときは失望が頂点に達していた。とはいえ、見出しは目をひくもので、『ニューイングランドにて異形の悪魔のなせし邪悪なる妖術につきて』と記されていた。これはどうやら、原本が手元にないものの写しらしかったが、全文が書き写されたわけでもなく、書き写された文書もいまとなっては全文を判読することは不可能だった。しかし、全般的には、かなりの苦労が必要とはいえ、なんとか読めそうだった。デュワートはつかえながらもゆっくり読みはじめ、その内容に魅せられるあまり、手間もいとわず自分の手で書き写しはじめた。どうやら、原本の途

中からはじまっているらしかった。

　されど怖るべき異事に就きて冗漫に語るを避け、ブラッドフォード氏知事就任の折より五十年間に亙るニューダニッチの事態に関し、千般報告されし事ども誌すに留めん。喧伝せらるる所に依れば、リチャード・ビリントンなる者、悪魔の書巻はたまたインディアン蛮族の老呪術師に甘誘され、善きキリスト教徒の慣習より堕落し、肉の不死性を主張するのみならず、森の中にて大いなる環状列石を築き、其の中にて悪魔即ちダゴンへの祈り挙げ、聖書が忌むべき所の魔術典礼を取り行いたり。此は判事等の知れる所となり、リチャード・ビリントンなべての冒瀆行為を否定せしも、程無く己が夜の空より呼び出せし物に対して、秘かに大なる恐怖を顕したり。其の年リチャード・ビリントンが列石の近くにて、七名の者屠られ、尽く其の身砕かれ半ば溶け、尋常ならざる亡骸にと成り果てぬ。出廷が命ぜられしも、ビリントン行方を晦まし、杳として窺い知れぬを、二箇月後の夜、蛮族ワンパノーアグ森の中にて吠え歌いけるが聞かれり。彼等に依りて環状列石倒壊されし事ども明らかになりぬ。此は彼等の長にしてビリントンに呪術の幾許かを伝授せし件の老呪術師なるミスクアマカス、程無く町に来たりて、ブラッドフォード知事に奇怪なる事を告げたればなり。即ち、彼のビリントン回復能わざる事を為し、自ら空より呼び寄せし物に喰い尽くされ、ビリントンが招喚せし物を帰らしむ方途無かりせば、ワンパノーアグ族の賢

人之を捕え、環状列石有りし場所に幽閉せしと。

ワンパノーアグ族深さ三エル幅二エルの窩を穿ち、彼等の知れる呪文に依りて魔物を封じ込め、旧神の印の刻まれし（判読不能）にて覆いたり。此の上にて（判読不能）窩より掘り起こせり。蛮族の老賢人申すらくは、此は乱すべからざる在所にして、旧神の印刻まれし平石の有る限り、魔物の解かるる事無からんと。魔物の姿を問われるに、ミスクアマカス顔を覆いて眼のみ現われたる様を示したる後、極めて面妖なる話を為し、蟇にも似て小さく硬き事も有らば、定まった体無きものの、蛇の生えたる貌を有して雲のごとく大きくなる事も有らんと云えり。

魔物の名前はオサダゴワアにして、此は星より到来して北の地にて崇拝されしと祖先等の語り継ぎたる、サドゴワアの仔を意味せし。ワンパノーアグ族、ナンセット族、ナラガンセット族、此の魔物を天より誘い出せし術を知りたれど、極めて邪悪なる物故、未だ招喚せし事無し。魔物を捕え、幽閉せし術も知りたれど、元に帰らしめん術は知らず。大熊の下に棲い致し、邪悪さの故に古滅されたるラマア族、すべての術に通じたると云う。傲慢なる者数多く、外世界の秘密を知れると宣巻くも、罹る知識を真に持てるを証せし事無し。オサダゴワア好みて空に戻る事多かれど、招喚されずんば戻る能わずと言える者もあり。

呪術師ミスクアマカス係る次第をブラッドフォード氏に述べたる後、ニューダニッチ南

西の沼近くに有りける森の塚に近づきてはならじと告げたり。二十年間立ちし丈高き石は倒せども、塚は儀式の場にて、草木一本生えざると云う。俊傑の人等、行方杳として知れざるにも拘らず、ビリントンが天より招喚せし物に喰れたるを疑いたるが、魔法を使う者ミスクアマカス之を聞きて、信置く能わざれど、ビリントン連れ去られしは事実なりと云えり。蛮族の同朋信ずるがごとく、喰れたるにはあらねど、ビリントン最早この地上に無からんは確なりと。

この後、急いで走り書きされたらしい奇妙な文章がつけくわえられている。

プロブ、タウのウォード・フィリップス師。

デュワートはこれが書棚にならぶ書物を言及したものと考え、ただちにランプを手にして書棚にむかうと、書物の背文字に目を走らせはじめた。驚くほど多様な書物があって、そのほとんどはデュワートになじみのないものだった。ライムンドゥス・ルルスの『普遍的魔術』、ロバート・フラッドの『錬金術の鍵』、『エイボンの書』、アルベルトス・マグヌスの著書、アルテフォウスの『智恵の鍵』、ダレット伯爵の『屍食教典儀』、ルドウィク・プリンの『妖蛆の秘密』をはじめ、哲学、魔術、悪魔学、カバラ、数学等に関する歳月を閲した蒼古たる書物

ばかりで、何度も繙かれたとおぼしき、手垢のついたパラケルススとヘルメス・トリスメギストスの著作集もあった。書物に魅せられたデュワートは、一冊ずつ書棚から抜きだしてページを繰っていたが、やがて探している書物が書棚の片隅につっこまれているのを見つけだした。
それはウォード・フィリップス師の著した『ニューイングランドの楽園における魔術的驚異』で、扉には「マサチューセッツ州アーカム第二教会の牧師」と記されている。刊年がボストン一八〇一年とあることからも、後に刊行された版だろう。かなり分厚いものであるため、ウォード・フィリップス師が多くの神父と同様、自説を展開しながらそれを説教せずにはいられなかったのだろうとデュワートは推測した。栞もついておらず、もう真夜中に近いこともあって、現在と異なる活字で印刷された書物を意気ごんで読み通すつもりにもなれず、もしアリヤ・ビリントンが何度となくこの書物に目を通したのなら、よく開けられたページに開け癖がついているのではないかと思いいたった。そして書物とランプをもってテーブルにもどると、ランプをテーブルにのせ、書物のすりきれた革の背をテーブルに置き、一度軽くゆすってから書物がひとりでに開くにまかせた。開いたのは始めからおおよそ三分の二くらいのところだった。
ゴチック体を真似た活字で印刷されており、見ためには奇異に感じられるが、さっき読みおえたものよりは判読しやすかった。開いたページに「リチ・ビリントンの話を参照すること」と書き記されていることからも、これが目指す書物であることはまちがいなかった。ちょうど開いたページは短い挿話が記されているらしく、前後もとりたてて首尾一貫しているふうでは

なかった。ウォード・フィリップス師はその後「魔物及び其の眷族と交わる邪悪」についての短い説教をする機会を得たらしい。しかしそこに記されたものは、妙に心さわがされるものだった。

然れども、醜行に就き、旧植民地ダクスベリーのジョン・ドテンの善良なる寡婦、ドテンが一七八七年の聖燭節真近に森より齎したる知らせほど、怖るべき報告は無し。彼の女並びに善良なる隣人等の断言するは、獣に非ず、人間に非ず、然れど人間の顔を備えし蝙蝠に似たる物の怪、彼の女より産まれ出でし事なり。声はあげず、害ある眼にて四方眺めたるとや。ニューダニッチにて魔物と通じたる後、姿を晦ましたるリチャード・ベリンガム或いはボリンハンの顔に、実に驚くべきほど似たると誓いて申すらく者等も有りけん。怖るべき獣人はアジゼスの裁判所にて調べられ、執政長官の命に依り、一七八八年六月五日焚刑に処せられぬ。

デュワートは何度も読みかえした。はっきりとはしないが、なんらかの暗示があった。普通なら見すごしてしまうようなものだが、アリヤが「ビリントンの話」云云を記している直後の一節なので、「リチャード・ベリンガム或いはボリンハン」がリチャード・ビリントンを指しているとはまちがいなかった。デュワートは想像力がかきたてられたにもかかわらず、なに

ひとつ説明をつけることはできなかった。リチャード・ベリンガムがリチャード・ビリントンと同一人物であると仮定して、かれが俗説とはちがい、「自ら空より呼び寄せし物に喰い尽されてはおらず、姿を隠してダクスベリー近くの森の奥深くで邪悪を実践し、恐怖を産み落とすことになった二次的家系において自らを不滅にしたことを、ウォード・フィリップス師の記録から推測するだけだった。一方、善良な寡婦ドテンが取替え子を産んだのは、悪名高い魔女裁判がおこなわれてからまだ一世紀もたっていないころなので、現在ダニッチとして知られるニューダニッチやダクスベリー周辺の愚直な住民が、聖職者であると否とにかかわらず、魔女裁判の時代の迷信になおもとりつかれていたことは想像にかたくない。

興奮してさらに調査をつづけた後、デュワートは寝室にひきあげたが、蛇や蝙蝠に似た異様な生物のあらわれる奇妙な夢に悩まされるかもしれないと思いつつも、床につくや、たちまち睡魔にとらわれてしまった。しかし夜中に目をさまし、自分がどこか高みから見はられているという確信を得て、数分間身じろぎもせずにいた以外は、夢に悩まされることもなく、そんな確信もすぐに消えてしまい、また健やかな眠りについた。

朝になり、かなり爽快な気分で目をさましたアンブローズ・デュワートは、祖先のアリヤについて、屋敷の書斎以外で資料を集めることを思いついた。そして車に乗りこみ、この地方の中心都市として、イギリスの特定の村や町に思わず比較してしまうアーカムに入り、心さわがせられる破風の部屋や扇形明りとりのある玄関を擁する駒形切妻屋根の家屋をはじめ、どこと

も知れぬ通りから発して忘れ去られた中庭に達するミスカトニック河の畔の狭い小道等をながめて、大いに目を楽しませた。デュワートはミスカトニック大学付属図書館で調査を開始し、入念に保存されている一世紀まえの『アーカム・アドヴァタイザー』と『アーカム・ガゼット』の揃いを調べた。

その日の朝は明るく晴れわたり、デュワートには自由にできる時間がふんだんにあった。多くの点でデュワートは手ぎわのわるい人物だった。どんな探求でも大変な熱意をもってはじめるのだが、たいてい最後までやりとおすことができない。デュワートは光のあたるかたすみの机をひとりじめにして、曾曾祖父の時代の新聞に目をとおしはじめたが、多数ある興味深い記事に注意が惹かれ、幾度となく道草を食ってしまった。数カ月分の新聞をひもといたころ、祖先の名前に目がとまったが、それはまったく偶然のことで、デュワートは好奇心に誘われて投書欄を調べている途中、編集長宛の簡潔かつ慇懃無礼な手紙の下方に名前を見いだしたのだった。

謹啓
ウォード・フィリップス師の然る書物につき、賞賛の言葉によりて行われたるジョン・ドゥルーヴェン殿の書評、貴紙に掲載されしこと存じあげ候。僧職の方に美辞麗句を連ねるが慣習なりと云えど、ジョン・ドゥルーヴェン殿は、みだりに口にせず伏せおくがよろしし

きことどもあるを顕示せらるることによってこそ、ウォード・フィリップス師に篤教つくせしかと拝察いたし候。

頓首
アリヤ・ビリントン

デュワートはすぐにこの投書に対する返信を探し、翌週の新聞に見つけだした。

一筆啓上
プロテスタントのアリヤ・ビリントン、自ら語りし事を知る明察の人なりけんや。拙著御高覧の由かたじけなく候。

九拝
ウォード・フィリップス

デュワートは何週間にもわたって投書欄に注意深く目を通したが、アリヤからの返書はついになかった。ウォード・フィリップス師は著書で説法しているにもかかわらず、明らかにアリヤ・ビリントンとおなじ気質の人物のようだった。その後しばらく、ビリントンの名前は見あたらなかったが、数時間経過したころ——『アーカム・アドヴァタイザー』と『アーカム・ガ

ゼット』の数年分を消化したころ——またアリヤ・ビリントンの名前がデュワートの目にとまった。

州長官、アイルズベリイ街道はずれに居をかまえしアリヤ・ビリントンに、夜半行いし事を中止し、なかんずく騒音を減ずる旨の通知を発したり。地主ビリントン、翌月アーカムにて開かれる法廷での聴問を求める申請をなしたり。

しばらく言及がとだえた後、アリヤ・ビリントンが判事のまえにあらわれたことを伝える記事が目にはいった。

被告人アリヤ・ビリントン、夜に何事もいたさず、騒音を立てることもその原因となることもいたさず、州法を遵守したれば、これを覆せるものありやと宣誓証言したり。亡妻の死より七年間一人きりで暮していることを理解せず、悶着の種を探す迷信深き人人の犠牲者こそ我なりと言う。召使のインディアンなるクアミスが宣誓証言の場に現れることは許さず。告発人の召喚あるいは召見を幾度となく要求したれど、原告これに難色を示して出廷を拒みたれば、本件のアリヤ・ビリントン冤罪をそそがれ、州長官の通知書を閑却するよう命じられたり。

少年ラバンが日記帳で言及していた〝音〟が想像の産物でないことは明白だった。しかしこの記事は、またしても、アリヤ・ビリントンに不満をもつ者たちがアリヤ本人に直面するのを怖れていたことをほのめかしていた。悶着をおこす者が害意の対象のまえにあらわれたがらないのはごく普通のことだが、しかしアリヤ・ビリントンの件に関しては、それ以上のなにかがあった。少年が〝音〟を聞き、原告も聞いたのなら、明らかに他にも聞いた者がいるはずにちがいない。しかし〝音〟を聞いたことを認め、その〝音〟をアリヤ・ビリントンに結びつけて証言した者はいなかった。どうやら人びとはアリヤに対して、恐怖とまではいかないものの、なんらかの畏敬の念をいだいていたらしい。アリヤは率直かつ豪胆な男で、とりわけ自分を守るときは、攻撃的になるのをためらわなかった。デュワートはたいした男だと思ったが、つのりゆく謎にますます好奇心をかきたてられていた。そして〝音〟の問題は、新聞の紙面から姿を消すよりも、頻繁にとりあげられるだろうと狙をつけたが、その予想は見事に的中した。『アーカム・ガゼット』を一カ月分もひもとかないうちに、おそらくウォード・フィリップス師の著書の書評をした紳士と同一人物らしい、ジョン・ドゥルーヴェンの無礼な手紙があらわれた。書評に対するアリヤ・ビリントンの簡潔な批判に立腹し、アリヤと州長官との悶着に興味を示したことは十分に考えられる。

拝白
本日たまたまアーカムの西および北西を徒歩で進みし折、アイルズベリイ街道近くにて、ビリントンの森として知らるる暗き森林地帯にさまよいこみ、脱けでる道を探し求めるかたわら、暗闇が訪れてまもなく、説明あたわざる性質のきわめて怖ろしき騒音聞こえはじめ、紳士アリヤ・ビリントンが屋敷奥の沼地の方向より発すると思われたり。前述の騒音にしばし耳を傾けたれど、彼の音声が何らかの生物の苦悶あるいは病にて発する悲鳴に酷似せしこと一度ならずであったため、その悲痛はこのうえならず、もし進む道を知らば近づいていたであろうほど、悲痛と苦痛はつまさるばかりに感じられけり。音声は半時あまり続きたる後に止み、静寂があたりを包みたれば、我は森を脱け出たり。

不一
ジョン・ドゥルーヴェン

デュワートは祖先がこれに刺激され、怒りにみちた返書をしたためたはずだと期待したが、数週間分の『アーカム・ガゼット』に目を通しても、なにもあらわれなかった。けれども、アリヤ・ビリントンへの敵対がどうやら具体化していったらしく、アリヤからの言葉がなにひとつあらわれないまま、ウォード・フィリップス師の公開状が掲載され、騒音の原因を発見して、騒音をとめる意図のもとに、調査委員会を率いて現場におもむく旨が記されていた。これは沈

黙をつづけるアリヤの注意を惹くためになされたものらしく、アリヤは沈黙を破った。しかしアリヤの返答は通知広告の体裁をとる返書において、牧師と書評子の双方を無視していた。

ビリントンの森として知らるる地所、あるいはビリントンの森に付属する隣接のいかなる野原または牧草地に関し、これに侵入するを発見されたる者は、逮捕され裁判にかけらるるものとす。アリヤ・ビリントンは本日州長官の前に出頭し、地所が侵入、狩猟、散策、および全ての許可無き立入を禁ずる場所である旨を宣誓証言したればなり。

これはたちまちウォード・フィリップス師を刺激し、師はつぎのように記した。

我等が隣人アリヤ・ビリントン、音につきいかなる調査が行れることにも難色を示し、音を地所内にとどめおくを欲すると思われけり。

ウォード・フィリップス師はこの言辞を弄する手紙をおえるにあたって、音がすることや調査されることをどうして怖れるのかとアリヤに問いかけている。

しかしながらアリヤは黙ってはいなかった。すぐに「何者の」犠牲にもなるつもりはないと答え、ひとり決めの「ウォード・フィリップス師あるいはその子分ジョン・ドゥルーヴェン」

が調査をおこなう資格があると信ずべき理由はないと言明し、音を聞いたと主張する者に対して暴言を吐いている。

かかる人士につきては、慎しやかなる人人が床に就くか、あるいは自家の内に留まり、闇の中を歩くをはばかる夜の刻限に、何を行いしか、いかな歓楽はては探求をいたせしかと宜く尋ぬるべきにあらぬや。彼等は音を聞きし証拠を提示せざりき。宣誓証人のドゥルーヴェン声を聞きしと声高に熱弁をふるいたれど、他の随行者ありや否やは黙して語らず。今を遡ることおよそ百年前、声を聞きしと思いこみ、無実の男女を告発し、これを魔法使いもしくは魔女として無残な死に目に会わせし人人ありしが、その際も証拠は提出さるること絶えて無し。宣誓証人は「何らかの生物の苦悶あるいは病にて発する悲鳴」と呼び給われるものと、牡牛の吠え声、行方知れずの仔牛を探す牝牛の啼き声、あるいは同種のごくありふれた夜の音声とを識別せらるる程、田野の夜の音声によく精通され給いたるや。自らの舌に用心し、耳に欺かれず、神が人間に見らるることを目論まぬものを見ぬよう心掛るが宜きと拝察いたし候。

これはかなりあいまいな手紙で、とりいそぎよく考えもせずに書かれたらしい。つまりアリヤ・ビリントンはみずから攻撃に身をさらし、ウォード・フィリップス師とジョン・ドゥルー

ヴェンの双方から直接に攻撃されることを予想していたにちがいない。
牧師はアリヤの最初の手紙とおなじくらい簡潔な手紙をしたためている。

神が人間に見らるるを意図し給わざりきことどもあるをビリントン承知せしことを知り、喜ばしく思い、また神に感謝したてまつるも、ビリントンかかることども見ざりしをただ願うのみにありて候。

しかしジョン・ドゥルーヴェンはアリヤを愚弄した。

いかにも我は隣人ビリントンが我の知りたる声を発する牡牛、牝牛、仔牛を飼いたるを知らず。ビリントンの森の近辺にて牡牛、牝牛、仔牛の声を聞かざることをさらに証言する者なり。山羊、羊、驢馬はもとより、我の知りたるいかな動物の声も無し。されど我聞き、他の者も聞きたるがゆえ、彼の地に音声あるは紛れも無き事実なり。

ジョン・ドゥルーヴェンの手紙はこういう調子でつづけられている。
アリヤ・ビリントンがなんらかの返答をすることが期待されていたのかもしれない。しかしアリヤは返書を送らなかった。アリヤの署名のある手紙はもうなかったが、三カ月後の『アー

カム・ガゼット』に、こうるさいジョン・ドゥルーヴェンの手紙が掲載され、侵入者としてあつかわないよう命令をくだすために、調査することを正式に通知しさえすれば、単独あるいは同行者を率いても、自由にビリントンの森を調査してもかまわないという招待状をうけとった旨を伝えている。ドゥルーヴェンは近近アリヤ・ビリントンの招待をうけるつもりであることを発表した。

そしてしばらく、なんの消息もうかがえなかった。

それがやがて、週を重ねるにつれ、不吉な記事がいやましに紙面をにぎわすようになる。デュワートの目を最初にとらえた消息欄の記事は無味乾燥なものだった。「本紙の非常勤の寄稿家ジョン・ドゥルーヴェン」がその週に記事を書くのがまにあわず、おそらく翌週には書きあげるだろうと記されていた。しかし翌週の『アーカム・ガゼット』はジョン・ドゥルーヴェンが「発見するを得ず、リヴァー・ストリートの下宿にも在宅せぬため、目下行方を調査中」であると伝えている。その翌週、『アーカム・ガゼット』はドゥルーヴェンが寄稿を約束していた原稿が、ウォード・フィリップス師とデリヴァランス・ウェストリップとともに、ドゥルーヴェンがビリントンの屋敷とビリントンの森におもむいた報告書だったことを公表した。フィリップス師とウェストリップはビリントンの屋敷から帰ったことを証言することができた。しかし下宿のおかみの証言によれば、その夜ドゥルーヴェンは外出した。どこへ行くのかとたずねても、答えなかったという。ビリントンの森でおこなった音の調査について質問をうけたフィリッ

プス師とウェストリップは、アリヤ・ビリントンがきわめて丁重であったことと、召使のインディアン、クアミスに昼食を用意させることとさえしたこと以外、なにひとつ思いだすことができなかった。州長官は失踪したジョン・ドゥルーヴェンの探索を命じた。

四週目、ジョン・ドゥルーヴェンの記事はなかった。

五週目もおなじ。

沈黙がつづき、三カ月が経過すると、州長官は不思議な失踪をしたジョン・ドゥルーヴェンの探索を中止した。

アリヤ・ビリントンの名前も新聞にあらわれることはなかった。ビリントンの森の音については、断固たる決意で、とりあつかわれるのが中断されたらしい。記事にも消息欄にも、アリヤ・ビリントンの名前があらわれることはなかった。

しかしドゥルーヴェンが失踪してから六カ月後、驚かされるほどの速やかさでさまざまなことが起こり、デュワートは当時の新聞が記事をあつかうのを自制していたことを強く意識した。現代の新聞なら、大見出しをつけてあつかっているだろう出来事であるのだから。

最初の出来事はマヌーゼット河の河口に位置する港町インスマスにほど近い海際で、無残に切りさかれた死体が発見されたことに関係している。死体の身許はジョン・ドゥルーヴェンであることが判明した。

ドゥルーヴェン氏は水死したる後に難破船の残骸にて傷つけられしかと思われけり。発見されたる時には既に死後数日が経過せり。半年前にアーカムで姿が見られて以来、消息を知る者は無し。顔が異常なる形相を示し、数多の骨が砕かれたれば、大難に会いしかと思われん。

二番目の出来事はデュワートの祖先、いたる所に姿をあらわすアリヤ・ビリントンに関係している。アリヤと息子ラバンがイギリスの親類を訪れるために出発したことが報じられていた。一週間後、アリヤにつかえていたインディアンのクアミスが、

審問のため州長官に呼ばれたれど、行方を見出すことあたわざりき。執行吏二名アリヤ・ビリントンの屋敷に行きしも、屋敷には誰も無し。屋敷には施錠封印され、逮捕状無くして入るを得ざれば、執行吏二名そのままにて帰りたり。

当時アーカム北西部のダニッチにのこっていたインディアン居住地で調査がおこなわれたが、なんの情報も得られなかった。インディアンたちはクアミスのことをなにも知らず、知りたくもない様子で、ふたりのインディアンは「クアミスなる人物、部族の者にあらず、部族を訪れたことも無し」と証言したらしい。

最後に州長官が、すでにおよそ七カ月まえのこととなった、奇怪かつ不可解な失踪のおこる夜に、故ドゥルーヴェンが書きはじめていた手紙を公表した。手紙の宛先はウォード・フィリップス師で、『アーカム・ガゼット』の記事によれば、急いで書かれた形跡がみとめられるという。その手紙は下宿のおかみが発見し、州長官に渡されたが、州長官はこの時期になってようやく手紙の存在をみとめた。『アーカム・ガゼット』が問題の手紙を掲載している。

ウォード・フィリップス師御許
バプテスト教会
アーカム・フレンチ・ヒル

捧白

我等が本日午後に目撃せし出来事につき、我が記憶おぼめくまでに損われたるかと思われるまでの、きわめて不可思議なる気分に襲われけり。これを詳かにするはあたわざれど、加えて、我等を招きし怖るべきビリントンのこと片時といえど脳裡より去らず、あだかもビリントンがもとへ参上致さねばならぬかのごとく、またあだかもビリントン何やらん魔術的手段によりて、我等の口にせし食物に記憶を損わしめん何かを混じたるかのごとく心地せり。師父よ、誤解するなかれ。我は森の環状列石にて見たるものを思い出すべく努力

いたすも、時の過ぎ行くままに我が記憶さらにおぼめくかの……

手紙はここでとぎれている。『アーカム・ガゼット』は原文通り忠実に掲載し、なんの結論もひきだしていない。州長官はアリヤ・ビリントンが帰国しだい審問されるだろうといっただけだった。そして不運なドゥルーヴェンの埋葬の通知があり、その後、ウォード・フィリップス師からの手紙が掲載され、ビリントンの森近くの土地に住む教区民たちが、アリヤ・ビリントンの出発以来、夜に音が聞かれなくなったといっていることを伝えている。

それ以後しばらくのあいだは、『アーカム・アドヴァタイザー』にも『アーカム・ガゼット』にもビリントンの名前があらわれることはなく、デュワートは六カ月分の両紙に目を通して、それ以上調べるのをやめた。調査の進展に魅せられてはいたが、目が痛くなっているうえに、もう午後もなかばだというのに、昼食をとっていないので、これ以上目を酷使しないほうが賢明だろうと判断した。読んだものにいささか面くらってもいた。ある意味では失望していた。もっとはっきりしたものを期待していたのだが、読むものすべてがきわめてあいまいで、霞がかかったようにぼんやりし、アリヤ・ビリントンの蔵書にのこされている文書で目にした謎いた断片よりもつかみどころのないものばかりだった。古い新聞からは明白な性質のものはなにひとつ得られなかった。事実、アリヤ・ビリントンを告訴した者が夜にビリントンの森で現実に音を聞いたことを証明するのは、少年ラバンの日記帳という状況証拠だけだった。それは

べつにして、アリヤ・ビリントンは、すくなくともいささか悪党めき、短気で、あけすけで、いばりちらし、悪口をいいふらす者たちに直面することをおそれなかった人物として描写されている。ウォードド・フィリップス師は一、二度するどい主張をおこなったが、アリヤは巧妙にのがれた。アリヤがはげしく異議をとなえた書物が『ニューイングランドの楽園における魔術的驚異』であったことは想像にかたくない。そして現代の裁判所で証拠として認められるようなものがなにもなかったとはいえ、アリヤをもっともいらだたせたジョン・ドゥルーヴェンが不思議な失踪をしたという事実にきわめて強い暗合があることは、注意をむけねばならないことだった。さらに、ドゥルーヴェンの中断した手紙は驚くべき疑問を提出している。意味するところは明白で、アリヤが食事になにかを混入して、うれしくない客たち——調査委員会——に見たものを忘れさせたということである。したがって、調査委員会はドゥルーヴェンとウォードド・フィリップス師がおこなう定かでない非難を実証するなにかを見たということだろう。手紙の断片にはさらに核心にせまっている箇所がある。「あだかもビリントンがもとへ参上致さねばならぬかのごとく」がそれだが、この一節は、アリヤが、もっとも苦にがしい思いにさせられたドゥルーヴェンをなんらかの手段で呼びもどし、自分は現場からはなれながら、最終的にドゥルーヴェンを死にいたらしめたことを暗示しているので、デュワートは不安に心をおののかせた。

もちろんこういったことはすべて推測にしかすぎないが、デュワートは森をぬけて屋敷に帰

るあいだも考えこみつづけ、屋敷にもどると、昨夜目を通した文書をまた調べ、しばらくは調査に没頭して、リチャード・ビリントンと人びとに怖れられたアリヤとの関係を、なんとしてでもつきとめようとした。数世代へだたっているとはいえ、ふたりが同一家系につらなっていることには疑問をいれないので、デュワートが調べるのは、単なる血縁関係ではなくして、文書に記録される信じがたい出来事とアーカムの週刊新聞二紙で報道されるものとの実質的関係だった。というのも、デュワートはしばらく熟考した後、ひとつはおそらく現在のダニッチであろうニューダニッチで起こり、いまひとつはビリントンの森で起こっているため、距離にして数マイル、時間にして一世紀へだたっており、偶然の一致にすぎないとしても、両者ともに「環状列石」という言葉がつかわれており、ミスカトニック河の干上がった支流の土手にある石塔をおおよそとりかこむ、ドルイド風遺蹟をさしていることは否定しようがないので、なんらかの関係があると思わざるをえなかったためである。

　デュワートは手ずからサンドイッチをいくつかつくると、オレンジ一箇と懐中電灯を上衣のポケットにいれ、午後もふけゆく日差のなか、沼地を迂回して塔におもむき、すぐに入念な調査を開始した。塔の内部には、壁に接するようにして、きわめてせまい石造りの螺旋階段があり、デュワートは心もとなさをおぼえたものの、浅浮彫の手法で刻まれた、素朴とはいえいささか印象的な装飾をながめながら、粗雑な螺旋階段をのぼった。その装飾は単一の模様のくりかえしで、螺旋階段の全周をとりまいており、かがみこんでかろうじて身をおくことのできる

天井まぢかの台でおわっていた。デュワートは手にした懐中電灯で、螺旋階段の全周に刻まれた浅浮彫が台にもほどこされていることを知り、かがみこんで調べてみると、同心円と放射線からなる複雑な模様であることがわかった。しかしさらに目をこらして見つめると、目眩くような迷路を見ているような感じになり、不可解にも模様が刻一刻と変化しているように思えた。デュワートは懐中電灯の光を上にむけた。

まえに塔を調べたとき、ほかよりも新しく備えられたとおぼしき屋根の部分に、なんらかの彫刻がほどこされていると思えたが、いま見ると、装飾のあるのはただひとつの石だけで、どうやら石灰岩の大きな平石らしく、デュワートがかがみこんでいる台とほぼおなじ大きさをしていた。しかしその装飾は浅浮彫の模様をくりかえすことはせず、むしろ粗雑な星の形状をしていて、中央には巨大な単眼らしきものがあった。だが、眼ではなかった。形はむしろこわれた菱形で、特定の線が炎あるいは炎の柱を暗示していた。

デュワートは浅浮彫の模様とおなじく、この模様が意味するものはわからなかったが、天井の平石をささえる接合剤が風雨の猛威にさらされてほとんどなくなってしまい、わずかにのこっている接合剤をうまくとりされば、平石をはずして、円錐形の屋根に開口部ができるのではないかという気がした。そして懐中電灯の光を天井のあちこちにあてているうちに、塔がもともと開口部を備えて造られ、後に平石でふさがれたと思われた。平石は他の石よりもなめらかで、塔の内部の暗さによるものかもしれないが、灰色がかっていた。

デュワートはうずくまったまま、塔をもとの構造に修復すべきだと思いいたった。考えれば考えるほど、修復しなければならないという思いが強くなり、台の上部の平石をとりのぞき、台の上で立てるようにしようと、なんの疑問もなく決心した。懐中電灯の光を下の地面にむけると、道具としてつかえそうな石の破片があったので、下におりてそれを手にすると感触を調べてみた。そしてまた台にもどり、危険なく作業するにはどうしたらいいかと考えた。落ちかかってきたとき、すくなくとも台から下へ落としこめないほど大きくはなかったが、力をふりしぼってもささえきれないほど重そうだった。デュワートは壁に体をおしつけ、懐中電灯をポケットにさしこみ、光をゆらしながら注意深くけずりはじめた。まもなく平石をとりはずせることがわかった。平石が都合よくはずれ、台から下の地面に落ちるよう、まず自分に近い部分からけずりとらなければならなかった。

デュワートは根気よく作業をつづけ、三十分ほどすると、目論んでいたとおりに平石がはずれ、ひと押しで台から地面へと落下していった。デュワートは台の上で立ちあがった。沼地のある東方にむいており、塔が屋敷に面していることがはじめてわかった。沼地と森のむこうに、陽光をうけてきらめく屋敷の窓があった。デュワートは一瞬どの窓だろうかと思った。これまでどの窓からも塔を見たことはなかったが、しかしそれは見ようと思わなかったためだろう。大きさからいって、その窓は、デュワートがこれまでのぞきこんだことのない、色つきガラスのはめられた書斎の窓にちがいなかった。

デュワートは塔がどんな目的のために造られたものやら想像することもできなかった。そうして立つと、両手を開口部の縁にしっかり置くことができる。デュワートの上半身は塔の頂（いただき）よりも高いところにあり、周囲が眺望（ちょうぼう）できるのだった。昔の天文学者が造ったのかもしれない。頭上の天空をながめるにはいかにも理想的だった。円錐形の屋根を形造っている石が壁とおなじくらい厚く、十ないし十五インチくらいあることにデュワートは気づいた。これまで風雨にさらされながら微塵（みじん）もゆるがずに立っているという事実は、この塔や、おそらく他の建築物をも建築し、歴史に名をのこすことなく世を去っていった昔の建築家のすばらしい技量を見事に立証している。しかしこの塔が天文観測のために建てられたという解釈は、かならずしも満足のいくものではなかった。塔は丘の上にも、小山の上にも建っておらず、島、というよりもかつて島であったかすかな隆起の上に建てられ、土地は三方から傾斜してせまり、なだらかに森のなかを流れるミスカトニック河にいたっているので、もともと天文台として建てられたとは思えない。すぐ近くには木木も、灌木（かんぼく）も草もはえていないが、地平線はとりまく斜面の木木に隠されているので、星があらわれてもしばらくのあいだはぼんやりとしか見えないだろうから、天文観測にはおよそ理想的とはいえなかった。

しばらくしてデュワートは螺旋階段をおり、落下した平石を片側にうつして、半円形の戸口から出た。戸口には風雨をさえぎるものがなにもなく、このことが屋根の開口部がふさがれていたことを一層奇妙に思わせた。

しかし太陽が樹海の背後にしずみ、夕闇がせまっているので、デュワートはこれを長く考えこまず、のこっているサンドイッチを食べおえると、沼地を迂回して屋敷にもどりはじめた。屋敷の玄関の壁にいかめしくしつらえられた大きな四本の柱が、しのびよる黄昏のなかで白く輝いていた。デュワートはいつもなんらかの調査をしたあとにきまってそうなるように、いささか気分をうきたたせていたものの、その日は具体的でただひとつだけの解釈を可能にしてくれるものがほとんど得られず、さまざまな推測にふけりながら、土着の民話や伝説はもちろん、アーカムの住民の耳目をそばだたせ、謎をのこして立ち去った、深慮あるアリヤに好奇心をつのらせていた。多くの情報を集めてはいたが、それらがおなじ模様のそれぞれちがう部分なのか、ちがう模様の部分にすぎないのか、つきとめることはできなかった。

屋敷に入ったデュワートはもう疲れきっていた。目のことを考えなければならないのがわかっていたので、曾曾祖父の書物をさらに調べたいという誘惑をふりきり、何百冊もの古書がないものとして、これからの調査をどうつづけようかと考えることにした。暖炉に火をおこし、安楽椅子にここちよくすわると、どういう調査をすれば一番早くべつの発見ができるかと思案した。行方をくらました召使クァミスのことを何度となく考えているうちに、召使の名前と古文書に記される「奇跡を行う者」の名前が似ていることに気がついた。少年ラバンの日記によれば、召使の名前はクァミスあるいはクアムスで、古文書にあらわれる名前はミスクアマカスだった。インディアンの名前が似かよっているのは事実だが、家族の場合にさらに顕著な類似をし

めすとも考えられる。
そう考えたデュワートは、ダニッチをとりまく丘のむこうに、クアミスの直系の子孫か親戚の子孫がまだ住みついているかもしれないと思いいたった。一世紀まえに同族の者たちがクアミスの存在を否定したことにもひるまなかった。百年まえに無視されていた人物が、歳月の経過とともに、忘れさられるよりも、さらによく記憶されているということもありうる。デュワートは翌朝、天気さえよければ、この線にそって調査するほうがいいかもしれないと思い、そうすることに決めると、すぐにベッドに横になった。
デュワートはぐっすり眠ったが、身じろぎして目をさまし、またまわりの壁に見つめられているという奇妙な感じのしたことが二回あった。

デュワートは数日ほうっておいた手紙の返事を書いたあと、十時ごろにダニッチにむかって出発した。空は雲につつまれ、東からかすかに風が吹き、雨がふるかと思われた。この天候の結果、ダニッチ特有の木木が鬱蒼（うっそう）と生い茂る丘や、むきだしの岩におおわれる丘の頂は、いつにもまして暗く不気味に見えた。踏みならされた道からはずれているし、またこのあたりをよく知っている者にとっては、無人の家家や、石垣に雑草や茨（いばら）がわがもの顔に繁茂し、何度となくせばまって通るのがやっとのことになる道道に、どうともいいようのない腐敗（ふはい）の雰囲気が感じとれるので、人びとがめったに足を踏みいれない場所だった。デュワートはそう進まないう

ちに、古びた駒形切妻屋根の家家が軒をつらねるアーカムとはまったくちがう、一種面妖(めんよう)な感じを強く意識するようになった。アーカムはずれのアイルズベリイ街道沿いの丘陵地帯とは対照的に、ダニッチの丘陵地帯は、奇妙なほど深い峡谷や山峡を擁し、何世紀もまえのものらしいぐらぐらする橋がわたされ、丘の頂には奇妙に岩が積み重なり、どうやら人為的に積み重ねられたものらしいが、何十年、いや何百年もまえに手をくわえられたのではないかとさえ思えるのだった。低くたれこめる雲を背景にして見ると、わだちののこる道やぐらぐらする橋を、ひとり車に乗って注意深く這(は)うように進んでいくデュワートには、丘が妙に悪意ある顔に思えたことが一度ならずあった。

デュワートは植物が不自然なほど繁茂しているのを見て、項(うなじ)の毛がさかだつような思いがし、無人になった土地を自然が奪いかえしている証拠だと考えたが、それでもなお、蔓(つる)があまりにも長く、密集する低木が頑強なのは奇異に感じられた。さらに、デュワートはミスカトニック河をはなれるようにして車を進めていたのだが、そのミスカトニック河が蛇のようにくねってその姿をあらわしたとき、水はいつになく黒く、岩の多い低地と湿地は異様な風情(ふぜい)で、季節はずれにも食用蛙がまだ鳴いていた。

デュワートが典型的な東部アメリカと思っていたものとはおよそかけはなれた地域を、およそ一時間ほど進んだころ、目のまえに家並があらわれた。標識はのこっていなかったが、ダニッチにちがいなく、ほとんどの住居は無人で、荒廃(こうはい)のさまざまな段階にあった。すばやく調べた

後、尖塔(せんとう)の毀(こぼ)れた教会が唯一の店らしきものになっていることがわかったので、デュワートはその近くで車を停めた。見すぼらしいなりをした老人がふたり、建物に背をもたせかけており、精神的にも肉体的にも退化あるいは堕落(だらく)の徴候(ちょうこう)をしめしていた。デュワートはそのふたりに話しかけた。

「このあたりにインディアンがいるかどうかご存じありませんでしょうか」

ひとりが体をおこして、よろめく足どりで車に近づいてきた。老人は深くくぼんでいる目を細めた。デュワートは老人の皮膚(ひふ)がざらざらしていることと、手がほとんど鉤爪(かぎつめ)のようになっていることに気づいた。そして老人が答えるためにやってきたのだと思い、やじれったそうに車の窓から顔をだした。

老人がびっくりしてあとずさったので、デュワートは面くらってしまった。

「ルザー」老人はうしろにいるもうひとりの老人を呼んだ。「ルザー、こっちへ来いや」その老人がやってくると、デュワートを指差した。「いつだったか、ジャイルズのおかみさんに見せてもろうた絵を、おぼえとるだろ」興奮してつづけた。「あん人だよ。なんちゅうこった。そっくりじゃねえか。ルザー、みんなの言(ゆ)うとるときが来たんだ。あん人がもどるとき、べつのももどるちゅうときが」

もうひとりの老人が上衣をひっぱった。「待ちなよ、セス。あせっちゃなんねえ。印を見せてもらわねば」

「印だ」セスが叫んだ。「印をもっとりなさるか」

いままでこういう手あいに会ったことのなかったデュワートは、胸のむかつく思いがした。嫌悪を表情にあらわさないようにするには、意識的にかなりの努力をしなければならなかった。デュワートはなんとか顔をこわばらせないでいることができた。

「昔のインディアンの家系を調査しているんですよ」デュワートはいった。

「こんあたりにゃインジアンはいねえ」ルザーと呼ばれた老人がいった。

デュワートは思いきって簡単に説明することにした。インディアンが見つけられると期待していたわけではなかったが、インディアンと混血した家族がひとつかふたつはあるだろうと思っていたのだった。デュワートはセスの凝視を意識して不安になりながらも、できるだけ単純な言葉を選んで説明した。

「あん人の名前はなんと言うたかな、ルザー」セスが突然たずねた。

「ビリントンよ」

「あんたの名前もビリントンじゃね」セスが大胆にたずねた。

「わたしの曾曾祖父がアリヤ・ビリントンなんですよ」デュワートが答えた。「それで、家族について……」

デュワートが身元をあかしたとたん、ふたりの老人は態度を一変させた。ただ好奇心があるだけという態度から、ほとんどへつらうまでの態度にかわった。

「グレン街道を行きなさって、スプリング・グレンのこっちがわの最初の家で停まりなせえ。ビショップの家です。ビショップ家にゃインジアンの血が流れてやすから、これまでわからなかったことがわかるかもしれませんよ。だども、夜鷹が啼いたり、蛙がわめくまえに、そこからはなれなきゃなんねえだ。そうしねえと、道がわからなくなっちまって、妙なものが聞こえやすからね。ビリントンの血が流れてるから、気にはなさらねえでしょうが、言うといたほうが親切ってもんだ」

「そのグレン街道というのはどれですか」デュワートがたずねた。

「あの二番目の角をまがって、まっすぐ行きゃあええ。そんなに遠くじゃありません。最初の家ですぜ。ビショップのおかみさんの機嫌がよけりゃ、お知りになりたいことを話してくれるでしょうよ」

デュワートはすぐにも車を走らせたかった。肉体的に不潔なばかりか、近親結婚の傷痕をもち、耳と眼窩が奇妙にゆがんでいるふたりの老人をまえにして、不安な思いにさせられていた。しかしどこでビリントンの名前を知ったかということに好奇心がかきたてられてもいた。

「アリヤ・ビリントンといいましたね」デュワートがいった。「アリヤ・ビリントンについて、このあたりではどんなことがいわれているんですか」

「悪気で言うたんじゃねえんです。本当に」ルザーが口早にいった。「グレン街道を行きなせえ」

デュワートはもどかしそうな顔つきをした。

セスがすこしまえにでて、すまなそうに説明した。「あんたのご先祖さまは、このあたりじゃ尊敬されとります。ジャイルズのおかみさんがご先祖さまの肖像画をもっとって、それがあんたとそっくりなんです。ビリントン家の人が森の屋敷に帰ってきなさったことは聞いとりますよ」

デュワートはこれを聞いて満足した。老人たちが自分を信用していないような気がしたが、教えてもらった道については懸念（けねん）をいだかなかった。デュワートはまちがうことなくグレン街道に入り、暗まりゆく空の下、丘のなかを進みつづけ、街道の名前となった泉のある峡谷（スプリング・グレン）に行きつき、ビショップ家をさがした。すこし手こずった後、壁板が白くなっている低い家屋が見つかった。デュワートは最初、かつて流行したギリシア復興様式の建物かと思ったが、近づいてみると、はるかに古い建物だった。門柱のひとつに、風雨にさらされかろうじて読める程度にビショップと記されていたので、ビショップ家の住居にまちがいなかった。デュワートは雑草のはびこる道を歩き、相当いたんだポーチにのぼると、誰も住んでいないような雰囲気なのですこし心もとなさを感じながらも、ドアをノックした。

しかし声が答えた。老婆（ろうば）らしき、しわがれた声だった。声はなかへ入ってなんの用かいうようにと告げた。

ドアを開けたデュワートは、むかつくような悪臭に襲われた。デュワートが入った部屋はまっ

暗だった。天気のせいだけではなく、窓が閉められ、灯がつけられていないためでもあった。ドアを完全に閉めずにすこし開けたままにしておくと、揺り椅子にしわだらけの老婆が坐っているのがわかった。暗闇のなかで白髪が輝かんばかりだった。
「坐りなせえ」老婆がいった。
「ビショップ夫人ですか」デュワートはたずねた。
老婆がビショップ夫人であることを認めると、デュワートは待ちかねたように、古いインディアンの家系の子孫をさがしていることをきりだした。さっきの老人の話では、ビショップ夫人にインディアンの血が流れているということだった。
「そのとおりじゃよ。ナラガンセット族の血が、そのまえのワンパノーアグ族の血が、あたしの体に流れとります」ビショップ夫人はくすくす笑った。「ビリントン一族の顔つきをしてなさるねえ」
「さっきもそういわれましたよ」デュワートはそっけなくいった。「遺伝でしょう」
「ビリントン家のお人がインディアンをさがしに来なさった。なら、クアミスをさがしてなさるのかのう」
「クアミスですって」デュワートは思わず叫んだ。驚いていた。そして、アリヤ・ビリントンと召使のクアミスのことが、どういうわけでか、ビショップ夫人にも知られているのだろうとあたりをつけた。

「びっくりしなさったね。けど、クアミスをさがしても骨折損のくたびれもうけじゃよ。クアミスはもどってこねえ。もどってこられねえからね。あっちへ行っちまったから、もうこっちへもどりてえとも思わねえんじゃよ」
「アリヤ・ビリントンについてどんなことをご存じですか」デュワートが不意にたずねた。
「なんでもたずねてくだせえよ。あたしゃみんなから聞いたことしか知りませんがのう。アリヤは人間以上の知識をもっとったそうじゃよ」ビショップ夫人は声をおしころして笑った。「人間に知られうる以上のことを知っとったそうじゃ。魔術とか旧神のこととかを。賢明な人じゃった。あんたにもいい血が流れとる。だども、アリヤがしたようなことはなさらんじゃろう。これだけはおぼえといてくだせえよ。石に近づいちゃなんねえ。外の世界のもんがもどれねえように、扉は閉ざさなきゃなんねえだ」
　老婆がしゃべりつづけるにつれ、アンブローズ・デュワートの心のなかに妙な不安の念がうずをまきはじめた。デュワートが大変な熱意をもってのりだしたこの企(くわだ)ては、この古びた村落にあるものが世俗的と見なせるなら、古い書物や新聞の範囲からはずれて世俗的な領域にうつっていたが、それがいまや不吉なだけでなく、名状しがたい邪悪の様相を呈(てい)しはじめていた。みずから好んで闇につつまれている老婆が、デュワートには悪魔めいた老女のように思えはじめた。闇のおかげで、デュワートは老婆の表情を見ることはできなかったが、老婆にはデュワートがよく見えるらしく、村にいたふたりの老人とおなじように、デュワートがアリヤ・ビリン

トンに似ていることを見ぬいていた。老婆の笑い声はぞっとするほど怖ろしく、蝙蝠の啼き声を思わせた。そしてなにげない感じで口にする言葉は、さほど想像力のないデュワートにも、奇怪かつ怖ろしい意味をもっているように思え、デュワートはもともとどんなものも論駁したい誘惑にかられる人物だったが、平然とうけとめることが困難になっていた。デュワートは耳をかたむけながら、こういうマサチューセッツの丘陵地帯のような辺鄙な場所では、奇妙で異界的な信仰や迷信がさかんにおこなわれるのも当然だと自分にいいきかせた。しかしビショップ夫人には迷信の雰囲気はかけらもなく、なにか秘められた知識といおうか、ほとんど人を軽蔑するような、きわめて心さわがせられる秘密を知っていることを感じさせるものがあった。

「アリヤ・ビリントンはどんな疑いをかけられていたんでしょうか」

「知りなさらんのか」

「妖術でしょうか」

「悪魔と結んだか、ちゅうことかな」ビショップ夫人はまたふくみ笑いをした。「そうじゃねえ。誰にもいえんことじゃ。だども、あれは丘をうろつき、悲鳴をあげ、地獄めいた音楽をたてているとき、アリヤを捕えたりはせんかった。アリヤがあれを呼び、あれが来たんじゃ。アリヤがあれをおくり、あれは行ってしもうた。あれは、百年間閉じられたままになっとる扉が、また開けられるときを待ってひそんでおった場所へ行ってしもうたから、また丘にあらわれることができるんじゃ」

老婆のあいまいな言及には聞きおぼえのある響があった。デュワートは妖術と悪魔学をなまかじりしていた。しかしビショップ夫人の話にはそういう知識ではおよびもつかないものがあった。

「ビショップ夫人、ミスクアマカスのことをお聞きになったことがありますか」

「ワンパノーアグ族のなかで一番賢明な人じゃったよ。爺さまが言うとるのを聞いたことがある」

すくなくとも伝説は知っているということなのだろう。

「それで、その一番賢明な人物のことですが……」

「たずねる必要はねえ。あん人は知っとった。ミスクアマカスの時代にビリントン家の人がおったことは、あんたもよく知っとられるじゃろうが。あたしが言う必要はねえだ。だども、あたしゃもう年じゃし、そう長くはあんめえが、言うのがこわいんじゃよ。本を見ればええ」

「どの本ですか」

「アリヤが読んだ本じゃよ。全部あそこにあるじゃろう。本を読めば、あれがどんなふうにして丘から応えたか、あれが星から来たみてえに、どんなふうに空からあらわれたかがわかるじゃろうて。だども、あんたはアリヤがやったようなことはやらんじゃろう。もししたら、〈名づけられぬもの〉はあんたを助けてくれるかのう。あれがあそこで待っとるんじゃから。まるできのうのごと、いまもすぐ外で待っとるんじゃよ。あれはおくりもどされたんじゃ。あやつら

には時間も存在せんからのう。空間もじゃよ。あたしゃ、しがねえ婆、もう長くはねえ婆だども、あんたのまわりにあやつらの影が見えて、その影が空を舞い、飛びかいながら待ちつづけとることは言うとくだ。丘へ呼びに行っちゃなんねえだよ」

デュワートは不安をつのらせながら、鳥肌がたつような思いで耳をかたむけていた。老婆、闇、老婆の声――すべてが不気味だった。古い家の壁にかこまれているにもかかわらず、まわりの丘にたれこめる神秘と闇が押しよせてくるような、たまらない圧迫感がひしひしと感じられた。あのふたりの老人がここまでやってきて、ものいわぬ仲間をつれて立ち、耳をじっとかたむけているかのような感じが不吉なまでにした。と、突然、部屋がなんらかの存在に息づいたかのような気がして、デュワートが想像力のとりこになったとき、老婆の声が消え、かわっておそろしいふくみ笑いがはじまった。

デュワートは不意に立ちあがった。

デュワートの態度の急変が老婆にもわかったにちがいない。老婆はすぐにふくみ笑いをやめ、すすり泣くような卑屈な調子でいった。「手荒なまねはしねえでくだせえ。もう長くはねえ年寄りじゃから」

さっきの老人ふたりもそうだったが、いままた老婆からそれ以上に、自分が怖れられているという明白な証拠をしめされて、デュワートは驚きながらも不安になった。デュワートは屈従されることには慣れていなかったし、ふたりの老人やこの老婆のへつらう態度には、吐

き気をもよおすほど悍しいなにか、デュワートにはうかがい知れないなにかがあった。それが自分ではなくアリヤに関するなにか伝説的な信仰から発するものであることがわかっていたので、デュワートはたまらないほどの反撥感をおぼえた。

「ジャイルズ夫人にはどこへ行けば会えるんですか」デュワートはたずねた。

「ダニッチの反対側ですじゃ。息子とふたりきりで暮しとります。息子は気がふれておって、乱暴をはたらくそうじゃが」

　デュワートがポーチに出るが早いか、背後からビショップ夫人の怖ろしいふくみ笑いがおこった。辟易したものの、デュワートはしばらく立ちどまって耳をかたむけた。ふくみ笑いが静まると、低くてはっきりしない言葉が聞こえてきた。しかし、デュワートが驚いたことに、老婆の言葉は英語ではなく、植物の繁茂する深い谷あいではことさら異様な、一種の音声言語だった。デュワートは心さわがせながら耳をすましていたが、つのりゆく好奇心にさそわれるまま、老婆がなにをぶつぶつつぶやいているのかを知るために、さまざまな言語を思いだしてみた。デュワートに判断できるかぎりにおいて、老婆の口にする音は、うなるようにいう言葉まがいのものと気音の結合物で、デュワートの知っているどんな言葉でもなかった。ポケットにはいっていた封筒の裏をつかって書きとめようとしたが、さて書きおわって読みかえしてみると、解読不能のなぐり書きでしかなかった。

んがい　んががあ　しょごく　いはあ　ないあら・と　ないあら・とてっぷ　よぐ・そと
とん・やあ　ん・やあ

家のなかの声はしばらくつづき、つづいているあいだはおなじことをくりかえしているようだったが、やがてその声もとまった。デュワートは狐につままれたような感じで自分が記したものを見た。明らかに無教養で、迷信深く、愚直な老婆だが、奇妙な音声言語にはなにか外国語を思わせる暗示があって、デュワートが大学で学んだことから考えても、インディアンの言語ではなかった。

祖先の姿を鮮明にする手がかりが得られるどころか、さまざまな謎がうずまくなかにむしろ深く入りこんでしまったようだった。ビショップ夫人の支離滅裂の会話はデュワートがこれまで知らなかったいくつもの謎をしめし、その謎はことごとく、漠然とはしているものの、アリヤ・ビリントンあるいはすくなくともビリントンの名前に関係があるらしく思われた。それはまるで、ビリントンの名前が全体の意味をつける中心の模様、あるいは情報がまだ欠落している記憶を刺激して甦らせる触媒であるかのようだった。

デュワートは封筒を注意深くおりたたむと、ポケットにもどし、もう家のなかは静まりかえり、木木をさわがせる風の音が聞こえるだけなので、車に乗りこみ、来た道をひきかえして村を通っていった。村では窓や戸口から、ものいわぬ暗い人影に、なかばへつらうような眼差で

はあるものの、油断なく見つめられた。デュワートはジャイルズ夫人の家があるだろうと思われる方向に車を進めた。ビショップ夫人が「ダニッチの反対側」といったところには、三軒の家があった。

デュワートはまんなかの家にむかったが、返事がなかったので、アーカムなら三ブロックはあるだろうと思われる長い家並の一番奥の家にむかった。デュワートがやってくるのは見られていた。三番目の家に近づいたとたん、背中のまるくなった大男が道わきの灌木からとびだして、大声で叫びながらその家にむかって走っていった。

「ママ、ママ、あん人が来たよ」

ドアが開き、大男がなかに入った。デュワートは、この見捨てられた村落の頽廃と退化の証拠がいやましにふえていくのを考えこみながら、かたい決意を胸に歩きつづけた。その家にはポーチがなかった。前面はペンキの塗られていない寒ざむとした壁で、そのちょうどまんなかにドアがあり、納屋よりも魅力にとぼしく、荒廃した様子や汚なさには、禁断の家を思わせるものがあった。デュワートはドアをノックした。

ドアが開き、女が立っていた。

「ジャイルズさんですね」デュワートは帽子をぬいだ。

女の顔から血の気がひいた。デュワートは女が迷惑そうにしていることを意識したが、好奇心のためにそれを無視した。

「おどかすつもりではありません」デュワートがつづけた。「どうもわたしの顔つきはダニッチの人をおどろかせるようですね。ビショップ夫人もそうでしたよ。ビショップ夫人はご親切にもわたしが曾曾祖父に似ていると率直におっしゃってくださいました。あなたが絵を見せてくださるかもしれないと、ビショップ夫人からうかがったんですが」

ジャイルズ夫人はあとずさりした。長くて細い顔はすこし色をとりもどしていた。デュワートは、ジャイルズ夫人がエプロンの下にいれている手で小さな像を握りしめているのを目のはしでとらえ、そよ風がふいてエプロンがひらめいたとき、その像がドイツ南部の森林地帯やハンガリーおよびバルカン諸国の一部で見いだされる、魔女の護身用のお守りに似ていることを知った。

「なかへいれちゃいけないよ、ママ」

「息子は人見知りばするとです」ジャイルズ夫人がいった。「そこにお坐りになってくだせえ。絵をもってきますから。大昔に描かれたもんで、父からもろうたんです」

デュワートは礼をいって腰をおろした。

ジャイルズ夫人は奥の部屋に姿を消した。息子をなだめる声が聞こえてきた。息子がおびえていることは、デュワートに対するダニッチの住民の態度のいまひとつのあらわれだった。しかしジャイルズ夫人の息子の場合は、むしろ無知のおびえとでもいうようなもので、よそ者には誰にもこういう態度をとるのかもしれない。ジャイルズ夫人はもどってくると、絵をさしだ

した。
粗雑だが効果的な絵だった。一世紀以上も昔の画家の素人っぽさはあるものの、曾曾祖父と自分とが驚くほど似ていることは、デュワートにさえわかった。ぞんざいなスケッチのなかに、デュワートとおなじ顎の角ばった顔つき、おなじ鋭い目、おなじ段鼻があった。もっともアリヤ・ビリントンは鼻の左側にはれものがあり、眉がデュワートよりもふさふさしている。しかしそのとき、デュワートはアリヤが自分よりはるかに年配だったことを思い知った。
「息子さんと言うてもよろしいとですね」ジャイルズ夫人がいった。
「家には肖像画がないんです。とても見たく思っていました」
「よろしかったら、もって帰られてもよろしいとですよ」
デュワートは喜んで応じたい誘惑にかられたが、この絵は、ジャイルズ夫人にとってどれほどつまらないものであろうと、それ相応の価値のあることがわかっていた。それに絵を手もとに置く必要はなかった。デュワートは絵を見つめ、曾曾祖父の容貌を注視しながら首をふると、絵をジャイルズ夫人に返して、丁重に礼をいった。
用心深く、かなりためらいながらも、年齢以上に成長した少年がやってきて、戸口に立ったが、デュワートがすこしでもいやそうな顔をすれば、逃げだそうという様子だった。デュワートはちらっと目をむけ、少年などではなく、三十くらいの男であることを知った。乱れた髪がいかつい顔にふりかかり、怖れていたるような魅了されていたるような眼差しで、じっとデュワート

を見つめていた。
ジャイルズ夫人がなにもいわずに立ちあがって、デュワートのつぎの動きを待った。帰ってもらいたがっているのは明白だった。そこでデュワートはすぐに立ちあがり——その動きでジャイルズ夫人の息子は家の奥へかけこんでいった——もう一度礼をいうと、家からはなれ、魔女のお守りかなにかはわからないが、ジャイルズ夫人がずっとそれをエプロンの下で握りしめていたことを考えこみながら、車にもどった。
デュワートにはダニッチをはなれる以外、もうほかにすることはなかった。失望してはいたが、喜んでダニッチを立ちさりたい気分だった。在世中に描かれた祖先の絵を見たことが、わざわざダニッチに出むいてきたことへのせめてもの報償(ほうしょう)だった。しかしダニッチへ遠出したことで、説明しようのない不安感をおぼえるようになり、この地方に顕著な頽廃と退化によって、口にのこるにがにがしさ以上のものに根づくような、一種肉体的な嫌悪感がそれにくわわっていた。説明することはできなかった。ダニッチの住民そのものが妙に虫が好かなかった。近親結婚をくりかえしたことは否定しようがなく、さまざまな生理的変化を身におびていた。たとえば、普通よりはるかに大きく、蝙蝠(こうもり)のように開いている妙にひらいた耳とか、ほとんど魚を思わせるつきだした目とか、両棲類をほのめかす分厚くてしまりのない唇とかが、ダニッチの住民に顕著な特徴だった。しかしデュワートに不快なまでの影響をおよぼしたのは、ダニッチの住民やダニッチの土地がらだけではなかった。それ以上のなにか、この地方の雰囲気に固有

ななにか、信じられないほど古くて邪悪ななにか、怖ろしい太古の冒瀆的行為と想像もままならない恐怖を暗示するなにかだった。この秘められた谷間では、恐怖までもが感知できる実体になっているとまで思われた。欲情と残忍性と絶望がダニッチでの生活には避けられないもので、暴力と悪徳と堕落がダニッチでの生きかたであるようだった。そして年齢と家系を問わず、住民全員に影響をおよぼす狂気がすべてを支配し、ダニッチをつつみこむその狂気は住民がみずから選んだという暗示をはらんでいるために、ことさら怖ろしいものだった。しかしデュワートを反撥させる、さらにそれ以上のものがあった。デュワートはアーカムの住民が自分に対してしめした恐怖に、不快なまでに影響されていた。怖れられているという事実からのがれることはできなかった。単なるよそ者に対する恐怖だといくら自分にいいきかせても、そうでないことがわかっているので無駄だった。デュワートは痛いほど意識していた。さらに、アーカムの住民が自分を怖れていることを、デュワートはアリヤ・ビリントンに似ているために、セスという老人が、心さわがせられることをほのめかしていた。セスは仲間のルザーを呼んで「あん人がもどってきた」といったが、あまりにも真剣な顔つきをしていったので、セスとルザーのふたりは、百年以上もまえにイギリスで死んでいるアリヤ・ビリントンがもどってくると、本気で信じているらしかった。

デュワートは丘や、陰鬱な谷間や、低くたれこめる雲や、宙天のさけめからさしこむ光を照りかえすミスカトニック河の深まりゆく暗さをほとんど意識していなかった。おびただしい可

能性に心が奪われ、これからどんな調査をしようかと考えこんでいた。さらに、目下の懸念をこえたところにあるものを、妙に意識していた——それは、アリヤ・ビリントンがダニッチの住民の無知で堕落した子孫だけでなく、当時の教養ある白人からも怖れられていた理由について、これ以上調べようとする企てをやめるべきだという、強まりゆく確信だった。

翌日デュワートは従弟のスティーブン・ベイツからボストンに呼びだされた。イギリスからの最後の荷物がスティーブン・ベイツ宛に送られてきたからだった。デュワートは二日間ボストンにいて、荷物をアイルズベリイ街道はずれの屋敷に転送する手続きをし、三日目には、ほとんどの時間をついやして、荷ほどきをしたり、さまざまな品物を屋敷内の各所に配置したりした。この最後の荷物のなかに、母親から渡された、アリヤ・ビリントンから代代ゆずられる指示書があった。最近おこなった調査の結果、デュワートは指示書を調べなおしたい誘惑にかられていた。そこで、大きな品物はまだ手をつけないままにして、たしか母親からもらったとき、大型封筒にはいっていて、表に父親が名前を記していたなと思いだしながら、指示書を捜しはじめた。

さまざまな書類や手紙の束を一時間ほどかきまわした後、記憶にある大型封筒が見つかり、数年まえ、死ぬ前夜にデュワートに読み聞かせたあと母親のほどこした封を破った。アリヤ自身が記したものではなかった。おそらくラバンが晩年に写しとったものらしく、百年以上まえ

のものとは思えなかった。しかし署名はアリヤとなっているので、デュワートは、ラバンも元の指示書を変更することなくそのまま書き写したのだろうと思った。

デュワートは書斎でわかしていたコーヒーをいれると、指示書を広げ、コーヒーをすすりながら読みはじめた。日付はなかったが、筆跡はしっかりしていて読みやすかった。

マサチューセッツ州におけるアメリカの地所につき、かかる地所は知らぬがよろしき理由により、家族の内にて保全するが賢明なること、我が後に続きし全ての者に厳命す。再びアメリカの岸に向けて出帆する者無からんと思うも、もしかようなことありせば、前述の地所に足を踏み入れる者、ビリントンの森として知らるる森の中なるビリントンの屋敷として知らるる家屋に残されし書物にて、意味する所を摑み、次のごとき指示を必ずや守るよう厳命致す。即ち、

島の廻りを流れる水を止めることなかれ、塔をいかようにも乱すことなかれ、石に懇願することなかれ。

怪しの時と所に通じる扉を開けることなかれ、戸口に潜みしものを招くことなかれ、丘に呼びかけることなかれ。

蛙なかんずく塔と館の間なる沼地におりし食用蛙を悩ますことなかれ、蛍を悩ますことなかれ、夜鷹として知らるる鳥を悩ますことなかれ、彼のもの鍵と監視を放棄することなき

ようにせんがためなり。
神変する窓に触れることなかれ、窓をいかようにも改変することなかれ。
塔及び島をいささかなりとも乱さず、また破壊する以外窓に如何なる手も加えぬことを証する条項を入れることなく、地所を売却あるいは処分することなかれ。

署名はアリヤ・フィニアス・ビリントンとなっている。
断片的とはいえ、これまでにデュワートが見つけたものに照らして、この比較的簡潔な書類はないがしろにできるものではなかった。デュワートは塔——調査したあの塔にちがいない——そして湿地帯あるいは沼地、そして窓——書斎のあの窓にちがいない——に対する曾曾祖父の気づかいにまったく当惑しきってしまった。デュワートは書斎の窓を興味深くながめた。いったいあの窓になにがあるのか。模様はおもしろいものだった。同心円に対して外から中心にむかっていくつもの線が走っている模様で、中央のまるい部分をとりかこむ多彩なガラスは、太陽の光がななめにさしこむ午後もふかまったいま、とりわけ明るく輝いていた。デュワートは窓を見ているうちに、とりわけ奇妙な反応を意識するようになった。鉛縁の円が動き、ぐるぐるまわっているように見えるのだった。線は震え、くねくねと動いているようだった。そして肖像か情景を思わせるものが、ガラスのなかに形づくられはじめたように思えた。デュワートは目をかたくつぶって頭をふった。そして思いきって、また窓を見た。奇妙なところはなにも

なかった。とはいえ、つかのまの印象があまりにもなまなましかったので、デュワートとしても、体をつかいすぎていつのまにかうとうとしていたためか、コーヒーを飲みすぎたためだろうと思わざるをえなかった。おそらくその両方なのだろう。デュワートはポットいっぱいのコーヒーをすこしずつ、砂糖をたっぷりいれて飲む男だった。

デュワートは指示書を置くと、コーヒー・ポットをキッチンにもっていった。もどってくると、もう一度、鉛縁の窓を見つめた。太陽はもう西の木木のうしろに沈み、窓が夕日に金色と銅色に明るく照らされているので、書斎のなかは黄昏がつどい、うす暗くなっていた。この時刻の太陽の光に目をくらまされたのだろう、とデュワートは思った。そして窓から視線をはずすと、指示書を大型封筒にもどし、大型封筒を書類ばさみにいれると、かたずけなければならない手紙や書類のはいっている箱を整理しはじめた。

デュワートはこういうふうに夕べのときをすごした。

いささかうんざりする仕事を、やりおえると、ランプの火を消し、キッチンのランプに火をともした。アーカム近くのどこかで草か灌木を焼いている煙がたなびき、三日月が西の空低くにかかる、おだやかでさわやかな夕べだったので、デュワートはしばらく散歩することにした。しかし出かけるため、玄関へ行こうと思って屋敷のなかを歩き、たまたま書斎をとおりかかったとき、なにげなく窓を見あげてみた。

窓を見たとたん、デュワートは立ちすくんだ。なにかのしかけか月光のいたずらによるもの

か、窓に見まちがえようもなく、グロテスクに変形した頭部があらわれていた。デュワートはわれをわすれてながめた。目、あるいは目の穿と、一種口らしきものと、半球形の額が識別できた。しかし人間らしきところはそれだけで、ぼんやりした輪郭は触角らしきものの怖ろしい見かけをとって先端は薄れ消えていた。今度はまばたきしてもかいはなかった。ぞっとするほどグロテスクなものは明らかに存在していた。最初は太陽、今度は月のせいだとデュワートは思い、曾曾祖父がこの目的のために窓を設計したのだろうと判断をくだした。

　それでも、この即席の説明は満足のいくものではなかった。デュワートは窓の下の書棚のまえに椅子をもってくると、窓の全体はもちろん各部を仔細に調べるため、椅子の上からがっしりした書棚の上にのぼろうとした。しかし窓をまえにしたとたん、窓全体がゆらめきはじめ、さながら月光が鬼火に転じ、おぼめく輪郭が害意ある生命をもつにいたったかのように思えた。

　幻影ははじまったときとおなじく、唐突に消えた。デュワートはやや体を震わしながら、窓の中央の円をまえにして立っていた。中央はさいわいすみきったガラスらしく、月の姿が見え、月と窓のあいだには、まわりの黒っぽい木木からぬきんでている、ぞっとするほど白い塔があった。塔はいまの位置からしか見えず、月光をあびてにぶく輝いていた。デュワートは窓の外をながめた。視力がおちたのか、あるいは塔のまわりを飛びまわっているものが実際に存在するのか。木木にかこまれているので基部ではなく、円錐状の屋根のまわりだった。デュワートは頭をふった。どうやら、月光と沼地からたちのぼる沼気のせいで、ありもしないものを見たよ

うに思ったらしかった。
　しかしデュワートは動揺していた。書棚からおりると、書斎のドアにむかい、そしてふりかえった。窓はかすかに輝いていた――それだけのことだったが、見ているうちにも、その輝きはそれとわかるほど薄れていくのだった。これは月の光が弱まっていくのと一致しているので、デュワートはほっとした。こういうことがあっては、デュワートが狼狽するのも当然だったが、デュワートは曾曾祖父の謎めいた指示書を読んだことで、ありもしないものが見えるような気分になったのだろうと思った。
　デュワートは予定通り、散歩にでかけたが、月が沈んで暗くなっているので、森の方には行かず、アイルズベリイ街道に通じる道を進んだ。心の動揺がまだつづいているため、自分がひとりきりではなく、つけられているという気がしてならず、何度となく密集する木木に目をむけては、動物の姿はないか、身を隠す動物のいることを告げる輝く目はないかとさがした。しかしなにも見えなかった。頭上では、星たちが輝きを強め、月は完全に沈みきっていた。
　デュワートはアイルズベリイ街道にやってきた。行きかう車を見ているとと、なぜか心が安らいだ。そしてひとりきりでいたためだと思い、近いうちに従弟のスティーブン・ベイツを呼んで、二週間ほど屋敷に滞在してもらわなければならないと思った。その場に立っているうちに、ダニッチの方角の陵線にあわいオレンジ色の輝きがあることに気づき、おびえた声のようなものが聞こえるように思った。デュワートはおそらくダニッチの倒れかけた家の一軒が火事になっ

たのだと考え、輝きが弱まるまで見つめつづけた。そしてふりかえると、屋敷にもどりはじめた。

　デュワートは夜に目をさまし、監視されているという確信に圧倒された。うれしい気分ではなかった。何度も寝返りをうちながら眠ったが、朝に目をさましてみると、まるで一晩じゅう眠らずに歩きまわっていたかのように、まだ疲れがのこっていた。椅子の上に注意深く折りたたんでおいた服が乱れていたが、夜中にベッドから出て服を乱したおぼえはなかった。

　屋敷に電気は通じていなかったが、デュワートは小型のラジオをもっていて、電池を節約しながらときおりスイッチをいれることがあった。音楽番組はめったに聞かず、たいていニュース、それも大英帝国からのニュースを再放送する朝のニュース番組を聞いた。これはいつもビッグ・ベンの音ではじまるので、デュワートは望郷の念をかきたてられ、黄色い霧につつまれるロンドンを、その古い建物を、古風で趣きのある通りを、はなやかな小路を思いだすのだった。この再放送のまえには、ボストンの放送局からの国内ニュースや地方ニュースがあって、その朝もデュワートがロンドンからのニュースを聞こうと思ってラジオのスイッチをいれると、地方ニュースが聞こえてきた。途中かららしく、デュワートはなにげなく、ややじれったそうにして耳をすましました。

　……遺体が発見されたのは一時間まえでした。放送をはじめるまえにはまだ身許が確認さ

れていませんでしたが、どうやら村人のようです。まだ検視はおこなわれていませんが、遺体はひどく傷つけられており、長いあいだ波にのせられて岩にたたきつけられたかと思われます。しかし遺体は水際からはなれた岸辺で発見されていますし、ぬれていませんでしたので、陸で殺害されたのかもしれません。飛行機から投げ落とされたかのように、投げつけられたか、落とされたような痕跡が認められます。検視官によれば、この地方で一世紀以上まえにあった一連の殺人事件と似かよっている点があるそうです。

これは地元の放送局による最後の地方ニュースだった。これがおわると、アナウンサーはロンドンからの再放送をお送りしますと告げ、ニューヨークから伝えられるイギリスのニュースがはじまった。しかし地元の犯罪のニュースがデュワートにきわめて特異な影響をおよぼしていた。デュワートは犯罪学にいささか興味をもっていたが、この種の影響をうけやすい性質ではなかった。それなのにこの犯罪が、トロップマン殺人事件やロンドンの切り裂きジャックの犯罪のやりかたをまねるようになるかもしれないという、予感めいたきわめて不安な確信がするのだった。デュワートはニュースの再放送にはほとんど耳をかたむけず、アメリカへやってきて以来、気分とか雰囲気とか事件とかいうものに、極度に敏感になってしまったものだと考えこんだ。そして、イギリスではことのほか顕著だった。あの超然とした態度をどうしてなくしてしまったのか、知りたく思った。

その日の朝は曾曾祖父の指示書にもう一度目を通してみるつもりだったので、朝食をおえると大型封筒をとりだし、書かれたものからなんとか意味をくみとろうとしはじめた。そしてとりわけ「指示」に目をむけ、考えこんだ。「流れる水を止めることなかれ」については、もうかなりまえから塔のある島のまわりの河がひあがっているので、とめるもなにも、どうすることもできない。塔を乱す云云(うんぬん)については、もうすでにふさがれていた平石をとりのぞくことによって、それに値する行為をしてしまっていた。しかし「石に懇願(こんがん)することなかれ」とは、いったいまたアリヤはどういう意味でこんな指示をだしたのだろうか。デュワートはストーン・ヘンジを思わせる遺物以外の石を考えることができなかった。アリヤの言及するのがその列石群として、どうしてアリヤは知性があるかのように石に懇願するようなことを期待したのだろうか。デュワートには見当もつかなかった。従弟のスティーブン・ベイツが来てくれたときに見せてやれば、かれならわかるかもしれない。

デュワートは指示書を読みつづけた。

曾曾祖父が言及しているのはどの「扉」だろうか。事実、厳命されることのすべてが完全な謎だった。「怪(あや)しの時と所に通じる扉を開けることなかれ、戸口に潜(ひそ)みしものを招くことなかれ、丘に呼びかけることなかれ」とは、不可解としかいいようのないものだった。アリヤにとっては、現代、つまり自分の生きている時代が怪しいものだったのだろう、とデュワートは思った。となると、アリヤの生きていた時代のなにかをさぐってはならないということなのだろう

か。可能性にしかすぎないが、そう考えると、アリヤが「怪しの所」という言葉でまったくべつのことを意味していると考えなければならなくなってしまう。「戸口に潜みしもの」という言葉には不吉な響があった。それを否定することはできない――不吉かつ不気味な響のすることとは。デュワートはシンバルの響と低くうなる雷鳴を思いうかべた。戸口とはなんだろうか。「潜みしもの」とは何者なのか。そして「丘に呼びかけることなかれ」と子孫に厳命することによってアリヤが意味したものはなんだったのか。デュワートは自分かべつの者が森のなかに立って、丘に呼びかける姿を思いうかべた。くだらない想像ではなかったが、笑いをさそわれる一面もあった。デュワートはこれも従弟のスティーブンに考えてもらわなければならないと思った。

デュワートはつづけて三番目の厳命を読んだ。蛙や蛍や夜鷹を悩ませたいとは思わなかった。この点に関しては、指示に違反するようなことはこれからもありそうにない。しかし「彼のもの鍵と監視を放棄することなきよう」とはどういうことなのか。これはいままで一番わけのわからない、あいまいで要領をえない箇所だった。鍵とはなにか。監視とはなにか。曾曾祖父はことさら謎めかして書いているらしい。子孫が謎を解きあかすことを願っていたのではないだろうか。もしそうなら、どうすれば謎を解くことができるのか。厳命にそむき、なにかが起こることを待てばいいのか。しかしそのやりかたは、賢明であるとも有効であるとも思えなかった。

デュワートはうんざりして、指示書を机に置いた。さっぱりわけがわからないので、もどかしかった。知識だけはふえていくが、困惑させられるものばかりだった。気むずかしいアリヤが、好意をもって見ることのできないなんらかの行為に従事していたらしいということ以外、これまで集めた情報からは、なんの結論もひきだすことができなかった。デュワートは密輸に関係しているのだろうと思った——おそらくミスカトニック河をさかのぼり、塔のある支流で受渡しをしたのだろう、と。

デュワートはその日、のこりの時間の大半を、まえの日に解いた荷物にかかわる仕事についやした。発送しなければならない書類、支払わなければならない請求書、点検しなければならない品物があった。デュワートがまだ見たことのなかった母の手になる所有物のリストに目を通していると、「ビショップからＡＰＢへの書簡包」と記された項目があった。ビショップという名前を目にして、デュワートはダニッチで会った老婆を思いだした。その包があったので手にすると、表には見慣れない筆跡で「ビショップ書簡」と記されていた。

その包を開けると、数十年まえのものとおぼしき手紙が四通はいっていた。切手ははられていなかったが、料金が支払われたことを意味するのか斜線がひかれ、封印がほどこされていたらしく、封蠟がまだのこっていた。包にあったのとおなじ筆跡で番号がうたれているので、手紙の順序は一目瞭然だった。デュワートはきわめて注意深く最初の手紙を開封した。しっかりした紙に、読みづらい小さな文字で記されていた。ざっと目を通して年代を知ろうとしたが、

何年に記されたものであるかはわからなかった。デュワートは椅子に坐って、手紙を順に読みはじめた。

ニューダニッチ
四月二十七日

謹呈

我等語りしことにつき、我等の探せし物に似たる存在を昨夜見たり。暗き翼を持ち、胴より蛇に似たるもの生えし。我は其の物を丘に呼びて環に入れたれど、非常なる困難をもってこれを致さば、環は長く留めおくほど強力なかりしかとおぼゆ。会話を試みしも、首尾はあげられず、其の物は不可解なる言葉を発するのみ。其の物書物に記されしレンの高原に近き凍てつく荒野のカダスより来れり。多くの者、丘の炎を目にしてそれを語りたるが、なかんずくウィルバー・コーリイなる男、頑迷にして敬虔なりせば、悶着を起こすおそれあり。我のおりし時にウィルバー・コーリイ丘に来らざることを願いたれど、おぼつかなき願いにあらんや。ヨグ・ソトースとなべての旧支配者のためなる列石に御名を残せし、貴殿の誉まれし御太翁リチャード・Bの精通され給いしことどもを、さらに一層よく学び取るを望願せり。貴殿の屋敷に戻られしことを喜び、駿馬の体調戻らば直ちにおとないたく思う。今週森より大いなる声夜に聞こえたれば、屋敷に戻られしこと知りけん。近近

目見(まみ)えんことを願いつつ
謹白
ジョナサン・B

デュワートはすぐに二番目の手紙を読みはじめた。

ニューダニッチ
五月十七日

拝呈

御手簡拝受。我がつましき刻苦(こっく)、貴殿はもとより名付けられざるもの或(あ)いは旧支配者に仕える者の全てに困難を齎(もたら)せしこと痛哭(つうこく)の念おぼえけるも、こは痴者(しれもの)ウィルバー・コーリイ列石にて儀式を行う我の前に忽然(こちねん)と現れ、妖術師にしあらば呪われかしと叫びたれば、うるさきことに思いて、話を致せし彼(か)のものをウィルバー・コーリイに向けたれば故(ゆえ)なり。ウィルバー・コーリイ引き裂かれ血を流し、彼のものの来れる所に連れ去られぬ。いずれの領域かは我は知らず、ただウィルバー・コーリイこの地にてもはや見るを得ざりしことを知るのみ。有体(ありてい)に申さば、我はその光景にいたく驚駭(きょうがい)せり。外なるものの我等をいかに見しかを知らず、彼(か)の開口部を我等に与えるも差向(さしむき)の好意にすぎぬやと思われたればなり

けん。さらに申さば、外なる地にて待ちながらたたずみたる他のものたちを過度に恐怖せしが、こは去る夕べ書物に記されし言葉に若干の変更を致さば、束の間、見慣れし場所に実に怖るべきもの見たればなり。見るも怖ろしき有様にて止まる所なく変化し続ける形を持ちし大いなるものにして、フルートに似たる楽器にて奇怪なる音楽を奏じる者達を従えたれば、これを目にし耳にする我は混乱の極に達し、この幻影を速かに消し去りたり。凍てつく荒野のカダスの遠方にありし遥けき地のンフングルあるいはイルより来れり魔物になかりせば、何者なるかは知らず、書物にも呼び出す言葉は無し。探求を頓挫させるは願わざれば、貴殿の助言を庶幾う次第なり。近近目見えんことを願いつつ、我はキシュの印にて貴殿に仕える下僕なる

ジョナサン・B

三番目の手紙には日付はないが、気候が言及されているので、この二番目の手紙が書かれてから三番目の手紙が書かれるまで、すくなくとも半年の期間があったと思われる。

啓呈

昨夜雪の中にて見し大いなる足跡につき、困難なりと言えど、説明致さねばならぬやと思いけり。正しくは足跡にあらず。さしわたし一フィート以上、長さ二フィート、少くとも

一部には水かきらしきものありて、奇怪にして謎めく非常なる大きさの鉤爪の跡に似たるか。かかる跡の一は七面鳥を追いて森に入りたるオルニイ・ボーエン報告せしも、我以外信ずる者なし。我は注意を惹くことなく耳を傾け、跡の残りたる場所を聞きし上、その場に赴き我が目で見たり。森の奥深くにてさらに同様の跡見つけらるる予感忽然と致し、森の中にわけいらばあちこちに跡残るばかりか、見越したる通り列石近くが最も数多し。されど如何な類の生物の姿も見えず。跡を調べたる後、翼備えしものの跡ならんと判断せり。何となれば、翼持ちたる生物の残せし跡に似たればなり。列石の周囲を巡れば、少年のものならん足跡目に入り、この跡を追いたるに少年走りたるかのごとく足跡の間隔広がり、少年の足跡彼の丘の涯なる森の端にて途切れたるや、実に怖ろしきかな。雪の中に少年の銃、七面鳥のものらしき羽数枚、帽子残りたれば、その帽子にて彼の少年この夏をもって十まり四つを数えるジュデディア・ティンダルなるを知りけん。今朝ジュデディア・ティンダルの行方を尋ぬれば、怖れしごとく不明なりしと答えられたり。何らかの手法により て開口部残され何物か来れりと判断致すも、何物が来れりやは知らず。そのものを送り戻す言葉の見つけられし書物の当該部分を願わくは教え給え。残りし跡の量から見て、そのものの数は一にあらずとおぼゆ。我はもとよりそのものの姿を見たる者無かりせば、そのもの不可視か否かも判らざれど、そのものN或いはヨグ・ソトース或いは他のものの従者なるか否かを知りたく思うこと切なり。そのもの他のものと同じく血をすするものにして、

いつまた外より来りて荒れ狂い人間を食せんか判らぬ故、そのもののさらに猛威をふるうこと無きよう、速かなる御返事を願う次第なり。

ヨグ・ソトース・ニボルド・ジン
ジョナサン・B

四番目の手紙はいくつかの点でもっとも怖ろしいものだった。デュワートは三通の手紙を読んで慄然とした恐怖に襲われていたが、四番目の手紙は、言葉そのものにははっきりとあらわれていないが、はかりしれない恐怖が暗示されていた。

捧呈(ほうてい)

昨夜床に入りりし支度を整えし折、彼(か)のもの窓に来(きた)り我が名を呼び我がもとに来れるを約せり。腹をくくりて夜の中を歩き窓に近づきて覗(のぞ)きたるに、何も見えんとて窓を開けるや、たちどころに納骨堂を思わせる悪臭漂いて耐えきれぬほどなりせば、思わず後ずさりたり。その刹那(せつな)、何物か窓より入りて我が顔に触れたるが、一部に鱗(うろこ)有りし寒天状のものにして吐き気を催(もよお)す程なれば、意識を失いて、如何(いか)ほどの時間かは知らねど伏(ふ)し倒れけん。意識を取戻せし我は窓を閉じて床に就(つ)きたり。なれど眠りを誘われし頃突如として我が家震え始め、我は何物か家近くを歩きしごとく大地の震えるを知り、再び我が名の呼ばるるを聞

き、我のいまだ応じぬ約束のされるを聞きたれど、我はアラブ人の言葉の誤用によりて開きし場所より、Nの翼持ちし生物来れるやと考えるのみなりけん。我の未だ見ざりし、また今後も見るを得ざらんと思われし、ウェンディゴ、イタカ、或いはロイガーなる様様の名にて知られたる風の上を歩きし者になかりせば、このもの何物なるか我は知らず。我の列石に懇願し丘に呼びかけし時、訪れるはNならずCならず、この世のものならぬ抑揚にて我が名を呼びしものにあらぬやと思い悩みたり。さあれば、旧神さえ旧支配者を消滅させず石が星辰と月の時間に届きし空間及び深淵に幽閉するに留たれば、旧支配者の邪悪この上無きもの故、人間と共に歩みてはならぬ他のものらの来るを防ぐためにこそ、願わくは夜に出でて扉を塞ぎ給え。我は大いなる危険にさらされたり。懸念にすぎたれば喜ばしきなるものが、この世のものならぬ存在に夜に我が名を呼ばれたれば、我が最期の時来れりと恐怖致すは切ならん。貴殿の書状おろそかに読みて、貴殿の記せし言葉を誤解せし。貴殿の記せしは以下の通りなり。「抑えること能わざるものを呼ぶことなかれ。すなわちそのもの汝に仇せしものを呼びて、それには如何な強力なる道具も詮無きが故なり。不断に下位なるものを求め、大いなるものの答える欲求を熾こすを避け、命令するを防ぎ給え」。なれどももし我誤れしことを致さば、速かに繕われんことを庶幾いたてまつる。我はNに仕えし汝の忠実なる下僕たる

ジョナサン・B

デュワートは長いあいだ四通の手紙について考えこんだ。曾曾祖父がなにか悪魔めいた行為に従事し、十分な知識をあたえることなく、ダニッチのジョナサン・ビショップをひきいれたことがいまや明白になっていた。目下のところその行為の性質はわからないが、なにか妖術や魔術に関係しているらしい。しかし四通の手紙にこもる暗示が信じられないほど怖ろしいものなので、デュワートは巧妙なでっちあげではないかとさえ思った。それを確める方法は、うんざりするものだとはいえ、ひとつだけあった。アーカムのミスカトニック大学付属図書館はまだ開いているだろうから、おそらく十分な期間だと思われる一七九〇年から一八一五年にかけて、失踪したか、あるいは謎の死をとげた人物がいるかどうか、アーカムの週刊新聞で調べることができる。

デュワートはあまり行きたくなかった。ひとつには、まだやらなければならない荷物の整理がのこっていたし、また、たとえ週刊新聞がサイズも小さくページ数も少なく、調べるのに長い時間はかからないとはいえ、もう一度古い新聞の束に喜んで目を通したいとは思わなかった。そういうわけで、デュワートは、短時間のうちになにかが発見できればしめたものだが、なにも発見できなくとも早早（そうそう）にきりあげようと思いつつ、アーカムのミスカトニック大学付属図書館にむかった。

調べおわったときは、もう夜もふけていた。

一八〇七年の新聞にめざすものを見つけだしたが、それは予想していた以上のものだった。デュワートは怖ろしさのあまり口をかたくつぐんで、見つけだしたものを正確に書き記すと、森のなかの屋敷にもどるや、ただちに机について発見した事実を分析しようとした。

まずウィルバー・コーリイの失踪があった。つぎに少年ジュデディア・ティンダルが失踪し、そのあとそれぞれ場所がことなるものの、四、五人が姿を消し、最後にジョナサン・ビショップ本人が失踪していた。しかしデュワートが発見したものは、一連の失踪事件だけではなかった。ビショップが失踪するまえに、コーリイとティンダルが姿をあらわし、ひとりはニューブリマス近く、いまひとりはキングスポートで発見されていた。ふたりとも死体になりはてていたが、コーリイの死体がひどい傷をうけている一方、ティンダルの死体にはほとんどなんの傷跡もなかった。そしてふたりとも失踪後数カ月が経過してから発見されたというのに、その死体は死後幾日(いくにち)もたっていなかった。怖ろしいほど暗示的なものとはいえ、こういう事実はビショップの手紙に実質をあたえるものだった。しかし、こういった付加的な情報が得られたにもかかわらず、事件の真相は杳(よう)としてうかがえず、意味するところはあいかわらず漠然としていた。

デュワートはしだいに従弟(いとこ)のスティーブン・ベイツのことを考えるようになった。ベイツは学者で、マサチューセッツ州の初期の歴史の権威(けんい)だった。それればかりか、風変わりなことも数多く研究しているので、なんらかの助けになるかもしれないと思われた。しかしデュワートは同時に、なぜか用心深くしなければならないという気がしていた。歩くにも気をくばり、調査

は他人の好奇心をひかないように、できるだけひとりきりで、もっと時間をかけておこなわなければならないという感じがした。デュワートはどうしてそんな感じがするのだろうかと考えはじめた。いくら考えても秘密にしなければならない理由などないのだが、しかしそう思いはじめると、またしても、どうしても秘密にしなければならない、過去に対する自分の興味にはなにかしかるべき理由があるはずだという、頑固なまでの確信にたちもどってしまうのだった。この確信は昔の建築物をひとりきりで楽しみたいという感情に根ざしているようだった。

デュワートは新聞から書き写したものをビショップの手紙と一緒にまとめると、ベッドに横になり、断片的ではあるが、これまでに発見した事実をどうすれば説明づけられるかと考えこみながら、いつしか眠りにおちいった。

その夜デュワートが夢を見たのは、おそらく一世紀まえに起こったことに頭を悩ませていたためだろう。デュワートはこれまでそんな夢を見たことがなかった。デュワートは戦い、ひき裂く鳥、怖ろしいまでにゆがめられた人間の見かけをとる鳥を夢に見た。ばけものじみた動物の夢を見た。自分が不思議な役割を演じる夢を見た。夢のなかのデュワートは侍祭（じさい）か司祭（しさい）になっていた。異様な衣服をまとい、屋敷から森のなかへ入っていき、食用蛙や蛍のつどう沼地をまわり、石の塔にむかった。塔のなかにも書斎の窓にも光が見え、信号を送っているかのように明滅していた。デュワートはドルイド風の列石の環（わ）のなかに入り、塔の影のなかに立つと、自分が開けた開口部を見あげ、怖ろしいほどゆがめられたラテン語で天にむかって呼びかけた。

呪文を三回となえると、地面に模様を描いた。描きおわったとたんに、ものすごいうなりがして、胸のむかつくような怖ろしいものが空からあらわれ、開口部を通って塔に流れこみ、塔をみたすや戸口から流れでて、デュワートを脇へ押しやると、下卑た言葉でデュワートに生贄を要求した。それに対してデュワートが環状列石に駆けもどってダニッチの方角を指し示すと、まっしぐらにダニッチの方角にむかっていったが、その突き進むさまは、まるで木木が空気、大地が海であるかのようだった。一部あるいは全体を随意に不可視にできるらしかった。デュワートは塔の影のなかに立って耳をすましていたが、まもなく夜闇をつんざく悲鳴が耳にこころよく聞こえはじめ、待ちのぞんでいた悲鳴をしばらく聞いていたかと思うと、生物が触腕で犠牲者をつかみながらもどってきて、塔をつたって来たところへ帰っていった。あたりは静寂につつまれ、デュワートも来た道をひきかえし、屋敷内のベッドに入った。

デュワートはこんなふうにして夜をすごした。そして夢のせいで疲れきったかのように、朝になってもなかなか目がさめなかった。ようやく目をさましたデュワートは足が痛み、なかなかベッドから起きあがれなかった。車のペダル操作でこれほどまでに足が痛くなることはないので、上体を起こして調べてみると、足の裏は傷だらけで、すこしふくれあがり、踵にはすり傷や切り傷があって、茨の藪を歩いたかのようだった。デュワートはびっくりしたが、驚く必要はないという気がした。それでも、もう一度ベッドから起きあがろうとするときはかなり面

くらっていて、らくに起きあがれると、相当な不快感をおぼえた。デュワートを不快にさせたのは、痛みの度合というよりもむしろ、予想もしなかった痛みがあることに驚いたためだった。
デュワートはかなりの苦労をして靴下と靴をはいたが、そうして傷をつつんでしまうと、すこし不快とはいえ歩くことができた。しかしどうしてこんなことになってしまったのか。デュワートは眠りながら歩いたにちがいないと判断した。これまでそんなことはめったになかったので、いささか驚かされることだった。それに、足の傷から明らかなように、屋敷から出て森のなかに入ったにちがいなかった。デュワートはゆっくりと夢を思いだしはじめた。どうもはっきりしなかったが、塔にいたことは思いだした。そこで服を着ると、自分の歩いた跡があるかどうかを調べるため、屋敷の外に出た。
最初はなにも見つからなかった。しかし塔についてみると、毀れた環状列石近くの小石まじりの砂地に、自分のものにちがいない裸足の足跡があった。その跡を追っていくと、ぼんやりした跡は塔に達していて、調べたほうがいいと思ったデュワートはマッチに火をつけた。
弱い光で、あるものが見えた。
デュワートはもう一本マッチをすって、もう一度見つめた。デュワートの頭のなかで急に驚きと混乱が渦を巻いた。石の螺旋階段の基部、階段そのもの、地面の上が赤くそまっていて、おそるおそる指をつけるまえですら、血であることははっきりとわかった。
デュワートは足跡のことも忘れ、指が焼けるまでマッチをもっていることも意識せず、じっ

と立ちつくしていた。もう一本マッチをすってみたかったが、そうすることができなかった。よろめきながら塔から出ると、暖かな朝の光のなか、塔の壁にぐったりと体をあずけた。デュワートはなんとか考えてみようとした。明らかに過去を深くさぐりすぎ、想像力が病的なまでに刺激されているらしい。ともかく塔は開いたままになっているので、兎かなにかが入りこみ、鼬でもやってきて争ったのだろう。屋根の開口部から梟が入りこみ、鼠かなにかを襲ったということも考えられる。しかしいずれにせよ、血の量は多すぎ、羽も毛も落ちていないから には、納得のいく説明にはならなかった。

しばらくして、デュワートは心を決めて塔のなかに入り、もう一本マッチをすった。自分の解釈を確証するようなものはないかとさがしてみた。なにもなかった。森のなかの悲劇であるとして説明づけられるような争いの痕跡はなかった。しかしそれ以上のものであるという証拠もなかった。血のようなものの跡が、本来あるはずでない場所にのこっているというだけのことだった。デュワートは満開の花のように意識を占領している、あの怖ろしい夢のことは考えずに、おだやかな気持で考えてみようとした。しかしすこし上からしたたりおちた血の跡であることは否定しようがなかった。このことがデュワートを不安にさせた。これを認めると、このことも夢のことも説明しようのないことを認めざるを得なくなってしまう。ささいではあるが、いやましに起こりつつあるきわめて不思議な出来事について、納得のいく説明をつけることなどできるはずもなかった。

デュワートは外へ出ると、塔からはなれ、森のはずれの沼地を迂回して屋敷にもどった。寝室に入ってシーツを見ると、踵の傷から流れた血の痕があった。塔の血痕をこれに結びつけたい思いがしたが、いくら想像をたくましくしても、そんなことはできそうになかった。デュワートはシーツをかえると、コーヒーをわかした。デュワートは考えこみつづけたが、最初あることを考えると、つぎにはそのまったく逆のことを考えるというありさまで、それはまるでデュワートの内部にふたりの人間がいるか、人格が分裂する危機にさらされているかのようだった。従弟のスティーブン・ベイッに来てもらわなければならないとデュワートは思った。一時的にせよ、孤独をやわらげてくれる者なら誰でもよかった。しかしそう考えたとたん、これまでになかった熱心さで、そんなことをしないほうがいいと考えているしまつだった。

デュワートはやりのこした仕事をかたずけてしまうことに決め、これ以上手紙や文書を読むことは注意深くさけ、想像力がかきたてられて怖ろしい夢を見ることのないようにした。そして午後のなかばには、いつもの自分にもどったと思えるほど、ごく普通の生の喜びをとりもどしていた。デュワートは体を休めると、音楽番組でも聞こうと思ってラジオのスイッチをいれたが、聞こえてきたのはニュースだった。デュワートは半分うわのそらで聞いていた。フランスの代表者がザール河をどうすべきであるかについて述べ、イギリスの代表者が見事なまでに要領をえない反対意見を述べた。ロシアとシナが飢饉になっているという報道があった——周期的におこなわれる報道だ、とデュワートは思った。マサチューセッツの知事が病気になって

いた。アーカムからの電話連絡があった――デュワートは坐ったまま耳をかたむけた。

まだ確認は得られていませんが、アーカムから失踪事件が報告されています。ダニッチの住民の証言によれば、ダニッチに住む中年の農夫、ジェイスン・オズボーンさんが、夜のあいだに姿を消してしまったそうです。噂によれば、ものすごい音がしたそうですが、なんの音だったのかはまだわかっていません。オズボーンさんは富裕な農夫ではなく、ひとりきりで暮していたので、誘拐事件であるとは思えません。

アンブローズ・デュワートは意識のかたすみで、偶然の一致だと思いこもうとした。しかしデュワートの驚きはこのうえなく、横になっていた寝椅子から身をふりほどくようにして起きあがると、ラジオを消した。そしてほとんど本能的に机につくと、スティーブン・ベイツに宛て狂乱した手紙を書き、どんなことがあってもぜひ来てほしいと記した。手紙を書きおえるや、投函するためにでかけたが、足を進めるたびに、手紙を投函せずに考えなおしたほうがいいという強迫観念に圧倒されていった。

デュワートが車でアーカムへ行き、スティーブン・ベイツ宛の手紙を忘れずに郵便局で投函するには、肉体的にも精神的にも、相当な努力が必要だった。アーカムの古びた駒形切妻屋根や鎧戸のおろされた窓は、通りすぎていくデュワートを、じっとうずくまって怖ろしくも親しげに、横目でにらんでいるようだった。

第二章　スティーブン・ベイツの手記

従兄のアンブローズ・デュワートの切迫した呼びだしに心動かされ、わたしは手紙をうけとってから一週間のうちにビリントンの屋敷に到着した。わたしの到着にひきつづいて、一連の出来事が起こり、最初はきわめて平凡なものだったが、徐徐に高まりを見せていったため、アンブローズの手になる断片的な書きつけやさまざまな記録につけくわえるべく、この特異な記録を認める次第である。

平凡なはじまりかたをしたと記したが、正確には正しい言い方ではない。ビリントンの森に位置する屋敷のなか、そして屋敷のまわりで後に起こった出来事にくらべることで、むしろ平凡に見えたというべきだろう。これらの出来事は偶発的で関連性のないもののように思えるが、わたしが後に発見したとおり、時間と空間と場所にとらわれないひとつのパターンを、その本質的部分にはらんでいる。残念ながら、最初はなんの意味もつかめなかった。わたしは最初から従兄に精神分裂病――というよりもわたしがそのとき精神分裂病と考えたもの――の徴候を見いだしていたが、後にそれとはまったくちがう、はるかに怖ろしいものではないかと考えるにいたった。

従兄のアンブローズの二面性のおかげで、わたしの調査は困難なものにさせられた。きわめて友好的になっているかと思えば、つぎの瞬間には自己防衛のために敵意をむきだしにするということのくりかえしだったからだ。最初からそうだった。わたしに狂乱した手紙を書き送った人物は、不可解にも自分がその渦中にあることを知った問題を説き明かすにあたって、なんらかの助力を丁重にわたしに求めた。しかしわたしの到着を告げる電報に応えてアーカムでわたしを出迎えてくれた男は、ひややかで用心深く、また自分の殻にとじこもっており、わたしの助力など必要ないといわんばかりで、あまつさえ滞在期間が二週間以内になることを求めさえした。礼儀正しく愛想もよかったが、急いで書いたとおぼしき手紙の調子とはおよそ似つかわしくない、妙にひかえめで超然とした雰囲気をまとっていた。

「電報がとどいたので、きみが二通目の手紙をまだうけとっていないことがわかったよ」アンブローズはアーカムの駅でそういった。

「送ってくれたとしても、うけとってないね」

アンブローズは肩をすくめ、最初の手紙について安心してくれるよう書いたのだが、とだけいった。そしてこの最初のときから、わたしの助力なしに問題が解決したことをほのめかし、たとえ最初の手紙で頼んだように急いで来てもらう必要はなくなったにせよ、やって来てくれたことはうれしいといった。

わたしは直観的に、アンブローズが嘘をついているという印象を得た。自分のいっているこ

とを信じきっているらしいが、それもはっきりそうだといいきれるものではなかった。わたしは手紙まで書き送った緊急の問題がもう解消できたらしいことを知ってうれしいとだけいっておいた。アンブローズはこの言葉に満足したのか、見ためにも緊張をといて話しやすくなり、アイルズベリイ街道沿いの土地がらについてしゃべりだした。マサチューセッツにおちついてまだそう日もたっていないのに、住んでいる土地の歴史に精通しているのには驚かされてしまった。尋常ではない土地、ニューイングランドで人がもっとも早くから住みついた他の多くの地域よりさらに古い土地、古くからの駒形切妻屋根や扇形明りとりがジョージアあるいはギリシア復興様式の家家より時代はくだるとはいえ、魅力の点で劣ることがないため、建築を偏愛する学者たちのメッカとなっている、妙に心をとらえてはなさない街アーカムを擁する土地に、デュワートがこれほどまでに精通しているとは、わたしも思っていなかった。一方、この土地には、ダニッチのような、荒廃、墜落、衰頽した谷間がいくつも存在し、ダニッチからつい目と鼻の先には、呪われた漁村インスマスが位置する。こういった地方から、実体は隠されたまま、殺人、不思議な失踪、奇妙な信仰復興をはじめ、さらにひどい堕落をしめす数多くの犯罪や行為について、声をころしてなかば囁き声で語られる噂が多数伝えられるが、それらはことごとく、永遠に隠されたままでいるほうがよいものを露にすることをおそれられて、調査されるよりも簡単に忘れ去られてしまうという。

こんなことを話しながら、わたしたちは屋敷に到着したが、その屋敷はわたしが二十年くら

いまえに見たままの姿をたもっていた。わたしの記憶にあるかぎり、また母の言葉を思いだせば、この屋敷はいつも保存状態がいいようだった。この屋敷ほど無人のままますておかれた期間の長くない、他の何百もの家家にくらべても、蚕食の度合ははるかにすくなく、かつての姿をそのままに良くのこしているのだった。さらに、アンブローズは屋敷を修理し、新しい備品を備えていたが、正面はペンキが新しく塗られる以外はなんの手もくわえられていなかった。それでもなお、正面つくりつけの丈高い四本の角柱は、建築上完璧な骨組のなかに備えられた中央の扉とともに、すぎさった世紀の威厳を見事に誇示していた。内部があらゆる点で外観を補っていた。アンブローズの個人的な好みがこの屋敷にそぐわないものを置くことを許さず、その結果として、屋敷の内部はわたしが予想していたようにきわめて快適だった。

しばらくまえにボストンに来たときはほとんど話題にもしなかったのに、従兄のアンブローズがなにごとかに没頭している証拠を、わたしはいたるところで目にした。家系調査が中心のようだった。これは書斎に見られる黄変した書類と、参考にするためおびただしい書物のならぶ書棚からとりだされた古びた大冊にとりわけ顕著だった。

わたしはアンブローズといっしょに書斎にはいったとき、後にわたしの発見したもののなかで大きな位置をしめることになる、一連の奇妙な事実の第二の要素に気がついた。見ると、アンブローズは不安と期待のいりみだれた顔をして、書斎の壁高くにしつらえられた鉛ガラスの窓にちらっと目をむけた。アンブローズが窓から目をそらしたとき、わたしはまたしてもふた

つの相反（あいはん）する感情――安堵（あんど）と失望――のいりみだれる顔を見た。ほとんどぞっとさせられるような異常なことだった。しかしわたしはなにもいわず、二十四時間か一週間かそれ以上か、周期がどの程度かはわからないにせよ、近い将来のいつか、アンブローズがわたしに手紙を書かざるをえなかったときとおなじ段階に達するだろうと考えた。

それはわたしが予想していたよりも早くおとずれた。

わたしたちはその日の夜にすこしおしゃべりをしたが、アンブローズはとても疲れているらしく、眠りこまずに目をさましているのがやっとというふうに見うけられた。わたしは自分から疲れたといい、屋敷についてすぐに見せてもらったわたし用の寝室に行って、アンブローズを安心させてやった。しかしわたしは疲れてなどいなかったので、ベッドにはつかず、しばらく読書をした。携（たずさ）えてきた小説本に興味がのらなくなると、ランプの火を消した――従兄の必要やむをえない照明方法に慣れようとしていたので、本当はもっと長くランプをつけているつもりだったが、それよりも早くランプの火を消してしまった。いま思いかえしてみれば、真夜中にちかいころあいだったにちがいない。わたしは闇のなかで服を脱ぎはじめたが、月の光が片側からさしこんで、部屋をかすかに照らしているので、まっ暗闇というわけではなかった。

まだ服を脱ぎかけているとき、叫び声がしたので驚いてしまった。わたしは屋敷のなかに従兄とわたしのふたりきりしかいないことを知っていた。従兄がほかの者を呼ぶつもりのないことも知っていた。わたし自身が叫んだのではないので、叫び声をあげたのは従兄のアンブロー

ズか、あるいはべつの者にちがいない。べつの者の叫び声なら、侵入者がいるということになる。わたしはためらわずに部屋から廊下にとびだした。階段をおりていく白いローブ姿の人影が見えたので、あわててそのあとを追った。
　このとき、また叫び声がした。今度ははっきりと聞こえた。何者かが奇怪な、意味のない言葉を叫んでいるのだった。

　いあ！　しゅぶ・にぐらす　いあ！　ないあらとてっぷ！

　誰の声であるかがわかった。従兄のアンブローズだった。明らかに、眠りながら歩いているのだ。わたしはアンブローズを寝室につれもどしてやるつもりで、やさしくはあるがしっかり腕をつかんだが、アンブローズは予想もしなかった力で抵抗した。わたしは腕をはなし、歩いていくアンブローズのあとについていった。しかしこの真夜中に外へ出て行くつもりであることがわかったので、もう一度腕をつかみ、ひきかえらせようとした。アンブローズはまたものすごい力で抵抗した。目をさまさなかったのがふしぎなくらい、ものすごい力だった。わたしはアンブローズに抵抗し、もうへとへとになるくらい時間をかけてようやくふりかえらせると、アンブローズを導いて、階段をのぼって自室にもどらせ、おとなしくベッドに横たわらせた。わたしはいささかおかしくもあり、またすこし不安にさせられることだった。アンブローズの部屋は、

かつて人に毛嫌いされたわたしたちの曾曾祖父のアリヤがつかっていたものだったが、わたしはアンブローズが目をさますかもしれないと思って、しばらくベッドわきに坐りこんだ。窓の方をむいて坐っていたので、外を見ることができたが、ときおり、その窓の前方にある石造りの塔の円錐形の屋根が、なにか人目をしのぶように、不規則な間隔をおいて光を発しているという妙な印象をうけた。しばらくその現象を観察してみたが、なんらかの性質によって石が月の光を反射させているのだと自分にいいきかせても、納得することはできなかった。

しかし結局、わたしは従兄の部屋をはなれた。まだすこしの眠気も感じていなかった。眠気を感じていたとしても、アンブローズのささやかな行為が、わたしの意識をはっきりと目ざめさせていた。アンブローズがまた歩きださないともかぎらないので、ふたりの部屋のドアをすこし開けたままにしておいた。しかし、アンブローズはもう歩きだしたりしなかった。そのかわり、心おちつかない眠りのまま、なにごとかをつぶやきはじめ、わたしもいつとはなしに耳をかたむけていた。アンブローズの口にする言葉は、わたしにはなんの意味もなさないものだった。わたしはアンブローズがつぶやく言葉を書きとめたい衝動にかられ、ランプに火をつけるのを避けるために、月の光のさしこむ場所にうつった。アンブローズが口にしたことはほとんどが支離滅裂だった。言葉のどれひとつとして判別することはできなかったが、ときおりわかりやすい文章があった。わかりやすいとはいっても、アンブローズが眠りながらぎごちなく不自然な声で口にするものが文章であるかぎりにおいて、すこしは文章らしかったというほどの

意味にしかすぎない。そういう文章は七つあり、それぞれ五分間くらい、ぶつぶつつぶやきながら寝返りをうちつづけた後に口にされた。わたしはできるだけ口にされるままに書きとめ、言葉づかいをはっきりしたものにさせるため、あとですこし手をいれた。従兄のアンブローズがきれぎれにつぶやいた理解できない七つの文章とは、つぎのとおりである。

ヨグ＝ソトースを呼びいだすためには、日輪第五の宮に入りて、鎮星の三分一対座に位置するときを待ち、炎の五芒星形を描き、第九の詩を三度唱え、ヨグ＝ソトースが守護者なる門の彼方の外なる空間にて、聖十字架頌栄日と万聖節前夜の儀式を繰返すべし。

彼はなべての知識をもてり、旧支配者のかつて突破せしところ、ふたたび突破せんとするところを知れり。

過去、現在、未来——なべて彼の内に一なり。

呪われたビリントン音をたてぬと断言せしが、その時ただちに大笑起こり、幸いにもビリントンにのみ聞こえし大笑なり。

ああ！　臭が！　臭がする！　あい！　あい！　ないあらとてっぷ。

そは永久に横たわる死者にあらねど、測り知れざる永劫のもとに死を越ゆるもの。

るるいえの館にて——るるいえの大いなる館にて——彼は死せるにあらず、眠れるままに……。

この異常きわまりない寝言のあとは深い沈黙がつづき、まもなくアンブローズの規則正しい息づかいが聞こえてきたので、わたしはアンブローズがようやくおだやかで自然な眠りについたことを知った。

こういうわけで、わたしはビリントンの屋敷に来たばかりだというのに、すでに矛盾しあう印象をいくつもうけていた。そしてこういったことはとどまるところを知らなかった。わたしは文章を書きとめると、自分の部屋のドアを閉めないまま、またアンブローズの部屋のドアを開けたまま、ベッドにつき、すぐに眠りこんだが、ドアが猛烈にたたかれる音で目をさまされた。目をあけると、アンブローズがわたしのベッド脇に立って、わたしを起こすつもりだったのか、手をのばしていた。

「アンブローズ、どうしたんだ」

アンブローズは震えていた。声も震えていた。「聞こえるだろ」
「聞こえるって、なにが」
「耳をすますんだ」
わたしは耳をすましてみた。
「なにが聞こえる」アンブローズが声を震わしてたずねた。
「風が木をさわがせている音だよ」
アンブローズはにがにがしい笑い声をあげた。「『彼等の声と共に風はおらび、彼等の意識と共に大地はことさやがん』。いかにも風だよ。しかし、ただの風だろうか」
「ただの風じゃないか」わたしはきっぱりといった。「悪夢でも見たんじゃないのか、アンブローズ」
「ちがう、悪夢なんかじゃない」アンブローズはしわがれた声でいった。「しかし今晩のはちがっていた。はじまったかと思ったらとまってしまった。なにかがとめたんだ。よかったよ」
わたしはなにがとめたのかを知っているので満足したが、なにもいわなかった。
アンブローズはわたしのベッドに腰をおろし、わたしの肩に手をおいた。「スティーブン、きみがこの屋敷にいてくれて、わたしはうれしいんだよ。もしわたしが、そのうれしさにそぐわないようなことを万一いうとしても、どうか気にしないでくれたまえ。わたしはときどきわれをうしなってしまうんだ」

「疲れているんだよ」

「そうかもしれない」アンブローズはそういって頭をあげた。ほのかな月あかりのなかで、わたしはアンブローズが顔をこわばらせているのを見た。アンブローズはまた耳をすました。

「ちがう、ちがう」アンブローズがいった。「木木をそよがせる風じゃない。星のなかをわたる風でさえもない。もっと遠くのものなんだ——外世界からの。スティーブン、きみには聞こえないのか」

「なにも聞こえないね」わたしはおだやかな声でいった。「ぐっすり眠ったら、きみにもなにも聞こえなくなるさ」

「眠ったところで、よくなるはずがないんだ」アンブローズは誰かに聞かれるかもしれないと怖れているかのように、囁き声でいった。「眠ればますますひどくなるだけなんだから」

わたしはベッドから出ると窓辺に行って窓を開けはなした。「それなら、ここへ来て耳をすましてみたらどうだい」

アンブローズはわたしのそばに来て、窓わくにもたれかかった。

「木木をさわがせる風の音だけだろう」

アンブローズは溜息をついた。「明日話すよ——もし話せるなら」

「話してくれるのはいつでもいいけど、どうしていま、話すつもりになっているのに話せないんだ」

「いまだって」アンブローズはこわごわといった感じで、肩ごしにふりかえった。「いまだって」かすれる声でおなじ言葉をくりかえした。「アリヤは塔でなにをしたんだろうか。どういうふうに列石に懇願したんだろうか。丘か空からなにを呼びだしたんだろうか。わたしにはさっぱりわからないいんだよ。潜んでいるのがなんで、どの戸口に潜んでいるのかも」わけのわからないこんな疑問を口にすると、アンブローズはおぼろな光のなかでわたしの目をさぐるように見つめ、首をふった。「きみが知っているはずがない。誰にもわからないことなんだから。しかし、ここでなにかが起こっているんだ。なにか不可解な手段で、わたし自身がそれをもたらしたんじゃないだろうか」

アンブローズはそういうと不意にふりかえり、「おやすみ、スティーブン」といって自分の部屋にもどって、ドアを閉めた。

わたしは驚きのあまり背すじがぞくっとして、しばらくそのまま立ちつくしていた。本当に林のなかを吹きわたる風の音にすぎなかったのだろうか。それとも風以上のなにかだったのだろうか。従兄の異様な振舞を見たために、わたしは体を震わし、自分の正気さえ疑いかねないありさまだった。そうして新鮮な風を全身に感じながら立っていたわたしは、つのりゆく圧迫感、魂もくだかれるような絶望感、怖ろしいまでの不潔感、森にかこまれるこの屋敷のたけだけしいばかりの暗澹たる邪悪感とともに、突如として、ものみなにじりじりと浸透する、人間の魂の深奥の忌わしさを痛切に意識した。

想像力の産物ではなかった。はっきり感じとれるものだった。わたしは開けはなった窓から吹きこむ風のつめたさを、対照になるものとして意識していた。邪悪、恐怖、忌わしさという不安が、部屋のなかにわだかまっていた。壁という壁から目に見えない霧のように吹きだすのが感じられた。わたしは窓辺からはなれて廊下に出た。そこもおなじだった。闇のなか、階下におりてみた。なにひとつかわらなかった。この古い屋敷のいたるところに、悪意ある怖ろしい邪悪がたれこめていた。これこそ従兄のアンブローズに影響をおよぼしているものにちがいない。ひしひしと感じられる圧迫感と絶望感をふりきるためには、全身全霊の努力が必要だった。壁という壁からそそぎでる浸透性の恐怖をはねつけるには、意識的な努力が必要だった。肉体をもつ敵の二倍の力をもつ、目に見えないものとの闘いだった。わたしは部屋にもどったが、眠るのをためらった。眠りこんで、手の届く範囲にあるものすべてにいつしか浸透して影響をおよぼす、あの恐怖の餌食になるのはまっぴらだった。すでにこの古びた屋敷とその新しい住人、わが従兄アンブローズに影響をおよぼしている恐怖の餌食になるなどは。

そうしてわたしは、すこしまどろんでは目をさますといったふうにして、深く眠りこまないように心がけた。一時間くらいしたころだろうか、たれこめる邪悪さ、悍しい怖ろしさと忌わしさが、はじまったときとおなじように、急に退いたような感じがした。しかしそのころには、もう十分体を休めていたので、わたしは深い眠りにつこうとはしなかった。わたしは夜明けに起きあがると、服を着て、階下におりた。アンブローズはまだ階下におりていなかったので、

この機会を利用して書斎の書類を調べてみることにした。
　さまざまな書類があったが、アンブローズの手紙のような、私的なものはひとつもなかった。奇妙な事件、とりわけアリヤ・ビリントンに関係している特定のことがらについて、新聞記事の写しらしきものがあった。アメリカの歴史がまだあさいころに起こったもので、筆者が「リチャード・ベリンガムあるいはボリンハン」と記し、従兄の筆跡で「R・ビリントン」と書きくわえられている、かなりの注釈がつけられた文書があった。わたしがアーカムへ来るまえボストンの新聞でざっと目をとおしたことのある、ダニッチ近くで発生した二件の失踪事件を伝える最近の新聞記事の切り抜きもあった。こういう異常なものに目をとおしはじめてまもなく、従兄が起きたらしい物音が聞こえたので、わたしは机からはなれ、従兄のやってくるのを待った。
　わたしが書斎で従兄を待ったのにはある目的があった。窓に対するアンブローズの反応を見たかったのだ。わたしがなかば予想していたとおり、アンブローズは書斎にはいると、なかば無意識のように、肩ごしに窓をちらっと見た。しかしわたしには、この朝のアンブローズが、アーカムでわたしを迎えた男なのか、昨夜わたしの部屋で話しかけた、見おぼえがあるほうの従兄なのか、見きわめることができなかった。
「やあ、もう起きていたのか、スティーブン。コーヒーをわかして、パンを焼くよ。最近の新聞がどこかにあるはずなんだがね。アーカムからの配達はいったいいつになるかわからないん

だ。わかるだろ。わたしもそうたびたび街には行けないし、いくら金をはずもうが、新聞配達の少年がこんな遠くまで来てくれるはずもないしね。ましてやあんなものがあったんじゃ……」

アンブローズは不意に言葉をきってしまった。

「あんなものってなんだい」わたしは無遠慮にたずねた。

「屋敷と森についての噂だよ」

「ああ、あれか」

「知ってるのか」

「すこしは聞いてるよ」

アンブローズはしばらくわたしをじっと見つめた。相反するふたつの感情にとらわれているらしく、一方ではわたしに話したくてたまらないのに、もう一方ではそうすることを怖れているか、あるいはわたしにはまだわからないなんらかの理由で、口にするのをためらっているようだった。やがて踵をかえすと、書斎から出ていった。

わたしは目下のところ、最近の——二日まえの——新聞にも、文書や書物にも興味はなく、すぐに鉛ガラスのはいった窓に顔をむけた。なんらかの理由で、従兄はこの窓を怖れるとともに、喜びを感じているらしい。というよりも、心の半分が怖れ、のこる半分がたのしんでいるといったほうがいいだろう。窓を怖れるアンブローズの心の半分が昨夜わたしに見せた一面をもつアンブローズであり、べつの半分が、わたしの部屋でのあの場面が起こるまえにアンブロー

ズをとらえていた衝動に近いと考えるのは、そう見当はずれのことでもないだろう。わたしはさまざまな角度から窓を調べてみた。窓の模様は光線の走る同心円で、どうやら普通のガラスがはめられているらしい中央の円に近い二、三はのぞいて、パステル風のやわらかな色のついたガラスがはめられ、他に例を見ない独特のものだった。わたしが知っているかぎりにおいて、模様といい、色のつかいかたといい、ヨーロッパの大聖堂やアメリカのゴティック建築のどのステンド・グラスにも例を見ないものだった。というのも、ヨーロッパやアメリカのステンド・グラスとはちがい、色が妙に調和していて、青、黄、緑、薄紫というふうに多彩にわたっているにもかかわらず、たがいに流れこみ溶けこんでいるようで、外の円のまわりの色はきわめて明るく、色のついていない中央の〝目〟にあたる円の近くは、ほとんど黒に近いほど暗い色がつかわれているからだった。その中心の円のために中央の黒い縁から色が洗い落とされたか、中央部分の暗い部分をきわだたせるため、一番外の縁から色が落とされたかのようで、さまざまな色がうまく溶けあっているため、目をこらしてじっと見つめていると、さながら色という色がまだ流れているかのように、色になんらかの動きがあるのではないかと思われるほどだった。

　しかし従兄の心をかき乱したものはこんなものであるはずがない。アンブローズなら、わたしとおなじように、その原因を推測していることだろう。模様は巧妙にして熟練の技であり、驚くべき技術力と同様にこれを考えだす途方もない想像力を要したことだろう。しかし長いあ

いだ見つめれば不可避的なものになる、同心円が動いているように見えることに、アンブローズが心をかき乱しているとは思えなかった。わたしはこの現象に科学的な説明がつけられることにすぐ気づいたが、この驚嘆すべき窓を見つめつづけていると、簡単には合理的な説明のできないあることに気づいて、不安になった。そんなはずはないのに、窓に突然、景色のような人の顔のようなものが見えるという、不思議な印象をうけることがときたまあったのだ——しかもそれは、窓に重なっているというのではなく、窓そのものから生じているかのようだった。

　わたしはすぐにこれが光のせいではないことを知った。というのも、この窓は西にむいており、この時刻では完全に影のなかになっているし、あわてて書棚をのぼって中央の無色ガラスから外をのぞいてみたところ、見えるかぎり光を反射させるようなものはなにひとつなかったからだ。わたしは目をこらして窓を見たが、はっきりしたことはなにもわからなかった。完全な絵の輪郭をなぞることはできなかったが、窓にこもる暗示的なものは無視できないたぐいのものなので、太陽か月の光が一番都合よくなるときを待って、ガラスに隠されているかもしれないものがあらわれれば、それを仔細に調べつくしてやろうと思った。

　アンブローズがキッチンから朝食の用意ができたといったので、わたしは窓からはなれた。アンブローズはいうのをしぶっているか、いうことができないらしいが、わたしとしてはこうして屋敷にいるのだから、なにがアンブローズの心をあれほどまでにかき乱しているのかを確かめるまで、ボストンへ帰るつもりなどさらさらなかったので、どんな調査をおこなうにせよ、

調査をやりとげる時間は十分にあるとふんでいた。

「アリヤ・ビリントンについていくつかの話を掘り起こしたようだね」わたしはテーブルにつくと、わざと率直（そっちょく）にいった。

アンブローズはうなずいた。「わたしの好古的な調査や家系的な調査を目にしたんだな。なにか助言でもしてくれるのかね」

「きみの特定の調査方針にそっての助言かな」

「そうさ」

わたしは首をふった。「残念ながら、なにもないね。あの書類を見れば、なにか思いつくことがあるかもしれないが。すこし見せてもらえないかな」

アンブローズはためらった。明らかに見せるのを気にしていたが、わたしがどれほど目をとおしたかは知らないものの、わたしがすでに目にしたことを否定するつもりがないのも明白だった。

「ああ、見てもかまわないよ」なにげなくいった。「たいしたものじゃないからね」そして何事かを考えこみながらわたしを見つめ、コーヒーを口にした。「スティーブン、実をいうと、調査に没頭しているんだが、なにがなんだかさっぱりわからないんだよ。どういうことかわからないんだが、ここで奇怪かつ怖ろしいことが起っているという感じが強くするんだ。やりかたさえ知っていれば、ふせげるかもしれないことがね」

「どんなことだい」
「わからないのさ」
「謎ばっかりじゃないか、アンブローズ」
「そうさ。すべてが謎なんだ。謎のかたまりだよ。わたしには始まりも終りも見つけられない。アリヤからはじまっていると思ったよ。しかしいまはそうじゃないと思っている。どういうふうにおわるのかは見当もつかない」
「それでわたしを呼んだのか」わたしはまえに坐っているのが昨夜わたしの部屋でしゃべった従兄であることを知ってうれしくなった。
　アンブローズがうなずいた。
「それなら、きみのしたことを全部話してもらったほうがいいね」
　アンブローズは朝食も忘れて話しはじめた。短時間のうちにすべてが明らかになった。アンブローズがこの屋敷で暮すようになってから起こったことのすべてが。自分がどんな疑いをいだいているかはひとことも口にせず、またそのようにいい、純粋に出来事だけを物語った。そして見つけだしたもの――ラバンの日記帳、百年以上まえにアーカムの住民と面倒を起こしたアリヤにまつわる古い新聞記事、ウォード・フィリップス師の著書等――について、要約したり、あらましを口にしたりした。しかしアンブローズは、自分が体験したすべてのことを考えてくれるまえに、きみもそういった書類や文書に目をとおしてくれなければならないといっ

た。アンブローズがいったとおり、いかにも謎めいていることだったが、わたしもアンブローズとおなじように、アンブローズの身に起こったものがなにか巨大な謎のいくつかの小さな部分で、それぞれの部分は、一見どれほど無関係なように見えても、ぴたりとおさまるべきところにおさまるような気がした。そして、さらにさまざまな事実を聞かされているうちに、アンブローズが捕われているらしい、忌むべき暗示を秘めた罠を意識するようになっていた。わたしはアンブローズの気分を静めさせ、朝食をとるように勧め、自分ではどうすることもできない強迫観念になってしまわないように、いまのように四六時中考えこむようなことはやめたほうがいいといってやった。

朝食がおわるとすぐに、わたしはアンブローズが見つけだしたり書き写したりしたもののすべてを、アンブローズが目をとおした順に、忠実に読む作業にとりかかった。アンブローズがそろえてくれたさまざまな文書を読みとおすには一時間以上かかり、そして読んだものを頭のなかで整理するのにまたしばらくかかった。アンブローズがいったように、まさしく「謎のかたまり」だったが、文書に記されている、奇妙で、明らかに分散した種種の事実から、おおよその結論をひきだすことは可能だった。

見落とすことのできない第一の事実は、アリヤ・ビリントン（そしてアリヤのまえにはリチャード・ビリントン――あるいは逆にリチャード・ビリントンと後にアリヤ）が、利用できる証拠からはなんとも断定しかねる性質の、なにか秘密の行為にたずさわっていたことだった。

邪悪なものであったとも考えられるが、これを認めるにあたっては、証言者がいだく迷信、噂話にこもる中傷、事実とはなんの関係もなくごく些細な事実を誇張する伝説を考慮にいれなければならなくなる。噂話や伝説は、一様に、もっぱら森のなかで夜に聞こえる〝音〟についての推測が満足のいくものでなかったため、アリヤ・ビリントンが嫌われ、怖れられていることを伝えていた。一方、ウォード・フィリップス師と書評家のジョン・ドゥルーヴェン、そしておそらくアリヤ・ビリントンを訪問した三人目の人物であるデリヴァランス・ウェストリップは、地元の人間ではない。すくなくともこの三人のうちのふたりは、アリヤ・ビリントンが携わっている行為が邪悪な性質のものであると信じきっていた。

　しかしそう主張してアリヤに敵対するには、なんらかの証拠があったはずだが、それはいったいどんな証拠だったのだろうか。アリヤに敵対した人物に関するかぎり、まったくの状況証拠しか存在しなかった。ごく簡単に要約することができる。ビリントンの屋敷をとりかこむ森のなかで、「なんらかの生物」の「唸り声」あるいは「悲鳴」に似た不可解な「音」がした。アリヤ・ビリントンをもっとも批判したジョン・ドゥルーヴェンが、付近で起こった他の失踪事件とおなじような状況下で失踪し、その死体がおなじような状況下であらわれた。つまり、類似した失踪事件がいくつも発生しており、いずれも失踪した者の死体はかなりの期間をおいて発見されたが、すべて死体が発見されるすこしまえに死んだということを示していた。失踪と発見のあいだに横たわる数週間ないし数カ月の期間については、なにひとつ満足のゆく説

明はなされなかった。ドゥルーヴェンは、アリヤが訪問した三人にさしだす食事に、記憶を失わせるだけでなく、ドゥルーヴェンを呼びもどすか、あるいはすくなくともドゥルーヴェンに呼びかけに応じないことを不可能にさせる、「なにか」を混入したことを暗示させる、不可解な書きつけをのこしている。これはもちろん三人がなにかを見たことを暗示している。しかし証拠にはなりえない――法律上認められる証拠ではない。

アリヤ・ビリントンに対するいまに伝わる当時の批判はそれでおわりということになる。しかし、現在および過去の事実、暗示、疑惑を対比させると、ドゥルーヴェンらがおこなった非難に対して、アリヤ・ビリントンが断固抗議したり無礼なまでに無視したりした態度には、かなりの矛盾(むじゅん)が認められるだろう。アリヤがなにを心配していたのか、明確な手がかりはなにひとつないとはいえ、事実全体が意味するものは、怖ろしいとはいわないまでも、驚くべきものだった。こういった事実は、初期のものと後期のものとのあいだに横たわる歳月には関係なく結びついており、うちにこもる暗示がまがまがしいものであるため、簡単にはふりはらうことのできない不安と、むかつくようなつのりゆく疑わしさとあいまいさをかもしだしていた。

そういう事実でまずあげられるものは、ウォード・フィリップス師の著書『ニューイングランドの楽園における魔術的驚異』に対するジョン・ドゥルーヴェンの書評を攻撃するため、アリヤ・ビリントンが記した文章のなかに認められる。

……みだりに口にせず伏せおくがよろしきことどもあるを……

おそらくアリヤ・ビリントンは、ウォード・フィリップス師がしっぺ返しをしたように、自分がなにを記しているのか知っていたのだろう。もしそうなら、少年ラバンが日記帳にときおり記すことが、さらに意味をおびてくることになる。森のなかで何事かがアリヤ・ビリントンの力をかりておこなわれていたという事実を、この日記帳から認めることができるからだ。それが従兄のアンブローズが思ったような密輪であるとは考えられそうもない。アーカムの新聞にも少年の日記にも記されるような「音」をたてながら密輪をおこなうとは、およそばかげたことだろう。密輪ではなく、もっと異常なものなのだ。それに、少年が日記に書きとめているあることと、過去二十四時間におけるわたし自身の体験には、怖ろしいほど暗示的な類似があった。少年は遊び相手のインディアンのクアミスが膝をついて「文無し言葉を声高に発し」たことを記しているが、その言葉は「ナルラト或いはナルロテプ」だったという。昨夜わたしは、従兄が寝言で「いあ！　ないああらとてっぷ！」と叫ぶ声で目をさまされた。このふたつの言葉が同一のものであることは、わたしには疑いようがなかった。

インディアンのクアミスの態度には礼拝を暗示させるものがあるが、土民たちが自分たちに理解できないものをなんでも崇拝しがちだということを認める必要がある。このことは、まったく理解できないという理由で、蓄音器を崇拝の対象にしていたアフリカの黒人とおなじよう

に、かつてのアメリカ・インディアンにもあてはまることなのだから。

わたしは少年ラバンの日記帳から、さらにもうひとつの疑問をおぼえた。失われたページが、例の三人がアリヤ・ビリントンを訪問した期間にほぼ相当するような気がしたのだった。もしそうなら、なにが実際にあったのかを知るうえで助けになるかもしれないことを、少年は目にして記録したのではないだろうか。そして父親は息子が書きとめたものを目にして、たちどころに破りすてたのではないか。しかしそれなら、アリヤはおそらく日記帳そのものを処分したことだろう。もし森のなかで実際になにか不埒な行為に従事していたなら、息子にそれを書きとめられたりすれば、のっぴきならないことになる。しかしもっとも有力な文章は失われたページのあとに記されている。おそらくアリヤは、少年の書きとめたものが証拠として認められるはずのないものであるとみなし、気にさわるページを破棄してから日記帳を返してやり、こういったことをもう書かないように誓わせたのだろう。これが一番ありえそうなことだと思えるし、従兄のアンブローズが日記帳を屋敷のなかで発見したことの説明にもなる。一番多くを語っている部分は、父親が気にいらない部分を破りすてるまで記されなかったのだ。

しかしこういったたがいに関連しあうさまざまな事実のなかで、もっとも心さわがせられるものは、『ニューイングランドにて異形の悪魔のなせし邪悪なる妖術につきて』と題された奇妙な文書からの引用のなかに認められる。

……リチャード・ビリントンなる者、悪魔の書巻はたまたインディアン蛮族の老呪術師に甘誘され……森の中にて大環状列石を築き、其の中にて悪魔即ちダゴンへの祈り挙げ、聖書が忌むべき所の魔術典礼を取り行いたり。リチャード・ビリントン……己が夜の空より呼び出せし物に対して、秘かに大なる恐怖を顕したり。其の年リチャード・ビリントンが列石の近くにて、七名の者屠られ……

これは見のがせないふたつの理由により、怖ろしいほど暗示的な一節にほかならない。リチャード・ビリントンが生きていたのはおよそ二世紀まえの時代だった。しかし時代には関係なく、リチャードの時代とアリヤの時代に類似した事件が発生し、さらにアリヤの時代と現代にも類似した事件が起こっている。アリヤの時代には「環状列石」があった。そして謎めいた殺人事件が何回ともなく発生した。いまもなお環状列石は崩れているとはいえのこっており、連続殺人事件と思われるものがまたしてもはじまっている。あらゆる可能性を考慮にいれてもなお、わたしにはこの類似が偶然の一致であるとは思えなかった。

しかし偶然の一致であることを否定すれば、いったいどういうことになるのか。

アンブローズ・デュワートや他の相続人に対して、「丘に呼びかけてはならぬ」というたぐいのことを厳命するアリヤ・ビリントンの指示書が存在する。類似をもちだすなら、リチャード・ビリントンは「夜の空より呼び出せし物」を怖れていた。たとえ偶然の一致が除外される

としても、これだけはのこされるだろう。そしてこれは偶然の一致よりもありそうにないことなのだ。しかし手がかりがある。アリヤがのこした指示書がどれほど不可解なものであろうと、アリヤは指示の「意味する所」が「ビリントンの森として知らるる森の中なるビリントンの屋敷として知らるる家屋に残されし書物」に見いだされるだろうと指摘している——つまり、この屋敷のなかの、おそらくはこの書斎のなかに手がかりがあるということだ。

この問題はわたしの軽信的な性向にはりつめる要求をうわのせした。アリヤ・ビリントンがインディアンのクアミス以外の誰にも知られたくないなんらかの行為に従事していたという事実をうけいれるなら、アリヤがなんらかの手段でジョン・ドゥルーヴェンをかたづけたということも認められる。それならアリヤの携わっていた行為は非合法的なものであったにちがいない。さらに、ドゥルーヴェンの死にかたは、アリヤばかりか、アリヤがダニッチの殺人事件と同様のやりかたでドゥルーヴェンを死なせるために用いた方法について、さらなる臆測をよびおこすものだった。アリヤがドゥルーヴェンを殺したという根本的な前提をうけいれるなら、論理的なつながりとして、アリヤが他の殺人事件にも関与していたという第二の前提が導きだせる。

しかしこの線にそって考えると、うけいれなければならない大きな譲歩を必要とする、一連の推測や臆測がなりたつので、簡単に結論が導きだせることをいくら願おうとも、すでに信じこんでいたもののすべてを投げすてて新たに出発しないかぎり、まったくわけがわからないこと

になってしまうのだった。リチャード・ビリントンが実際に「夜の空」からなにかを呼びだしたのなら、それはいったいなになのか。現在では絶滅しているが、二世紀まえにはまだ生息していた翼龍のようなものをためらいがちにでもうけいれないかぎり、科学上そういう生物は知られていない。しかしこれはそれ以外の説明よりありえそうにないことだった。科学は翼龍の問題に関してすでにきっぱりと断を下している。科学はほかに空を飛ぶものを記録していない。しかし問題の生物が飛んだとは誰も記していないのだ。飛ばないのなら、どういうふうにして空からあらわれたのか。

わたしはますます困惑してしまい、首をふった。従兄がやってきて、ややこわばった笑みをうかべた。

「きみにも荷が重すぎるようだね、スティーブン」

「考えれば考えるほど、手におえなくなってくるよ。しかしアリヤがのこした指示書には、ここにある書物のなかに鍵があると書かれているじゃないか。きみはもう見たのか」

「どの本かわからないことにはどうしようもないだろう。手がかりはなにもないんだからね」

「それはどうかな。手がかりはいくつかあるよ。正確にどういうのかは知らないが、ナイアーラトテップかナーラトップがひとつだ。ヨグ＝ソトトかヨグ＝ソトースというのもある。このふたつが、ラバンの日記にも、きみが書きとめたビショップ夫人の話にも、ジョナサン・ビショップの手紙にも共通してあらわれているじゃないか。それに、ビショップの手紙には、ここに

ある古文書で見つけられるかもしれないことが、ほかにもいくつか言及されているしね」
　わたしはもう一度ビショップの手紙に顔をむけた。アンブローズはビショップの手紙に、ビショップが記している人物の死に関する、アーカムの新聞記事から書き写したものを添付して(てんぷ)いた。これらにも心さわがせられる類似があったが、アンブローズが睡眠不足のためにやつれているようなので、わたしもあえて口にはしなかった。しかしジョナサン・ビショップの動きをこっそりうかがおうとしたおせっかいな者たちが失踪し、後に死体となって発見されたように、アリヤ・ビリントンの行為に気まぐれに干渉(かんしょう)していたジョン・ドゥルーヴェンにおなじことが起こった点は、ないがしろにできることではなかった。ありえそうもない事件についてどう考えるにせよ、ジョナサン・ビショップが記している人物たちが、新聞の記事を信用するかぎり現実に姿を消してしまったことだけは否定しようがないのだ。
「そうだとしても」わたしが顔をあげると、従兄のアンブローズがいった。「わたしにはどこから手をつけたらいいのかわからないんだよ。ここにあるのは古い本ばかりだし、そのほとんどは読むのも一苦労というしろものなんだからね。筆写したものを製本したものまであるんだから」
「気にすることはないさ。時間はたっぷりあるんだ。今日じゅうにけりをつける必要なんてないよ」
　アンブローズはこれを聞いてほっとしたような顔つきをして、会話をつづけようとしたが、

そのとき玄関のドアをノックする音が聞こえたので、立ちあがって玄関にむかった。耳をすましていると、訪問者をなかへいれたらしいので、わたしは読んでいた文書や書類をあわてて目につかないところに置いた。訪問者はふたりいるようだったが、アンブローズはそのふたりを書斎にはとおさず、小半時間くらいしたころ、訪問者をおくりだして書斎にもどってきた。

「警察だったよ」アンブローズが説明した。「ダニッチ近くで起こった殺人事件、というよりも失踪事件を調査しているそうなんだ。たまらないね。最初の死体とおなじように、失踪した者全員が死体になって発見されたら、このあたりにいる者には忘れられない事件になるだろうよ」

わたしはダニッチの住民が堕落していることは誰でも知っていることだといってやった。

「しかしそのことで、いったいどうして警官がきみに会いに来たんだね、アンブローズ」

「住民のなかで音——悲鳴といってたな——を聞いた者がいるそうなんだ。オズボーンという男が姿を消したところから、ここはそう遠くないから、なにか耳にしなかったかと聞かれたのさ」

「もちろんなにも聞いてないんだろう」

「ああ、なにもね」

過去と現在に見いだせる怖ろしい類似にも、アンブローズは気づいていないようだった。あるいは気づいているとしても、そんなそぶりは見せなかった。わたしはわざわざ注意をむけさ

せる必要はないと考えて、話題をかえることにした。そして昼食まえにふたりで散歩して、新鮮な空気を吸えば、気分がよくなるだろう、といってやった。アンブローズは気軽に応じた。

　こういうわけで、わたしたちは屋敷の外に出た。古びた木木はかなりの葉を落としていて、冬がそう遠くないことをうかがわせた。体をひきしめるような風が吹いていて、それを見たわたしは、古代のドルイド僧たちが木木を崇拝していたことを不安にも思いだしてしまった。しかしこれは、わたしが塔の近くにある環状列石に心をとらわれていたことによる、つかのまの印象だった。というのも、わたしが提案した散歩というのは、アンブローズにわたしが塔に行きたがっていることを知られることなく、行きあたりばったりに歩くふうをよそおいながら、塔にむかうことだったからだ。これが目論見どおりにいかなかったとしたら、わたしはひとりきりでも塔に行ってみるつもりだった。

　わたしはわざとらしくまわり道をとり、塔と屋敷のあいだに横たわる沼地を避け、かつてはミスカトニック河の支流であったものの、いまではひあがってしまった河床を目指し、南から塔にむかう道をたどった。従兄はときおり木木の古さについてふれ、斧や鋸で木が切られたことを示す切り株すらないと何度もいった。アンブローズの声の調子には誇りとも疑念ともつかないものがあった。わたしが古い樫はドルイド僧があがめた木に似ているなというと、アンブローズは鋭い眼差でわたしを見つめた。そしてドルイド僧についてどんなことを知っているのかとたずねるので、ほとんどなにも知らないと答えた。するとアンブローズは、ドルイド

のような古代の宗教あるいは宗教的信仰の多くに、基本的なつながりがあると思ったことはないかねとたずねた。わたしはそんなことを思ってみたこともないので、そのとおりに答えた。もちろん神話の型は基本的には類似している。すべては未知についての恐怖あるいは好奇心から生じ、神話をつくる者はいつの時代にもいるものだ。しかし、かたや迷信と伝説、かたや倫理道徳と信条というふうに、単なる神話の型と宗教的信仰とは区別しなければならない。わたしはそういったのだが、アンブローズはなにも答えなかった。

わたしたちはしばらく黙ったまま歩きつづけたが、するうちきわめて奇妙なことが起こった。それが起こったのは、ひあがった河床にさしかかったときのことだった。

「ああ」アンブローズがいつもとちがう、ややしわがれた声でいった。「ミスクアマカス河に来てしまったな」

「なんだって」わたしはアンブローズの顔を見つめてたずねたが、どうやら驚いた表情をしていたにちがいない。

アンブローズはわたしを見つめかえした。目の焦点があってきた。そしてどもりながらいった。

「な、なんだって。なんだってとは、どういうことなんだね、スティーブン」

「きみはこの河の名前をどういったんだ」

アンブローズは首をふった。「なんのことをいってるのかわからないよ」

「ついさっきいったじゃないか」
「どうしてだ。いうはずがあるものか。この河に名前があるなんてことさえ知らないんだから」
アンブローズは本当に驚いていた。すこし怒っているようでもあった。わたしはこれを見て、それ以上問いつめないことにした。おそらく聞きまちがえたか、想像力のとりこになったのだろうといっておいた。しかしアンブローズは、たしかにかつて流れていた河の名前を口にしたのだ。そしてその名前には、ワンパノーアグ族のあの「老呪術師」、リチャード・ビリントンを悩ませた「物」を打ち負かして閉じこめたという、あの「魔法使い」の名前と、まったくおなじ響があった。
わたしはきわめて不快な気分になった。わたしはすでに、従兄がまきこまれているものが、従兄やわたしが懸念しているもの以上に空怖ろしいものであるという印象を得ていた。いかにもなにげなくなされた事実の開示はその懸念を確信にまでつのらせた。しかしわたしはまもなく、さまざまいだいていた疑惑をさらに確信する、驚くべき体験をすることになった。
わたしたちはひとことも言葉をかわさないまま、ひあがった河床を歩き、塔のある場所をとりまく下生えをふみこえた。島は、塔をとりかこむようにして突出している岩以外、小石と砂しかなかった。従兄はこれらの岩をドルイド風だといっていたが、わたしはそうではないという気がした。現存しているストーン・ヘンジに見られるような模様がなにひとつなかったからだ。しかし人為的になされたものか、時の蚕食によるものか、いまでは見事に崩れてしまって

いるこのかつての環状列石は、一部が奇妙にも沖積土の堆積物のように見えるほか、人手をかいしてつくられたものであることを告げる、見まちがえようのない徴があった。それは目的と呼べるようなものであって、石のそれぞれは塔をとりかこむ枠として意図されたかのように見えるのだった。すこし調べてみると、目をとおした文書や書きつけから予想していたものがすべて見つかった。

　わたしは以前にも何度かこの塔を見たりながめたりしたことはあったが、崩れはてた環状列石のなかに足を踏みいれたとき、それが生まれてはじめての経験であるかのような気がした。アンブローズがまとめたものを読んだせいもあるだろうが、雰囲気がかわってしまっているせいもあった。わたしは以前と雰囲気がちがっていることを強く意識した。これまでこの塔からは、おぼめく過去に失われたうらさびしい遺物という印象をうけたものだったが、このとき一瞬、塔が時間とはまったくかけはなれたものだという確信を得た。以前はかりしれない歳月の雰囲気をかもしだしていた古めかしさを知っていたためかもしれないが、そうとばかりもいえなかった。というのも、かつては過去の遺物のように見えていたこの石造りの塔が、いまや時をものともしない悪意ある雰囲気をまとい、納骨堂を思わせる心さわがされるほどのにおいをかすかにただよわせる、がっしりした、ほとんど怖ろしいほどの構造を備えているように思えたからだ。

　わたしははじめて訪れたかのように足を踏みだした——それがわたしにとって新しい体験で

あったと信じるには、想像力の助けなど必要ではなかった。わたしは塔をよく知ってはいたが、塔のなかに立って、石の階段にそう彫刻と、従兄がとりのけた、ほかよりは新しい大石に刻まれた姿か模様を調べたくてたまらなかった。階段にそって刻まれた模様が、書斎の窓の模様の完全な縮小版であることがすぐにわかった。一方、とりのけられた大石に刻まれた模様は、妙なくらい正反対のものだった。円のかわりに星があり、放射する線のかわりに菱形と炎の柱かなにかそのようなものがあった。わたしがくりかえし模様は書斎の窓の模様に似ているなといおうとしたとき、アンブローズが「なにか見つけたのか」といったのだが、その声にこもる調子のせいで、わたしは警戒し、口をつぐんだ。

　アンブローズの声にこもっているのは無関心さではなかった。敵意があった。従兄がまたしても、アーカムの駅でわたしを出迎え、わたしをボストンへ早く帰らせたがる男になったことを、わたしはすぐに見ぬいた。またたくまに心にひとつの疑問がうまれた。従兄はどれくらい塔に近づけば気分がかわるのだろうか。しかしわたしはなにもいわなかった。考えていることも、見つけだしたもののことも口にはしなかった。塔はとても古いものだし、模様はきわめて原始的だが、意味のないものだ、とだけいっておいた。アンブローズはしばらく暗い眼差で陰鬱にわたしを見つめていたが、満足したらしく、塔の外に出ると、ぶっきらぼうに、もうすぐ昼だし、早く昼食の準備がしたいから屋敷にもどろうといった。

　わたしはアンブローズの気分に応じ、いさぎよく塔からはなれて、屋敷へとむかう道をとも

に歩き、アンブローズの料理の才能について気分をひきたてるようにしゃべって、いまは気ばらしとしてたのしいかもしれないが、結局はうんざりするほど退屈なものになるにちがいないから、いい料理人を雇うほうがいいと提案してやり、屋敷が見えてくると、昼食の時間をおくらせ、アーカムへ足をのばしてレストランで昼食をとろうじゃないかといった。

わたしの予想とはうらはらに、アンブローズはこれに心よく同意し、わたしたちはまもなく、あの昔ながらの街にむかってアイルズベリイ街道を車で走っていた。わたしはアーカムで、ミスカトニック大学の付属図書館に行き、できるものなら、アリヤ・ビリントンの行動について、アンブローズがアーカムの古い新聞から書き写したものがどれほど正しいものかを見きわめるため、アンブローズからはなれる機会が得られることを願っていた。

その機会はわたしが思っていたより早く訪れた。昼食をおえるとすぐに、アンブローズがかたづけなければならない仕事がいくつもあることを思いだしたからだった。アンブローズはいっしょに来ないかと誘ったが、わたしはていねいにことわり、図書館に行って、去年ボストンの学会で会ったアーミティッジ・ハーパー博士にあいさつをしたいんだといい、アンブローズの仕事が一時間でおわることを確かめると、その時分に大学通りに面する大学の門のまえでおちあうことにした。

ハーパー博士は正規の教授職から一応隠退はしていたが、ミスカトニック大学付属図書館の二階に研究室をもち、自分が専門とするマサチューセッツの歴史について質問にくる同僚や愛

書家を自由に出入りさせていた。人品いやしからぬ老紳士で、こぎれいに切りそろえられた口髭や先を細くとがらした顎鬚や鋭敏な黒い目は、七十歳の年齢を感じさせなかった。わたしと話をしたのは二度だけで、最後に話したのもおよそ一年まえのことだったが、ハーパー博士は一瞬ためらった後わたしのことを思いだして、わたしにまた会えたことがいかにもうれしそうに、人に勧められて中西部の人間が書いた本を読んでいるんだが、魅力的なところもあるがどうも散慢な感じでね、といった。そしてにこやかな笑みをうかべ、「ソーローとはくらべものにもなりませんよ」といい、脇に置いていたその本を見せてくれさえした。シャーウッド・アンダースンの『ワインズバーグ、オハイオ』だった。

「アーカムにはどんなご用でいらっしゃったんですか、ベイツさん」ハーパー博士が椅子に背をあずけてたずねた。

わたしは従兄のアンブローズ・デュワートに会いに来たのだと答えたが、その名前を聞いてもハーパー博士が顔色ひとつかえないので、従兄がビリントンの地所の相続人であり、その従兄を訪問したことに関連してすこしお話したいことがあるのだとつけくわえた。

「ビリントンはマサチューセッツのこのあたりでは古い家がらですよ」ハーパー博士はなんの感情もあらわさずにいった。

わたしは、できるかぎり多くの資料に目をとおしてみたが、どういう家がらであるのかを告げてくれる資料はひとつとしてなく、敬意をはらわれる家がらではなかったようですと答えた。

「たしか紋章をもつ資格のある家がらだったと思いますがね」ハーパー博士がいった。「ここにあるファイルのどこかにその紋章がのっていますよ」

紋章をもつ資格があることはわたしも知っていた。そこでハーパー博士に、リチャード・ビリントンやアリヤ・ビリントンについて、率直に事実を話していただきたいといった。

老博士は目をきらめかし、にっこり笑った。

「特定の文書にリチャードのことがすこし記されていますよ。好意的に記されたものとはいえませんがね。アリヤについては、当時の週刊新聞に記録されていることがすべてのようです」

これは満足のいくものではなかった。そう思う気持がわたしの表情にあらわれたにちがいない。

「しかしそういったことはご存じでしょうな」ハーパー博士がいった。

わたしは週刊新聞に記されていることは知っているといった。そしてリチャード・ビリントンに関する記述とアリヤに関する記述に認められる、類似性に驚いているのだとつけくわえた。ふたりとも、非合法的なものであることを証明することはできないが、きわめて疑わしい行為に従事していたらしい、と。

ハーパー博士の顔からにこやかさが消えた。しばらくおし黙っていた。話そうか話すまいかを決めかねているような沈黙だった。しかし、まもなく、自分のいうことをおしはかるような感じで、しゃべりはじめた。たしかにハーパー博士は、長い歳月にわたるビリントン家とビリ

ントンの森にまつわる伝説を知っていた。それらの伝説は、事実、マサチューセッツの民間伝承のむしろ中核的な部分なのだった。年代的には一部は魔女裁判の時代をさかのぼるものの、大半は魔女狩りの興奮が高まった時代から伝えられるものだった。現実的な状況において、これらの伝説にはなんらかの土台があるらしい。しかし現在では多くが失われているものの、一時は簡単に信じこまれ、永の歳月を閲していまに伝えられるグロテスクな伝説に、どの程度までの真実が信憑性をあたえているのかは見きわめることができない。とはいえ、リチャード・ビリントンが一時は妖術使いあるいは魔法使いとみなされ、アリヤ・ビリントンが夜に森のなかでよからぬ行為をしていると噂されたのは事実だった。伝説や噂話がこういう土台の上につぎつぎにつみかさねられていくのはむしろ当然のことで、そういう伝説や噂話はひとたび口にされると、広まっていくうちに実に多くの面をくわえていき、それらがもとの伝説や噂話を、奇怪で怖ろしいものの領域からグロテスクで信じがたいものの領域へと移してしまう。こういうふうにして、もともとあった真相はぼんやりしたものになってしまう。

しかしふたりのビリントンが「なにごとか」に従事していたことは確実だ、とハーパー博士はいった。いまからふりかえってみれば、一世紀まえそしてそれ以上もまえに、ビリントンの名をもつふたりの男がおこなったことは、降魔術に関係していたのかもしれないし、関係していなかったのかもしれない。ふたりともハーパー博士がときおり報告をうけたことのある特定の儀式に関係していたのかもしれないし、関係していなかったのかもしれない。その儀式とい

うのは、ダニッチやインスマスの地域に共通するもので、性格的には、人間に起原をもつといえることを暗示させるものがなにもないので、人間とは別種の太古の種族に属しているものらしかった。木にこもる、目に見えないものを崇拝するドルイドの儀式の一部を、どこにでもある性格のものであるとして除外しないかぎりは。

ハーパー博士はリチャード・ビリントンとアリヤ・ビリントンのふたりが、木の精ドリュアスかそれに似た、神話上の生物を崇拝していたということを意味しているのだろうか。わたしはそう思ってたずねてみた。

ハーパー博士はドリュアスを念頭においてはいなかった。人間に知られているどんなものよりもはるかに古い、奇怪かつ怖ろしい宗教ないしは信仰がいまに伝わっているのだという。比較的にいえばささやかなものなので、科学者や調査家も普通は探りをいれるのをさけ、その結果として、少壮の学者たちが、原始的な民族のもつ古代の宗教や信仰について知れるかぎりを記録している。

それではわたしの祖先ふたりが、なにか奇怪で原始的な宗教を実践していたとお考えなのですか、とわたしはたずねた。

そういうことです、とハーパー博士はいい、目をとおした記録が正しいかぎり、リチャード・ビリントンとアリヤ・ビリントンの実践していた宗教的儀式が、人身御供をふくんでいたことは大いにありうることだが、それを証明するものはなにもないとつけくわえた。しかしリチャー

ドとアリヤがふたりとも住んでいた場所から姿を消してしまっている。リチャードはどこへ行ったかわからないが、アリヤはイギリスへ渡り、イギリスで亡くなった。リチャードがまだ生きながらえているという伝説や言い伝えは、すべてナンセンスだ、とハーパー博士はきっぱりといいきった。そういう話は簡単につくりだされ、軽がるしく信じやすい者たちによって広められるものだ、と。家系がアンブローズ・デュワートにつながり、そして同様にわたし自身につながっているかぎりにおいてのみ、リチャードとアリヤは生きながらえているにすぎない。敵意にみちた話は、ごくささやかな出来事を、想像力に火をつけられて色あざやかに描きだし、大衆を驚かせ狼狽させようとした者たちがつくりだしたものなのだ。最後にハーパー博士は、別種のものがのこっているといった。霊的な残存物として知られているもの、邪悪が猖獗をきわめた場所にのこりつづける邪悪があるのだと。

「あるいは逆にいいものかもしれませんね」わたしはたずねた。

「単に『力』と呼ぶほうがいいでしょうな」ハーパー博士はそういって、またにこやかな顔をした。「なんらかのたぐいの力がビリントンの屋敷にたたずんでいるのは、大いにありうることです。さあ、ベイツさん、あなたご自身もそれをお感じになったのではありませんか」

「感じましたね」

ハーパー博士は驚いていた。うれしい驚きではなかったようだ。しかしすぐにまた軽い笑みをうかべた。「それなら、そのことについてわたしがあれこれいう必要はないでしょう」

「それどころか、博士のお考えを聞かせていただきたく思います。わたしはあの古い屋敷ですべてを喰いつくそうとする邪悪を感じとったのです。どういうことなのか見当もつきません」
「邪悪な行為がおこなわれていたということでしょうな。おそらくその邪悪な行為こそが、リチャード・ビリントンとアリヤ・ビリントンについて、後にいわれた話の根本的な土台になっているのでしょう。どういう性質のものなんですかな、ベイツさん」
　わたしには簡単に説明することはできなかった。わたしの体験を言葉におきかえると、すべての恐怖が失われてしまうのだった。わたしがどんな反応をしたのかもわからなかったが、話しているうちにすこしずつ蘇ってきた。ハーパー博士はひとことも口をはさまず、じっとわたしの話に耳をかたむけ、わたしが話しおえると、しばらく考えこんだ。
「デュワートさんはそういったことにどんな反応をされているんでしょう」ようやくハーパー博士がそうたずねた。
「そのことでおうかがいしたわけなんです」
　わたしはアンブローズを待たせることがないように、できるだけ細部をきりつめて、アンブローズにふたつの人格が認められることを、言葉を選んで慎重に話した。
　ハーパー博士はこのうえない注意をはらって耳をかたむけ、わたしが話しおえるとまた黙りこくって考えこみ、やがて、屋敷と森とがわたしの従兄に「悪影響」をおよぼしているらしいといった。しばらく屋敷からはなれたほうがいいかもしれない、と。「冬のあいだはなれてい

たほうがいいでしょう」――そうすれば、よくなるかもしれないから。そしてどこか行くあてはありますかとたずねた。

わたしはすぐに、ボストンのわたしの家に来るかもしれませんといったが、屋敷の書斎にある古書の一部に目をとおす機会をえたいと願っていることを率直に認めた。従兄の同意が得られれば、ビリントン家の古書ももっていけるかもしれない。しかし本来の自分になっているアンブローズを説得しないかぎり、アンブローズがボストンで冬をすごすことに同意するとは思えなかった。わたしがそのことをいうと、ハーパー博士は、ダニッチ近辺そしてその住民にとってよくない前兆になっている最近のダニッチの事件を考えれば、短いあいだでも屋敷をはなれることがアンブローズ自身にとっていいことになるのだから、どうあっても説得したほうがいいと強くうながした。

わたしはハーパー博士に別れを告げると、外に出て、秋の日差のなかに立ち、アンブローズが来るのを待った。アンブローズはすぐにあらわれた。アンブローズは不機嫌そうにむっつりして、アーカムからかなりはなれるまでなにもいわず、ようやく口を開いたときも、ハーパー博士に会ったのかとだけぶっきらぼうにたずねた。アンブローズ自身について話してきたことを知ったなら、アンブローズが腹をたてるだろう――腹をたてるくらいでおさまらないだろう――と思われたので、適当ないいわけを用意していたのだが、アンブローズはそういう質問をしなかったし、わたしとしてもわざわざ自分のほうからそのことを口にしたりはしなかった。こ

ういうわけで、わたしたちは黙りこくったまま屋敷にもどった。

もう午後もおそくなっており、従兄がすぐに夕食の仕度にとりかかったので、わたしは書斎に入った。アンブローズを説きつけて、アンブローズを書物ともどもボストンにともなうことを願っていたので、どういう書物を選びだそうかと思ったが、どこから手をつけていいかわからず、一冊一冊ひもといては、従兄が直面している問題の手がかりをあたえてくれるかもしれない、何度となく文書や写しでくりかえされる言葉はないものかと探しつづけた。書棚にならぶ多数の書物は、この地方とこの地方の家族にかかわる、なにか歴史的および家系的な価値のある年代記だった。しかしおおむねこれらの書物は、個人や当該の家族やなんらかの組織の力をかりて著されたもので、奇異な家系図にうずめつくされており、家系を研究する者以外はなんの関心もいだかないようなしろものだった。しかし決して月並なものではない別種の書物があって、何冊かは表装の革が見事にすりきれていた。こういう書物のなかには、わたしの知らない言語で記されたものがごくわずか、ラテン語のものが少し、英語のゴチック体で印刷されたものが何冊かあり、完全なものではないらしいが、筆写したものを製本した写本が四冊あった。わたしはこれらの書物にわたしが探しもとめるものが見つけられることを願った。

わたしは最初、リチャードかアリヤが面倒な筆写をしたのだろうと考えたが、すこし調べてみるだけで、そうではないことがわかった。つづりがあまりにもでたらめで、わたしの知るかぎり、リチャードやアリヤのような教養ある人物の手になるものであるとは考えられなかった。

さらに、後にくわえられた書きこみがあり、これはおそらくアリヤ・ビリントトンの手になるものだと思われた。写本のどれひとつとしてリチャード・ビリントンが所蔵していたことを告げるものはなかったが、ほとんどがきわめて古いもので、年代は記されていないにせよ、筆写されたものの大部分がアリヤ・ビリントンに先立つものと考えられるので、あるいはリチャードの蔵書だったのかもしれない。

わたしは写本のなかから、厚くも重くもない一冊を選び、椅子に坐って注意深く調べてみた。表紙には書名がなく、表装はきわめてなめらかで、その感触は人肌を思わせた。しかし本文の第一ページには、そのあとすぐにはじまる筆写に先立ち、なんの前書もなしに、伝説の名前らしきものがこう記されていた。

アル・アジフ　アラブ人の書

わたしは手早くページをめくりつづけ、この写本が、すくなくともひとつはラテン語、いまひとつはギリシア語で記された、単数あるいは複数のテキストからの断片的な翻訳から構成されているのではないかと思った。多くの本文用紙には折りめがあり、いかにも謎めいた感じで、「英博物館」「国立図」「ワイドナー」「ブエノス・アイレス大」「サン・マルコス」と記されていたが、すこし考えてみた結果、これらの書きつけが出所を示し、ロンドン、パリ、ケン

ブリッジ、リマに所在する有名な博物館、図書館、大学を指していることを確信した。筆写には顕著な相違が認められるので、多くの人手を介したものであるらしい。ということは、誰かが——おそらくはアリヤ自身が——原本の重要部分をなんとしてでも手に入れたく思い、原本がきわめて珍らしいものにちがいないので、自分用にまとめて製本できるよう、さまざまな人間に金をはらって原本を所蔵する場所に行かせ、書き写させたのだろう。しかしこの写本はおよそ完全なものとはいえず、正しい順序にならべようとした試みがいささか見られるものの、製本するためにこれをとりまとめた者が、世界各地から送られてきたにちがいないそれぞれのページに首尾一貫性をもたすため、相当な努力をしたことが、後にくわえられた書きこみからはっきりとうかがえた。

　最初のときよりはゆっくりと、二回目にページを繰りはじめたわたしは、森のなかの問題に関係している名前のひとつをはじめて目にして、そのページに目をくぎづけにした。そのページはきわめて薄い紙で、ひねくれた筆跡で記され、読みやすいものではなかった。わたしは窓の方に体を近づけて読んだ。

> 人間こそ最古あるいは最後の地球の支配者なりと思うべからず、また生命と物質からなる尋常の生物のみ、此の世に生くるとも思うべからず。〈旧支配者〉かつて存在し、いま存在し、将来も存在すればなり。我等の知る空間にあらぬ、時空のあわいにて、〈旧支配

者〉のどやかに、原初のものとして次元に捕わるることなく振舞い、我等見ること能わず。ヨグ＝ソトースは門を知れり。ヨグ＝ソトースは門なれば。ヨグ＝ソトース門の鍵にして守護者なり。過去、現在、未来はなべてヨグ＝ソトースの内に一なり。〈旧支配者〉のかつて突破せしところ、ふたたび突破せんとするところ、ヨグ＝ソトースこれを知る。〈旧支配者〉かつて大地を踏みにじりし所、いまなお踏みにじりたる所は云うにおよばず、かかる〈旧支配者〉の見えざる理をもヨグ＝ソトースこれを知れり。人は臭によりて〈旧支配者〉気近しとて悟ることままあれど、〈旧支配者〉の姿につきては知ること能わず、唯〈旧支配者〉と人類との交種に現るる特徴をよすがに窺いうるも、此は千差万別にして、人間の最も真なる姿をとることもあらば、〈旧支配者〉のものなる、実体を有せざる不可視の姿をとることもあらん。〈旧支配者〉見えざるまま、悪臭放ちながら跋扈せし荒寥たる在処とは、〈旧支配者〉の盛んなる季、〈言葉〉、これが唱えられ、〈儀式〉、これの叫呀せられん所なり。〈旧支配者〉の声と共に風はおらび、〈旧支配者〉の意識と共に大地はことさやがん。〈旧支配者〉は森を撓め、邑を砕くも、森にまれ邑にまれ、襲いかかる手を見ることなし。凍てつく荒野のカダス〈旧支配者〉を知るも、人はカダスにつきて何をか知らん。南の氷の荒野、はたまた大洋に沈みし島島、〈旧支配者〉の印の刻まれたる石を有すれど、海底深く凍てつきたる都市、はたまた海藻と富士壺の絡みこびりつく鎖されし塔、何人の目にとまりしや。大いなるクトゥルー〈旧支配者〉の縁者なるも、莫

莫として〈旧支配者〉を窺うにとどまりたり。いあ！　しゅぶ＝にぐらす！　汝は悪臭放つものとして〈旧支配者〉を知るばかりなり。〈旧支配者〉の手、汝の首にかかりたれど、汝〈旧支配者〉を見ることなく、〈旧支配者〉の棲いたすところ、汝が護り固めたる戸口ならん。ヨグ＝ソトースは星辰の出会いし門の鑰なり。人がいま支配せし所はかつて〈旧支配者〉の支配いたせし所なれば、〈旧支配者〉ほどなく、人のいま支配せるところを再び支配致さん。夏の後には冬来り、冬過ぐれば夏来るが道理なり。再度この地を統ぶる定めなるが故、〈旧支配者〉その力を秘めて弛まず待ち受けたるが、時節来らば何者も〈旧支配者〉に刃向うを得ず、なべては〈旧支配者〉の支配下に置かれけり。門を知る者〈旧支配者〉のために道を開けるを余儀なくされ、〈旧支配者〉の望むまま〈旧支配者〉に仕えけるが、知らぬままに道を開きし者が〈旧支配者〉を知るは刹那なりけん

このあと文章が欠落していて、すぐにつぎのページへと移る。しかしつぎのページに記されたものは、別人の手になるもので、べつのテキストから筆写されたものらしい。紙がはるかに黄変し、手書き文字も古めかしい書体のものなので、すでに目をとおしたものよりも古いものらしかった。

……先に約されしごとく、彼は自ら刃向いし者等に捕えられ、大洋の深下に投げ込まれ、

水没した都(ルルイエ)なる大いなる廃墟の只中に聳え立つと云われける富士壷のこびりつきし塔に入れられ、旧神の印にて封じ込められけるが、自身を幽閉せし者等に激怒致さば、彼等の怒りを買い、彼ら再び彼に下りて彼に死に似たるものを課し、彼をして夢見るままに残し、而して自ら来れり場所、即ち、星辰の間にありしグリュ＝ヴォに還れり。彼はルルイエの館にて永久に夢見るままに横たわるも、彼のなべての下僕なる者万難を排してルルイエを目指し、怖るべき力を秘めし旧神の印に触るること能わずと云えど、周期還帰し、彼の解き放たれて再度地球を取り囲み、地球を己が王国となし、旧神を新たに打ち倒すことを知れば、彼の目覚めを待ち望みたり。さらに言えば、彼の兄弟にも同様のこと起こり、自ら刃向いし者等に捕えられ、流刑に処せられぬ。名づけられざるものは星辰の彼方の深外の空間に追放され、残る者等も地球よりことごとく追われけり。炎の塔の形の内に来れり者等、また元の地に戻りたれば、絶えて姿を見ること能わざれど、地球には安らぎ訪れ、旧支配者の下僕等集いて旧支配者を解き放つべく方途を探り、人が秘密に包まれし禁断の場所を窺いて門を開けるを待つ間は、その安らぎ破らるること無からん。

　わたしは決然とした態度でつぎのページに目をむけた。それまでのページよりは小さく、それも薄いオニオン・スキンの紙で、どうやら監視の目をかいくぐってこっそり書き写したものらしかった。というのも、ありとあらゆる省略がなされていて、そのため何度となく目をとめ

ては、手書き文字それ自体が読みにくいのに、ようやく判読できる言葉の意味を考えなければならなかったからだ。この三番目の筆写は、二番目の筆写が一番目の筆写につづいている以上に、二番目の筆写につながっているように思えた。

旧支配者につき、彼等門にて待ち構え、其の門こそなべての空間にして時間なりと誌されけり。何となれば、彼等時間と空間の何たるかを知らざれど、現れずとも、なべての時間と空間に存在すればなり。彼等の内には形状、特徴、本来の形、貌を変えられし者あり、彼等にとりてはいたる所が門なりけん。されど余が開かんとした第一の門は砂漠の下なる円柱都市アイレムにありき。しかれども人が石を築きて禁断の言葉を三度口に致さば、あらしめるべき門たちどころに現れ、門を抜けて来るべき者等到来致さん。そはドール、忌むべきミ＝ゴ、トゥチョ＝トゥチョ人、深きものども、ガグ、夜の魍魎、ショゴス、ヴーアミ、凍てつく荒野のカダスとレン平原を護りしシャンタクなり。旧神の子等はすべて似たりけるが、大いなるイースの種族と旧支配者、意見をたがえて旧神に刃向い、旧支配者が地球を掌中に収むるかたわら、大いなる種族はイースより戻りて、いま地球を歩みおる人には未だ知られざる、時間を先へ進みし地球の土地に在所を定め、先に自らを駆り立てし風と声が再び来り、風の上を歩みしものが地球及び星辰の間なる空間を永久に覆いつくさん時を待ちたり。

ここのところで、さながら筆写されたものが入念に抹消されたかのように、文章が欠落しているが、それがどの程度のものかはわからない。簡単な文章が抜粋をしめくくっている。

やがて彼等は復活せり。この大いなる復活の時、大いなるクトゥルーは海洋の下なるルルイエより解き放たれ、名づけられざるもののハリの湖近くのカルコサなる己が都より来り、シュブ＝ニグラス現れて悍しさを倍化し、ナイアーラトテップ旧支配者とその配下に言葉をもたらし、クトゥグア刃向う者等に手をかけて破壊し、盲目の白痴にして有害なるアザトース無限と呼ばるるなべてのものの中心、泡立ち不敬の言葉を吐きつづけおりし所、なべてが混沌として破壊されん世界の只中より現出し、一にして全、全にして一なるもののヨグ＝ソトース己が天球を運び、イタカまた歩み、地球の内なる暗澹たる洞窟よりクトゥグア到来し、而して彼ら共に地球並びに地球に生けるなべてのものをわがものとなし、大いなる深淵の主、彼等の復活を知らされ、兄弟達と共に邪悪を放散致すために来たらん時、彼等旧神と戦う準備を致さん。

もう夕暮が近づいていた。正しく理解しているとはいえないとしても、わたしはこの古びたページに謎の鍵が存在するという妙な確信に心がみたされていたが、光がうすれゆき、キッチ

ンから従兄が夕食の仕度をする音が聞こえてくるので、読むのはしばらく断念しなければならなかった。本を脇へ置いたが、わたしの知識の範囲外にあり、明らかに原初的なものに対する、この凶まがしくも怖ろしい言及をまえにして、このうえなく当惑しきっていた。この断片の集積は、「空より呼び寄せしものに喰い尽され」たというあのリチャード・ビリントンの扇動によりはじめられ、アリヤの指示によってつづけられたと見てさしつかえないだろうが、その目的については、禁断のものにちがいない知識をさらに得ようとするものでないかぎりは、皆目見当もつかなかった。リチャードとアリヤのふたりが、読んだものをどう解釈し、その知識をどう用いたかは、とりわけふたりが生きていた時代に起きた出来事を考慮にいれるなら、怖ろしい意味あいをおびてくる。

キッチンに行くため立ちあがって向きをかえたとき、それと意識しないまま窓が目にはいったが、わたしは怖ろしさのあまり息をのんで立ちつくした。太陽の残んの光が色つきガラスにあたり、そこにくっきりと、ぞっとするほどゆがめられた特徴をもつ、なにか巨大でグロテスクな生物の、人間とはかけはなれた、いいようもないほど怖ろしい顔の戯画が描かれていたのだった。眼は——眼と呼んでいいものなら——眼窠に深く沈みこみ、鼻孔らしきものはあったが、鼻と呼べるものはなかった。頭は無毛で光輝き、顔の下半分はくねくね動く触毛に覆われていた。わたしはこの幻影を怖ろしさのあまり凍りついたようになって見つめていたが、またしても圧倒的な悪意を感じとり、あたかも手の届く範囲にある生物すべてを滅ぼしたがってい

るかのように、邪悪が四方から襲いかかり、壁や窓から流れ来るなにか実体のあるもののように、わたしにのしかかってくるような気がした。そしてつかのまのことだったが、吐き気をもよおすほど怖ろしいものの具現(ぐげん)である、納骨堂を思わせる悪臭がわたしの鼻孔を襲った。
わたしは震えていたが、目をつぶったり顔をそらせたりしたい衝動をおさえ、窓をじっと見つめ、読んだものによって実体をあたえられた幻覚のとりこになっているのだと確信した。やがて怖ろしい像は小さくなり薄れゆき、窓は普通の姿をとりもどし、怖ろしいにおいもしなくなった。しかしつぎに起こったことははるかに怖ろしいもので、ほかならぬわたし自身がそれを招きよせたのだった。
先に従兄のアンブローズをおびえさせていた幻(まぼろし)に、わたしまでもがとらわれたのだと自分にいいきかせるだけでは満足がいかず、わたしはまた窓の下にある書棚にのぼり、色のついていない中央のガラスから、沈みゆく太陽のあわい光に照らされ、木木のあいだでくっきりと輪郭を描いているはずの、石の塔の方角に目をやった。ところが、いいようもないほど怖ろしいことに、塔は見えず、まったく異界的な、わたしの経験にあるものとはまったく異質な光景が見えたのだ。驚きと怖ろしさのあまり、わたしはもうすこしで書棚の上から落ちてしまうところだったが、なんとか体をささえ、目が痛くなるまでその光景をながめた。どう見ても地球上のものではなかった。空には見たこともない困惑させられる星座が集い、ヒヤデス星団らしきものしかわからなかったが、そのヒヤデス星団らしきものも、地球上で見るよりはるかに間近(まぢか)に

迫っているようだった。そして景色のなかに動きがあった――異界的な空に動きがあった。荒涼とした景観の上空に動きがあった。なにか巨大で無定形な生物が、邪悪な思いを胸にわたしの方に速やかにやってくるようだった。グロテスクな八腕類を思わせるその生物は、弾性のある巨大な黒い翼をもち、見るも怖ろしい鉤爪状の足をたらしながら、わたしにむかって飛んでくるのだった。

わたしは目がくらみ、あわてて書棚の上からおりた。しかしひとたび書斎の平凡なたたずまいに身を置くや、衝動にかられ、勇気をふるいおこしてまた書棚の上にのぼり、もう一度中央のガラスに目をむけてみた。最初に見えると思ったもの、塔と木木と沈みゆく太陽が見えるだけだった。そして書斎の床におりたったわたしは、かなり気分もおちついていた。窓に見た怖ろしい貌は幻覚としてかたづけることができるかもしれない。しかしその窓から見えたものについては、どういえばいいのだろうか。わたしは見たものをアンブローズに話すことはできないと思った。簡単にわたしの話を信じこみ、症状を悪化させるかもしれないのだから。わたしが見たと思うものを実際に見たのなら、あの景観を本当に見たのであるなら、あれほどまでに異界的で怖ろしい土地は、いったいこの宇宙のどこにあるのか。

わたしはしばらく窓の下に立ち、怖ろしい変容がまた起こることをなかば期待しながら、ときどき窓を見あげてみたが、なにも起こらなかった。考えこんでいたわたしは、夕食ができたことを知らせる従兄の声でわれにかえり、返事をすると、書斎をはなれた。もう暗くなってい

る窓をふりかえって見ることもせず、つくった食事をまえにしてわたしを待つ、アンブローズのいるキッチンへむかった。

「本を読んでなにか得るところはあったかね」アンブローズがたずねた。

その口調にこもるなにかのせいで、わたしは身がまえた。アンブローズの顔を見ると、その表情には敵意こそなかったものの、親しげな様子もなく、知ることが賢明でない情報を探し求めている者の質問のように思えた。しかしわたしは正直に答え、あちこちひろい読みをしてみたけれど、さっぱり理解できなかったといった。

アンブローズはこれに満足したようだったが、一瞬顔にうかんだ迷いの表情がその徴なら、心のなかで葛藤が起こり、それを自覚したらしかった。しかしわたしはそれ以上なにもいわず、アンブローズも口をとざしたので、わたしたちは無言のまま夕食をとった。

ふたりとも疲れていたので、その夜は早ばやとそれぞれの部屋にひきあげた。

わたしは冬のあいだボストンで一緒に暮そうとアンブローズを説得するつもりでいたが、雪が舞いだすのを見ては、できるだけ早い機会にその話題をきりださなければならないと思った。しかしその機会は、従兄がそういう提案を快くうけいれる気分にもどっていることを確信し、またわたしに対して従兄が敵意をもっていないと確信できないかぎり、訪れそうもなかった。

屋敷は静寂につつまれ、軒にあたる雪片の音しか聞こえないので、わたしはすぐに眠気をもよおした。しかし夜のいつごろか、ドアを閉める音らしきものにわたしは目をさまされた。ベッ

ドで半身を起こして耳をすましてみたが、なにも聞こえなかった。わたしはまた従兄が部屋から出たのかもしれないと思い、ベッドから出ると、足音をしのばせて従兄の部屋にむかった。ドアをためしてみると、開いたので、静かになかに入ってみたが、音をたてないようにしたわたしの努力はまったく無用のものだった。従兄はいなかった。わたしは従兄をさがす衝動にかられたが、しばらく考えた後、外には雪がつもっていてわたしの足跡がのこるので、賢明ではないと判断した。わたしはマッチをすって腕時計を見た。二時だった。雪はもうやんでいるので、朝になってからでも、従兄のあとを追うことはできる。

自分の部屋にもどろうとしたとき、異界的な音——音楽——が耳にはいった。わたしは耳をすまし、フルートが奏でられているような不思議な音を聞いた。ほとんど短調で奏でられ、人間の声を思わせるハミングか詠唱らしきものをともなっていた。わたしの判断に狂いがなければ、屋敷の西側のどこかから聞こえてくるのだった。従兄の部屋の窓をすこし開けてみると、まさにそのとおりであることがわかり、わたしは満足して窓を閉めた。従兄が眠っているにせよ目をさましているにせよ、従兄のあとを追ってなにをしているのか確かめてみたい衝動が高まったが、わたしは用心して踏みとどまった。用心だけではなかった。過去に森のなかにわけいって詮索した者たちの身に起こったことが、ふと脳裡をかすめたからでもあった。

わたしは自分の部屋にもどると、そのまま眠らずに、従兄になにかが起こったかもしれないと怖れながら、従兄の帰ってくるのを待った。二時間ほどしたころ、アンブローズが帰ってき

たらしく、玄関のドアの閉まる音が聞こえた。今度はそれほど大きな音ではなかった。階段をのぼる足音が聞こえた。従兄は部屋に入り、ドアを閉めた。それ以後は梟の啼き声以外、なんの物音も聞こえなかった。梟の啼き声もやがて不意にとぎれ、また夜と静寂が屋敷をつつみこんだ。

翌朝、わたしはアンブローズより先に部屋から出た。従兄が屋敷の裏から森に入っていったことがわかっているので、玄関のドアから出て、大きく迂回して森のなかにわけいってみると、従兄の足跡が見つかった。思っていたとおり、足跡はかつて島であったものの上に立つ、石の塔に通じていた。足跡をたどるのは簡単だった。つもった雪の厚さはおよそ一インチくらいで、従兄の足跡はわたしが期待していた以上にくっきりとのこっていた。すでに記したように、足跡は直接塔にむかい、塔のなかに入っていた。さらに、アンブローズが大石をとりのけて出来た開口部から雪がふきこみ、塔の内部も雪におおわれているので、アンブローズが開口部まで階段をのぼりつめたこともわかった。わたしはためらわずにおなじ道をたどり、アンブローズが立って屋敷の方を見た場所にのぼった。丘からすこし顔をのぞかせる太陽に照らされ、屋敷がくっきりと見えた。わたしは屋敷を目にすると、視線を落として、従兄が塔でなにをしていたかを告げるものはないかと探してみた。そうしていると、塔の外の雪の上に、妙に心さわがせられるものが見つかった。しばらく目をこらして見つめたが、なんであるかを見きわめることができなかったので、見いだすことになるかもしれないものに怖れおののきながら、階段を

おりると、塔の外に出て近よってみた。
　はっきり区別のできる跡が三つあり、それぞれがまがまがしい恐怖をはらんでいた。ひとつは雪がくぼんだもので、長さはおおよそ十二フィート、さしわたし二十五フィートくらいあり、なにか巨大な生物が身を置いたかと思われるものだった。大気は冷たく、雪もまだ溶けてはいないので、このくぼみの外側のふちを調べてみた結果、どんな生物が腰をおろしたかはわからないが、なめらかな肌をしているらしかった。もうひとつの跡は、鉤爪状のもので、幅が三フィートくらいあり、水かきがついているようにも思えた。のこる最後の跡は、そこで大きな翼がはためいたかのように、周縁に鉤爪状の跡がある、雪をこすりつけた不吉な跡だった。しかしどんな翼であるかは見当もつかなかった。まったく理屈に反して、不吉な意味あいがほとんど疑いようのないものだったため、わたしは雪にのこる三種類の跡を呆然と見つめていたが、やがて恐怖に圧倒され、来た道をひきかえし、従兄がわたしのいないことでなにも疑わないように、できるだけ従兄の歩いた道すじをはなれ、相当な遠まわりをして屋敷にもどった。
　わたしが思っていたとおり、アンブローズはもう起きていた。また本来のアンブローズにもどっているので、わたしはほっとした。アンブローズは疲れているのか、ぐちっぽかった。わたしがいないので心配していたらしい。ぐっすり眠ったのに、疲れがのこっているのでわけがわからないといい、妙に圧迫感をおぼえるともいった。さらに、わたしがいないのでわたしを探しに外へ出てみたら、昨夜屋敷を訪れた者がいるらしく、裏口へやって来て、わたしたちを

起こせないまま立ち去ったようだといった。わたしはこれを聞いて、アンブローズが自分の足跡を見たものの、それが自分の足跡だとわからずにいることを知り、アンブローズが昨夜塔へ行っているあいだ目をさましていなかったことがわかった。

わたしはすこし散歩してきたのだといい、街にいるときはそうするのが習慣で、習慣をかえるのはいやなんだと説明した。

「自分がどうなっているのかもわからないんだよ」アンブローズがいった。「朝食をつくる気にもなれないんだ」

「まかせろよ」わたしはそういって、すぐに朝食の準備にとりかかった。

アンブローズは素直に同意し、腰をおろすと、掌で額をこすった。「なにかを忘れてしまったような気がするんだよ。今日なにかする計画をたてていたんじゃなかったのかな」

「いや、なんの計画もたてていないよ。疲れているだけさ」わたしはアンブローズをボストンのわが家に誘ういい時期だと思った。それにわたし自身、邪悪と活潑な恐怖を怖ろしいほど意識していたので、この屋敷から逃げだしたく思っていた。「アンブローズ、気分転換をしようと思ったことはないのか」

「腰をおちつけることもできないんだからね」

「いや、住む場所をかえてみたらどうだっていうことさ。冬のあいだボストンでいっしょに暮さないか。なんだったら、春にはいっしょにこの屋敷に来てやってもいいよ。ボストンへ来れ

ば、ワイドナー図書館で調べものができるし、講演やコンサートもあるし、なんといっても、いろんな人に会って話ができるだろう。きみに必要なのはいろんな人と会って話をすることだよ。話す相手は誰だっていいのさ」

アンブローズは半信半疑のようだったが、べつに反対はしなかったので、同意するのは時間の問題だと思えた。わたしはうれしかったが、用心してもいた。いつアンブローズの敵意ある気分がぶりかえすかもしれないし、そうなればわたしの誘いを拒否するのは目に見えているので、そのまえに話を決めなければならなかったからだ。そういうわけで、わたしは午前中アンブローズからはなれず、ビリントンの古書を携えて行くよう勧めることも忘れず口にしつづけたが、はたせるかな昼食後ようやく、アンブローズはボストンで冬をすごすことに同意した。そして同意してからは、心に深く根をおろす自衛本能にかられているかのように、一刻も早く出発したがり、事実わたしたちは日が暮れるまえに屋敷をあとにしていた。

三月下旬にわたしたちはボストンからビリントンの屋敷にもどった。アンブローズは奇妙なくらい熱心に屋敷へもどりたがり、わたし自身は懸念をいだいていた。もっとも、ボストンにいるあいだ、いきなり夢中遊行をした不安な夜はべつとして、アンブローズはきわめて健やかになり、わたしにあの最初の手紙を書き送ることになった精神的圧迫感から立ちなおっていないと思わせるようなものを、まったく言動にあらわさなかった。事実、アンブローズは人づき

あいもよく、アリヤ・ビリントンの蔵書からぬきだした妙な古書に没頭して、いささか社交性に欠けているのを示したのは、ほかならぬわたしの方だった。冬のあいだ、わたしは精をだして古書にとりくんだ。わたしがすでに書き記したものに似た文章が数多くあった。鍵と思える名前に対する言及も多かった。明らかに矛盾（むじゅん）した文章もいささかあった。しかし、容認することを可能にするほどはっきりした基本的信条の簡明な記述はどこにもないし、怖ろしい言及や慄然（りつぜん）たる意味あいをはらむ全体的構図のあらましを示すものもなかった。

　しかし春が近づくにつれ、従兄はいささかおちつきをなくすようになり、一度ならずビリントンの森にある屋敷に帰りたい希望を口にし、ともかくあれが自分の家なのだからというのだった。これに比較して、わたしが冬のあいだ何度となく議論しようと試みた写本や古書の特定の面については、ことのほか無関心だった。ビリントンの森に関して、冬のあいだにふたつの事件が起こり、両者ともボストンの新聞でも報道された。ダニッチで悍（おぞま）しい消失をした男がふたり、時をへだてて発見されたのだった。ひとりはその冬のクリスマスから元日にかけてのあいだに、いまひとりは二月初旬（しょじゅん）に発見された。両名とも、まえの事件とおなじように、遺体となって発見され、死後そう時間はたっておらず、程度こそ異なれ、どこか高みから落下したかのように全身がくだかれていたが、身許を確認することはできた。いずれも、失踪してから発見されるまでのあいだに数カ月の期間が横たわっていた。新聞記事は、なんの書置もなかったことを重視し、両名が家をはなれる理由のなかったことを強調していた。ひとりはミスカトニック

河にある島で、いまひとりは河口近くで発見されたのだが、発見されるまでの足取りについては、なにひとつ手がかりがなかった。わたしは従兄が当惑しながらもこの事件に興味をもっているらしいことを知って、背すじがぞくっとしたものだ。従兄は、隠れた意味を知らなければならないが、記憶をつなぐ道を見失っている者のように、何度も記事を読みかえしていた。

わたしにはまったく理解できないので、驚きながらそんな従兄を見まもっていた。すでに記したように、春が近づくにつれ、従兄のおちつきのなさは屋敷に帰りたいという強い欲求にまで高まり、わたしの心は不安と懸念にみたされたが、その懸念はすぐに立証されることになった。ボストンのわたしの家をあとにするや、従兄は冬のあいだとはまったく正反対の態度でふるまいはじめたのだった。

わたしたちは三月下旬のある夕暮どきに、ビリントンの森にある屋敷にもどった。おだやかな心地よい夕べで、大気は樹液のかぐわしい香にみち、木木はみずみずしい葉をつけ、花が咲きほこり、東から吹く風がこころよい刺激のある煙をはこんでいた。わたしたちが屋敷のそれぞれの部屋へはいって腰をおちつける間もなく、従兄がかなり興奮して部屋からあらわれた。わたしが腕をつかまえなかったら、そのまま通りすぎていったことだろう。

「どうしたんだ、アンブローズ」わたしはたずねた。

アンブローズは敵意ある眼差をちらっとわたしにむけたが、しゃべりかたはおだやかだった。

「蛙たちだよ。聞こえないのか。耳をすましてみろよ。蛙たちが歌ってるじゃないか」アンブ

ローズはわたしの手をはらいのけた。「もっとよく聞けるように外へ出るのさ。蛙たちはわたしがもどってきたのを喜んでいるんだ」

わたしはビリントンの森にはいって以来、蛙の鳴き声をぼんやり意識していたように思うが、アンブローズのこの振舞によって、きわめて強く意識するようになった。いやな顔をされるだろうと思って、わたしはついていくのをやめ、そのかわりに廊下をわたってアンブローズの部屋に入り、開いている窓のひとつのまえに立ち、少年ラバンが父親とインディアンのクアミスがなにをしているのだろうかと思ったのが、その窓であることを思いだした。蛙の鳴き声は耳をつんざくばかりのはげしさだった――耳にこもり、部屋にこもり、屋敷と石の塔のあいだに横たわる異様な沼地からわきおこっているのだった。しかしそのものすごい鳴き声に耳をかたむけていると、鳴き声そのものよりさらに奇妙なことに気づくようになった。

温帯のほとんどの地域では、異常におだやかな気候にめぐまれる場合をのぞいて、四月になるまで、つまり春になるまで、雨蛙（あまがえる）科に属する蛙たちと赤蛙以外は鳴かないものだ。春になってようやく食用蛙が鳴きだす。しかし沼地からわきおこるものすごい蛙の合唱は、さまざまな蛙の鳴き声が簡単に識別できるうえ、なんと食用蛙の鳴き声までが聞こえたのだ。最初は驚いたが、あまりにものすごい鳴き声に聴覚があざむかれているのだと思うと、その驚きもやわらいだ。晩春の雨蛙の甲高い鳴き声を、遠くから聞こえてくる夜鷹の啼き声と聞きまちがえることがよくあるので、おなじような聞きちがえだろうと思った。しかしまもなく、そうでないこ

とがわかった。さまざまな鳴き声を簡単にはっきりと識別することができたのだから。

聞きちがえをした可能性はなかった。奇妙なくらい心さわがせられることだった。慣れ親しんでいる自然界のパターンに反しているためばかりではなかった。目をとおした写本のなかに、風変わりにも「存在」と記されているものや、その従者たち、つまりしばしば同義語として用いられる従僕あるいは崇拝者が存在するか、真近にいるとき、両棲類が見せる振舞について、うかがいしれない言及があったためでもあった。その振舞というのは、「狂えるアラブ人」としてのみ描写される著者のほのめかすところによれば、これは両棲類が特異な意識を備えていることを示すものであり、「深きものども」として知られる海の生物にしたがうものたちと同様の原初的な関係を、両棲類がもっているためだという。

いいかえれば、地球の両棲類が、「見えると否とにかかわらず、彼等は感じとりて声を発する」ため、原初からの縁者が存在すると、異常なまでに活動的になり、また異常なまでに声をあげるということを、著者はほのめかしているのだった。

したがって、わたしはひどく気持を乱しながら、すさまじい鳴き声に耳をかたむけていた。冬のあいだは、ごく普通のものだった従兄の振舞に確信がもてたのだが、それがいまや、従兄はそれまでの態度を瞬時に、それも以前より完璧に急変させてしまっていた。葛藤も苦痛もなしに成しとげたという意味では、まさしく完璧な変化だった。事実、アンブローズはすさまじい蛙の鳴き声を聞いて悦んでいるらしく、このことでわたしは警鐘の響を感じながら、アリヤ・

ビリントンの奇妙な指示書にあるつぎの厳命を思いだした。

蛙なかんずく塔と館の間なる沼地におりし食用蛙を悩ますことなかれ、蛍を悩ますことなかれ、夜鷹として知らるる鳥を悩ますことなかれ、彼のもの鍵と監視を放棄することなきようにせんがためなり。

この厳命が暗示するものは心地よくはないが、尊重してもよいだろう。もし蛙と蛍と夜鷹が彼の――おそらくはアンブローズの――「鍵と監視」であるなら、このものすごい鳴き声はいったいなにを意味するのか。なにか目に見えないものが近くにいること、あるいは異質な侵入者がそばにいることを警告しているのだろうか。その異質な侵入者とは、このわたしにほかならないのではないか。

わたしは窓からはなれ、断固たる思いで部屋から出ると、階段をおりて、従兄のいるところへ行った。従兄は両腕を組んで立ち、顎をすこしつきだすようにしていた。目には異様な光がきらめいていた。わたしは挑発してやろうと思っていたのだが、従兄を見たとたん、そんな決心もついいえてしまい、なにも口にせずに従兄のそばに立ったが、やがて従兄の沈黙に耐えられなくなり、かぐわしい夕暮の鳴き声を楽しんでいるのかとたずねてみた。

従兄は顔をふりむけることもせずに謎めいたことをいった。「もうすぐ夜鷹も歌うだろう。

蛍が光を放つだろう。そのときが来たのだ」
「なんのときだね」
従兄が返事をしなかったので、わたしはひきかえしはじめた。屋敷にもどりかけていると、深まりゆく夕闇のなか、私道に面する屋敷の横手に動きが見えたので、衝動にかられ、その方向にむかって駆けだした。学生時代は短距離の選手だったし、走る力はまだわずかしかおとろえていなかった。その結果、屋敷をまわるころには、ひどい見なりをした男が道に沿う密集した低木のなかに入りこもうとするところが見えた。わたしはすぐにあとを追い、まもなく追いついて、走る男の腕をつかんだ。二十歳くらいの青年で、やっきになってわたしの手をふりほどこうとした。
「はなしてくだせえ」半分泣きながらいった。「なんもしてません」
「なにをしていたんだ」わたしはきびしくたずねた。
「あん方が帰ってらっしゃったことを確めたかっただけでやす。帰ってらっしゃったと聞いたもんで」
「誰がそういったんだ」
「聞こえねえんでやすか。蛙でやす」
わたしは背すじがぞくっとして、思わず手に力をこめたので、青年は痛さのあまりうめき声をあげた。わたしはすこし手の力をぬき、はなしてやるから名前をいえといった。

「あん方にゃあいわねえでくだせえ」
「いわないよ」
「自分はレム・ウェイトリイちゅうもんでやす」
　わたしが手をはなしてやると、また追いかけられるとでも思ったのか、青年は脱兎のごとく走りだした。しかしわたしが約束どおりじっとしているので、二十フィートくらい走ってから足をとめ、ためらいがちにふりかえり、音をたてないようにしてもどってきた。そしてわたしの袖をつかみ、低い声で注意をひくようにいった。
「あんたはあいつらみてえになさらねえ。なんも起こらねえうちに、ここから出てったほうがいいでやすよ」
　それだけいうとまた走りだしたが、今度は立ちどまることをせず、森をつつみこんでいる闇のなかに姿を消してしまった。背後では、狂おしいまでの蛙の鳴き声がまだおこっていて、わたしは自分の部屋が沼地とは逆の東に面していることをうれしく思った。そうであっても、鳴き声ははっきりと聞こえるだろうが。しかしわたしの耳に鳴りひびいていたのは、レム・ウェイトリイの言葉で、その言葉はわたしのうちにある常軌を逸した恐怖を目ざめさせていた。未知に直面する者なら誰しも心のうちに抱き、説明不可能なものに直面したときはねあがって、一刻も早く逃げだしたくなるようにさせる、あの恐怖だった。わたしはしばらくしてようやく、この恐怖とレム・ウェイトリイの言葉を気にとめたい衝動をおさえ、ダニッチの住民の問題を

あれこれ考えながらひきかえしはじめた。この新しい出来事で、この地域で起きていることに対するなんらかの手がかりが、ダニッチに見いだせるかもしれないという気がしたのだった。従兄の車をなんとかつかうことができるなら、ディーンズ・コーナーズ奥のあの地域へのりこんで、調査をしてみる価値は十二分にあると思えた。

　アンブローズはさっきとおなじところにまだ立ちつくしていた。わたしがしばらくいなかったことさえ気づいていないらしいので、そばへ行くことをやめて、そのまま屋敷にもどった。まもなくアンブローズも屋敷にもどってきた。

「あんなにたくさんの蛙がいまごろ鳴くなんて異常じゃないか」わたしはいった。

「ここでは異常じゃない」そのひとことでこの件はおわりといった感じで、ぶっきらぼうにいった。

　従兄がますます他人になっていくかのように感じられるし、また簡単に敵意をみなぎらせるように思えたので、わたしは話をつづけたくなかった。もし問いつめたりすれば、敵意以上のものをひきおこして、従兄は即座（そくざ）に玄関のドアを指し示すことだろう。わたしとしては、おおむね喜んで立ち去りたい気分だったが、従兄のためにこそ、できるかぎりそばにいてやらなければならないと思っていた。

　その夜は緊張した沈黙のうちにすぎていき、わたしは部屋にひきあげる最初の機会をのがさず利用した。本能がいまは書斎にある古書に目をむけてはいけないと警告していた。そこでわ

たしは昨日アーカムで買った新聞をたずさえて部屋へひきあげたが、これは賢明な選択ではなかった。というのも、その新聞には読者からの投書を匿名でとりあげる欄があり、ダニッチに住むある老婆が夜に何度となく、ジェイスン・オズボーンの声で目をさまされたことが伝えられていたのだった。オズボーンは一連の失踪事件の犠牲者のひとりで、冬のあいだに死体が発見されている。わたしがはじめてアンブローズを訪問した直前に失踪しており、検視解剖の結果、どこに行っていたにせよ、激烈な気温の変化をうけたことが判明したが、それ以外については、死体に見られる奇妙な切り傷や裂傷が死因であるということ以外、なにもわからないらしい。投書をした匿名の人物は格別教養もなさそうで、「信じられないように思える」ので老婆の話が「さしおさえられていた」ことを非難し、かなりの長さにわたって、老婆が目をさまして答え、はっきりと聞こえる声がどこからするものか探してみたがなにも見えず、結局「すぐそばか、頭上の空から」しているのだと思ったと記していた。

　いくつかの理由から、わたしは興味をそそられた。まず第一に、オズボーンの死体ばかりかオズボーンに先立つ失踪人たちの死体が、「どこか高いところから落下した」らしいという、よくくりかえされる結論に、奇妙に類似している。第二に、またダニッチに問題がもたらされた。そして最後に、アリヤ・ビリントンのさまざまな厳命と「空から」なにかを呼びだすことについての慄然たる言及から、最近現実に起こっていることにいたるまでの謎に関して、その全体的構造に、直接的ではないにせよ、補強的証拠をくわえるものになっている。しかしわた

しはこれがいま歩いている迷路のなかでなんらかの価値をもつものだという気がするとともに、四方の壁がわたしを監視し、襲いかかる口実として明白な動きを待っているかのような悪意を、いやましに感じとってもいた。さらに、投書を読んだことで意識がさわがされてもいた。気持よく眠ることなどできるはずもなく、長いあいだ、蛙の鳴き声に耳をすまし、廊下をへだてた部屋で従兄がおちつかなげに寝返りをうつ音を耳にし、ほかの音は聞こえないかと耳をすましてーー夢だったのか目をさましていたのかわからないがーー地中そして空を歩く黮黮とした跫音に似た音を耳にした。

蛙たちは一晩じゅう鳴きつづけた。けたたましい鳴き声がようやく静まったのは夜明けごろだが、そのときでさえまだ二、三鳴いている蛙がいた。ようやくベッドから出て服を着たとき、まだ疲れがのこっていたが、昨夜の決心をひるがえすことはせず、できるものならダニッチに行くつもりだった。

朝食後すぐに、わたしはどうしてもアーカムへ行く用があるのだといって、車をつかわせてくれと頼んだ。従兄は簡単に同意してくれ、なぜかほっとした様子で、がぜんにこやかになり、わたしが夜になるまでもどらないかもしれないといったときでさえ、異常とも思えるほど快活にふるまった。そして先に立って車に近づくと、好きなだけアーカムにいればいいし、必要なだけ車をつかえばいいといって、わたしを見送った。

わたしの決心は衝動のようなものだったとはいえ、ある目的を胸にいだいていた。妙に遠ま

わしの話をしたというビショップ夫人に会ってみるつもりだった。ビショップ夫人のことはアンブローズがざっとあらましを聞かせてくれていたので、車を停めて道をたずねることもせず、簡単に住居が見つけられると思った。またわたしが目をとおすのを許された文書のなかにある、アンブローズが封筒の裏に書きとめたものによれば、ビショップ夫人はナイアーラトテップとヨグ＝ソトースの名前を口にしたらしい。従兄の話では、どうやら迷信深い人物のようだし、わたしが大胆な一撃であると思った投書で言及される老婆こそ、ビショップ夫人であるかもしれないので、しゃべりたがらない何事かを聞きだすためには、できるだけ遠まわしに話をもっていったほうがよさそうだった。

ビショップ夫人の住居は予想どおり簡単に見つかった。従兄から聞かされたことをおぼえているので、うすよごれた白の壁板のある平屋を見たとたん、これにちがいないという気がした。それでも心もとなさはあったが、門柱に「ビショップ」と記されているので、はっきりと確認することができた。わたしはためらわずにポーチにのぼり、ドアをノックした。

「はいりなせえ」なかからしわがれた声がした。

家のなかは従兄が訪れたときとおなじように闇につつまれていた。戸口からさしこむ光で、老婆の姿をとらえることができ、老婆が膝(ひざ)の上に黒猫をのせているのも見えた。

「坐りなせえ」

わたしは誘われるままに腰をおろし、名前を告げることもせずに、いきなり質問をした。
「ビショップ夫人……その、ビリントンの森で蛙の鳴き声をお聞きになったことはありますか」
ビショップ夫人はためらわずに答えた。「ありますじゃ。ずうっとつづく声を聞いたこともあるし、外から来るもんを呼んどることも知っとります」
「どういうことなのかわかってらっしゃるんですね」
「あい。お話しぶりから察するに、あんたも知ってなさるようで。御主人さまがもどってこられたんじゃよ。お屋敷がまた開けられたときに、もどってこられることがわかりました。御主人さまは長いあいだ待っとられた。それがいまようやくもどりなされて、あやつらももどってきもうして、裂いたり、切りひらいたりしておるんですじゃ。あたしゃ年寄りで、もう長くもねえでしょうが、あんなふうに死にてえとは思っとりません。こんなことをおたずねなさるあんたは、どういうお人なんじゃな。あやつらの仲間ではあんめえが」
「わたしに仲間の徴(しるし)でもあるのですか」
「いんや。だども、あやつらはどんな姿にでもなれるんじゃからのう。そんこつは知っとられるじゃろう」ビショップ夫人はしゃべりながら笑いはじめていたが、急に声が小さくなった。
「御主人さまがいらしたときに乗っとられた車とおんなしじゃ。御主人さまのところから来なされたんじゃな」
「それは事実ですが、あなたのいう御主人さまのためにわざわざやってきたのではありません

よ」わたしはすばやくいった。
ビショップ夫人はためらっているようだった。「あたしゃ、なあんもわるいことはしとらんのじゃから。あん手紙ば書いたのはあたしじゃねえ。人の話を小耳にはさんだ、レム・ウェイトリイが書いたんじゃ」
「ジェイスン・オズボーンの声をいつお聞きになったんですか」
「さらわれてから十日間、そいから十二日間、最後に死体が見つかる四日前から毎晩聞こえよった。昔とおなしように。こいから先とおなしように。ちょうどあんたがいなさるところにおるみてえに、オズボーンの声が聞こえたんじゃ。オズボーンのことはよう知っとるけ、聞きまちがえるはずはねえ」
「オズボーンはなにをいったんですか」
「最初は歌うとったのう。聞いたこともねえふしぎな言葉で。最後は祈っとるみてえじゃった。そんあいだは、あやつらのつかう、人間には意味のわからねえ言葉で早口にしゃべっとった」
「それで、かれはどこにいたんですか」
「外側じゃ。あやつらといっしょに外側にいたんじゃ。あやつらはオズボーンを食う準備にとりかかるときを待っておったんじゃから」
「でも、かれは食べられたんじゃありませんよ。死体が発見されているんですから」
「そりゃあそうじゃよ」ビショップ夫人は笑った。「あやつらがほしがるもんはいつも肉だと

はかぎらねえで。人間を考えさせたり、理解させたり、行動させたり、しゃべらせたりする、霊魂たらちゅうもんをほしがりよるんじゃ」
「生命力のことですね」
「好きなように言うたらええ。あやつらはそれをほしがるんじゃ。悪魔じゃよ。たしかにジェイスン・オズボーンは見つかった。だども、体がいたるところ切り裂かれてたちゅうでねえか。死んで発見されたんじゃよ。あやつらはオズボーンからほしいものをたらふくとって、あやつらのいたとこへオズボーンば連れてったんじゃ」
「それはどこなんですか」
「ここじゃし、あそこじゃよ。あやつらはいつもここにおって、あたしらをとりかこんどるが、あやつらを見ることはできねえだ。あやつらはあたしらの話に聞き耳をたててるかもしんねえ。御主人さまがまえのように呼びかけるのを、戸口で待っとるんじゃよ。御主人さまはもどってこられた。二百年ぶりにもどってこられたんじゃ。爺さまが言うとったように。御主人さまはまたあやつらを解き放ち、あやつらは飛んだり、這うたり、泳いだりして、あたしらのすぐんとなりにおって、またあらわれて何もかもをまたはじめる時をうかごうとるんじゃ。あやつらは扉がどこにあるかも、御主人さまの声も知っとる。だども、印と呪文と錠の全部を知らんかったら、御主人さまとてあやつらから安全じゃねえだ。だども、御主人さまは知っとられる。ようくわかっとられる。伝えられる言葉によって、あやつらを送り返す方法も知っとられる」

「アリヤのことですか」

「アリヤじゃと」ビショップ夫人は鼻もちならない笑い声をあげた。「アリヤは人間以上によう知っとった。誰んも言うことのできねえもんのことも知っとった。あれを呼び、あれと話し、あれにつかまえられねえようにすることもでけた。アリヤはあれを閉じこめて、行ってしもうたんじゃ。アリヤはあれを閉じこめ、あの長い月日のあとでもどろうとなさっとった御主人さまも、そこに、外側に、閉じこめてしもうたんじゃ。ほとんどの者は知らんかったが、ミスクアマカスは知っとった。御主人さまはこんあたりを歩かれたが、たくさんのお顔であらわれられたんで、しかと御主人さまであると見きわめた者は誰もおらんかった。御主人さまはウェイトリイの顔、ドテンの顔、ジャイルズの顔、コーリイの顔をとられ、ウェイトリイやドテンやジャイルズやコーリイの家族のなかにおられたが、ウェイトリイとドテンとジャイルズとコーリイ以外は御主人さまであることもわからんかったんじゃ。御主人さまは寝食をともにして話もなされたが、外側におられたときゃ、たいそう大きかったから、こっちでとりなさった体に全部おさめることができんで、衰弱して死んでしまわれた。アリヤだけが御主人さまをだしぬいたんじゃ。御主人さまが死んでから百年以上もあとで、御主人さまをだしぬいたんじゃ」怖ろしい笑い声がまたおこり、部屋のなかにしみいるようにして消えた。「あたしゃ知っとります。ようわかっとる。あたしゃ、あやつらにとってはなんの役にもたたん人間じゃが、あやつらが外で話しとるのが聞こえるし、言葉はわがんなくとも、羊膜ばかぶって生まれてきたから、

あやつらがなにを言うとるかがわかるんじゃよ。外にいるあやつらを聞くことができるんじゃ」
このころには、わたしも従兄の意見を正しく理解していた。アンブローズが感じたように、ビショップ夫人が心さわがされる秘密の知識をもっていること、ビショップ夫人のほとんど人を軽蔑するような優越感を強く意識していた。知るにいたった情報を理解するための必須の鍵がないという、なすすべもない無力感にまたしてもでくわしていたが、わたしはビショップ夫人が隠された禁断の知識をふんだんにもちあわせていることを確信した。
「あやつらは地球にまたあらわれる時を待っとるんじゃ。ここだけじゃねえ。いたるところで待っとるんじゃよ。外側だけじゃなく、水んなかや地の底で待ちつづけ、御主人さまが力をかしとられるんじゃ」
「その御主人さまを見たことがあるんですか」わたしは思わずたずねていた。
「御主人さまそのものに目をむけたことはねえだ。御主人さまがとられた姿を見たことはあるがのう。御主人さまがもどられたら、あたしらにゃわかるんじゃよ。印を知っとるから。あやつらはジェイスン・オズボーンをさらっていきおったじゃろ。リュウ・ウォーターベリイをさらいに来たじゃろうが。あやつらはまたあらわれるじゃろうて」
「ジョナサン・ビショップというのはどんな人だったんですか」
ビショップ夫人はまた、蝙蝠の啼き声に似たところのある、気味のわるい笑い声をあげた。
「たずねるんも当然じゃろう。あたしの爺さまじゃよ。秘密のいくつかを知って、すべてを知っ

たと思いこんだんじゃ。それだけにかかりきりになって、あれを呼びはじめ、のぞき見をしたり詮索をしたりした者にあれをさしむけたんじゃが、御主人さまに肩をならべるほどじゃなかったんで、ほかの者がさらわれたようにさらわれてしもうた。御主人さまは爺さまをたすけるために指一本あげようとなさらず、弱い男だから、石にたのみこんだり丘に呼びかけたりして、地獄めいたあやつらをもたらす権利などなかったとおっしゃったそうじゃよ。爺さまのしたことのおかげで、ダニッチに憎しみがうまれて、コーリイ家の者やティンダル家の者は、ひとりのこらずビショップの家の者を憎んだんじゃ」

　老婆が口にしたすべてのことが怖ろしい意味をはらんでいた。アリヤ・ビリントンに宛られたビショップの手紙は、ビショップ夫人のしゃべったことを忠実に裏書きするものだし、従兄が苦労してつかんだように、アーカムの新聞のファイルのなかにはそれ以上の証拠があった。動機がなんであれ、この件が明白な事実であることは論駁のしようがない。新聞の記事はウィルバー・コーリイとジュデディア・ティンダルの消失と後の発見を伝えているが、ジョナサン・ビショップとの関係をほのめかしてはいない。しかしその当時おそらくアリヤ以外の誰も目にしなかったであろうビショップの手紙は、コーリイが消失するまえからその関係を告げるもので、いままたビショップ夫人がおだやかに、コーリイ家とティンダル家がビショップ家を憎んでいたことを認めたのだった。これは、二件の未解決の消失事件にジョナサン・ビショップが関係していることを、コーリイ家とティンダル家の者が推測していたためにほかならない。わ

たしはこのころには、もし自分のものにできる適当な知識さえあれば、さらに老婆から情報が得られるだろうと確信していたので、かなり心をかき乱していた。さらに、ビショップ夫人の言葉の背後にひそむこのうえなく怖ろしいもの、ビショップ夫人にふくみ笑いをさせるもの、部屋のなかでそれと感知できる存在になっていると思われるもの、すなわち過去にさかのぼり、時をこえて未来までふくみそうに思える秘密につつまれた膨大な原初的な知識と、全生命体を圧倒する時をうかがいつつ、影のなかに永遠に住みついている、知覚力をもつ邪悪で醜い存在とを意識していた。

「お爺さんを目にされたことはないんですね」

「一度もねえ。だども、爺さまについてどう言われとるかは知っとる。頭のええ人じゃったが、それもそこそこの程度で、わずかばかりの知識が命とりになったんじゃよ。石の円をつくって、あれを呼んだんじゃが、あれといっしょにべつのもんまでが来てしもうて、さらわれてしもうたんじゃ。そのあと、御主人さまがあれとほかのもんを、円を通して送りかえされた」ビショップ夫人はまたふくみ笑いをした。「あんたは丘のむこうになにがおるのか知らんのじゃろう」

わたしは古書によく出てくる鍵と思える名前のひとつを思いきって口にしたが、ビショップ夫人は驚いたらしく、表情にこそあらわさなかったものの、声に驚きをあらわした。

「あやつらの名前を口にしてはなんねえ。あやつらが耳をかたむけてたら、あんたに近づいてきて、あんたを追っかけるかもしんねえだよ。印をもってねえかぎりは」

「どんな印ですか」
「身をまもる印じゃよ」
　ダニッチにのりこんだ従兄に言葉をかけたふたりの老人が、従兄に「印」をもっているかとたずねたことをわたしは思いだした。すこしちがうかもしれないが、おそらくその印とビショップ夫人のいう印はおなじようなものなのだろう。わたしはたずねてみた。
「そんふたりが言うたんはべつの印のことじゃよ。そんふたりは阿呆で、なんのことかもわからずに言うとるんじゃ。なにが起こっとるかも知らんのじゃから。自分らが金持になって力をもてると思うとるが、印はそんなもんじゃねえ。外にいるあやつらが村の者を金持にさせたりするはずがねえ。もどってくることだけを考えとるんじゃから。もどってきて、あたしらを奴隷にしたり、あたしらとまじわったりして、準備ができたときにゃ、あたしらを殺してしまうんじゃよ。そんときでも、印のあるもんにゃなんもしねえ。そんときが来たら、あんたもあやつらのもんになるんじゃよ。あたしにゃわかるんじゃ。知ろうと思うたことはねえが、あたしにゃわかるんじゃ。あたしゃオズボーンがあれにさらわれたときに、オズボーンの悲鳴を聞いたし、セトの家の世話をしとるサリー・ソーヤーは、あれがやってきてオズボーンのいた小屋をばらばらにする音を聞きよった。リュー・ウォーターベリイのときもおなしじゃよ。足跡を見よったフライの娘っ子は、象の足跡よりでっかかったちゅうとる。その足跡ちゅうたら、足が四本以上もあるもんがのこしてった、象の二、三倍はある大きさだったちゅうことじゃ。フ

ライはほかにもいろんなところで翼の跡みてえなもんも見よったそうじゃ。だども、みんながフライを笑うて、夢を見ちょるんじゃろうちゅうたもんで、フライがみんなを連れて見に行ったら、消されたような妙な跡があちこちにあるだけで、フライの言うたような跡はどこにもなかったそうじゃよ」

告白するが、わたしはこれを聞いて鳥肌がたち、うなじの毛がさかだった。老婆はしゃべることに熱中するあまり、わたしをほとんど意識していないようだった。明らかにビショップ夫人は、耳にしたことのすべてに、自分の祖先について知ったことをかさねあわせ、怖ろしくも謎めいた事件について、はてしなく思いをめぐらしているのだろう。

「一番怖ろしいことは、もんすごく大きなあやつらが見えねえちゅうことじゃ。だども、あやつらが近くにいれば、においでわかる。もんすごくひでえにおい、地獄から伝わってくるようなにおいがするんじゃよ」

わたしはビショップ夫人の言葉を聞き、理解していたが、もはや積極的に耳をかたむけてはいなかった。ビショップ夫人のいったことのいくつかが、ひとつのパターンにはまりはじめていた。真剣に考えれば考えるほど、怖ろしさのあまり身の毛がよだつほど暗示的なものだった。ビショップ夫人は「御主人さま」を尊敬しているらしいが、二百歳以上の人物であるようにしゃべっていた。その「御主人さま」というのがアリヤ・ビリントンであるはずはない。では、リチャード・ビリントンなのだろうか。あるいは、ウォード・フィリップス師が「リチャード・

ベリンガム或いはボリンハン」と記している、とらえどころのない人物なのだろうか。
「その御主人さまについては、どんな名前をご存じですか」わたしはたずねてみた。
ビショップ夫人はたちどころに用心深くなり、わたしを疑いはじめたらしかった。「御主人さまの名前を知っとる者はいねえ。そうしたいんなら、アリヤと呼んだらええし、リチャードと呼んでもええし、もっと昔の名前で呼んでもええじゃろう。御主人さまはしばらくここで暮されて、そいから外側へ暮しに行かれるんじゃよ。またもどってこられて、また外へ行ってしまわれるんじゃ。いまはもどっとられる。あたしゃ婆じゃが、生まれてからずうっと御主人さまのことば聞かされて、前から言われとるごと、御主人さまがもどられるのをずうっと待って暮してきたんじゃ。御主人さまは名前も場所ももたれんのじゃよ。時間を出入りなされるんじゃからのう」
「ものすごいお年寄りにちがいありませんね」
「年寄りじゃと」ビショップ夫人はふくみ笑いをし、鉤爪を思わせる手で揺り椅子の肘掛をこすって音をたてた。「御主人さまはあたしより年寄りでいらっしゃるんじゃよ。この家よりも、あんたよりも。三つをあわせたよりも年寄りじゃ。御主人さまにとっちゃ、一年は一瞬で、十年でも一秒くらいなんじゃから」
わたしにはうかがい知ることのできない謎だった。しかしひとつだけははっきりしているようだった。アリヤ・ビリントンとアリヤの行動についての調査は、時間をはるかにさかのぼり、

おそらくリチャード・ビリントン以前にもさかのぼるものなのだ。アリヤはいったいなにをしたのか。どうしてまた急に、何世代もまえに祖先たちがやってきて、そして自分が生まれた土地を去り、イギリスにもどってしまったのか。あまりにも自明なことのように思え、ためらいもせずにうけいれていた最初の仮定――近隣で起こっている奇怪かつ怖ろしい出来事にかかわりあうのを避けるため、インディアンのクアミスを解雇してからイギリスにむかったのだという仮定――も、疑わしいものになってしまった。しかしそうでないのなら、アリヤが逃げだした本当の動機はなになのか。厄介な事件、とりわけ不思議な消失とそれ以上に不思議な再現について、関係当局がアリヤに疑惑の目をむけたことを示すものはなにもないのだから。

ビショップ夫人はもう黙りこくっていた。家のなかのどこかから、時をきざむ時計の音が聞こえていた。ビショップ夫人の膝にのっている猫が、身をおこして背をのばすと、床におりたった。

「誰があんたをここへよこしたんじゃ」ビショップ夫人がいきなりたずねた。

「誰も。自分の意志で来たんです」

「来たのには理由があるんじゃろう。警察の方かな」

わたしはちがうことをうけあった。

「それで旧神の印ももっとられんのじゃな」

わたしはもっていないといった。

「歩く場所に用心して、話すことに気をつけなさるがええ。そうせねば、外にいるあやつらがあんたを見て、耳をかたむけるじゃろうて。それとも御主人さまがそうなさるじゃろう。御主人さまはあれこれ質問したりかぎまわったりする者を好かれんし、気にいらんことがあると、空か丘からあれを呼びだしなさるからのう」

ビショップ夫人と話しているあいだじゅう、一度なりともビショップ夫人の誠実さを疑わなかったことを思いだす。ビショップ夫人は自分がしゃべることを単純に信じこんでいた。自分の言葉が意味することを完全に理解していないかもしれないが、さまざまな方法で具現し、人間に関するかぎり悪意ある存在にちがいない、なにかこの世のものならぬ力を、すっかり信じきっていた。それについては、わたしは毫も疑問をいだかなかった。ビショップ夫人の話はときにほとんど宗教的といっていいようなものになり、わたしは質問をして、ビショップ夫人が教会にはめったに行かないにせよ、組合教会信者であり、神を信じこんでいることを知って驚いた。神を信じることは、ビショップ夫人の頭のなかになまなましく存在している、地球外の存在を怖れる気持と、まったくあいいれないものなのだから。

ようやくいとまごいをしたとき、わたしは従兄とわたしのふたりが泳いでいる暗い海が、ふたりのどちらかにとってか、あるいはふたりともにとって、たどりつく岸のないものであることを確信していた。屋敷や森で従兄に影響をおよぼす穏やかな精神分裂病が、問題を一層複雑にしており、どこかに助力をもとめないかぎり、探求にみじめにも失敗して、神ならぬ身の知

るよしもない存在に、力をもたらしてしまうことは歴然としていた。というのも、本当に理解しているわけではなかったにせよ、丘のどこかに悪意ある力がひそんでいて――どういう生物かはわからない――人間をほろぼす時をうかがっているということを、よろこんで認めたい気分にさえなっていたのだった。

わたしは屋敷へ帰るあいだ、あれこれと考えつづけ、出口がひとつもなく、複雑な通路があって、そのそれぞれが行きどまりになっている、多くの入口をそなえた迷路にさまよいこんでいた。そのまま陰鬱な気分で屋敷に帰りついたが、従兄のアンブローズは書斎でいそがしそうにしていた。こんなに早くわたしが帰ってくるとは思っていなかったらしく、わたしが書斎に入るとあわてて書類をとりのけたが、それでも奇妙な図形が一瞬わたしの目にはいった。アンブローズの当惑させられる秘密主義に応じるように、わたしもいままでどこにいたかは説明せず、なんとかアンブローズの質問をうまくはぐらかしたが、アンブローズは口にこそしなかったものの、いらだたしく思っているようだった。アンブローズはわたしがいることで居心地がわるいらしく、どうやらわたしもアンブローズにそう見えていたにちがいなかった。さいわいもう夕暮どきで、すぐに夜になった。わたしは夕食後、部屋にひきあげる最初の機会をとらえ、頭痛がするからといった。わたしの頭のなかの乱れが頭痛にひとしい精神的な不調をうみだしていたことを認めていただけるなら、頭痛というのはかならずしも嘘ではなかった。

その夜起こったことに関して、わたしは自分が病気でもなかったし、なんら異常な精神状態

にもなかったことを、あらゆる努力をはらって示したい。たしかにわたしの頭のなかは混沌としていたが、幻覚をたやすくうけいれるような精神状態ではなかった。事実、とりわけ油断なくしていたのだが、おそらくその理由は、なにかよからぬことがいつなんどき起こるかもしれないと、本能的に予感していたためだろう。

前日とおなじように、蛙の鳴き声が、塔と屋敷のあいだに位置する森のただなかの沼地から、耳をつんざくばかりにおこっていた。わたしがまだ部屋にもどっていないころに、鳴き声ははじまった。博物学者が期待するように、太陽が沈み、最初はためらいがちにあちこちからわずかにおこり、しだいに高まっていくというのではなく、なにか合図でもあったかのように、太陽が西の地平線に姿を消して二、三分すると、ものすごい鳴き声が突如としてわきおこったのだった。アンブローズは地獄めいた鳴き声をなんとも思っていないようだったが、昨夜の話題をむしかえしたらアンブローズがどう思うかわからないので、わたしも蛙の鳴き声についてはふれなかった。ひとたび自分の部屋にはいってしまうと、さほど耳ざわりではなくなったものの、わたしは鳴き声をいやましに意識しはじめた。

しかし想像をたくましくすることは避けた。そしてあらかじめ決めていたとおり、いつもたずさえている本——ケネス・グレアムの『たのしい川辺』——を手にして、愛すべき登場人物のモール、トード、ラットのくりひろげる冒険をまた読みはじめ、いつものようにたのしもうとした。わたしは、アンブローズの熱にうかされたような要求に応じて、はじめてこの屋敷に

来て以来起こった出来事や状況を考えてはいても、そこそこ短時間のうちに、グレアムの忘れられない登場人物の故郷を流れる永遠の河に沿う、たのしいイギリスの田園風景にわれをわすれていた。それまでに何十回となく読みかえしていたし、蛙の鳴き声を完全に意識しなくなったことはなかったが、そこそこ読書に没頭することができた。ようやく本を置いたときは、もう真夜中に近く、凸月が西の空に位置をかえていた。いささか目が疲れていたので、ランプの火を消した。しかし体の方は疲れていなかった。わたしは緊張をといており、心の奥はすこしさわいでいて、なじみぶかい物語の余韻がのこっていた。そのままの状態でしばらく坐っていると、ビリントンの謎のさまざまな部分が脳裡にうかんできた。

なんらかの理論的解釈を見つけようと努力していると、アンブローズの部屋のドアが開き、アンブローズが廊下に出たらしい音が聞こえた。わたしはアンブローズが石造りの塔に行くことを即座に知ったと思う。アンブローズをとめたい衝動にかられたが、その衝動をおさえたことをおぼえている。アンブローズが階段をおりていく足音が聞こえ、しばらく足音は聞こえず、やがてドアの閉まる音がした。わたしはアンブローズの部屋に行き、森に入るためには通らざるをえない、芝生が見おろせる窓にむかった。歩いているアンブローズが見え、またしてもあとを追いたいという衝動にかられた。しかし理性以上のものにとめられた。わたしは恐怖に近いものを意識していた。アンブローズが以前のように眠ったまま歩いているとは思えなかった。はっきりと目をさましているらしく、わたしがあとからついていけば腹をたてるかもしれなかっ

た。
　わたしは心を決めかねてしばらく立ちつくしていたが、やがて比較的単純なことをするだけで、アンブローズが塔へ行くかどうかがわかるかもしれないと思いいたった。つまり、書斎におりて、書棚にのぼり、塔の一番上にむかっている窓をまえにして、中央の無色ガラスからのぞき、月光のなかで塔の屋根の開口部に人影が見えれば、アンブローズが塔の上にいるということになる。このことを思いついたころには、もしアンブローズの目的地が塔なら、もう塔についているはずだった。わたしは屋敷には慣れていたので、闇のなかをためらわずに階下へおり、直接書斎に入った。こうして闇のなかではじめて窓を目にしたのだが、月光がステンド・ガラスにめざましい効果をおよぼしているので、目をまるくして驚いてしまった。月光は窓に、動いているような、異常なくらいなまなましい効果をおよぼし、そのなまなましさは照りはえの幾分かを書斎全体にまきちらしているほどのものだった。
　わたしは以前よりは気をつけて書棚にのぼり、窓をまえにして中央の無色ガラスからのぞいてみた。以前にのぞいたときに体験した不思議な幻覚のことはすでに記してある。このときに見たものも同一次元にあるものだったが、最初は幻覚のようには思えず、いささか誇張されているように思っただけだった。というのも、わたしの目にはいった光景はまさしく見えると思った景色だったが、色あいはかわらないとはいえ、月よりも明るいらしい光につつまれていたかのようだった。白ワインをとおしてでも見るかのように、形や色や影が微妙に変化して、すべてが

なにか異界的で奇怪なものになっているのだった。この景色のなかに塔がそびえていた。以前よりもはるかに近くなっているように思えた。森がはじまっているところまで近づいているように見えたが、姿や、位置関係はなんらかわるところがないので、拡大鏡をとおして見ているような印象をうけ、そうにちがいないと確信したものだ。

しかしわたしの注意は遠近の見透しにも、凸月からでているはずの強まった光にもむかわず、塔そのものにむけられていた。もう真夜中をすぎているにもかかわらず、塔のなかの階段の一番上に立っているアンブローズがはっきりと見えた。上半身が強まった光のなかではっきりと見え、その瞬間、この時刻では冬の星や星座が地平線の上低くで輝いている西の空にむかって、両手をさしだした。西の地平線のすこし上には、ヒヤデス星団のアルデバラン、オリオン座の一部、そのすこし上にシリウス、カペラ、カストル、ポルックス、土星が見え、月が近いためにいささか光を弱められているとはいえ、まちがいなく識別することができた。あとで思い知ったように、距離や時間や背景を考慮にいれれば、本来見えるはずよりもはるかにはっきりと従兄の姿をとらえていたのだが、わたしはそんなことにも気づかず、ごく細部まで見えることも、窓の無色ガラスから見えるこのうえなく怖ろしい光景の、背景以上のものではないように思っていた。

というのも、従兄のアンブローズはひとりきりでいるのではなかった。

アンブローズから外部にむかって、はじまりもおわりもなさそうだが、流動的な状態にある

らしく、しかも生きているという見まちがえようのない印象をあたえる、変態的な成長物――これ以上にふさわしい言葉をわたしは知らない――がのびているのだった。その成長物は、蛇のようにも、蝙蝠のようにも、すべての生物がまだ原初の軟泥から出現していない生命進化の段階における、巨大な無定形の怪物のようにも見えた。しかし見えたのはこれだけではなかった。アンブローズのまわり、塔の屋根、その上の空に、筆舌につくしがたい他のものがいたのだ。屋根の上には、アンブローズを両側からはさむかのように、たえまなく姿をかえているように思える蛙に似た生物が二匹いて、どうしてそうするのかは見きわめられなかったが、いまや耳をつんざくばかりになっている蛙の鳴き声に匹敵する、怖ろしいまでのフルートに似た音をだしていた。そしてアンブローズの頭上には、巨大な蝮に似た生物が何匹もいて、妙にゆがんだ頭部とグロテスクなほど大きな鉤爪のある付属器官をそなえ、ばけものじみた大きさの、弾性のある黒い翼でやすやすと宙にうかんでいた。事実、普通の状況であるなら気を失ってしまいそうなこの光景は信じられないほどのもので、わたしは一瞬、気が狂ってしまったのだと思い、ビリントンの森の問題とこの地域で起きた事件を気づかうあまり、こんな幻覚を目にするようになってしまったのだと考えた。しかしもちろん、こういうふうに理性的に考えられたということ自体、わたしの目にしたものが、わたしの想像とはまったくかけはなれた存在であるという明白な証拠なのだ。

さらに、塔の外には、たえず流動的に動いているものがあった。翼をもつ生物は、べつの次

元にすべりこむかのように、ときどき急に見えなくなることがあった。屋根の上でフルートに似た音をたてている無定形の生物は、ばけものじみた大きさになったり、きわめて小さくなったりしていた。変態的な生長物と記したアンブローズのまえの空間に広がっているものは、怖ろしいほど流動的になっていて、わたしは目をはなすことができずにいたが、いまにも幻覚が消えてしまい、もう一度月に照らされる穏やかな景色があらわれるのだと思っていた。流動的と記してしまったが、目のまえで起こった信じられないほど怖ろしいことを描写するには、適切でないことはわかっている。塔にいるアンブローズの前方を焦点にして、空中に広がっているように見えていたものは、ひきつづいて肉体を変化させる巨大な無定形の塊になり、特定の蛇のように全身が鱗におおわれ、とどまるところなく、さまざまな長さと形の触角状の付属器官を無数につきだしたりひっこめたりした。黒い毛につつまれた怖ろしいものになり、いたるところから大きな赤い目を開けた。一見八腕類を思わせるばけものになり、地獄めいた小さなしわだらけの塊のようになったかと思うと、触角は大きさと重さを何百倍にも増して、後方にふるように動かされ、その先端ははるか遠くで文字通りとけてしまっていた。紫色になった体に大きな単眼があらわれ、従兄を見おろすかたわら、その下に大きな口がぽっかりと開き、怖ろしい叫びをあげると、それに応じて屋根にいる生物と湿地帯の蛙は荒あらしい鳴き声を耐えられないほどの音量に高め、そして従兄が、人間以下のものを怖ろしくもまねているような、ほうほうという声をだした。わたしはこれほどまでに怖ろしくなり、おびえたことはなかった。

従兄はこの呪われた地方の歴史によくあらわれ、つねに信じられないほどの恐怖をはらむ、慄然たる名前を口にした。

んがい　んがああ　いはあ　よぐ・そとおす！

地獄めいた獣的な騒ぎはこのうえなく、わたしは世界じゅうに聞こえるのではないかとさえ思ったが、今度は四方の壁からだけでなく不思議な窓からも流れだしている、あの怖ろしい悪意に圧倒されて、窓から落ちてしまった。

片方の膝から床に落ち、意識がはっきりもどるまで、しばらくその姿勢でいたが、やがて立ちあがって、耳をすましてみた。怖ろしい音が屋敷のなかにまで聞こえるだろうと思ったが、なにも聞こえないので、たまらないほど混乱してしまい、なにが起こったのか理解することもできないまま、逃げだしたい衝動をかろうじておさえ、また書棚にのぼりはじめた。頭のなかは混沌としていた。なにか信じられないほど忌わしい幻覚のとりこになっているような気がした。森のなかの石造りの塔に目をむけてみなければならないと思い、逃げだしたい衝動と争いながら、もう一度さっきの場所に立ち、すさまじい情景にむかってゆっくりと目を開けた。

塔が見えた。月光のふりそそぐ森が見えた。西の空低くうかぶ月も見えた。星のひとつから、ゆらめく薄い霧の線のように見えるものが、つかのまのびて消えた。いわゆる霊体のようだっ

た。しかし数分まえまでわたしの意識にのしかかっていたものは、あとかたもなかった。塔にはなにもなく、蛙の声はまだリズミカルにつづいていたが、ほかの音は聞こえなかった。塔の上にもまわりにもなにもなく、アンブローズの姿も見えなかった。わたしは顔をガラスに押しつけ、信じられない思いでのぞきこんでいたが、やがてアンブローズが屋敷に帰りかけているにちがいないことを知った。もういまごろは屋敷に近づいているかもしれない。わたしは時間感覚を失っていたので、円形の窓からもう一度無人の景色をちらっとのぞきこむと、あわてて窓からはなれた。

軽やかに床におりたち、書斎からひきあげて、急ぎ足で階段をのぼったが、まだ部屋まで行きつかないうちに、下からドアが開く音とアンブローズの足音が聞こえた。しかし耳をすましてみて、わたしはびっくりしてしまった。なんという足音なのか。ひとりの人間の足音ではなかった。それも信じられないほどゆっくり、足をひきずっている音だった。階段の下から聞こえた声は、なんという囁き声だったのだろうか。

「長いあいだだ」喉にかかっていたが、明らかにアンブローズの声だった。

「そうです、御主人さま」

「わたしはかわっているかな」

「お顔とお召しもの以外は、なにもかわっておりません」

「遠くへ行っていたのか」

「ムナールとカルコサに行っておりました。御主人さまも遠くへいらっしゃったのでしょう」
「多くの顔で多くの場所へ行った。過ぎし時や来たるべき時に。あっさりいってしまえば、ここには危険がある。わたしとおなじ血をひく部外者がこの屋敷のなかにいるのだ」
「眠れるでしょうか」
「眠る必要があるのか」
「ございません」
「それなら、体を休めて待つがよい。朝にはいつものようになっているだろう」
「そのとおりです、御主人さま。なにか御用がございましたら、わたしはまえのように台所の小部屋におりますから」
「そこにいればよい。人間が記す年号は知っているか」
「存じません。わたしは長いあいだ行っていたのでしょうか。二年、それとも十年」
アンブローズのふくみ笑いが聞こえた。実に怖ろしい笑いだった。「一瞬のあいだだ。十の二十倍以上だ。旧支配者が予見し、わたしたちが知らされたように、大きな変化が起こっている。おまえにもわかるだろう」
「おやすみなさいまし、御主人さま」
「ああ。おまえがまえにここでおなじことをいってから、ずいぶん時がたっている。よく休むのだ。準備をして道を開けるために、なすべきことがあるからな」

従兄がゆっくりと階段をのぼってくる足音をのぞいて、静寂がつづいた。さりげない音をたててアンブローズが近づいてくるのを聞いていると、ますます怖ろしくなってきた。書斎の窓からあんなものを見たあとでのさりげなさといったら。妙に遠まわしの暗示的な会話を聞いたあとでのさりげなさといったら。もうたまらないほどの怖ろしさだった。もっともわたしが目にし、耳にしたものが、現実のものであればの話だが。わたしはすでに自分の正気を疑いはじめていた。アンブローズは階段をのぼりつめ、自分の部屋にはいり、ドアを閉めた。しばらくして、ベッドがきしみ、そのあとはすべてを静寂がつつみこんだ。

そのときわたしをとらえた最初の衝動は、すぐに逃げだすことだった。しかし逃げだしたりすれば、アンブローズは疑惑をつのらせ、敵意を高めるだろうから、およそ不可能であることがわかった。逃げだしたい衝動にともなって、副次的な反応も訪れていた。それはわたしがアンブローズを見すてているという感情だった。つぎになにが起こるかわからないにせよ、やらなければならないことがひとつあった。もう一度ハーパー博士に会い、すべての出来事を順序立てて話し、アンブローズの書斎にある文書も写しをとって見せなければならない。この真中をすぎた時間に、そういう仕事にとりかかる気分にはなれなかったが、やらなければならなかった。ビリントンの森の謎を解決してくれるのが誰であろうと、屋敷をはなれるまえに、その人物の役にたつような覚書をまとめておく必要があった。もちろん、ダニッチの怪奇な怖ろしい出来事についても。

その夜わたしは眠らなかった。

朝になると、わたしは従兄が階下へおりていくのを待ち、そうしてから、どんなものを目にするのだろうかと怖れおののきながら、階下へとむかった。しかしわたしの恐怖は無用のものだった。アンブローズは忙しそうに朝食の準備をしていた。アンブローズの顔つきを見たとたん、わたしの恐怖は静まってしまった。事実、機嫌がよさそうで、アンブローズはいつになく口数が多かった。蛙の鳴き声で睡眠がさわがせられたんじゃなければいいんだが、とさえいった。

わたしはそんなことはなかったと答えた。

アンブローズは、蛙の鳴き声が異常なくらいうるさいが、静かにさせるなんらかの方法が見つかるかもしれないといった。

わたしはそれを聞いて愕然とした。アリヤの厳命を思いだしてしまったためだが、アンブローズの方はにこやかに、また超然とした感じで笑みをうかべており、アリヤが厳命でなにを意味したかを知っているかのようだった。わたしは狼狽したが、自分の感情をかくさなければならないと思った。

アンブローズは言葉をつづけ、その日は一日じゅう外にでているが、気にせずにしてほしいといった。森のなかでやらなければならない仕事を見つけだしたというのだ。

わたしはうれしくなったが、その気持をかくした。アンブローズが屋敷にいなければ、書斎

なことはあるだろうかとたずねてみた。
アンブローズはにっこり笑った。「その申し出には感謝するよ。しかし実をいうと、話すのをわすれていたんだが、手伝ってくれる者がいるんだ。きみがこのまえ外出した日に、男をひとり傭ったんだよ。きみを驚かせないように、話しておくべきだろうね。しゃべりかたが妙で、風変わりな恰好をしている男だから。実をいうと、インディアンなんだよ」
わたしは驚きをかくすことができなかった。
「びっくりしているようだね」
「ああ、驚いたよ」わたしはようやくのようにして答えた。「いったいこのあたりのどこでインディアンを見つけたんだね」
「いや、かれの方からやってきたんで、傭ったのさ。このあたりで見つけられるものには驚かされるね」アンブローズは立ちあがり、もうわたしも食べおえていたので、食器をかたづけはじめ、そして最後に呪わしい事実をつけくわえた。「きみがよろこびそうな奇妙な偶然の一致があるんだよ。インディアンの名前はクアミスなんだ」

第三章　ウィンフィールド・フィリップスの物語

先の図書館長アーミティッジ・ハーパー博士の指示により、スティーブン・ベイツがミスカトニック大学のキャンパスにあるセネカ・ラファム博士の研究室にやってきたのは、一九二四年四月七日の正午直前だった。ベイツは年のころ四十七くらいで、体つきはたくましく、髪がすこし白くなりはじめていた。自分をなんとかおさえようと努力しているらしいが、ひどく心をかき乱し、動揺（どうよう）しているようで、わたしはいつヒステリーを爆発させるかもしれない神経症患者だと思った。分厚い原稿の束（たば）をたずさえてきており、自分の身にふりかかった特定の経験を手ずから書きとめたものと、関連する文書や書簡の一連の写しから構成されていた。やってくることはハーパー博士から電話で知らされていたので、わたしはすぐにラファム博士の研究室に通したが、ラファム博士はベイツになみなみならぬ関心をいだいているらしいので、ベイツの原稿がラファム博士の専門とする、人類学的調査の面をそなえているにちがいないと思われた。

ベイツが名前を告げると、ラファム博士はすぐに話すようにといった。さらにうながす必要もなく、ベイツはさっそく話をきりだした。ベイツの話はいささか常軌（じょうき）を逸（いっ）したつじつまのあ

わないもので、誇張したしゃべりかたについていけたかぎりでは、いまもなおのこっている太古の信仰に関係していた。しかしまもなく、ベイッの話に対するわたし自身の反応がなんの役にもたたないものであることがわかった。ラファム博士は唇をひきしめ、目を細め、額にはしわをよせ、昼食時間も完全にわすれはてて、ベイッの話に一心に耳をかたむけているので、ひとたび口から出るや流れるようにほとばしるベイッの話に、なにか顕著な意味あいを見いだしているにちがいなかった。ベイッはやがて原稿のことを思いだしたのか、ようやく話を中断し、原稿をさしだして、すぐ読むようラファム博士をうながした。

　わたしがさらに驚かされたことに、ラファム博士は同意した。もどかしそうな感じで封を開けると、一枚一枚読みおわるつどわたしに手渡した。ラファム博士はわたしの感想をもとめることはせず、自分の感想も口にはしなかった。わたしは驚きをつのらせながらベイッの異常な記録を読んだが、ラファム博士がときおり原稿をもつ手を震わせるのを見ては、神経を高ぶらせてしまった。読みやすい筆跡で記された原稿を読みはじめてからおよそ一時間後、わたしよりも先に読みおわったラファム博士は、顔をあげて訪問客をくいいるように見つめ、中断した話をつづけるようにとうながした。

　しかし話すことはもうありません、とベイッは答えた。ベイッはすべてを伝えおわっていた。ベイッが、関連する文書——すくなくとも関連しているとベイッが思った文書——をなんとか書き写していることは明白だった。

「妨害されなかったんですな」
「一度もありませんでした。従兄が帰ってきたのは、わたしが写しおわってからでしたから。インディアンを見ました。ナラガンセット族は盛装するものだそうですが、そういわれているとおりに、きれいに着飾っていましたよ。従兄はわたしに助力をもとめたんです」
「本当ですか。どんなことをたのまれたのです」
「従兄が塔の屋根からとりのけた風変わりな石があるんですが、従兄もインディアンも、ふたりで力をあわせても、その石を動かすことができないようなんです。わたしはひとりでもちあげられるんじゃないかと思って、そういいました。そうすると、従兄がそれなら試してくれないかといったんです。石をどこかべつのところへ移して、塔からはなれたところへ埋めたいんだと説明しました。わたしはいわれたようにやってみましたが、なんの困難もなく、従兄の力もかりずに、石を運ぶことができました」
「あなたの従兄は手をかさなかったんですね」
「ええ。インディアンもです」
　わたしの雇い主であるラファム博士は訪問客に紙と鉛筆をわたした。「塔のまわりの地図を描いて、石を埋めた場所を示してもらえますかな」
　ベイツはすこし当惑したようだったが、いわれたとおりにした。ラファム博士は地図の描かれた紙を大事そうにうけとると、注意深く原稿の束といっしょにして、わきへ置いた。そして

椅子に背をあずけ、両腕をくんだ。
「従兄が手をかさなかったことを奇妙には思いませんでしたか」
「いいえ。わたしたちは賭をしたんです。その賭にわたしが勝ったわけです。わたしが負ければ従兄は賭金を得られるわけですから、手をかすはずがないでしょう」
「かれがもとめたのはそれだけですか」
「そうです」
「あなたの従兄がしていたことをなにかごらんになりましたか」
「ええ、見ました。従兄とインディアンは塔のまわりをきれいにしていたようです。わたしがまえに見た鉤爪や翼の跡が、すっかりきれいになくなっていましたから。そのことをたずねてみたんですが、従兄はなにげない感じで、夢でも見たんだろうといっただけでした」
「あなたの従兄は、ビリントンの森の謎にあなたが興味をもっていることを、意識しつづけているわけですな」
「ええ、もちろんです」
「しばらくこの原稿はおかりしてよろしいでしょうか」
ベイツはためらったが、お役にたつのならといい、ラファム博士がきっと役にたちますよと答えると、ようやくのようにして同意した。しかし手ばなすことには気のりがしないらしく、とりわけほかの者に見られることを心配していた。ラファム博士は誰にも見せないと約束した。

「わたしのやるべきことがなにかあるでしょうか、ラファム博士」ベイツがたずねた。
「ええ、ひとつありますね」
「どうしても真相をつかみたいので、できることならなんでもしたいと思います」
「それなら、ご自宅へお帰りになるのがいいでしょう」
「ボストンにですか」
「すぐにです」
「森のなかになにがあるにせよ、従兄をのこして立ち去るなんてことはできません」ベイツは抗議した。「それに、わたしが立ち去れば、従兄はわたしを疑うようになるでしょう」
「矛盾したことをおっしゃいますね。かれがあなたを疑うかどうかは問題ではないのですよ。あなたのお話をうかがったところでは、あなたの従兄は、どんなものの脅威にさらされても、十分に対処できると思えますからね」
　ベイツは子供っぽい笑みをうかべると、ポケットに手をいれて手紙をとりだし、ラファム博士に見せた。「これでも従兄がひとりでやっていけるとお思いですか」
　ラファム博士は手紙をゆっくり読み、おりたたむと、封筒にもどした。「あなたがおっしゃったように、あなたを呼ぶこの手紙を書いてから、かれはよそよそしくなったわけでしょう」
　訪問客はうなずいた。しかし従兄の屋敷にもどるという計画をかえるのにはあいかわらず気がすすまないらしく、あわてて立ち去るという印象をあたえないよう、しばらく屋敷にそのま

まいつづけたいといった。
「いますぐボストンに帰られるのが一番いいと思うのですがね。しかし屋敷に滞在することを主張なさるのなら、できるだけ滞在期間を短くなさるようお勧めします。せいぜい三日くらいですな。ボストンに帰られるときは、ぜひもう一度お立ちよりください」
訪問客はようやく同意して、立ちあがった。
「お待ちください、ベイツさん」ラファム博士が呼びとめた。
ラファム博士は部屋を横ぎってスティール製のキャビネットに近づき、鍵をあけてなにかをとりだし、机にもどった。そして机の上にあるものを置いた。
「こういうものをまえにごらんになったことはありますかな、ベイツさん」
ベイツはそれを見つめた。高さがおおよそ七インチくらいの小さな浅浮彫で、触角のついた頭足動物の頭部をもち、背に一対の翼をそなえ、下方に大きな怖ろしい鉤爪を有している、八腕類の怪物が刻まれていた。ベイツが怖ろしそうにながめているあいだ、ラファム博士はじっと待ちつづけた。
「似ています……しかし、わたしが見た生物、というよりも、夜に書斎の窓から見えたと思ったものと、そっくりおなじというわけじゃありません」ようやくベイツがいった。
「しかしこういう浅浮彫はまえにごらんになったことはないのでしょう」
「ええ、ありません」

「絵を見たこともないのですね」
ベイツはうなづいた。「塔の近くを飛んでいたものに似ています。あれが鉤爪の跡をのこしたのかもしれません。けれど、従兄が話しあっていたものにも似ているんです」
「あなたはそう解釈したのですね。話しあっていたと」
「意識してそんなふうに思ったわけじゃありませんが、そうであったにちがいないと思います」
「なんらかの意志の疎通がはかられていたということですな」
ベイツは浅浮彫からまだ目をはなさなかった。わたしの記憶が正しいなら、南極大陸で発見されたものだった。
「怖ろしい」ようやくベイツがいった。
「いかにもおっしゃるとおりです。しかし一番怖ろしいのは、それが生きているものをモデルにしてつくられたかもしれないと考えられていることです」
ベイツは顔をしかめ、首をふった。「信じられません」
「本当のところはわからないのですよ、ベイツさん。しかしごくさりげない噂話をたやすく信じこみながら、幻覚を見たのだと自分にいいきかせることで、自分が正気である証拠を否定する者がほとんどですからな」ラファム博士は肩をすくめ、浅浮彫をとりあげると、しばらくながめて、また机に置いた。「誰にわかるというのです。きわめて原始的なものです。しかしあなたはボストンへ帰るようわたしが強くお勧めしても、屋敷へもどられるおつもりなのでし

ょう」
ベイツはきっぱりうなずくと、ラファム博士と握手をして立ち去った。
ラファム博士は立ちあがり、体をのばした。もう二時に近かったが、わたしはラファム博士が昼食にでかけるのを待った。しかしラファム博士は机のそばからはなれなかった。そしてまた椅子に坐り、ベイツの原稿をまえに置くと、眼鏡をふきはじめた。わたしが驚いているのを見て、いささか気味のわるい笑みをうかべた。
「きみはベイツさんとベイツさんの話を真剣にうけとめていないようだね、フィリップス」
「謎めいた消失事件を説明するためにもちだされた、きわめて風変わりな、くだらない長話だと思いますよ」
「消失と再現自体の状況とおなじように、風変わりなものではないのだよ。わたしはこの問題を軽がるしくあつかいたくはないね」
「まさか、信用なさっているんじゃないでしょう」
ラファム博士は椅子にもたれかかり、眼鏡を片手でもち、穏やかな眼差でわたしを見つめた。
「きみは若いね」ラファム博士はそういって、ちょっとした講義をはじめた。わたしは尊敬の気持で耳をかたむけたが、やがて驚きはじめ、まもなく空腹のことも忘れてしまった。きみはわたしの研究に精通しているはずだから、原始的な形態の崇拝、とりわけ原始的な種族がおこなっている崇拝と、特定の変化を示しながら現在にまで伝わっている古代の信仰についても知っ

ているだろう、とラファム博士はきりだした。たとえばアジアのいくつかの秘境からは信じられないような信仰がいくつもうみだされたが、それらはきわめて奇妙な場所でほぼ同時期に発生したものらしい。チムー文化が、おそらくまだ中国が存在しなかったころに、中国の奥深いところから発生したのではないかという意見を、かつてキンミッヒが提唱したことがある。陳腐な意見とうけとられる危険をおかして、博士はイースター島とペルーの両地に見られる奇怪な彫刻についてふれた。崇拝のパターンは、あるときは昔ながらの姿のまま、あるときは変化して伝えられるが、識別できなくなるほど変化してしまうことはない。古代の残存物を明確にそなえているものではおそらく一番新しい、アーリヤ人の文明においては、ドルイドの儀式が存在する一方、とりわけフランスやバルカン諸国の特定地域に、妖術や魔術の悪魔的な儀式が存在する。ラファム博士は、そういう崇拝が特定の明確な類似性をもっていると思ったことはないか、とわたしにたずねた。

わたしは、根本的にはすべての崇拝はおなじようなものだ、と答えた。

ラファム博士は、誰にも議論できないような、根本的な類似性に重なる局面について言及した。再来する存在についての考えが決して特定のひとつの集団に限定されるものではなく、地球上のさまざまな辺境地に、太古の神神、あるいは神に似た存在を崇拝する者たちがいるということを示す、驚くべき証拠があるとほのめかした。神に似ているというのは、あまりにも人間や地球上のすべての動物からかけはなれているため、信奉者を魅了したという意味でいって

いるにすぎない。性質的には邪悪の存在なのだが。

ラファム博士は浅浮彫を手にしてかかげた。「きみはこれが南極大陸で発見されたことを知っているね。これがどういうものであるかはわかるかな」

「そうですね。インディアンが『ウェンディゴ』と呼んでいるものについての、素朴な彫刻家の生硬な考えなんでしょう」

「わるくはない推測だ。もっとも南極の伝説には、北極のウェンディゴと類似する生物を暗示させるものはほとんどないがね。ところがこれは氷河の下から発見されたのだよ。とほうもなく古い時代のものだ。実際、チムー文化以前にさえもさかのぼるらしいからね。だから、そのひとつの要素についてはユニークなものなのだ。それ以外についてはユニークさはない。おなじような彫刻がさまざまな時代につくりだされているといえば、きみは驚くかもしれないね。それらのいくつかをたどっていくと、クロマニヨン人にまで到達するばかりか、それをも超えて、わたしたちが好んで文明と呼んでいるものの夜明けにまで達するのだよ。中世のものもあるし、明朝のものもあるし、ロシアのものも、ハワイのものも、西インド諸島のものも、現代のジャワのものも、清教徒たちが来た当時のマサチューセッツのものもある。好きなように考えてかまわない。いまのわたしは、まったくべつの理由から、特別なものだという気がするね。十中八九、この像の、おそらくはミニチュアこそが、アンブローズ・デュワートがダニッチでビショップ夫人の家へ行く道をたずねたとき、ふたりの村人にもっているかとたずねられた

『印』だろうよ」
「遠まわしなやりかたで、この浅浮彫には、現実に生きているモデルがあるとおっしゃってるんでしょうか」
「わたしはこれをつくったものがなにを考えてつくったのかは知らない」ラファム博士は腹立たしいほど重おもしく答えた。「しかし可能性を否定するほど頑固でもないよ」
「つまり、さっきのベイツという人がしゃべった話を信じてらっしゃるんですね」
「特定の範囲内においては、嘘ではないと思うね」
「精神病ですよ」
「信じるということは、なんの証拠もなしにたやすくできるが、存在するはずのないものを目のまえにつきつけられると、なかなか信じられないものだよ」博士は首をふった。「きみの祖先の名前が、何度も原稿のなかにあらわれていることには気づいただろう。ウォード・フィリップスだ」
「はい」
「この機会を利用していると思われたくないのだが、どうだろう、きみの家系をさかのぼって、アリヤ・ビリントンと意見をたがえてからの牧師の略伝を教えてもらえないだろうかね」
「残念ながら、とりたてていうほどの人生をおくった人物ではありませんよ。長生きはしませんでしたし、『魔術的驚異』と題する著書を回収して焼却しようとしたことで、名を汚しま

したしね」
「ベイツさんの原稿に照らして、そのことをなんとも思わないのかね」
「単なる偶然の一致ですよ」
「いや、偶然の一致以上のものだね。きみの祖先の行為は、悪魔を見て自説をとりけしたがる者の行為に似ているからね」
　ラファム博士は何事も軽がるしくはあつかわない人物なので、わたしは博士のもとで働くようになってから、多くの風変わりな出来事や信条に出くわしてきた。そういうものがおおむね、ほとんど近づくことも不可能な遠隔地で発生しているという事実は、同様のものがごく近くで発生している可能性をはばむものではない。つけくわえるなら、ラファム博士はわたしが知っているだけでも幾度か、なにか怖ろしい残存物にまつわる神話にかかわりあい、本質において呆然とするほど怖ろしいものをほのめかす、目もくらむような次元の概念をかすめたことがあった。
「アリヤ・ビリントンが悪魔と通じていたと思ってらっしゃるのですか」わたしはたずねてみた。
「その質問には肯定的にも否定的にも答えられるね。知られている記録からは、悪魔の唱道者といえるだろう。アリヤ・ビリントンは明らかに時代に先がけた人物で、同時代のほとんどの者より知性あふれ、危険に遭遇したときに、その危険性をはっきり認めることが

できたのだ。疑いもなく人類の誕生までさかのぼる典礼や儀式を実践したが、その結果からのがれる方法を知っていた。だから、きみのいうとおりの人物であるようだ。この文書を徹底的に調べれば、もっとよくわかるようになるだろう。わたしは時間を無駄にするつもりはないよ」

「このくだらないものを過度に重視してらっしゃるような気がするんですが」

ラファム博士は首をふった。「すぐには理解できないものや、すでに考えつかれた科学的信条にあてはまらないものに、『偶然の一致』だの、『幻覚』だのというようなレッテルをつける科学の態度はなげかわしいものだよ。ビリントンの森と、そのまわりの地域、とりわけダニッチで起こっていることについては、信じる信じないの領域をこえるものであって、ビリントンの森でなんらかのことがおこなわれるたびに、ダニッチやその近くで不思議な消失事件が起こることは、単なる偶然としてかたづけられないものだといっておこう。ベイツさんの原稿を気にかける必要はないよ。もっとも昔の文章を引用している箇所はべつだが、その原文は、ベイツさんが記しているものを無視するとしても、簡単に見つけることができるだろう。この現象は二百年以上の歳月にわたって、別個に、すくなくとも三回くりかえされているね。最初に起こったときは魔術に帰され、不運な者がまったく理解の外にある出来事のために、苦しんだり死んだりしたということらしい。当時は、魔女狩りや魔女を焼き殺した時代からそうへだたってはいないし、ヒステリーや共謀はいつの時代にもあるものだ。アリヤの時代では、真実のなんらかのきらめきがウォード・フィリップスとジョン・ドゥルーヴェンにさしいって、ふたり

は導かれるままビリントンを訪れ、そこでなんらかの体験をした。ドゥルーヴェンは消失して、ダニッチから消えた犠牲者とおなじ道をたどり、ウォード・フィリップスは訪れたということ以外、ビリントンを訪問したことについてなにも思いだすことができず、その後、著書を破棄しようとした。注意してもらいたいが、その著書には、何十年もまえに起こったおなじような性質の事件についての言及があるのだよ。この現代では、ベイツさんに助力をもとめるいささか狂乱した手紙を送ってから、アンブローズ・デュワートが不可解な敵意をベイツさんにむけている。こういったことすべてに特定のパターンがあるね」

わたしは異議なく是認した。

「屋敷そのものが邪悪だとほのめかす者がいるのはわたしも知っているし、ベイツさんの原稿もところどころでおなじことをほのめかして、霊的残留物の理論を提出している。しかしわたしはそれ以上だと思うよ。現在知られている出来事をはるかに超えた、信じられないほど怖ろしくて悪意あるなにかだと思うね」

ラファム博士の態度の底知れない重おもしさのため、博士がベイツの原稿を重視していることは、一瞬でも疑うことはできなかった。明らかにラファム博士はベイツの原稿を徹底的に検討してみるつもりらしく、すでにその作業にとりかかりはじめ、参考文献のならぶ書棚からさまざまな書物をぬきだしており、口にしたとおり時間を無駄にしてはいなかった。そして手をやすめると、昼食をとってきたらどうだねといい、途中でアーミティッジ・ハーパー教授に書

きつけをわたしてくれないかと頼み、さっそく書きはじめた。ひどく気分をうきたたせ、強い興味をおぼえているらしく、いつもながらの流れるような筆跡で手早く書きつけをしたためると、たくみな手さばきでおりたたみ、封筒にいれて封をし、「今日は遅くまでここにいなければならないかもしれない」から、たっぷり食べてきたほうがいいねといって、封筒をわたしに手渡した。

四十五分後に食事をおえてもどってくると、ラファム博士のまえにはおびただしい本や書類がつみあげられていた。そのなかに、ラファム博士の要求により届けられたにちがいない、ミスカトニック大学付属図書館の貴重な蔵書である、封印のほどこされた大冊があった。ベイツの原稿がわけられ、いくつかのページには印がうたれていた。

「なにかお手伝いしましょうか」

「いまは心を開けているだけでいいよ。坐りなさい」ラファム博士は立ちあがり、窓辺に近づいた。その窓からはミスカトニック大学付属図書館まえのキャンパスと、監視しているかのようにそこで鎖につながれている大きな犬を見おろすことができる。「よく思うのだがね」肩ごしにいった。「たいていの人間が自分のもっている知識のすべてを関連づけられないことは、実にありがたいことなのだよ。ベイツさんがそのいい例だと思うね。ベイツさんは分散した知識のように思えるものを記録し、つねに怖ろしい現実のふちをかすめながら、現実にまっこうから顔をむけようとはしない。平均的な人間の、予想される、型にはまった行動様式や信仰様

式はべつとして、現実性をもたない昔からの名残の迷信や信条、つまり皮相的なものにしばられているのだ。もし一般人が宇宙のとてつもない壮大さに気づいたり、外宇宙の底知れぬ深淵をかいま見たりすれば、おそらく気が狂ってしまうか、迷信よりはむしろそういう知識の方をしりぞけてしまうだろうね。ほかのことでもおなじだよ。ベイツさんは二世紀以上にわたる一連の出来事を書きとめ、機会あるごとに、ビリントンの森の謎を解明しようとしているが、そのたびに失敗している。ジグソー・パズルの小片であるかのように、さまざまな出来事をならべ、暫定的な結論をいくつもひきだしている。たとえば、祖先のアリヤ・ビリントンがなにかきわめて異様で、おそらくは非合法的なものらしい行為に従事していて、近隣の不思議な失踪事件がそれに関係していると考えているのが一例だが、ベイツさんはそれ以上推理を進めようとはしない。特定の現象を実際に目にし、耳にしているのに、自分の正気を疑うしまつだ。つまり、平均的な精神のもちぬしということだよ。いわゆる『教科書』にのっていないものに直面した場合、自分の正気を疑うことのほうが、単純とはいえ知的だと思っているのだ。『想像』とか『幻覚』とかについて記しているが、自分の反応が『正常』であるとして、先細りの推測があやまっていることを示してみせるほど、正直ではあるがね。結局のところ、謎をとく最後の鍵をもっていないらしいのは事実だが、さまざまな断片をしかるべき位置におさめて、かろうじてほのめかしているあらましよりもさらに広い意味をもつ解答を手に入れる勇気に欠けているのだよ。だから実質的には逃げだして、問題をハーパー博士にあずけてしまい、それがさ

らにわたしにまかされたというわけだ」
わたしはベイツの原稿を正確な事実の記録であると思ってらっしゃるのですか、とたずねてみた。
「ほとんど選択の余地はないと思うね。事実かそうでないかという問題だ。もし事実であることを否定すれば、記録され、目撃され、歴史のなかに埋没している既知の出来事を否定する立場に身を置くことになる。既知の事実だけをうけいれるなら、他の出来事のすべてを『偶然の一致』としてかたづけがちになってしまう。そういう偶然の一致の起こる割合が、どんな科学的な手段をもちいようと、とてもうけいれられるものではないという事実はべつとしてね。だから、わたしたちには選択の余地はないだろう。ベイツさんの原稿は、既知の歴史に関連をもつ一連の出来事を明らかにしている。それでもきみがベイツさんの原稿の特定の部分を虚構のものだといいたいのなら、どういう源からベイツさんのこの世のものならぬ空想が生じているかを説明する必要があるだろう。ベイツさんの描写は、ほとんど学者はだしといっていいほど明晰で、描写しているようななにかを実際に見たことをうかがわせる細部をふくんでいるし、人間の既知の歴史には、そういう細部を説明するものはなにもないのだよ。きみはさらにいうかもしれないが、たとえ入念に描写された生物が悪夢の産物であるとしても、悪夢にそういう存在があらわれた理由を、例をあげて示さなければならないだろう。なぜなら、その場合は、生活や精神的活動における現実体験にはまったく無縁の生物が、夢や悪夢にあらわれうること

を自明のこととして仮定しているわけだが、その仮定はそういう生物とおなじように科学的事実に反しているからね。原稿を事実の記述としてうけいれる場合にのみ、原稿はわたしたちの目的に役立つわけだ。わたしたちはそこからはじめなければならない。それがまちがいかどうかは、時が告げてくれるだろうよ」

ラファム博士は机にもどって腰をおろした。「きみはここでの一年目に、カロリン諸島のポナペで原住民が海の神性を崇拝しておこなう奇妙な儀式について、文献に目をとおしたことをおぼえているだろう。その海の神性は、最初はなじみぶかい海の神であるダゴンだと思われていたが、原住民が一様に、ダゴンより偉大なもので、ダゴンと深きものどもがその海の神性につかえるのだといったのだったね。そういう信仰が現代にまで伝えられているのは万国共通のことで、まあ、一般に知られることはめったにないのだが、この場合は付随する発見があったため、公表されたわけだ。沖あいで遭難した船に乗っていた一部の原住民の死体が、妙に変形したものだったからね。たとえば原始的な鰓、胴からはえる退化した触角。ひとりなどは臍近くの鱗におおわれた皮膚に鱗のある眼があった。全員が海神信仰宗派に属していたことが知られている。カロリン諸島に住む原住民について、なまなましくわたしの記憶によみがえってくるものは、かれらが自分たちの崇拝する神を星から来たものだと確信していることだよ。アトランティス人、マヤ族、ドルイド僧などの宗教信仰や神話の様式に、きわだった類似性があることはきみも知っているね。基本的な類似性、とりわけ海と空を結びつける要素は、つきるこ

となく見つけだせる。たとえばケツァルコアトルがそうだ。ケツァルコアトルはギリシアのアトラスに等しいが、そのアトラスは大西洋のどこかからやってきて、世界を肩にかついでいるとされている。宗教だけでなく、純粋な伝説にもこの類似性は認められる。たとえば、神の信仰が人間の巨人族へと広がり、その巨人族が海に起原をもつと思われるようなものにもね。正確にいうなら、ギリシアのタイタン、スペインの島の巨人、水没したライオネスのコーンウォールの巨人のように、西洋の海だがね。わたしがこんなことをいっているのは、大いなる存在が海底に住んでいたと信じられていた原始時代にまでさかのぼる伝承に、奇妙なつながりがあることを指摘するためだよ。その信仰が、明らかに巨人の起原についての第二の信仰をうみだしているのだ。すべてに先行するものがあるから、ポナペのもののような、現代にまで古代の信仰が伝わっている証拠に驚く必要はないが、ポナペで起こった肉体上の突然変異には、驚かされるとともに困惑させられるというのが、正直な感想だろうね。その突然変異は、特定の海の生物とカロリン諸島の一部の原住民のあいだに肉体的なまじわりがあったという、もちろん事実ではなく、暗澹たる推測によって説明づけられる。もしそれが事実なら、突然変異は完全に説明がつくだろう。しかし、そういう海の生物が存在するという現実上の積極的な証拠を欠いている科学は、事実ではないと単純に否定する。突然変異は『消極的な』証拠としてかたづけられ、認容されることはなく、原始的なものの出現は未知であるという入念な説明がでっちあげられ、原住民は『先祖返り』あるいは『隔世遺伝』のレッテルをはられ、それでおしまいと

いうわけだ。もしきみかわたしか、まあ誰でもいいが、こういう事件のすべての端と端をあわせるなら、そうしてつながったものは地球を何回もとりまくだろうし、それればかりか、たがいに支持しあい、奇妙な出来事の反復される面を強調する、特定の心さわがせられる類似性をあらわにするだろう。しかしこういう孤立した諸現象について、公平無私の研究を喜んでやりたいなどと思う者はいない。ベイッさんの場合に見られるように、見つかるかもしれないものには、きわめて現実的な、まったく人間的な恐怖が存在するからね。存在のパターンはかき乱さないほうがいいものだよ。誰も対処する準備のできていない、時間と空間の延長の彼方に、どんな恐怖が存在しているのかわからないのだから」

わたしはポナペの住民について読んだことをおぼえているので、そういった。しかし、ベイツの原稿に関連しているという意味でなされる、博士の話についていくことはできなかった。ポナペの事件をわたしに思いださせるのは、なんらかの目的があってのことだという気はしていたのだが。

ラファム博士は説明のために、微にいり細をうがったことを話しはじめた。

人類学者が知っている数多くの分散した現象には、すべてに共通した特定のパターンが存在する。それは地球にはまずべつの種族が住んでいたとする神話で、その種族は悪しき行為をなしたために、地球での足場を失い、「旧神」によって追放され、時間や空間に幽閉された。しかしその種族は、単なる人間とはちがい、時空の法則にはしたがわず、べつの次元に移動する

ことができる。追放され、幽閉されて、怖ろしくも憎むべき印によって封じこめられてはいるが、その種族は「外世界」で生きつづけ、地球と現在地球に住みついている「劣等」種族をふたたび支配、所有しようとして、頻繁に具現する。「劣等」というのは、追放された種族が影響をうけない低級な法則の支配をうけるためにほかならない。その種族はさまざまな名前で知られているが、もっともよくつかわれる名称は〈旧支配者〉であり、多くの原始人——たとえばポナペの原住民——に仕えられていた。〈旧支配者〉は悪意あるものであり、〈旧支配者〉が象徴する目眩く恐怖と人類のあいだに位置する障壁が、純粋に気まぐれなものであり、まったく不適切なものであることを認識しておく必要がある。

「しかしそれはベイツの原稿と写しをもとに考えつかれたことじゃないんですか」

「ちがうのだよ。ベイツさんの原稿が書かれる何十年もまえから知られていたことだからね」

「ベイツはその伝説を見つけだしたにちがいありませんよ」

　ラファム博士はすこしも動じず、重おもしさはまったくかわらなかった。「たとえそうだとしても、紀元七三〇年ごろにダマスカスで、アブドゥル・アルハザードというアラブ人の詩人によって、旧支配者についての怖ろしい稀覯書が著されたという論争の余地ない事実は、いかんともしがたいのだよ。一般に狂っていると思われていたアルハザードは、著者の書名を『アル・アジフ』としたが、これは特定の秘密社会ではむしろギリシア語版の標題の『ネクロノミコン』で知られている。この伝説や伝承が何世紀もまえに事実として記録にとどめられ、アラ

ブ人の書き記したものの特定の面を確証するように思える非人間的な現象がこの現代に起こっているのなら、そういう現象を人間、それもこういったことの予備知識をもっている証拠のない個人の想像や策謀のせいにするのは、いかにも非科学的な姿勢じゃないだろうかね」

「そのとおりです。つづけてください」

ラファム博士はつづけた。旧支配者は四大霊——地・水・風・火——に相当するが、四大霊は同様に旧支配者の媒体であって、四大霊との相互依存とみずからの霊的能力により、旧支配者は時間と空間の影響をまったくうけることがないため、人類と地球上の全生命に対するつきせぬ脅威になっている。ふたたびあらわれようとする旧支配者のたえざる奮闘は、原始的な崇拝者や従者に助けられているが、かれらはたいていが肉体的あるいは精神的に劣った者たちで、ポナペの原住民に示されるように、ときおりは肉体が変異しており、旧支配者とその地球外の配下がどの空間や時間にいようと、特定の儀式によって、旧支配者と配下が入りこめるか呼びだせるかする、特定の開口部をきりひらこうとしている。こういったことは、すくなくとも部分的に、アラブ人のアブドゥル・アルハザードや、アルハザードに追随して類似する伝承を書きのこしたさまざまな群小作家によって記録されているが、群小作家の著したものには、おなじ源から発しているものの、アルハザードの時代以降に存在するようになった多様な細目がくわえられている。

ラファム博士は言葉をきって、わたしをじっと見つめた。「ついてこれるかね、フィリップ

ス」

わたしはうなずいた。

「よろしい。さて、旧支配者にはさまざまな名前があたえられている。やや劣るものたちがいて、数の上ではこちらのほうが多い。まさるものたちより、自由というわけではなく、そのほとんどは、人類を支配しているのとおなじ法則の多くに支配されている。まず第一に、水没したという未知の都市ルルイエで『死せるにあらず夢見ながら』横たわっているというクトゥルーがいる。ルルイエについては、アトランティスにあると考える者もいるし、ムーにあるという者もいるし、ごく一部にはマサチューセッツの海岸線からさほど遠くない沖あいにあるという者もいる。二番目は、名づけられざるものとか、名状しがたきものとか呼ばれるハスターだが、ハスターはヒヤデス星団中のハリに住んでいるらしい。三番目は、豊饒の神あるいは女神を怖ろしくも戯画化したようなシュブ＝ニグラスだ。つぎに『神神の使者』と述べられるナイアーラトテップがいる。そして旧支配者のなかで一番強力なものである有害なヨグ＝ソトースは、無限の中核に位置する盲目にして白痴の混沌であるアザトースと、支配地を共有している。きみの顔つきからすると、いくつかの名前に気がつきはじめたようだね」

「もちろんです。原稿のなかにありましたから」

「写しのなかにもあるのだよ。ナイアーラトテップが顔のないあらわれをとるとき、『白痴のフルート奏者』と描写される生物にしたがわれることをいっておこうか」

「ベイツが見たものですね」
「そうだ」
「でもそうなら……ほかのものはどうなんですか」
「推測することしかできないね。しかし、ナイアーラトテップにはいつも白痴のフルート奏者が随行するのだが、おそらくその顕現のひとつはナイアーラトテップ自身なのだよ。旧支配者は、おそらく本来の姿と本性を備えているのだろうが、ある程度まで変身してあらわれることができるわけだ。ナイアーラトテップについて、アブドゥル・アルハザードは『無貌』と描写し、ルドウィク・プリンは『妖蛆の秘密』で『なべてを見る眼』だとしているし、『無名祭祀書』を著したフォン・ユンツトは旧支配者の一員――おそらくクトゥルー――と同様に『触角に飾られたる』といっている。こういうさまざまな描写は、ベイツさんが『変態的な成長物』や『延長』として見たものに見事にあてはまるね」

こういった原始的あるいは原初の信仰や宗教に関して、問題の伝承がものの見事に通用することを知り、わたしは驚いてしまった。ラファム博士はこれまでそういう書物のことを口にしたことがなかったし、所有してもいなかった。いったいどこで学びとったのだろうか。わたしはそのことをたずねてみた。

「ミスカトニック大学付属図書館の鍵つきの書庫にいれられ、厳重に保管されているのだよ。人の目にふれることはほとんどない。この本は……」ラファム博士はわたしが昼食からもどっ

たときに目にした不思議な大冊をたたいた。「これはなかでも一番有名なもので、今晩返却しなければならないのだ。十七世紀にスペインで印刷された、オラウス・ウォルミウスによる『ネクロノミコン』のラテン語版だ。実をいうと、ベイツさんの原稿や写しで言及されているのはこの本なのだ。アリヤ・ビリントンの依頼によって、世界各地で断片的に書き写されたものが、これなのだよ。完全な版や不完全な版は、ワイドナー図書館、大英博物館、ブエノス・アイレス大学、リマ大学、パリ国立図書館、それにこのミスカトニック大学に所蔵されている。カイロや、ローマのヴァティカン図書館に秘蔵されているという者もいるね。さまざまな者が断片的に筆写したものが存在するという説もあるが、ベイツさんが従兄の書斎で見つけた、アリヤ・ビリントンの所有物であったものを考えれば、その説もある程度までは正しいのだろう。アリヤにできたのなら、ほかにもおなじことをした者がいたはずだろうからね」

ラファム博士は立ちあがり、戸棚から年代もののワインをとりだすと、グラスにそそぎ、目を細めて口にした。またしばらく窓辺に立った。外では闇がつどいはじめ、地方都市アーカムの夕暮どきの音がしていた。ラファム博士はやがてふりかえると、机にもどった。

「背景についてはもう十分わかっただろうね」

「信じろとおっしゃるんですか」

「いや、そんなことはない。もちろん、きみが信じるとは期待していないよ。しかし、暫定的な仮説としてうけいれ、それをもとにして、ビリントンの謎を検討することはできるだろう」

わたしは同意した。

「よろしい。では、アリヤ・ビリントンからはじめようか。デュワートとベイツさんもアリヤから手をつけはじめたらしいからね。ウォード・フィリップスとジョン・ドゥルーヴェンは妖術だと思っていたようだが、妖術かどうかはべつとして、アリヤ・ビリントンがなんらかのたぐいの極悪な行為に手をそめていたことについては、なんの疑いもなく同意することができるだろう。アリヤの森での行為に関連する特定の証拠がある。とりわけ、森のなかにある石造りの塔に関してはね。そして、アリヤの息子のラバンによれば、『晩餐が用意されて後』ということだから、夜におこなわれたことがわかる。具体的になにをしていたかはわからないが、インディアンのクアミスも同様に、奴隷のようにではあるが、参加していたのだろう。インディアンがナイアーラトテップにほかならない名前を、畏れるような口調でいったことを、少年ラバンは聞いている。同時に、ビショップ書簡は、ダニッチのジョナサン・ビショップもおなじような行為に手をそめていたことを示している。ビショップ書簡では主題がことのほか明瞭だ。ジョナサン・ビショップは空から何物かを呼びだせるほど知識をもっていたが、その知識も、開けたものを閉じられるほど、あるいは自分の身を守れるほどのものではなかった。意味されることは明白で、そういう呼びかけに応じてやってきたものがなんであれ、それは人間をなんらかの用に供するもので、暗示されるものもきわめて明白だが、その用とはなんらかの食糧としてということだ。もしこれをうけいれるなら、まだ解決されたことのない消失事件を説き明

かすことができるだろう」
「しかしそれなら、死体が発見されたという事実を、どうやって説明なさるんですか」わたしは不意に言葉をさしはさんだ。「消失していた者がいた場所を提示するようなものはなにもありませんし」
「わたしは消失した者が異次元に入りこんでいたのではないかと思っているのだが、たとえそうだとしても、そのことを告げる証拠は異次元にも存在しないだろうね。暗示されるものは怖ろしいくらい明白じゃないか。呼びかけに応えてやって来たものは、いつもおなじものとはかぎらないのだよ。手紙やアリヤの指示書に、さまざまな名前の複数の存在を呼びだすことが記されていることを思いだしてみたまえ。異次元からやってきて、また異次元にもどっていったものは、劣等な生物、つまり人間をともなってもどっていくのだろう。わたしたちには推測することもできないが、生命力か、血か、あるいはもっと微妙なものを食糧にするためにね。その目的のために、そして口を封じるためもあるのだろうが、ジョン・ドゥルーヴェンは疑いもなくビリントンの屋敷にひきずりこまれるか運びこまれるかして、ジョナサン・ビショップが詮索好きのウィルバー・コーリイに対して用いたのとおなじ恨みがかったやりかたで、生贄としてさしだされたのだよ」
「それは認めるとしましても、既知の事実には首尾一貫していないところがありますよ」わたしはいった。

「よく気づいてくれたね。そう、たしかに首尾一貫していないところがある。そこに目をむけなければならないのだが、ベイッさんは目をむけなかったので、推理に重大な瑕疵をもたらしてしまっているのだよ。仮説を展開してみよう。アリヤ・ビリントンはわたしたちにはわからないなんらかの手段によって、祖先の地所で旧支配者の伝承を確証するようなものに遭遇した。調査し、研究をつづけ、最終的に、ミスカトニック河の支流――デュワートが自分のものではない記憶から不思議にもミスクアマカス河と呼んだ支流――の島にある塔と環状列石を、意図されたとおりに使用する方法をつきとめた。用心深い男だったとはいえ、ダニッチの住民がときおり入りこむのをふせぐことはできなかった。おそらくは、それに責任があるのはビショップだと考えて、自分を慰め、また弁解していたのだろう。わたしたちが知ったように、世界じゅうから『ネクロノミコン』の筆写された断片を注意深く集めたが、同時に、自分が到達した地球外の無限の広大無辺さに、いささか神経を高ぶらせるようになった。ウォード・フィリップスの著書をあつかったジョン・ドゥルーヴェンの書評に対する怒りの爆発は、ふたつのことをあらわしている。自分の手が完全に自分のものではないと疑いはじめ、絶対に自分のものではない衝動と闘おうとしはじめていたのだ。ドゥルーヴェンに対する直接的な攻撃とドゥルーヴェンの死が、問題を頂点にまで高めた。クアミスを解雇し、『ネクロノミコン』から得た知識を用いて、ビショップが消失した後にビショップの開けたものを封印したように、自分の開けた『開口部』を封印し、そしてイギリスにわたり、森のなかの企てにおける悍しい霊的エネルギー

からはなれて、本来の生活をふたたびはじめたのだ」
「論理的だと思います」
「さて、この仮説に照らして、アリヤ・ビリントンがマサチューセッツの地所について書き記した指示書を検討してみよう」ラファム博士はベイツが書き写したものを選びだし、ひとまとめにすると、緑色の灯をつけた。「これだ。まず第一に、アリヤは『後に続きしすべての者』に対して、地所を家族の者が所有しつづけることを厳命し、つづけて、『ビリントンの森として知らるる森の中なるビリントンの屋敷として知らるる家屋に残されし書物にて、意味するところ』がつかめることを、間接的に認めてはいるものの、わざとあいまいにしたとしか思えない一連の指示を告げている。最初のはこうだ。『島の廻(まわ)りを流れる水を止めることなかれ、塔をいかようにも乱すことなかれ、石に懇願(こんがん)することなかれ』。水はひとりでに流れるのをやめ、わたしたちが知っているかぎりでは、このことによって悪い結果はなにひとつ起こっていない。塔を乱す云云(うんぬん)については、アリヤは明らかに、自分が閉じた開口部を元にもどすようなやりかたで乱してはいけないということを意味したのだろう。その閉じられた開口部というのが塔の屋根であることは歴然としている。開口部はある印の刻まれた石でふさがれたのだ。問題の石を実際に見たわけではないが、その印は、旧支配者に対して絶対的な力をもつ旧神の印、旧支配者が怖れ憎む印にちがいないし、それ以外のものであるはずがない。デュワートはアリヤがやってはいけないと指示していたとおりのことをしてしまったわけだ。最後に言及されている

懇願というのは、開口部のむこうの力と接触する第一段階に達するためにくりかえされる、ひとつ、あるいは複数の呪文を意味している。

「第二の指示だが、『怪しの時と所に通じる扉を開けることなかれ、戸口に潜みしものを招くことなかれ、丘に呼びかけることなかれ』となっている。最初の部分は石造りの塔について先になされた指示を強調しているにすぎない。二番目の文章ははじめてきわめて明確な存在について言及されたものだ。戸口に潜むものがなんであるかは、わたしたちにはわからないがね。ナイアーラトテップかもしれないし、ヨグ＝ソトースかもしれないし、べつのものかもしれない。いずれにせよ、三番目の文章は、外世界からのもののあらわれに接した、おそらくは生贄を要する儀式の参列者の第二段階について、言及したものとうけとってまちがいないだろう。

「三番目の指示は、ふたたび警告という性質をもっている。『蛙なかんずく塔と館の間なる沼地におりし食用蛙を悩ますことなかれ、蛍を悩ますことなかれ、夜鷹として知らるる鳥を悩ますことなかれ、彼のもの鍵と監視を放棄することなきようにせんがためなり』というのがそれだ。ベイツさんはこの指示の意味を推測しはじめた。この指示は単に、名前をあげられた生物が外世界からの存在を特別感じやすく、鳴き声や光のリズムで警告してくれるから、それによって準備ができるということをいっているにすぎないのだよ。名前をあげられた生物をおびやかすことは、自分の身をおびやかすことになるかもしれないということだ。

「四番目の指示では、はじめて窓が言及され、『神変する窓に触れることなかれ、窓をいかよ

うにも改変することなかれ』と記されている。どうしてだろうか。ベイツさんが書いているものから考えると、その窓には有害な性質があるらしいね。もし指示が身をまもるためのものであるなら、邪悪さを認識しているのだから、どうして窓を破壊してしまわなかったのだろう。変更をくわえられた窓が、もとのままの窓より危険なものになりかねないからじゃないだろうか」

「そこのところは、どうもついていけません」わたしは口をさしはさんだ。

「ベイツさんの話から、思いあたるふしはなにもなかったのかね」

「窓が異様なもので、ガラスがちがっているということはわかっています。明らかに、そういうふうにつくられただけのものですよ」

「わたしはその窓が窓などではなく、異次元、つまり他の時間や空間をうつす鏡か、プリズムか、レンズだと思うね。景色ではなく、朦朧とした光線を映すようにもなっているのかもしれないが、なんにせよ退化した超感覚に作用するものであって、それをつくったのは人間ではないのかもしれない。ベイツさんは二回その窓から、普通の景色以上のものを見ている」

「それをためらいがちにうけいれるとして、まだ最後の指示がありますね」

「最後のものは、すでに記された重要なことの単なる再確認で、それまでの指示が警告していることを考慮にいれれば、十分すぎるほど明瞭だよ。『塔及び島をいささかなりとも乱さず、また破壊する以外窓に如何なる手も加えぬことを証する条項を入れることなく、地所を売却あ

るいは処分することなかれ』というのだからね。ここでまた、窓がどういうわけでか邪悪な影響をおよぼすことがほのめかされ、そのことがつぎに、アリヤさえどうしてそうなるのか知らなかったようだが、窓そのものがべつの開口部になることを暗示している。外世界のものの物理的な侵入ではないにしても、外世界のものの知覚か、意識か、影響力が入りこむ開口部なのだ。きわめて明白な理由から、もっともありえそうな解釈はこういうことではないだろうか。わたしたちが知っている情報のすべてにおいて、森と同様に屋敷のなかでなんらかの影響力が作用しているのは歴然としている。アリヤは研究し、実験する衝動にかられた。ベイツさんは、デュワートが屋敷を手にいれたとき、窓にひきよせられ、窓を調べ、窓から外をのぞいてみた、といっている。そしてデュワートは森のなかの塔に入りこんだとき、屋根をふさいでいる石をとりのぞきたい衝動にかられたとも。ベイツさん自身も、あやまって『精神分裂病』としてしまったデュワートの妙な振舞や態度をはじめて目のあたりにしてからの、屋敷に対する自分の反応を書きとめている。これだ。読んでみようか。『そうして新鮮な風を全身に感じながら立っていたわたしは、つのりゆく圧迫感、魂もくだかれるような絶望感、怖ろしいまでの不潔感、森にかこまれるこの屋敷のたけだけしいばかりの暗澹たる邪悪感とともに、突如として、ものみなにじりじりと浸透する、人間の魂の深奥の忌わしさを痛切に意識した……。邪悪、恐怖、忌わしさという不安が、部屋のなかにわだかまっていた。壁という壁から目に見えない霧のようにふきだすのが感じられた』。つけくわえれば、ベイツさんも窓にひきよせられている。そ

して、まだ屋敷に来て早早のことだったから、比較的公平無私な視野から、従兄に作用している積極的な影響力を観察することができたのだ。ベイッさんはそれを、正確になんらかのたぐいの心のなかの『葛藤』だと診断して、『精神分裂病』というレッテルをはっているが、これは明らかにまちがっているね」

「そう断定的になられることで、飛躍してらっしゃるんじゃありませんか。二重人格のように思えるんですが」

「いやいや、そんなことではないよ。それこそ、あまりにも知らなさすぎるという危険なのだ。気分が表面であらそっているということ以外、なんの症状もないからね。アンブローズ・デュワートは、明らかに、最初はむしろ愛想もよく、のんきに暮す紳士で、時間をつぶすためにあれやこれやをのんびりと調べていた。やがて、なんであるかがわからないまま、なにかを意識するようになり、不安をつのらせた。その結果、従弟のベイッさんに手紙を送っている。ベイッさんはアンブローズが変化しているのを知った。ベイッさんがいると、デュワートは不安そうにして、まもなくはっきりした敵意を示すようになった。アンブローズはまえの自然な状態につかのまもどることもあり、冬のあいだボストンに逗留しているときはその状態がつづいた。しかし先月森のなかの屋敷に帰ったとたん、以前の敵意がまたむきだしにされた。ベイッさんは意識していないようだが、敵意はまもなく用心深さにかわっている。ベイッさんはそれに対して、歓迎されたり、まったく逆の態度を示されたりしていると思っているらしいね。そして

アンブローズの心のなかの葛藤に気づいて、きみとおなじように、ほとんど知識のない心理学の言葉をつかい、精神分裂をほのめかしているのだ」
「きわめて明白だと思うね。知性をふりむけるものだよ。アリヤに作用し、アリヤがふりきったものとおなじだ」
「外界からの影響だとおっしゃるんですね。どんな性質のものなんですか」
「旧支配者の一員でしょうか」
「いや、その証拠はないね」
「でも暗示されてはいるんでしょう」
「いや、暗示されてさえもいないね。明白に暗示されているのは、旧支配者の媒介者の影響なのだよ。きみもベイツさんの原稿を入念に読んでみれば、その暗示を見つけられるだろう。そそぎこまれた影響力は本質的には人間的な性質をもっているものなのだ。もし旧支配者自身がビリントンの屋敷内で作用している影響力を活潑化しているのなら、そそぎこまれる影響力は、すくなくとも一度くらいは、非人間的なものになるのではないだろうか。それを示すものはなにもないからね。屋敷や森について、汚ならしさや悍しさや邪悪さの印象をベイツさんにあたえたものが、なにか異界的なものであるなら、ベイツさんの反応が根本的に人間的なものであったはずもないだろう。ベイツさんはそのとき、まさしく人間的といっていい反応に圧倒されたのだからね」

わたしはこのことを考えてみた。ラファム博士の理論はいかにも堅固なもののように思えたが、たとえそうだとしても、明確な瑕疵があるような気がした。博士はデュワートとベイッに作用している「影響力」がアリヤ・ビリントンにも作用していたことを示唆している。もしその「影響力」が博士が措定するように人間に源を発するものなら、一世紀以上の歳月にわたるものということになる。わたしは注意深く言葉を選んで、この点を指摘した。

「そう、そのとおりだよ。しかし矛盾するとは思わないね。その影響力が地球外に源をもつことを忘れてはいけないよ。地球外であると同様に次元外のものでもあるのだ。したがって、人間であると否とにかかわらず、旧支配者とおなじように、地球の物理的な法則を超越しているのだよ。つまり、その影響力が人間的なものであるとして、わたしたちと同一延長の時空のなかにも存在するが、それだけに限定されてはいないということだ。ビリントンの屋敷に住む者に時間と空間がおよぼす制限に甘んじることなく、さまざまな次元に存在する能力をも有しているのだよ。ビショップやビリントンやデュワートが呼びだした存在の犠牲になった不幸な者たちが、わたしたちの次元におとされるまえに身を置いた、さまざまな次元に存在しているのだ」

「デュワートですって」

「デュワートもだよ」

「最近ダニッチで起こっている不思議な消失事件が、デュワートのせいだと暗にいってらっしゃ

るのですか」わたしは驚いてしまった。

ラファム博士はいくぶんあわれむように首をふった。「いや、暗にいってるのではない。明白な事実としてだ。きみが偶然の一致という不愉快な土台にたちかえりたいのでないかぎりはね」

「そんなことはありません」

「よろしい。考えてもみたまえ。ビリントンは環状列石と石造りの塔に行き、『扉』を開けた。森のなかで音が、ビリントンとはまったく無縁の者たちやビリントンの息子のラバンに聞かれ、ラバンはその音について日記に書きとめている。この現象はつねに、一、失踪、二、異常ではあるが数週間あるいは数カ月後の発見をともなっていて、両者ともまだ解決されていない。ジョナサン・ビショップは手紙のなかで、環状列石に行き、『そのものを丘に呼びて環に入れたれど、非常なる困難をもってこれを致さば、環は長く留めおくほど強力なかりしかとおぼゆ』と記している。その後も、ビリントンの行為に類似する状況下で、同様の奇怪な消失と再現が起こった。こういう一世紀以上もまえの出来事が、この現代でもくりかえされている。アンブローズ・デュワートは眠りながら塔へ歩いていった。夢のなかで、信じられないほど悍しく怖ろしいものを意識した。外界からの影響力にとりつかれているが、そのことに気づいていない。こういう事実を考慮にいれてもなお、デュワートが石造りの塔に行って血痕と思われるものを発見してから、失踪と再現が報告されているのを、偶然の一致にすぎないと思うような公平な観

察者がいると思うのかね」
わたしは、一連の類似した事件を説明するため、偶然の一致を導入する解釈が、ラファム博士のもちだす解釈とおなじくらい風変わりなものであることを認めた。わたしは混乱し、大いに心さわがせられていた。セネカ・ラファム博士は考え方の幅も広く、きわめて博識な人物で、その博士が絶対的な知識からかけはなれたなにかを支持すると、博士を尊敬する者は底知れない衝撃をうけてしまう。明らかに、ラファム博士にとっては、提出する仮説はことごとく推測以上のものを土台にしていて、それは真疑を超越する信念にかかわっているものなのだ。しかし博士がなんの疑問ももっておらず、とりあつかう主題とその背景についての該博な知識を確信しているのは明白だった。
「きみは自分自身の思考にとらわれているようだね。それなら、今晩おたがいに考えぬいて、明日にでも照らしあわせてみようじゃないか。きみにはここにある何冊かの書物の、わたしが印をつけた箇所を読んでもらいたいが、『ネクロノミコン』だけは、今晩図書館に返却しなければならないから、ここでいま目をとおさなければならないよ」
わたしはただちに『ネクロノミコン』をまえにして、ラファム博士が印をつけた奇妙なふたつの部分にとりくみ、読みながらゆっくり翻訳した。いずれも、絶えることなく待ちながら横たわっている、慄然たる外世界の存在をほのめかすくだりだった。事実、アラブ人の著者は「待ちながら横たわりしもの」として言及し、名前をあたえていた。最初のくだりのなかほど

の部分が、圧倒的な力でわたしにせまってきた。

ウボ＝サスラは忘れられざる源なり。ベテルギウスより支配致せし旧神にあえて刃向いし者等、即ち旧神に挑みし旧支配者はウボ＝サスラより出けり。旧支配者、盲目にして白痴の神なるアザトース、並びに全にして一、一にして全なるもの、時間或いは空間の如何なる制限をも受けず、地上においてウムル・アト＝タウィル及び古のものどもの顕現をとりたるヨグ＝ソトースに唆されたればなり。旧支配者、地球並びに全宇宙を再び支配せん来るべき時を永遠に夢に見つづけん……。大いなるクトゥルーはルルイエより昇らん。名づけられざるものハスターはヒヤデス星団中アルデバラン近くの暗黒星より再来致さん。ナイアーラトテップは潜み棲みし闇の中に永遠に咆哮し続けん。千匹の仔を孕みし森の黒山羊なるシュブ＝ニグラスは仔を産み続け、なべての森のニュンペー、サテュロス、レプレコーン、矮人族を支配せん。ロイガー、ツァール、イタカは星間宇宙を飛び、トゥチョ＝トゥチョ人なる従者の地位をひきあげん。クトゥグァはフォマルハウトより領土を取巻かん。ツァトゥグアはンカイより現れん……。時が近づき、刻限が間近に迫りながら旧神旨寝をむさぼりたれば、旧支配者門にて永遠に待ち続けたり。旧支配者既に従者に外世界からの扉の前にて待てやと命じることを得れば、旧神によりて旧支配者に課されし呪文を知り、呪文を破る方途を知りたる者おるを、旧神知らず、熟睡の内に夢を愉みたり。

二番目の箇所はすこしうしろのほうにあり、おなじように力強いものだった。

魔女、悪鬼に対して身の護りとなるもの、深きものども、ドール、ヴーアミ、トゥチョ＝トゥチョ人、忌わしきミ＝ゴ、ショゴス、ガースト、ヴァルーシア人、並びに旧支配者及びその落とし子に仕える同様の人種、はたまた生物に対して身を護るものは、古代ムナールの灰白色の石より刻まれたる五芒星形の内にあるも、こは旧支配者に対しては力足らざり。この五芒星形の石を所有する者、戻る道なき源にまで飛び、歩み、這い、泳ぎ、忍びゆくなべての生物を意のままにすることを得ん。ルルイエにてもイヘエにても、ヨスにてもイハ＝ントレイにても、ゾティークにてもユゴスにても、クン＝ヤンにてもンカイにても、ハリの湖にても凍てつく荒野のカダスにても、イブにてもカルコサにても、五芒星形力を発揮したり。しかれども星が弱まり冷えこみし時、太陽が消え星の間の空間広がりし時、なべての力も弱まらん。五芒星形の力も、恵み深き旧神によりて旧支配者に課されし呪文の力もこの例にもれず。かかる時、かつての時と同じ時訪れ、次の聯句が立証されん。

そは永久に横たわる死者にあらねど
測り知れざる永劫のもとに死を越ゆるもの

わたしはミスカトニック大学付属図書館からもちだすことが禁じられている写本のコピーや

他の本をたずさえて家に帰り、その夜を徹して読みふけった。奇怪かつ怖ろしい本文に没頭した。『ナコト写本』、『セラエノ断章』、シュリュズベリイ教授の『ルルイエ異本を基にした後期原始人の神話の型の研究』、その『ルルイエ異本』、ダレット伯爵の『屍食教典儀』、『エイボンの書』、フォン・ユンツトの『無名祭祀書』、ルドウィク・プリンの『妖蛆の秘密』、『ドジアンの書』、『ドール讃歌』、『フサンの謎の七書』に目をとおした。口にはできない形態で、現代もなお地球の辺境地に残存している、人類誕生以前の怖ろしくも冒瀆的な邪教崇拝について読んだ。アクロ、ナアカル、ツァト＝ヨ、チアンという名前をもつ、先行人類の黝い言語についての記述を熟考した。マオとかロヤティクとかいう徹底して邪悪な祭儀や「遊戯」についての慄然たる暗示にでくわした。信じられないほど古い地名を何度となくくりかえし目にした。ナスの谷間、ウルタール、ンガイ、ングラネク、オオス＝ナルガイ、凶運都市サルナス、トロク、インガノク、キタミール、レムリア、ハテグ＝クラ、コラツィン、カルコサ、ヤディス、ロマール、イアン＝ホー等等。信じられないほど悍しい恐怖の悪夢に名前が記された、他の存在にもでくわしたが、あの地獄めいた伝承の光に照らしてのみ説明できる、奇怪かつ信じがたい事件の記述が付随していたので、その怖ろしさはひとしおだった。怖るべき蛇神イグ、蜘蛛の姿をしたアトラク＝ナクア、ラーン＝テゴスとしても知られる「毛むくじゃらのもの」グノフ＝ケー、吸血鬼のように「血をすするもの」チャウグナル・ファウグン、時間の角度をうろつくティンダロスの地獄の猟犬、そして全にして一、一にして全であるもの、

原初的恐怖をうちに隠す虹色の球体の集積物として偽りの見せかけをとる、ばけものじみたヨグ＝ソトースについての記述に、奇怪な名前、聞きおぼえのある名前、悍しい描写、想像することもできない暗示を見いだした。人間が知るべきでないこと、想像力のたくましい者なら正気が失われるようなこと、破棄されるほうがよいことを読んだ。旧神の支配に公然と反抗したため、旧神によって、ベテルギウスの星の王国から永遠に追放された旧支配者が、地球の支配を奪回するという怖ろしい最終結果とおなじように、こういった知識をもつこと自体、人間にとってこのうえなく危険なことであるかもしれない。

　わたしはその夜の大半を徹して読みふけり、読みおわってからは、目をさましたままベッドに横たわり、吐き気をもよおすような怖ろしい記述について考えこんだ。本から読みとっただけでなく、人類学の知識において現代にかなう者のないセネカ・ラファム博士からも、グロテスクかつ暗澹たる神話の生物についてくわしく聞かされていたため、そういう生物のなまなましい姿が無意識の作用によって夢にあらわれるかもしれないので、眠りこむのが怖ろしかった。それに、感情がはげしくゆり動かされて、眠るどころではなかった。さまざまな身の毛もよだつ稀覯書によって明らかにされた概念は、あまりにも広大で、すべてを慄然たる恐怖のうちにつつみこむものであるため、わたしは意識的な努力をすべて、普段の精神状態をとりもどす方向にむけていた。

　わたしは翌朝いつもより早くラファム博士の研究室に行ったが、博士はすでに研究室に来て

いた。もうかなりまえから机についているらしく、机の上は、まったく異界的な図や地図や表や文章を記した紙でおおわれていた。

「全部読んだんだね」わたしが借りてかえった本を机のかたすみに置くと、博士がいった。

「徹夜しましたよ」

「わたしもはじめてこういった本を見つけたときは、毎晩夜を徹して読みふけったものだよ」

「もしこういったことがごくわずかでも真実なら、時間と空間についての概念や、ある程度までは人間の起原さえも修正しなければなりませんね」

ラファム博士は平然とした顔つきでうなずいた。「わたしたちの知識のほとんどが、地球のものではない知性に直面すれば証明することもできない、根本的な信条に基づいていることは、科学者でも知っているよ。おそらく最終的にはその信条を変更しなければならないだろうね。わたしたちが一般に『未知』と呼ばれるものにおいて直面しているものは、こういった書物が存在するにもかかわらず、まだ推測の域をでていないのだから。しかしなにかがこの世界の外側に存在することは疑いようがないと思うよ。この神話は悪の力と同様に善の力も入れる余地をもっている。きみもよく知っているから、あまりにも細部にわたって強調する必要のない、キリスト教、仏教、回教、儒教、神道といった特定の他のパターンとおなじようにね。事実、既知の宗教パターンはすべて共通しているのだよ。わたしが特にこの神話に関して、この世のものならぬ外界の生物の存在を認めなければならないという理由は、きみにもわかるとおり、

それをうけいれることによってのみ、こういった書物の付随資料に記録されている奇怪で怖ろしい現象ばかりか、普通は公表がおさえられているが、毎日のように世界じゅうで起こっている、人間のもつ科学知識全体に矛盾する、膨大な量の事件をも説明することができるからなのだ。そういった事件の一部は、あまり名前の知られていないチャールズ・フォートという人物が収集して、二冊の驚くべき著書に記録している。きみもいつか目をとおしたほうがいいね。

「人間の観察者があまりあてにはならないという、よく知られた事実を考慮に入れて、二、三の事実を考えてみようか。わたしはよく考えたうえで『事実』といっているのだよ。一八六三年から翌年にかけて、ロシアのブスチョフ、ピリツファ、ネルフト、ドルゴヴディで、空から石が落ちてきた。その石からは地球上の既知の物質は見いだせず、『褐色の斑のある灰白色』をしていたという。何度となく言及されるムナールの石も『灰白色の石』と描写されることを強調しておこう。同様に、数年まえイギリスのバーミンガムに落ち、ひきつづいてウルヴァハンプトンに落ちたローリイの割石も、外は黒色だが、内部は灰白色だった。

「また、一八九三年に英国汽船キャロライン号が、船と中国の海岸近くの山のあいだに、『光球』が見えたことを報告している。その光は『球状』で、山の高さとは関係なく、また山からはなれた空にうかんでいたそうだ。そして北方へ移動していて、二時間ほど観察された。その光は翌日の夜も見られ、二月二十四日と二十五日のふた晩つづけて目撃されたわけだが、ふた晩とも、午後十一時ごろにあらわれたという。その光は反射光を放ち、望遠鏡では薔薇色をし

ているように見えた。ふた晩目も、最初の夜とおなじように、キャロライン号から目撃されたとおりの動き方をしたらしい。しかしふた晩目には、この現象は七時間もつづいた。おなじような現象は、英国汽船リアンダー号の船長も報告しているが、その船長は光が真上に上昇して消えてしまったといっている。その日から十一年後の二月二十四日には、アメリカ汽船サプライ号の乗組員が、それぞれ大きさはちがうものの、すべて『球状』の三つの物体が『同時に』上昇していくのを目撃し、重力の影響をうけていないらしいと報告した。一方、同様の光球はミズリー州トレントン近くで列車の乗客が何人も目撃して、鉄道の郵便係が一八九八年八月号の『マンスリー・ウェザー・レヴュウ』に目撃談を寄稿しているが、その光は雨がふっているあいだじゅうあらわれ、ものすごい東風が吹いているにもかかわらず、列車とおなじ北方に向かって速度と高度をかえながら移動しつづけ、アイオワの小さな村に近づくと、消えてしまったという。一九二五年のとりわけ暑い八月には、サク・プレイリーという村のウィスコンシン河にかかる橋を歩いていた若者ふたりが、十時ごろの夜空に、アンタレスが位置する東からアルクトゥルス近くの西にまで、南の地平線を特異な光の帯がつづき、『丸くなったり、卵形になったり、菱形になったりする黒い光の球』がその光の帯を横切るのを見ている。このはるかな物体が南東から北西にわたって光の帯全体をわたっていったあと、光の帯は弱まり、消えてしまったというのだ。こういったことからなにか思いあたるふしはないかね」

わたしはつのりゆく確信に圧倒されて、喉がからからにかわいていた。「旧支配者の一員が

『虹色の球体の集積物』のような外見をとるということだけです」

「いかにもそのとおりだ。わたしはこういった事件が説明づけられるといっているのではない。しかしそうだとするなら、またしても、説明のために偶然の一致というやつをうけいれざるをえなくなってしまう。旧支配者についての記述は、三十年ほどの期間から選んだこういうそれぞれ別個の現象よりも、何世紀も古いのだからね。最後に、自発的な失踪や飛行機の消失などはべつとして、不思議な消滅事件をとりあげてみよう。

「たとえばドロシー・アーノルドだ。彼女は一九一〇年十二月十二日に、五番街と七十九丁目のあいだにある、セントラル・パークの入口付近で姿を消した。まったくなんの動機もなかった。その後姿をあらわすことはなく、身代金(みのしろきん)が要求されることもなければ、彼女が失踪したことで家族がなにかを得るということもなかった。

「同様に、『コーンヒル・マガジン』は、ウィーンのフランツ皇帝の宮廷に英国政府を代表してあらわれたベンジャミン・バザーストが消失したことを記録している。バザーストは近侍(きんじ)と秘書をつれて、ドイツのペルレベルクでつかうつもりの馬を調べ、反対側にむかおうとしたとたん、消えてしまった。それ以後、行方はまったくつかめていない。一九〇七年から一九一三年にかけては、ロンドンだけで、三千二百六十人の者が謎の失踪をとげ、ふたたび姿をあらわすことはなかった。ミシガン州のバトル・クリークにある製粉工場で働いていた青年は、工場へ入ろうとしたところで消えている。一九〇〇年一月五日付の『シカゴ・トリビューン』が、

この青年、シャーマン・チャーチの事件を報道しているよ。シャーマン・チャーチの姿も二度と見られることがなかった。

「アンブローズ・ビアースの場合には怖ろしさが感じられる。ビアースはカルコサとハリをほのめかし、メキシコで姿を消しているのだ。メキシコの戦争で銃弾をうけたともいわれているが、失踪したときはまったく病弱で七十歳をこえる年齢だった。それ以後、ビアースの消息はぷっつりととぎれている。一九一三年のことだよ。一九二〇年には、ロンドン南部を歩いていたレオナード・ワドハムが、通常の感覚がなくなるという怖ろしい瞬間があった後、突然三十マイルはなれた場所に、自分ではまったく理解できない方法で移動していたという。

「しかし、アメリカ、それもマサチューセッツ州アーカムに目をむけてみよう。一九一五年九月のことだが、カーウェン・ストリート九三番地に住むラバン・シュリュズベリイ教授がアーカム西部の小道を歩いているあいだに、忽然と姿を消している、すくなくとも三十年間は家に手をつけてはならないという指示がのこされていたから、なにか予期していたように思えるね。しかし動機はなく、足取りもつかめなかった。意味深いことに、シュリュズベリイ教授はニューイングランドでは、わたしたちがいまあつかっている問題や類似する地球上や宇宙の諸問題に、わたし以上に精通している唯一の人物だったのだよ。それはそれでいい。例にだしたこういう現象は、記録にのこる同様の現象に比例して、百万に対する無限小の割合で存在するにすぎないからね」

口早に物語られた一連の奇妙な事実をしばらく総合的に考えてから、わたしはラファム博士にたずねてみた。「こういった稀観書に記されているものが、このあたりで過去二百年以上にわたって起こっている事件について解答を提供してくれるものだとして、おそらく石造りの塔の屋根の開口部がそうだと思われる戸口に、いったいなにが潜んでいるとお考えなんですか」
「わからないのだよ」
「でも、推測なさっているんでしょう」
「ああ、推測はしている。きみはあの風変わりな文書、『ニューイングランドにて異形の悪魔のなせし邪悪なる妖術につきて』をもう一度読んでみるべきだね。『リチャード・ビリントンなる者』が『森の中にて大いなる環状列石を築き、其の中にて悪魔……への祈り挙げ、聖書が忌むべき所の魔術典礼を取り行いたり』の箇所だ。これはおそらくビリントンの森にある塔をとりかこむ環状列石のことだろう。さて、この文章は、リチャード・ビリントンが恐怖を感じ、結局は自分が夜の空から呼びだした『物』に『喰い尽され』たことをほのめかしている。しかしそれが事実であるという証拠はどこにも記されていない。インディアンの賢人であるミスクアマカスは、かつてビリントンの環状列石の中心にあった窩に『呪文に依りて魔物』を封じこめ、言葉は読めないが、おそらくは『平石』か『石』でその上をおおったのだろう。文書によれば、その『平石』か『石』には『旧神の印』が刻まれていたということだ。文書は封じこめられたものをオサダゴワアと呼び、『サダゴワアの仔』と説明しているが、これからはただち

に、わたしたちが検討している神話にあらわれる、あまり知られていない実体が連想されるね。ツァトゥグアだよ。ツァトゥグアはズォタグアとしてもソダグイとしても知られているが、人間にはまったく似ておらず、いささか可塑（かそ）的な変幻自在の黝（かぐろ）い存在で、原初に崇拝されていたとされている。しかしミスクアマカスがあえて口にした姿は、一般にうけいれられているものとはちがい、『蟇（ひきがえる）にも似て小さく硬き事も有らば、定まった体無きものの、蛇（くちなわ）の生えたる貌（かお）を有して雲のごとく大きくなる事も有らん』となっている。この貌についての描写はクトゥルーにもあてはまるだろうが、クトゥルーは水のある場所、とりわけ海か、ミスカトニック河の支流以上の海に通じる場所にあらわれる。

「またナイアーラトテップの特定の顕現（あらわれ）にもあてはまるが、こちらのほうはそれらしい感じがするね。ミスクアマカスは明らかに正体を見あやまり、リチャード・ビリントンの運命についてもまちがいをおかしているのだ。リチャード・ビリントンが例の開口部、つまりアリヤが子孫にあてた指示書で言及している戸口を超えて、外世界に行ったことを示す証拠があるからね。その証拠はきみの祖先の著書にあるのだよ。アリヤはそのことを知っていた。リチャードは姿をかえてもどり、人間となんらかの交わりをしたのだ。こういったことの多くは、伝説としてダニッチの住民に知られているが、ダニッチの住民は、自分たちの祖先を手ほどきして教えたリチャード・ビリントンの実践（じっせん）した儀式や神話を、なんらかのやりかたで知っていると考えられる。ベイツさんは原稿で、ビショップ夫人の『御主人さま』についての話を再現している

ね。しかしビショップ夫人にとって、『御主人さま』というのはアリヤのことではない。これはベイッさんがビショップ夫人と話すまえでさえ、ベイッさん自身の原稿やすべての文章からも明白だ。ビショップ夫人はこういっている。『アリヤはあれを閉じこめ、あの長い月日のあとでもどろうとなさっとった御主人さまも、そこに、外側に、閉じこめてしもうたんじゃ。ほとんどの者は知らんかったが、ミスクアマカスは知っとった。御主人さまはこんあたりを歩かれたが、たくさんのお顔であらわれられたんで、しかと御主人さまであると見きわめた者は誰もおらんかった。御主人さまはウェイトリイの顔、ドテンの顔、ジャイルズの顔、コーリイの顔をとられ、ウェイトリイやドテンやジャイルズやコーリイの家族のなかにおられたが、ウェイトリイとドテンとジャイルズとコーリイ以外は御主人さまであることもわからんかったんじゃ。御主人さまは寝食をともにして話もなされたが、外側におられたときゃ、たいそう大きかったから、こっちでとりなさった体に全部おさめることができず、衰弱して死んでしまわれた。アリヤだけが御主人さまをだしぬいたんじゃ。御主人さまが死んでから百年以上もあとで、御主人さまをだしぬいたんじゃ』。どうだろう。なにか思いあたるふしはないかね」

「まったく理解に苦しみますよ」

「よろしい。理解できないはずはないのだが、わたしたちは誰しも、記憶にある知識のたくわえに応じて、論理的かつ合理的であるものに基づいた思考パターンに、ある程度までしばられているからね。リチャード・ビリントンは自分のつくった開口部を通りぬけていったが、べつ

の、おそらくはジョナサン・ビショップがやったのとおなじような行為でつくられた開口部をとおって、もどってきたのだよ。そしてさまざまな者にとりついた。つまり人間のなかにはいりこんだということだが、外世界に存在したことから、すでに変身していた。その第二の形態における彼の存在のすくなくともひとつの結果が、きみの祖先の著書に記録されている。きみの祖先はドテンという主婦が一七八七年の聖燭節近くの日に出産したことにふれ、産みおとされた生物が『獣に非ず、人間に非ず、然れど人間の顔を備えし蝙蝠に似たる物の怪……なり。声はあげず、害ある眼にて四方眺めたるとや。ニューダニッチにて魔物と通じたる後、姿を晦ましたるリチャード・ベリンガム或いはボリンハンの顔に、実に驚くべきほど似たると誓いて申すらく者等も有りけん』と描写している。リチャード・ベリンガムあるいはボリンハンというのは、もちろんリチャード・ビリントンのことだ。それはよいとして、おそらくリチャード・ビリントンは肉体的な姿か霊的な姿でダニッチに存在しつづけ、一世紀以上にわたって、つまり自分の家系の者がふたたびビリントンの森の屋敷に住みつくまで、あのあたりで発生している恐怖——肉体上の『退化』あるいは『堕落』の証拠として簡単にかたずけられてきた怖るべき変異——になんらかの役割をはたしてきた。そしてリチャード・ビリントンにほかならない力、つまりビショップ夫人の話やダニッチの伝説や伝承における『御主人さま』が、ふたたび積極的になり、最初の開口部を回復しようと試みたのだ。明らかにリチャード・ビリントンにほかならない外部のものからの示唆によって、アリヤは古い記録や文書や書物を調べはじめ、

最終的には環状列石を修復した。列石の一部を塔の修復に用いたのかもしれない。塔の一部がほかの部分より古い事情はこれで説明がつく。当然アリヤは旧神の印の刻まれた灰白色の石をとりのぞき、デュワートとインディアンがベイツさんを説得して運ばせたのとおなじように、その石をどこかはなれたところにうつしたのだろう。こうして開口部がふたたび開けられ、奇妙な、疑いもなく顕著な争いがはじまった。その記録がのこっていればいいのだがね。リチャード・ビリントンは自分の目的が達成されたのを知ると、第二の目的、つまり自分の屋敷でアリヤという人物のなかにはいりこみ、この地球上での中断した生存を再開する企てを実行しようとしたのだ。しかしリチャードにとって不運なことに、アリヤはリチャードの第一の目的を実現しただけではおわらなかった。研究をつづけ、リチャードが見つけられると思った以上の『ネクロノミコン』の断片を手にいれ、自分の意志でさらに先へ進み、外世界から特定の存在を招喚し、その存在がどんな目的をもっているにせよ、その存在がダニッチで猛威をふるうにまかせた。しばらくこのやりかたをつづけていたが、一方でフィリップスとドゥルーヴェンと反目し、またもう一方でリチャード・ビリントンの意図を十分に意識するようになると、自分が呼びだした存在と、同様にリチャード・ビリントンの力を外世界に送りかえし、新しい開口部を旧神の印がある石でふさぎ、屋敷をあとにして謎めいた指示だけをのこした。しかしリチャード・ビリントンのなにかがたたずみ、御主人さまのなにかがのこり、そのためにまたしても一世紀後に、リチャード・ビリントンの目的が実現された」

「それなら、あそこで作用している影響力というのは、アリヤではなしにリチャード・ビリントンなんですね」

「疑問の余地はないね。それを示すものがいくつもあるよ。リチャードは姿を消して、ふたたびあらわれることがなかった。アリヤはイギリスで亡くなっている。そのリチャードにとりつかれているデュワートを見て、ベイツさんは二重人格の証拠だとあやまって考えたわけだ。リチャードは性格的に弱いデュワートにとりつくことができたのだろう。最後に、このうえもなく呪わしいささやかな証拠がひとつある。リチャード・ビリントンは、外世界のものがしたがう制限におなじようにしたがわなければならないほど、外世界のものと通じあっていた。つまり、旧神の印の支配をうけるということだ。さて、インディアンが夜明けまえにあらわれた日のことだが、デュワートがベイツさんの助けを必要としたことはきみもおぼえているね。それは旧神の印のある石を運んで埋めることだった。デュワートはあえてベイツさんにひとりでもちあげさせた。ベイツさんはもちあげた。デュワートもインディアンも指一本かさなかったことに注意したまえ。ふたりともその石にはあえて指一本ふれなかったのだよ。その理由は、アンブローズ・デュワートはもはやアンブローズ・デュワートではなく、リチャード・ビリントンになっていて、インディアンのクアミスは、アリヤに仕えた、さらに一世紀まえにはリチャードに仕え、二百年以上まえにはじまった恐怖をまたはじめるため、怖ろしくも冒瀆的な外世界の空間から呼びもどされたインディアンにほかならないからなのだ。わたしがまちがっていな

いのなら、邪悪な目的を防ぎ、くいとめるために、迅速に行動する必要がある。ベイツさんは三日後にボストンへ帰る途中でここに立ちより、もっと多くのことを話してくれるだろう。立ち去ることが許されるならの話だが」

ラファム博士の懸念は三日もたたないうちに実現してしまった。

スティーブン・ベイツの失踪については、公式な発表も報道もなかったが、郵便配達夫の手によって、ひきちぎられた一片の紙が届けられた。郵便配達夫は、アイルズベリイ街道でひろい、ラファム博士宛になっているのでもってきたのだ、といった。ラファム博士は黙って読み、読みおわるとわたしに手渡した。

おそろしくあわてて記したらしいなぐり書きで、何箇所か紙がつきやぶられているので、おそらく最初は膝の上において書き、そのあと木の幹にでも押しあてて書いたものと思われる。

ミスカトニック大学ラファム博士。ベイツ。かれはあれにわたしを襲わせました。最初はなんとかきりぬけました。見つけられることはわかっています。最初は太陽と星です。つぎにはにおいです。神よ、なんというにおいなのか。あるものが長いあいだ燃えているようなにおいです。異様な光を見て走りました。道路にたどりつきました。あれがわたしを追っている音が聞こえました。木をさわがせる風のようです。つぎがにおいです。太陽が

爆発し、ばらばらのものがひとかたまりになってやってきたのです。神よ！　不可能です……

これだけだった。

「明らかにベイッさんを助けるのは手遅れだね」ラファム博士がいった。「ベイッさんを捕えたものに出会わないことを願いたいものだが」不吉そうにつけくわえた。「わたしたちの力ではおぼつかないからね。唯一のチャンスは、呼びだされたものが外世界にもどっているあいだに、ビリントンとインディアンをつかまえることだよ。あれは呼びだされないかぎり来ることはないだろう」

ラファム博士はしゃべりながらも机の引出をあけ、皮製の腕輪とも腕章ともつかないものをふたつとりだした。最初は腕時計かとも思ったが、よく見ると、卵形の灰白色の石がつけられた皮製の帯だった。石には奇妙な模様が刻みこまれていた。おおむね五つの角のある星形をしていて、その中央には両端が切れた菱形があり、なかに炎の柱らしきものがあった。ラファム博士はひとつをわたしに手渡し、のこるひとつを自分の手首にはめた。

「どうするんですか」わたしはたずねた。

「あの屋敷へ行って、ベイッさんの行方をきく。危険かもしれないがね」

ラファム博士はわたしが抗議するのを待ったが、わたしはなにもいわなかった。わたしは博

士の例にならい、腕輪をはめると、ドアを開けた。
　ビリントンの屋敷には人のいる気配はなかった。窓のいくつかには鎧戸がおろされ、大気はひんやりしていたが、煙突から煙はでていなかった。わたしたちは車を玄関まえにとめて、敷石道を歩いて玄関にむかい、ドアをノックした。返事はなかった。わたしたちはさらに強くノックした。そうしてノックしつづけていると、いきなりドアが開き、鷲鼻をして髪が燃えるように赤い中背の男が立っていた。肌はほとんど褐色といえるほど黒く、鋭い眼差でわたしたちを疑わしそうに見つめた。ラファム博士はすぐに名前を告げた。
「スティーブン・ベイツさんを探しているんですが、ここにいらっしゃるとうかがいましたので」
「残念ですが、まえはいたんですが、先日ボストンに帰りましたよ。ボストンに家があるんです」
「よろしかったら、ボストンの住所を教えていただけませんか」
「ランドル・プレイス十七番地です」
「どうもご親切に」ラファム博士はそういって、片手をさしだした。
　デュワートはこの不必要な儀礼にいささか驚きながらも、さしだされた手を握ろうとした。ところが、博士の手にふれたとたん、しわがれた悲鳴をあげてとびさがり、片手でドアにすがりついた。デュワートの顔にあらわれた変化は見るも怖ろしいものだった。さきほどまでの疑

惑が、いいようのない憎しみと当惑した怒りにかわった。さらに、目には認識の光があった。しかし一瞬のことにすぎなかった。つぎの瞬間、ドアはものすごい力で閉められた。なんらかの方法で、デュワートは博士がつけている不思議な腕輪に気づいたのだ。

ラファム博士は動じるところのない平静さで車にひきあげた。わたしが運転席についたときは、腕時計に目をむけていた。

「もうすぐ夜だ。時間はあまりない。デュワートは今晩塔に行くはずだよ」

「あれは警告の意味でなさったんでしょう。どうしてですか。デュワートに知らせないほうがいいんじゃありませんか」

「知っていていけないという理由はないよ。知らせておくほうがいいのだ。しかしこんなことを話して時間を無駄にしてはいけない。夜になるまえにやらなければならないことがたくさんあるからね。日没まえにまたここへ来たいのだよ。今晩必要なものを得るためには、アーカムにもどらなければならない」

日が沈む三十分まえに、わたしたちはビリントンの森を歩き、屋敷からは見えない西のはずれから塔をめざしていた。すでに黄昏が下生えの密生する森の地面をおおい、わたしたちの足を急がせた。わたしたちは重装備をしていた。ラファム博士はなにひとつ忘れなかった。シャベル、角灯、セメント、水をたっぷりいれた大きな水差、どっしりしたバール、その他同種のものをたずさえていた。それにくわえて、ラファム博士は銀の弾丸を装填した妙に古めかしい

着装武器をたずさえ、ベイッが記した旧神の印のある灰白色の大石を埋めた場所を示す地図をもっていた。
　森のなかで不必要な会話を避けるため、ラファム博士はデュワート――つまりリチャード・ビリントン――とインディアンのクアミスが、日が沈みしだい塔にやってきて、地獄めいたことをおこなうはずだと説明してくれていた。そのときまでにやらなければならないことはあらかじめうちあわせてあった。すみやかに平石を見つけだし、掘りおこさなければならない。セメントをこねあげなければならない。そのあとに起こることは、ラファム博士しだいということになる。博士はなにがあっても絶対に邪魔をせず、ためらわずに命令にしたがうようにといっていた。わたしは怖ろしい不安を感じていたが、そうしますと約束した。
　わたしたちはようやく塔の近くにつき、ラファム博士はベイッが石を埋めた場所をすぐに見つけだした。わたしがセメントをこねているあいだに、博士はやすやすと平石を掘りだした。太陽が沈んでほどないうちに、わたしたちは監視をはじめ、夕闇が夜にかわるのを待った。やがて塔のむこうの東の沼地の方角から、悪魔めいた両棲類の鳴き声がわきおこり、沼地の上では光がはげしく明滅して、無数の蛍の存在を告げていた。蛍のはなつ青白い光は、オーロラのように輝いていた。そしてわたしたちをとりかこむ森のなかで、夜鷹がこの世のものならぬ奇怪な歌をうたいはじめた。すべてがひとつにとけこんでいるようだった。
「近くにいるのだよ」ラファム博士が不吉そうにささやいた。

夜鷹と蛙の鳴き声は怖ろしいほど高まり、夜を狂った不協和音でみたし、わたしは、もうこれ以上異様な地獄さながらの騒音に耐えられないのではないかと思ったほどだった。やがて、鳴き声が最高潮の荒あらしさに達したとき、腕をさわられたので、ラファム博士の声を聞くまでもなく、アンブローズ・デュワートとクアミスが近づいてくるのがわかった。

そのあとの出来事については、もういまとなっては遠い過去のことで、アーカムのまわりの土地もいまでは二百年以上知らなかった平穏と自由を楽しんでいるが、どうしても客観的に記すことができない。まずデュワート、というよりもデュワートの見せかけをとるリチャード・ビリントンが、塔の屋根の開口部にあらわれたことからはじまった。ラファム博士はたくみに身を隠せる場所を選んでいた。そこからだと、茂みをとおして、塔の屋根の開口部全体を見ることができた。わたしたちはアンブローズ・デュワートの姿がまもなく開口部にあらわれるのを目にし、ほとんどすぐにデュワートの声を耳にした。頭を星空にむけてあげ、目と言葉を外なる空間にむけ、下品で怖ろしい口調で叫びはじめた。蛙と夜鷹の狂おしい鳴き声にもかかわらず、言葉ははっきりと聞こえた。

いあ！　いあ！　んぐあああ　んんがい・がい！　いあ！　いあ！　んがい　ん・やあ　ん・やあ　しょごぐ　ふたぐん！　いあ！　いあ！　い・はあ　い・にやあい・にやあ！　んがあ　んんがい　わふる　ふたぐん　よぐ・そとおす！　よぐ・そとおす！

木木をわたって風が吹きはじめた。上から吹きおろす風だった。大気がひえこむかたわら、蛙と夜鷹の鳴き声と蛍の明滅はテンポをますます早めていった。わたしはびっくりしてラファム博士に顔をむけたが、まさにそのとき、ラファム博士は銃の狙(ねら)いを定め、発砲した。
わたしはふりかえった。デュワートに弾丸が命中していた。デュワートはすこしうしろへよろけたが、開口部にのりだして、頭からまっさかさまに地面に墜落(ついらく)した。その瞬間、インディアンのクアミスが開口部にあらわれ、怖ろしい声で、リチャード・ビリントンがはじめた儀式をつづけた。

いあ！　いあ！　よぐ・そとおす！　おさだごわあ！

ラファム博士の二発目の弾丸がインディアンの体に貫通した。インディアンは倒れなかったが、くずれはてたように見えた。
「いまだ」ラファム博士が冷たくいかめしい声でいった。「あの石をもとにもどすのだ」
蛙と夜鷹の悪魔さながらの怖ろしい鳴き声につつまれながら、わたしは石をかかえあげ、ラファム博士はセメントをもって、下生えも気にせず、塔にむかって走りに走った。風はますます強くなり、大気は急速にひえこんでいった。しかしわたしたちのまえには塔がそびえたち、

塔のなかに入れば、開口部が星たちをうつしていた。しかし、なんという怖ろしさか。見えるものは星ではなかった。

あのすさまじい恐怖の記憶を心の目にとどめたまま、どうやってあの忘れられない夜をしのぎとおしたのか、わたしにはわからない。いまのわたしにはぼんやりした記憶しかないのだ。わたしたちは開口部をもとどおりにふさいだ。リチャード・ビリントンの邪悪な存在にとりつかれ、ようやく死によって解放されたアンブローズ・デュワートの亡骸を葬ってやった。デュワートの失踪は他の失踪者とおなじ未知で未発見の原因のせいにされるだろうが、死体が他の死体とおなじようにあらわれることを望む者は待っても無駄になるだけだ、とラファム博士はいった。きめこまかな年古りた塵を見て、ラファム博士はこれがクアミスの残骸なのだといった。クアミスはすでに二百年以上もまえに死んでおり、リチャード・ビリントンの邪悪な命令によってのみ動きまわることができたのだった。わたしたちは環状列石をうちこわした。旧神の印が刻まれた畏ろしい灰白色の石がかき乱されないように、塔そのものを下から破壊して、埋めてしまった。その地面から、角灯の光で、あの「老呪術師……ワンパノーアグ族の長ミスクアマカス」にさかのぼる、古い時代の奇妙な人骨を発見した。あの壮大な書斎の窓を完全に破壊した。ミスカトニック大学付属図書館に預けるため、貴重な書物や文書をぬきとった。わたしたちがもってきたものを集めた。ビリントンの屋敷から書物や文書をはこびだすため車を屋敷にむけた。そして夜明けまえに立ち去った。こういったことについて、わたしにはぼんや

りした記憶しかない。やりとげたということがわかっているだけだ。リチャード・ビリントンの時代には名前がなかったが、リチャード・ビリントンにとりつかれたアンブローズ・デュワートが名前を口にした、ミスカトニック河の支流ミスクアマカス河の島であったところへ、わたしは一度思いきって行ってみた。なにもなかった。ダゴンの場、オサダゴワアの場、招喚されるのを待ちながら戸口に潜んでいる怖るべき外世界の存在の場であった、塔と環状列石はあとかたもなかった。

こういったことすべてについてわずかばかりの記憶しかないのは、開口部をとおして見たもののせいなのだ。わたしは星だけが見えると思っていた。星ではなかった。太陽だった。スティーブン・ベイツが最後の瞬間に目にした、複数の太陽だった。ものすごい光球がいくつも開口部におしよせてきたのだ。それだけではなかった。開口部にせまった光球が割れた。わたしは黒ぐろと流れだす原形質状の肉がひとつにまとまって、外宇宙の身の毛もよだつ慄然たる恐怖を形づくるのを見た。原初の時の無の落とし子を見た。戸口に潜んでいた触角のある無定形の怪物を見た。その怪物こそ、虹色の球体の集積物という仮面をもち、時空間の最下底のさらに彼方、核の混沌のただなかにおいて、原初の粘液として永遠に泡だっている、有害きわまりないヨグ＝ソトースだったのだ。

クトゥルー神話――禁断の考証学

大瀧啓裕

　クトゥルー神話を構成するさまざまな作品は、旧支配者や魔道書にまつわる凶まがしい事件を克明に記録した、貴重きわまりない文書であるとも申せましょう。いうまでもなく、こうした慄然たる事件簿＝記録文書であつかわれる特定の事項が、当該の記録文書のなかだけにとどまらず、他の記録文書にも顔をのぞかせ、クトゥルー神話体系という大きな骨組のなかで個個の作品を有機的に結びつけていることこそ、まさにクトゥルー神話の醍醐味のひとつにほかなりません。なぜなら、複数の記録文書でとりあげられることにより、付加的な情報が徐徐に補足され、おのずから全体のイメージがうかがえるようになるからです。このクトゥルー・シリーズの解説では、これまで旧支配者や魔道書や地名をとりあげ、こういった事情について説明をおこなってきましたので、今回はすこし角度をかえ、登場人物をあつかってみることにしましょう。

たとえば、本シリーズの第一巻に収録された『ハスターの帰還』には、ミスカトニック大学付属図書館の館長として、ランファー博士が登場しています。おなじ人物が本シリーズ第二巻の『永劫の探究』において、「アンドルー・フェランの手記」と「エイベル・キーンの書置」にも、さりげなく登場しているのですが、はたしてお気づきになったでしょうか。これら三つの記録文書を相互に参照するなら、ランファー博士が少なくとも一九二八年から一九四〇年にかけて図書館長をつとめたこと、厳重に保管される魔道書の内容を理解していたこと、シュリュズベリイ博士の所有していた『セラエノ断章』や未完におわった『ネクロノミコンにおけるクトゥルー』の草稿をうけとったこと、そして謎の失踪をとげたアンドルー・フェランの手記を入手して公表したことが、具体的な事実としてはっきりとうかびあがってくるはずです。

もちろん特定の人物が複数の記録文書にあらわれることは、ただ単に情報量を増すためだけのものではなく、記録文書を読む者に一種のなつかしさを感じさせるとともに、記憶を卒然とよみがえらせて、壮大な神話体系における位置づけをおこなわせる作用もあわせてもっています。さまざまな記録文書に傍証として頻繁に登場する、『インスマスを覆う影』のオーベッド・マーシュ、『ダニッチの怪』のウィルバー・ウェイトリイ、『闇にささやくもの』のヘンリー・エイクリイ、そして『永劫の探究』のラバン・シュリュズベリイ博士たちは、さかんに登場することで情報を付加するとともに、クトゥルー神話の広がりをほのめかすという、この重要な役割をになわされているわけです。

さらに、クトゥルー・シリーズ第六巻にあたる本書では、『恐怖の巣食う橋』において、ダニッチ唯一の雑貨店の店主として、トバイアス・ウェイトリイがささやかな脇役で登場しています。この人物は本シリーズ第七巻に収録される『閉ざされた部屋』でもおなじ脇役をつとめていますが、ラヴクラフトの熱心な読者の方なら、ここでひとつの疑問をおぼえることでしょう。クトゥルー神話の聖典であるラヴクラフトの『ダニッチの怪』においては、ダニッチ唯一の店がオズボーンの雑貨店だと明示されているからです。『恐怖の巣食う橋』および『閉ざされた部屋』は、いずれもダニッチの怪事件以後の記録文書であるにせよ、正確な年代を提供してはくれませんが、一九二八年にオズボーンが経営していた店がいつのまにかウェイトリイ一族のものになっている事実は、いささか意味深長なことではありますまいか。

この場合は、事情をうかがう情報が完全に欠落していますので、件のトバイアス・ウェイトリイが脇役ながらも再三登場することは、記録文書を読む者に謎めいた雰囲気を感じさせることになります。そしてクトゥルー神話の世界にのめりこんだ読者が、なんらの情報もないことにやりきれなさを感じ、想像力をたくましくさせて、それなりの説明をつけようとするなら、これはすなわち、読者がクトゥルー神話の世界にすっかりとりこまれたことを意味するのです。故意に隠された情報のあることを、記憶をよりどころに察知して、それなりにミッシング・リンクを補おうとする試みは、とりもなおさず、読者がクトゥルー神話の体系化に、積極的に参加していることにほかならないのですから。そして読者のおこなうこの作業は、いかなる記録

文書からも情報が得られないことから、いかさま禁断のにおいのする考証めいたものになるわけです。いつのまにか読者を巻きこみ、神話体系の生成発展に参加させる魔力まで備えていることにも、クトゥルー神話の人気の秘密があるといえるのではないでしょうか。

さて、終生とりつかれたように、この禁断の考証をおこないつづけた人物がいます。本シリーズの第一巻と第二巻に収録された労作、『クトゥルー神話の神神』と『クトゥルー神話の魔道書』の編纂者、リン・カーターがその人です。昨年一九八八年の二月に五十六歳の若さで惜しくも亡くなりましたが、この人の生涯は、ひたすらクトゥルー神話のミッシング・リンクを補うことに費やされたといっても、あながちおおげさないいかたにはなりますまい。十代のときにまとめあげた先の二篇の労作といい、一九七二年に刊行された『ラヴクラフトとクトゥルー神話』といい、ケアレス・ミスの目立つ欠点があるとはいえ、リン・カーターほど熱心にクトゥルー神話の考証をおこなった人物はおりません。四年まえに癌の手術をうけてからも、クトゥルー神話に属する掌篇を書きつづけていましたし、クトゥルー神話作品の発表舞台となった雑誌〈ウィアード・テイルズ〉が、一昨年に復刊されたときには、クトゥルー神話作品の掲載されていない〈ウィアード・テイルズ〉なんか、と皮肉たっぷりに気炎をあげていたほどです。

そんなリン・カーターを追悼する意味もこめて、昨年何冊かの小冊子が限定版で発行されていますので、そのなかから『ネクロノミコン挿話集』を選び、リン・カーター流考証学の成果

を、ごく簡単に紹介しておきましょう。クトゥルー神話をいろどる人物のなかでも、もっとも謎にみちて魅力的なアブドゥル・アルハザードについて、リン・カーターはその逸話をなみなみならぬ情熱をかたむけて語っていますが、これを紹介するに先立ち、クトゥルー神話でアルハザードがどのように描写されているかを確認しておかなければなりません。ラヴクラフトが『ネクロノミコンの歴史』で記していることが、必要にして十分なものといえるでしょう。

紀元七〇〇年頃ウマイア朝のカリフの治世中に活躍したという、イエーメンはサナアの狂える詩人……アブドゥル・アルハザードは……バビロンの廃墟とメンフィスの地下洞窟を訪れ、古代のアラブ人にロバ・エル・カリイエ（虚空）、現代のアラブ人にダーナ（深紅の砂漠）と呼ばれる、死の邪霊と怪物が護り住んでいるという、アラビア南部の大砂漠で十年間ひとりきりですごした。この砂漠については、走破したふりをする者たちによって、奇怪かつ信じがたい驚異が数多く語られている。アルハザードは晩年ダマスカスに住み、その地で『ネクロノミコン』（『アル・アジフ』）を執筆したが、アルハザードの最期あるいは消失（紀元七三八年）については、多くの怖ろしくも矛盾することがいわれている。イブン・カリカン（十二世紀の伝記作者）によれば、白昼通りで目に見えない怪物に捕えられ、恐怖のあまり立ちすくむ大勢の者のまえで、怖ろしくもむさぼり喰われたという。アルハザードの狂気についても、多くのことが語られている。アルハザードは伝説の円柱

都市アイレムを見たと主張し、また名前のない砂漠の都市の廃墟の地下で、人類より古い族の衝撃的な年代記や秘密を発見したと主張した。回教徒ではあったが、回教には無関心で、自らヨグ＝ソトース、クトゥルーと呼んだ未知の実体を崇拝した。

さて、カーターの『ネクロノミコン挿話集』は、ジョン・ディー直筆の英訳草稿を基に、カーターが現代語訳を試みるという体裁をとっていますが、注目すべきは、八篇の挿話すべてがアルハザードの体験をそのまま書きとどめたものになっていることです。すなわち、『ネクロノミコン』には、劫初の凶まがしい知識や伝承、慄然たる呪文や魔術、暗澹たる予言や暴露にくわえて、アルハザードの自伝的要素も備わっていることがわかります。さいわいにして、これらの挿話は編年体になっていますので、そのまま順をおって、要点だけを抜粋することにしましょう。

まず、アルハザードは悪名高いサラセン人の妖術師、ヤクトゥーブのもとで修業にはげみ、邪悪なものを招喚する方法を学んだり、ネブの岩石墓地で食屍鬼と話をかわしたり、大ピラミッドの地下にある窖で名状しがたいニトクリスの饗宴にふけったりしたほか、ハドスの谷間にあるネフレン＝カの洞窟で冒瀆的な儀式をとりおこなったりしたといいます。往古の知識を得るのに汲汲として努めたあげく、忘劫のアトランティスからもたらされた霊液を用いて魔物を招喚したために、師匠がその魔物にむさぼり喰われた後、アルハザードはしばらく砂漠をさすら

い、スフィンクスの両脚のあいだにある秘密の扉を開け、はてしなく地下へと通じる階段をくだり、天井の高い広大な部屋に入りこみ、ここでツァトゥグアを招喚することに成功しました。そしてツァトゥグアから、無貌のバイアグーナの謎のたとえをはじめ、イルからヌフングルまでの呪文を伝授されたようです。この「イルからヌフングルまでの呪文」というのは、本巻に収録された『恐怖の巣食う橋』から察しがつくように、『ダニッチの怪』におけるウィルバー・ウェイトリイの暗号日記が典拠となっています。

　アラビアの砂漠には秘密の都市が三つあり、人類誕生以前に爬行生物が築いた無名都市、木乃伊が燃えあがる宝石をつかんでいる暗黒の都市、呪われたシャダッドが怖るべき鬼神とともに築きあげた千柱の都市アイレムのことをいいますが、アルハザードは食屍鬼すべての父親であるナグに忌わしい代償を支払ってアイレムを目指し、アイレムが諸力の焦点に位置していることを知り、異界への扉を開いたものの、戸口に潜むものをまじまじと見つめたことで、みずからの怖ろしい運命を悟ったといいます。その運命がどのようなものであったかは、既にクトゥルー・シリーズ第二巻にはっきりと記されていますので、いまさら申しあげる必要はないでしょう。あとつけくわえるべきは、クトゥルー・シリーズ第三巻収録の『彼方からのもの』における不気味な生物が、ティンダロスの猟犬だと同定されていることと、アルハザードが『ナコト写本』を読んでいたとはっきり記されていることです。

　なんの批判もくわえずに、『ネクロノミコン挿話集』の重要箇所のみを紹介したわけですが、

正直いってこの小冊子は、まだ推敲の余地のある未完のものにすぎません。ひるがえって、クトゥルー神話体系そのものも、多くのミッシング・リンクをのこしつつ、いまなお展開をつづけているといってさしつかえないでしょう。読者の積極的な参加が求められる所以です。いつの日か壮大な全貌があらわれるのを待ちつづけるか、あるいは体系化という途方もない運動に身を投じるか、その判断はクトゥルー神話の呪縛力が、おのずからくだしてくれるはずです。

暗黒神話大系シリーズ　クトゥルー 6

1989年 7 月14日　初 版 発 行
1991年 8 月20日　再 版 発 行

著　　者　ラヴクラフト&ダーレス
編　　者　大　瀧　啓　裕
発 行 者　青　木　治　道
発 行 所　株式会社　青　心　社
〒550　大阪市西区西本町1-13-38
新 興 産 ビ ル 615
電 話　06－543－2718
FAX　06－543－2719
振 替　大阪 3 －21375

乱丁、落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・製本　日産印刷工業株式会社
ISBN4－915333－59－0　C0197

■文庫　Paperback

ヴェルナディックサーガ②　謀略の王国

神代　創／文庫版／定価640円

古代文字の秘密を解明するためリシュラムへやって来たヴィシュヴァ。しかし、レシュボーンと共にのがれえぬ大いなる謀略の渦の中へと…。

グール・バスターシリーズ①　くたばれＧ・Ｂ!!

竹内　眠／文庫版／定価580円

オレはロックバンドのボーカル冴島讐。ヘンなオッサンの出現でオレは吸血鬼の末裔だということが判ったのだが…オカルトバトルコメディー第１弾！

グール・バスターシリーズ②　アイ・ラブ・ユーは死のサイン

竹内　眠／文庫版／定価580円

ロクでなしの親父のお蔭で、たび重なる不幸に見舞われたオレの身に、今度は聞くも涙の超弩級の不幸が襲いかかって来た。なんてオレは不幸なんだ!!

乱れ殺法ＳＦ控　ＳＦという暴力

水鏡子／文庫版／定価600円

その鋭い切り口に定評のあるＳＦ評論家〈水鏡子〉、その著者の学生時代から現在に至るまでのＳＦの読み方を評論を中心として綴った評論エッセイ!!

赤い霧のローレライ　近日刊行！

リイ・ブラケット／文庫版／予価600円

厚い雲の下、赤い霧の海がひろがる金星を舞台に繰り広げられる数々の冒険。名作「赤い霧のローレライ」をはじめ四編を収録した初のブラケット短編集。

■文庫　　　Paperback

怪奇幻想小説シリーズ　ウィアード[1]

H・P・ラヴクラフト他／大瀧啓裕編／文庫版／定価600円

太古の昔に富栄えた邑サルナスの呪われた崩壊を描くラヴクラフトの「サルナスをみまった災厄」をはじめ、スミス、ハワード他の作品を12編収録。

怪奇幻想小説シリーズ　ウィアード[2]

R・E・ハワード他／大瀧啓裕編／文庫版／定価600円

神秘と名状しがたい恐怖が存在する暗黒のジャングルを舞台に描くハワードの「死霊の丘」をはじめ、ブロック、ライバー他の傑作作品を収録。

怪奇幻想小説シリーズ　ウィアード[3]

H・P・ラヴクラフト他／大瀧啓裕編／文庫版／定価600円

悍しいブードゥの呪い、古代の羊皮紙の恐怖、生き返った死人……闇へ通じる地下室の戦慄に彩られた幻想の傑作12編を収録!!

怪奇幻想小説シリーズ　ウィアード[4]

H・P・ラヴクラフト他／大瀧啓裕編／文庫版／定価600円

巨匠ラヴクラフトを始め、マティスンやカウンセルマン、テンフルなどをはじめF・グルーバーの名作「十三階」を含む12編を収録。

放浪王ガルディス①　妖精の竪琴

神江　京／文庫版／定価560円

傭兵戦士ガルディスと吟遊詩人レアーヴェノスが受けた使命、それは神のもとより盗み出された「妖精の竪琴」を捜し求めること。新冒険譚ここに開幕!!

放浪王ガルディス②　詩神の光詩

神江　京／文庫版／定価580円

ガルディスはレイと別れ、吟遊詩人の長エラトスとともに次なる探索の旅にでる。しかし、行く手に待ち受けるものは…？　新キャラも登場の第２弾！

放浪王ガルディス③　冥界神の呪言

神江　京／文庫版／定価620円

赤き魔道士マハはガルディス、エラトスとともに禁断の魔道の謎を探るべくウディエットへと向かう……!!　ガルディスシリーズ第３弾ますます快調！

ヴェルナディックサーガ①　神なる狂獣の剣

神代　創／文庫版／定価580円

忌わしき運命に翻弄され苦悩の旅を続けるヴィシュヴァ。この運命を断ち切る唯一の手段を手に入れる為《剣の間》へと向う！新ヒーローここに誕生！

■コミックス　Comics

コミックガイア1～4※

士郎正宗他／Ａ５並製／定価各890円

ほとばしる呪文、舞うだんびら、柔肌にまとわりつく法程式…士郎正宗の新連載「仙術超攻殻オリオン」ほかを搭載して新世代コミック絶賛発売中!!

コミックガイア5※

士郎正宗他／Ａ５並製／定価890円

大評判連載６本に“鋼鉄はがね”、“井上直久”、“まつむらまきお”を加え、さらには“いのまたむつみ”の折り込みオリジナルポスター付きだ!!

コミックガイア6※

士郎正宗他／Ａ５並製／定価890円

毎号恒例の愛読者プレゼントはそのままに、全員プレゼントも始まった。No.５の９人に“松崎貢”も加わって、さらにボリュームど～んとアップだ!!

ダンビート

ぴゅあ／Ａ５並製／定価880円

呪術書「稽蠱神異記」に隠された謎を追う狂言者プラント。呪術集団九辰会とジュアンはプラントの罠を破り世界を破滅から救うことができるのか？

アップルシード1　プロメテウスの挑戦

士郎正宗／Ａ５並製／定価880円

未来都市オリュンポスを舞台に、スーパーメカを駆使してくり広げられるバトルアクション！　士郎正宗がおくる近未来ＳＦアクション巨編第１弾！

アップルシード2　プロメテウスの解放

士郎正宗／Ａ５並製／定価880円

オリュンポスを管理するスーパーコンピューター・ガイアが叛乱をおこした…!!　策謀渦巻く未来都市を舞台に炸烈する、スーパーアクション！

アップルシード3　プロメテウスの小天秤

士郎正宗／Ａ５並製／定価880円

ESWATに所属したデュナンとブリアレオスは、オリュンポスをめぐる諸勢力のあらたな策謀のなかへと巻き込まれていく…。士郎ワールド第３弾！

アップルシード4　プロメテウスの大天秤

士郎正宗／Ａ５並製／定価880円

オリュンポスで再び炸裂するバトルアクション!!　デュナンとブリアレオスはカイニスが操る巨大ランドメイトを阻止することができるだろうか。

暗黒神話大系シリーズ

クトゥルー 6

大瀧啓裕 編

青心社

640

9784915333590

1910197006404

呪われた街〈ダニッチ〉を流れる川にかかる古い橋とその恐ろしい秘密を描いた「恐怖の巣食う橋」。不老不死の研究から生まれた戦慄の怪物を描く物語「生きながらえるもの」。アーカムの北に広がるビリントンの森、そこに建つ閉ざされた謎の塔に秘められた太古の秘密と怖るべき企てをめぐる恐怖とは……。旧支配者ヨグ＝ソトース復活をめぐる闘いとその恐怖を記録した長編「暗黒の儀式」を含む、ラヴクラフト＆ダーレスによるクトゥルー神話３編を収録。

定価640円（本体621円）

ISBN4-915333-59-0 C0197 P640E